

野 向 遺 跡
市野々向原遺跡
千 野 遺 跡
発掘調査報告書

2000

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

の むかい
野 向 遺 跡

いち の むかい はら
市野々向原遺跡

せん の
千 野 遺 跡

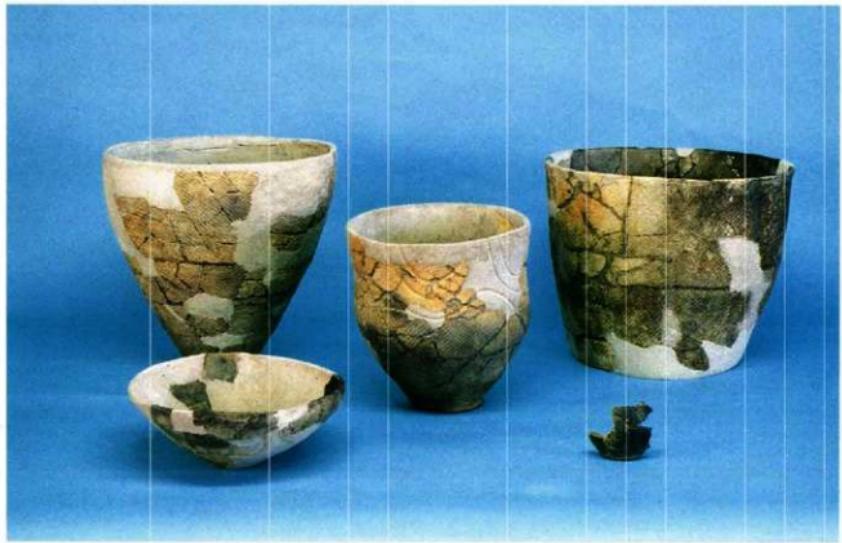
発掘調査報告書

平成12年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



野向遺跡 E L 452複式炉検出状況(西から)

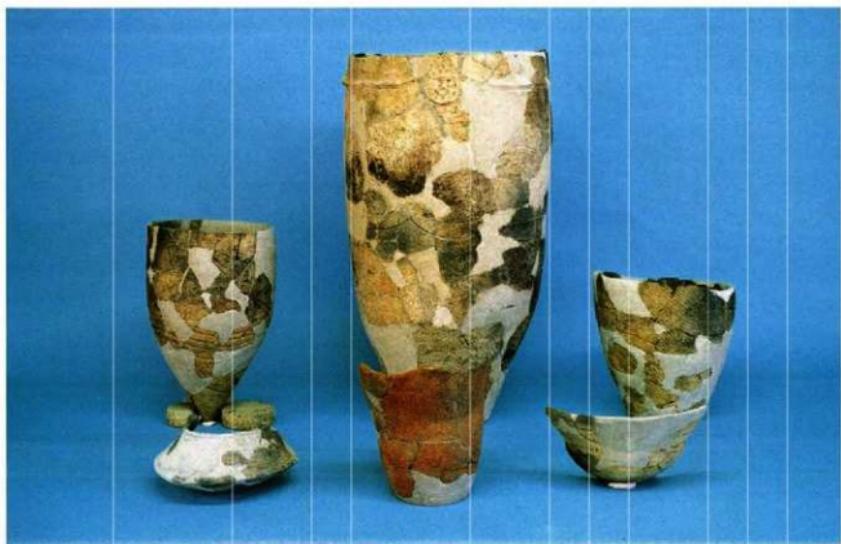


野向遺跡出土土器

卷頭図版 2



市野々向原遺跡 S T 533 堅穴住居跡 (南から)



市野々向原遺跡出土土器



千野遺跡 S T 62 敷石住居跡 (西から)



千野遺跡出土土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡の調査成果をまとめたものです。

これらの遺跡は山形県の南西部、新潟県と県境を接する小国町にあります。小国町は飯豊・朝日の連峰に囲まれ、荒川と横川の両岸に開けた、四季の変化が美しい緑豊かな町です。

この度、横川ダム建設工事に伴い、工事に先立って野向ほか2遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の住居跡や狩猟のための陥し穴など生活の痕が見つかり、縄文時代早期から晩期までと弥生時代中期ごろの土器や石器など多数の遺物が出土しました。縄文時代の集落を理解する上でも、良い資料を得ることができたと考えています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が埋蔵文化財保護の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は横川ダム建設工事に係る「野向遺跡」「市野々向原遺跡」「千野遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は建設省北陸地方建設局横川ダム工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 第1次調査は、次年度以降の調査計画策定を目的とした予備調査として実施した。第2次調査はこの結果を踏まえ、調査範囲・面積を確定した上で実施したものである。
- 4 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　野向遺跡　　遺跡番号　平成元年度登録
所在地　　山形県西置賜郡小国町大字市野々字野向
市野々向原遺跡　　遺跡番号　1425
山形県西置賜郡小国町大字市野々字向原
千野遺跡　　遺跡番号　1423
山形県西置賜郡小国町大字網木箱ノロ字千野

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

《野向遺跡・市野々向原遺跡第1次発掘調査》

受託期間　平成7年7月1日～平成8年3月31日

現地調査　平成7年9月18日～平成7年11月2日

調査担当者　調査第一課長　佐々木洋治
主任調査研究員　尾形　與典（現調査第二課長）
調査研究員　小関　真司
調査員　高柳　健一

《野向遺跡・市野々向原遺跡第2次発掘調査、千野遺跡発掘調査》

受託期間　平成9年4月1日～平成12年3月31日

現地調査　野向遺跡　　平成9年5月19日～平成9年8月1日

市野々向原遺跡　　平成9年7月28日～平成9年10月15日

千野遺跡　　平成9年10月23日～平成9年11月26日

調査担当者　調査第二課長　野尻　侃（現調査第一課長）
主任調査研究員　尾形　與典（現調査第二課長）
調査研究員　須賀井新人
調査員　黒沼　幹男
調査員　國井　修

- 5 発掘調査及び本書を作成するにあたり、建設省北陸地方建設局横川ダム工事事務所、山形県教育庁文化財課、小国町教育委員会、西置賜教育事務所等関係機関の協力を得た。また、資料整理にあたり阿部明彦氏（山形県立博物館）からご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

- 6 本書の作成は須賀井新人・黒沼幹男・國井修、執筆は須賀井が担当した。編集は須賀井・多田和弘・大村和弘が担当し、全体については野尻侃が監修した。
- 7 委託業務は下記のとおりである。
- 遺構の写真測量及び土器の一部と打製石器の実測については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 市野々向原遺跡の資料理科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
- 千野遺跡の資料理科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 8 出土遺物調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
- S T……堅穴住居跡 S K……陥し穴・土坑 S D……溝状遺構 S P……ピット
S X……性格不明遺構 E K……住居内土坑 E L……炉 跡 E U……埋設土器
R P……登録土器 R Q……登録石器・石製品 P……土器 S……石
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 土層観察において、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（I～VII）で示し、遺構の堆積土についても算用数字で表した。
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、野向遺跡・市野々向原遺跡がN-23°30' -W、千野遺跡がN-0°50' -Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/20・1/30・1/40・1/200・1/400縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図・土層断面図中における水系レベル標高の単位はmである。
- (5) 遺構実測図の土層断面中において、土器は黒ベタ、石製品・礫石は網目のスクリントーンで表示した。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺物実測図・拓影図は、土器は1/3、石器・石製品は1/2・1/3・1/4で採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、任意の縮尺である。
- (8) 土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。
- (9) 土器観察表と石器計測表中の出土地点・層位欄で「F」は遺構覆土内出土を示し、深さに拘わりなく層位を3分割して、上層から1～3の算用数字を付した。また、「Y」は遺構底面出土を示し、出土地点不明なものは「X-0」で表記した。
- (10) 土器観察表中の時期・分類は3遺跡とも共通である。また、石器計測表中の分類にあたっては遺跡ごとに各々異なるものである。
- (11) 石器計測表中の（ ）内数値は、残存値を示している。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	6
III 野向遺跡	
1 遺跡の概観	7
2 検出遺構	12
3 出土遺物	27
4 まとめと考察	43
IV 市野々向原遺跡	
1 遺跡の概観	45
2 検出遺構	50
3 出土遺物	66
4 まとめと考察	104
V 千野遺跡	
1 遺跡の概観	106
2 検出遺構	111
3 出土遺物	126
4 まとめと考察	157
VI 総 括	
縄文土器の編年	159
引用・参考文献	166
報告書抄録	167
付編	
「市野々向原遺跡の自然科学分析」	
「千野遺跡より出土した縄文時代埋設土器のリン酸・カルシウム分析」	

表

表 1 調査工程表	2	表 8 市野々向原遺跡石器計測表(2)	101
表 2 野向遺跡土器観察表	32	表 9 市野々向原遺跡石器計測表(3)	102
表 3 野向遺跡石器計測表(1)	39	表 10 市野々向原遺跡石器計測表(4)	103
表 4 野向遺跡石器計測表(2)	42	表 11 千野遺跡土器観察表(1)	145
表 5 市野々向原遺跡土器観察表(1)	73	表 12 千野遺跡土器観察表(2)	146
表 6 市野々向原遺跡土器観察表(2)	74	表 13 千野遺跡土器観察表(3)	147
表 7 市野々向原遺跡石器計測表(1)	100	表 14 千野遺跡石器計測表	156

挿 図

第1図 遺跡位置図	5	第20図 打製石器(2)	36
第2図 野向遺跡層序	7	第21図 打製石器(3)	37
第3図 野向遺跡調査概要図	8	第22図 打製石器・磨製石器	38
第4図 野向遺跡遺構配置図	9	第23図 磨石器(1)	40
第5図 S T334堅穴住居跡(1)	13	第24図 磨石器(2)	41
第6図 S T334堅穴住居跡(2)	14	第25図 市野々向原遺跡層序	45
第7図 SK10・11・140・151・152 陥し穴	17	第26図 市野々向原遺跡調査概要図	46
第8図 SK127・147・442陥し穴	18	第27図 市野々向原遺跡遺構配置図	47
第9図 SK109・125・445陥し穴、 SK110土坑	19	第28図 S T533堅穴住居跡	51
第10図 SK6・186・196・197・377・ 376・380土坑	22	第29図 E L567土器埋設石組炉、 SK526集石土坑、SK525土坑	53
第11図 SK113・114・303・383・384・ 385・393・394・408土坑	23	第30図 SK524・530集石土坑、 SK235・236土坑	54
第12図 SK27・49・381・382・439・ 444土坑	24	第31図 SK155・156・199・202・ 538土坑	58
第13図 SK55・56・159・194・252土坑	25	第32図 SK170・171・174・177土坑	59
第14図 SK105・251・371土坑	26	第33図 SK29・288・298・370・527・ 548・563土坑	60
第15図 繩文土器(1)	28	第34図 SK238・356・357・422・ 423・424土坑	61
第16図 繩文土器(2)	29	第35図 SK194・228・287・291・ 292土坑	62
第17図 繩文土器(3)	30	第36図 SK2・372・541・542土坑	63
第18図 繩文土器(4)	31	第37図 SK28・443・537土坑	64
第19図 打製石器(1)	35		

第38図	S K294・295・310・337土坑	65	第72図	S K68・121・122・154・187・ 230・227・228土坑	119
第39図	縄文土器(1)	68	第73図	S K124・148・159・160・164・ 169土坑	120
第40図	縄文土器(2)	69	第74図	S K149・153土坑、 S X152性格不明遺構	121
第41図	縄文土器(3)	70	第75図	S K175・229土坑、 配石・集石遺構群	124
第42図	縄文土器(4)	71	第76図	E U183他埋設土器	125
第43図	縄文土器(5)	72	第77図	縄文土器(1)	130
第44図	縄文土器・弥生土器	73	第78図	縄文土器(2)	131
第45図	打製石器(1)	76	第79図	縄文土器(3)	132
第46図	打製石器(2)	77	第80図	縄文土器(4)	133
第47図	打製石器(3)	78	第81図	縄文土器(5)	134
第48図	打製石器(4)	80	第82図	縄文土器(6)	135
第49図	打製石器(5)	81	第83図	縄文土器(7)	136
第50図	打製石器(6)	82	第84図	縄文土器(8)	137
第51図	打製石器(7)	83	第85図	縄文土器(9)	138
第52図	打製石器(8)	84	第86図	縄文土器(10)	139
第53図	打製石器(9)	85	第87図	縄文土器(11)	140
第54図	打製石器(10)	87	第88図	縄文土器(12)	141
第55図	打製石器(11)	88	第89図	縄文土器(13)	142
第56図	打製石器(12)	89	第90図	縄文土器(14)	143
第57図	打製石器(13)	90	第91図	縄文土器(15)	144
第58図	打製石器・石製品	92	第92図	打製石器	150
第59図	礫石器(1)	94	第93図	打製石器・磨製石器・石製品	151
第60図	礫石器(2)	95	第94図	礫石器(1)	152
第61図	石製品・礫石器(1)	96	第95図	礫石器(2)	153
第62図	石製品	97	第96図	石製品・礫石器(1)	154
第63図	石製品・礫石器(2)	98	第97図	石製品・礫石器(2)	155
第64図	石製品・礫石器(3)	99	第98図	出土土器編年(1)	160
第65図	千野遺跡調査概要図	107	第99図	出土土器編年(2)	162
第66図	千野遺跡層序	108	第100図	出土土器編年(3)	163
第67図	千野遺跡遺構配置図	109			
第68図	S T58・67・135堅穴住居跡、 E L237土器埋設石組炉	112			
第69図	S T62敷石住居跡	114			
第70図	S K139・170・172・188土坑	117			
第71図	S K120・142・189土坑、 S X43性格不明遺構	118			

図 版

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 卷頭図版 1 野向遺跡 | 図版31 S K370土坑 他 |
| 卷頭図版 2 市野々向原遺跡 | 図版32 S K28土坑 他 |
| 卷頭図版 3 千野遺跡 | 図版33 出出土器(1) |
| 図版 1 野向遺跡A区・B区構造検出状況 | 図版34 出出土器(2) |
| 図版 2 S T334竪穴住居跡 | 図版35 出出土器(3) |
| 図版 3 A区検出陥し穴群配列状況 他 | 図版36 出出土器(4) |
| 図版 4 S K140陥し穴 他 | 図版37 出出土器(5) |
| 図版 5 S K147陥し穴 他 | 図版38 出出土器(6) |
| 図版 6 S K303土坑 他 | 図版39 石鏃(1) |
| 図版 7 S K113・114土坑 他 | 図版40 石鏃(2) |
| 図版 8 S K377土坑 他 | 図版41 尖頭器・石錐 |
| 図版 9 S K381・382土坑 他 | 図版42 両尖匕首・石匙 |
| 図版10 S K159土坑 他 | 図版43 石匙 |
| 図版11 出出土器(1) | 図版44 石箆(1) |
| 図版12 出出土器(2) | 図版45 石箆(2) |
| 図版13 出出土器(3) | 図版46 石箆(3) |
| 図版14 出出土器(4) | 図版47 石箆(4) |
| 図版15 石鏃・尖頭器 | 図版48 石箆(5) |
| 図版16 石錐・石匙・石箆 | 図版49 石箆(6) |
| 図版17 石箆 | 図版50 石箆(7) |
| 図版18 石箆・搔器 | 図版51 石箆(8) |
| 図版19 削器 | 図版52 搔器 |
| 図版20 削器・磨製石斧 | 図版53 削器(1) |
| 図版21 凹石・磨石 | 図版54 削器(2) |
| 図版22 磨石 | 図版55 削器(3) |
| 図版23 石皿 | 図版56 削器・異形石器 |
| 図版24 市野々向原遺跡全景 他 | 図版57 加工痕ある剥片 |
| 図版25 S T533竪穴住居跡 他 | 図版58 凹石 |
| 図版26 S K526集石土坑 他 | 図版59 磨石 |
| 図版27 S K530集石土坑 他 | 図版60 石棒・砥石 |
| 図版28 S K202土坑 他 | 図版61 石棒 |
| 図版29 S K177土坑 他 | 図版62 石棒・石皿 |
| 図版30 S K194土坑 他 | 図版63 石皿 |
| | 図版64 千野遺跡調査区全景 |

- 図版65 千野遺跡遺構検出状況 他
図版66 S T62敷石住居跡
図版67 S T135堅穴住居跡 他
図版68 E U235埋設土器 他
図版69 S K189土坑 他
図版70 S K121・122土坑 他
図版71 S K153土坑 他
図版72 S K124土坑 他
図版73 配石・集石遺構群検出状況 他
図版74 出土土器(1)
図版75 出土土器(2)
図版76 出土土器(3)
図版77 出土土器(4)
図版78 出土土器(5)
図版79 出土土器(6)
図版80 出土土器(7)
- 図版81 出土土器(8)
図版82 出土土器(9)
図版83 出土土器(10)
図版84 出土土器(11)
図版85 出土土器(12)
図版86 出土土器(13)
図版87 出土土器(14)
図版88 ミニュチュア土器・円盤状土製品
図版89 石鎌・石錐・石匙・石籠・削器
図版90 削器・打製石斧
図版91 磨製石斧・穿孔石製品
図版92 凹石
図版93 凹石・磨石
図版94 敷石・石棒・砥石
図版95 石棒
図版96 石皿

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

山形県の南西部を流れる荒川は、急流のため古くから流域に度々被害をもたらしている。このため国では、昭和21年より中小河川改修事業の一環として治水事業を行ってきた。しかし、昭和42年8月の羽越水害では、沿川市町村で死者90名に及ぶ大災害を受けた。これを契機に、翌43年4月に一級河川の指定がなされるとともに、荒川水系工事実施基本計画が策定された。計画では上流にダムを建設することで、洪水調節のほか水資源の有効利用や発電も行い、流水の正常な機能の維持を図ることを目的とした。横川ダムはこうした経緯の中、荒川総合開発の一環として計画され、昭和62年度から建設のための事業調査が実施されている。

平成3年度に横川ダムの基本計画が告示されたのを受けて、県教育委員会では平成4年度に、水没地内に所在する周知の遺跡のうち用地買収済みの野向遺跡と市野々向原遺跡について、遺跡保存の検討資料を得るために試掘調査を行った。その結果、両遺跡とも地目の大部分が水田であることから、昭和20年代後半に実施されたば場整備により地山直上まで削平を受けていたが、一部の区域で遺物包含層の存在が確認された。これらの資料を基に、平成6年度に事業主体である横川ダム工事事務所と遺跡の取り扱い等について協議した結果、発掘調査による記録保存を行うこととなった。調査計画では、平成7年度に第1段階として予備調査（第1次調査）を行い、その成果を踏まえて次年度以降に本調査（第2次調査）を実施するという内容が確認された。予備調査は、本調査に必要な経費積算及び調査期間の算定等の基礎資料を収集し、全体の作業量を把握して長期にわたる調査の効率化と全体計画の調整を図ることを目的としたものである。発掘調査の依頼を受けた当センターでは、平成7年9月18日から第1次調査を実施し、この結果を踏まえて第2次調査の範囲・面積の確定、調査期間・経費等の算定を行った。

一方、千野遺跡についてはダム建設関連トンネル工の掘削残土処理地であり、将来的には休憩施設等を設置する旨の事業計画が平成8年7月に示された。これを受けた県教育委員会では、同年9月と11月に事業との調整を図る目的から試掘調査を実施したところ、中位段丘面に良好な遺物包含層の遺存を確認した。このため平成9年2月に遺跡保存の協議が行われたが、事業計画の変更が不可能なため、平成9年度に野向遺跡及び市野々向原遺跡の第2次調査と合わせて発掘調査による記録保存を実施する運びとなった。

発掘調査に至るまでの協議等は以下のとおりである。

《野向遺跡・市野々向原遺跡第1次調査》

- ◆横川ダム工事事務所長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「横川ダム建設の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼（H7/3/13）
- ◆県埋蔵文化財センター理事長より横川ダム工事事務所長あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答（H7/3/24）
- ◆横川ダム工事事務所と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結（H7/7/1）

《野向遺跡・市野々向原遺跡第2次調査、千野遺跡》

- ◆横川ダム工事事務所長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「横川ダム建設の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼（H9/2）
- ◆県埋蔵文化財センター理事長より横川ダム工事事務所長あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答（H9/3）
- ◆横川ダム工事事務所と県埋蔵文化財センターとの「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結（H9/4/1）

2 調査の方法と経緯

《野向遺跡・市野々向原遺跡第1次調査》

第1次調査は、次年度以降の本調査計画の策定を目的とした予備調査である。遺跡範囲内に数本のトレンチを設定し重機械を使用して掘り下げ、遺構・遺物の分布状況を把握し、遺構の数及び検出面までの深さや遺物包含層の厚さ等を記録するものである。

現地調査は平成7年9月18日より開始。幅2m・長さ50mを基準としたトレンチを野向遺跡に20本、市野々向原遺跡で16本設定。21日より重機械にて表土除去（～27日）。遺構検出作業を繰り返しながら、各トレンチの遺構分布状況平面図作成し、併せて基本層序等の諸記録を行う。10月5日、野向遺跡より埋設土器1基が検出され、掘り下げを行う。一部の検出遺構についても掘り下げて、遺物の有無を確認。10月26日に事業者等の関係者を対象にした調査説明会を実施。27日までにすべてのトレンチにて記録作業終了。その後、調査区の埋め戻し・整地を行い、11月2日に調査終了した。なお、第1次調査で確認された内容は次のとおりである。

野向遺跡：土坑・溝跡・ピット等の検出遺構53基、埋設土器1基。

縄文土器（中期末）・石器（石鏃・石鎧）・フレイク等、整理箱3箱。

市野々向原遺跡：土坑・溝跡・ピット等の検出遺構56基、石組5基。

縄文土器（早期～中期）・石器（石鏃・石鎧）・フレイク等、整理箱6箱。

以上の資料や諸記録を基にした結果、遺跡範囲の内ほ場整備による削平が比較的軽微で、遺構と判断される土色変化が多く認められた区域に限定して第2次発掘調査を実施することとなった。なお、これらの調査結果は12月22日付けで横川ダム工事事務所長あて報告を行った。

《野向遺跡第2次調査》

平成9年5月19日より現地調査を開始した。発掘調査区域は、第1次調査の結果により設定したA区（6,400m²）とB区（1,500m²）に分かれる。20日から重機械による表土除去（～28日）。随時、面整理を行ながら遺構の検出に努めた。遺構は主にA区北東及び南西部にまとまって認められ、また包含層からの出土遺物はA区北端の河岸段丘縁辺部で多く、B区では総じて希薄な状況であった。検出遺構の略測図作成後、6月18日より遺構内掘り下げを開始し、断面実測や出土遺物についての諸記録を順次行った。A区南西部では地形状況から、調査区外にも遺構の存在が推定されたため、7月7日からこの一部区域の拡張を実施、新たに陥し穴等の遺構を検出した。29日にはこれまでの成果を公表するため、調査説明会を開催。31日に空中写真撮影による遺構測量を経て、8月1日に調査を終了した。

《市野々向原遺跡第2次調査》

平成9年7月28日に調査開始。発掘調査区域はA区(5,600m²)とB区(2,500m²)に分かれ、グリッド基軸は野向遺跡と同一に設定。29日から8月7日まで重機械による表土除去を行い、遺物包含層の遺存を確認しながら面整理を繰り返した。野向遺跡と対峙するA区南端の河岸段丘縁辺部に遺構・遺物が密集。遺物は石器・フレイクの出土量が多い。遺構分布の略測図を作成した後、9月9日より竪穴住居跡など遺構内の掘り下げ開始。出土遺物を観測しながら随時、記録作業を進めた。縄文時代早期～晩期までの各時期の土器とともに、多数の石器toolが出土。調査説明会は10月8日に開催し、成果を公表した。15日に遺構測量のための空中写真撮影を実施。同日、発掘調査を終了した。

《千野遺跡》

平成9年10月23日に調査開始。調査区(1,600m²)を設定した後、重機械導入前に一部手掘りにて遺物包含層及び遺構検出面までの深さを再確認した。24日より表土除去(～27日)。調査区中央部で河岸段丘中位から高位に変換する旧地形が判明、傾斜変換付近が鞍部となるため包含層の遺存は良好、グリッド単位の掘り下げを実施、多量の土器が出土した。検出面まで掘り下げた後に遺構配置図を作成し、11月7日から遺構精査に入った。断面測量等の記録作業に追われながら掘り進め、13日からはさらに調査区外の中位段丘縁辺部についてトレーニング調査を行った。20日に調査説明会の開催、25日に空中写真撮影による遺構測量を経て、26日で調査を終了させ発掘機材等を撤収した。

表1 野向・市野々向原遺跡第2次調査、千野遺跡調査工程表

	1997年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
野 向	トレンチ							
	重機粗掘							
	グリッド設定							
	面整理							
	遺構精査							
	記録							
	空撮							
調査説明会								
市 野 々 向 原	トレンチ							
	重機粗掘							
	グリッド設定							
	面整理							
	遺構精査							
	記録							
	空撮							
調査説明会								
千 野	トレンチ							
	重機粗掘							
	グリッド設定							
	面整理							
	遺構精査							
	記録							
	空撮							
調査説明会								

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

遺跡の所在する小国町は山形県の南西部に位置し、新潟県と県境を接する。町域は県総面積の約7.9%と広大な面積を占めるが、北の朝日山地と南の飯豊山地の低山地帯に属するため、大部分は中山性の山地と丘陵から成っている。平野部分は河川沿いの段丘や谷底平野に見られ、小国盆地周辺では比較的大規模に発達するが、その面積は町域の約4%にしか満たない。この地域は寒暖の差が大きく、全国有数の豪雪地帯でもある。

小国町は、本県で唯一他県へ流下する荒川水系に属している。荒川は朝日岳を源として南流し、小国盆地西部で横川と合流した後に飯豊山地より北流する玉川や足水川を併せ、新潟県関川村・荒川町を経て日本海へ至る。荒川と横根山北側で合流する横川は、飯豊山塊から北東へ伸びる山並に連なる地蔵岳を水源として北流し、土尾下流にて大石沢川と合流する。さらに北流して伊佐領付近で明沢川を合流した後、流れを西に変えて大滝川を合流する流域面積288km²、流域延長36.1kmの一級河川である。

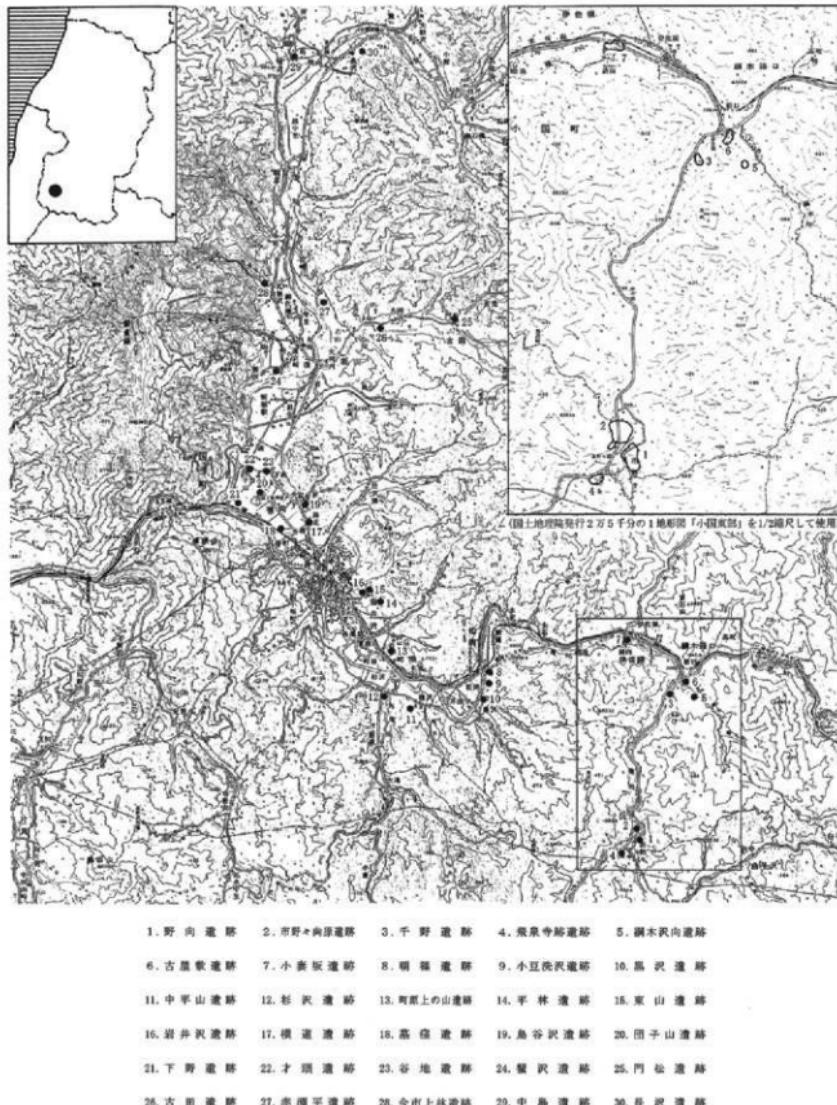
山地及び丘陵の表層地質は、概ね小国町北半で花崗岩質岩石、南半では新第三系中新統から成る。荒川流域には第四系の河成段丘堆積物が分布しており、横川流域の地質は礫・砂及び粘土から成る未固結の堆積物である。さらに山間地へ向かうと「箱ノ口墨層」と呼ばれる砂岩や珪岩から成る古生層に当たり、横川の中流部では珪質頁岩を探取することができる。また、横川が明沢川と合流するまでの間に、南北約4kmにわたり河岸段丘が発達している。周辺の山地は概ね緩斜面で構成されているが、所々に地滑り地形を認めることができる。

小国町内には平成8年度までに、90箇所の遺跡が確認されている。小国盆地周辺で特に密度が高く、約半数の45箇所が分布する。その他は、荒川水系により開析された谷底平野や段丘・緩斜面に立地している。遺跡の分布状況を地形的な要因からみると、旧石器時代の遺跡は小国盆地東縁の洪積段丘にのみ分布しており、他の地域では確認されていない。縄文時代の遺跡は小国盆地の沖積段丘から沖積低地面に多く分布しており、河川沿いの段丘にも散見される。これらの遺跡は標高130~340mの間に分布するが、特に140~180mの範囲に集中している。

野向遺跡は、横川とその支流の明沢川との合流地点から南へ約4kmの市野々地区に所在する。横川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は250m前後を測る。遺跡の東西は、南西方向に当たる桜峠付近から流れる2本の沢によって区画される。

市野々向原遺跡は野向遺跡の対岸、横川左岸の舌状に張り出した河岸段丘上に立地しており、遺跡南西部は一段高い台地状となっている。標高は247m前後であり、段差5mを測る台地上の標高は約252mとなる。

千野遺跡は、横川と明沢川の合流地点より南へ約600mの箱ノ口地区に所在する。横川左岸の高・中・低3段に発達した河岸段丘の内、中位段丘面を中心に立地している。標高は約206mを測り、河床面とは15m前後の比高差を生じる。遺跡西側の山地斜面には、地滑りによると思われる崩壊地形が認められる。



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行 5万分の1 地形図「小国」「手ノ子」を1/2縮尺して使用)

2 歴史的環境

小国町に所在する90数箇所の遺跡の内、7割以上が旧石器時代と縄文時代の遺跡である。他は平安時代以降の遺跡とされているが、その多くは時期を明確に確定できない。

旧石器時代の遺跡は、縄文時代との複合遺跡も含め今まで10箇所が確認されている。洪積段丘の中位面に立地する東山遺跡・平林遺跡、低位面には横道遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡等が分布する。これらの遺跡群は昭和35年以降、山形大学が中心となって精力的に調査が行われ、後期旧石器文化の変遷の様相を推察できる遺跡群として重要視されている。横道遺跡からは杉久保型ナイフ形石器が出土しており、また東山遺跡は東山型ナイフ形石器の標準遺跡となるなど、東北日本の旧石器時代研究の上で貴重な成果をあげている。

縄文時代の遺跡は、『朝日連峰学術調査報告書』及び『飯豊連峰学術調査報告書』に多数の遺跡が紹介されており、荒川上流の団子山から舟渡地区と横川下流の小国町中心街北東地域に密集して分布する。これまでには場整備や国道改修工事等を原因として、朝篠遺跡・蟹沢遺跡・団子山遺跡（小国町教育委員会）、下野遺跡・墓塚遺跡・谷地遺跡（山形県教育委員会）、古屋敷遺跡（山形県埋蔵文化財センター）の発掘調査が実施されている。これらの遺跡は、時期的に縄文時代中期から後期初頭を主体とするものである。箱ノ口地区に所在し千野遺跡の北東500mに位置する古屋敷遺跡からは、早期前葉から前期前葉にかけての住居跡6棟が検出され、遺構配置状況から明沢川左岸の段丘縁辺に沿って弧状に並ぶ集落形態が推察されている（佐藤他1995）。墓塚遺跡では前期の大木1式、中期の大木7b式～10式の土器と共に、33棟の竪穴住居跡が検出された。大木1式土器の中には関東地方の黒浜式に、大木7b式の中には北陸の新崎式や中部地方の梨久保式に類似するものが認められた（佐藤・名和1982）。谷地遺跡からは、中期中葉の大木7b式～8b式の土器と共に北陸地方の馬高式系の土器が出土しており、住居跡や土坑・配石遺構などが検出されている（佐藤他1983）。下野遺跡では、中期後葉の大木9式～10式期の複式炉をもつ住居跡や土坑などが検出された（阿部・名和1981）。蟹沢遺跡では、中期後半から後期初頭にかけての住居跡や土坑等が検出され、大木式系の土器と共に新潟県を中心とする三十稻場式の土器が多量に出土している（渡部・塚原1980）。朝篠遺跡からは、後期から晩期にかけての土器が出土し、晩期に比定される住居跡3棟が検出された（柏倉他1970）。このような調査成果から、小国町の縄文時代遺跡は北陸方面の影響が強く現れ、中期中頃までは馬高式などが共伴し後半にはそれらの影響が割と少なく、後期に入ると三十稻場式が流入するなど再び北陸の影響が強まる様相が指摘されている。したがって、当該地域は山形県下の最上川流域とは様相が異なるため、大木式系土器研究においても貴重な資料を提供していると言える。

弥生・古墳時代の遺跡は、当該地域では発見されていない。また、歴史時代の遺跡については山形県遺跡地図等に21箇所の記載が見られるが、内容の明らかなものは現在のところ報告されていない。弥生時代以降の遺跡数が極端に減少するのは、当該期の遺跡が現在の市街地や集落との重複によって破壊されたものなのか、あるいはこの地域の特徴と言えるのかは、今後の調査を待たなければならない。

III 野向遺跡

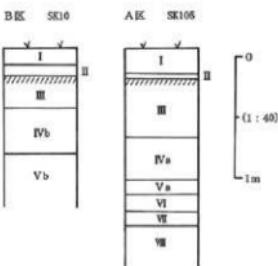
1 遺跡の概観

野向遺跡は、平成元年度に山形県教育委員会が実施した「小国町東部地区基礎調査」によって発見された遺跡である。東西150m・南北250mの範囲内からフレイクや石核が採集され、この調査により縄文時代の遺物散布地として登録された。遺跡面積は約23,700m²と推定されている。発掘調査前の地目は、一部が宅地跡と畠地の他は水田である。第2次調査区は、予備調査の結果を基に設定した7,900m²であり、遺跡北半部の段丘縁辺部が中心となる。

(1) 遺跡の層序

遺跡の立地する横川河岸段丘の基盤層は、礫・砂及び粘土からなる未固結の堆積物で形成されている。しかし、戦後の開田やは場整備により、大部分の範囲で地山付近まで削平されていることが過去の調査例から分かっている。遺物包含層が削り取られ、現耕作土直下が地山となっている区域もあり、特にA区中央部が顕著であった。したがって、包含層出土の遺物は原位置から移動している可能性が高いと思われた。

遺跡の基本的層序として、A・B区のそれぞれ南西隅部に位置する掘り下げ構造の側壁を利用して、現地表面から構造底



第2図 遺跡層序

面までの土層堆積状況を観察した。柱状に示したのが第2図であり、A区とB区ではIV層以下の層序が異なる。なお、VI層以下はA区のみの確認である。次に各層の観察所見を記す。

I層：黒褐色粘質土を基調とした表層腐植多湿黒ボク土壌で、耕作土である。

II層：黒色シルトを基調とした遺物包含層。A区中央部では完全に削平され、遺存しない。

III層：褐色細砂を基調とする地山層。B区よりA区の方が粒子が粗く、土層内の礫混入の割合もA区の方が多い。上面が構造検出面となる。

IV層：A区では褐色基調の砂層で、礫混じりの酸化した川砂が帶状に混入している。

B区では黄褐色シルト層で、固くしまって安定した地盤となる。

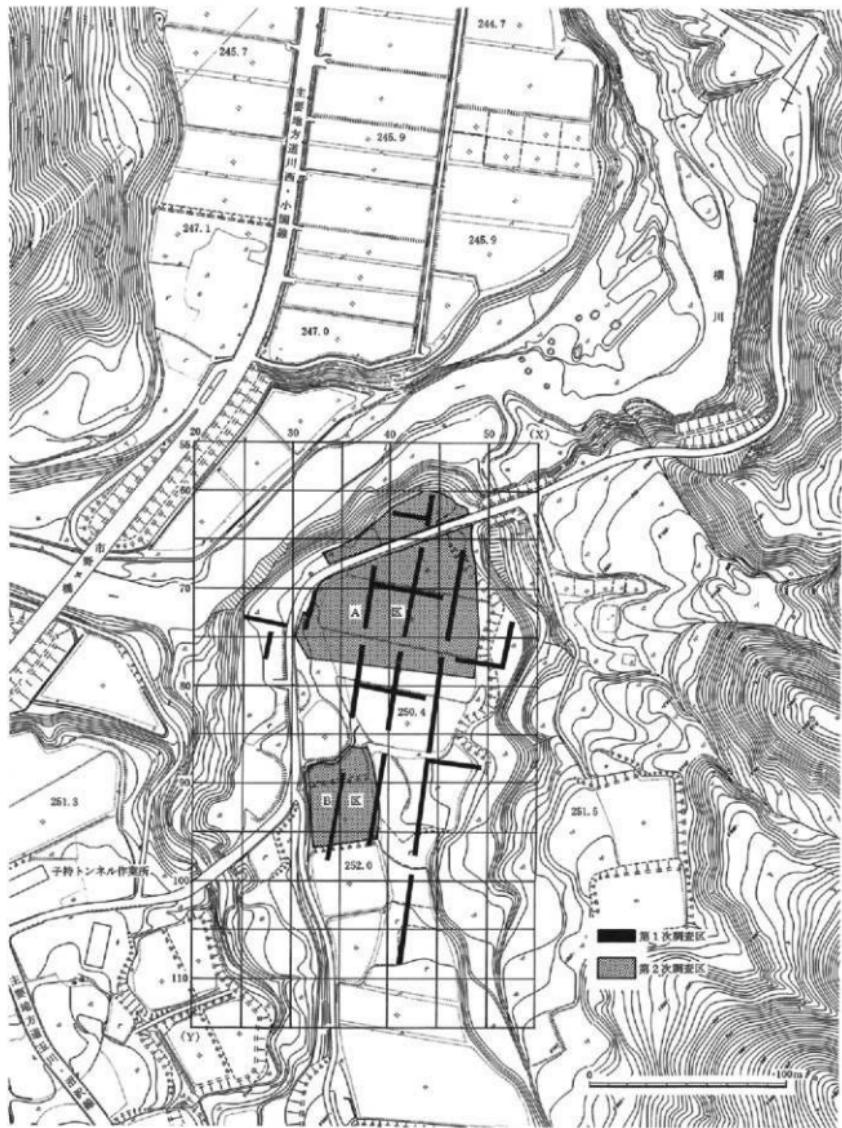
V層：A区では酸化鉄分を多量に含んだ川砂層が堆積する。氾濫時の旧河床と考えられる。B区では粗砂や礫を多く混入する暗褐色の砂層となる。

VI層：明褐色基調のシルト層で、混入物のない純粹な堆積土である。

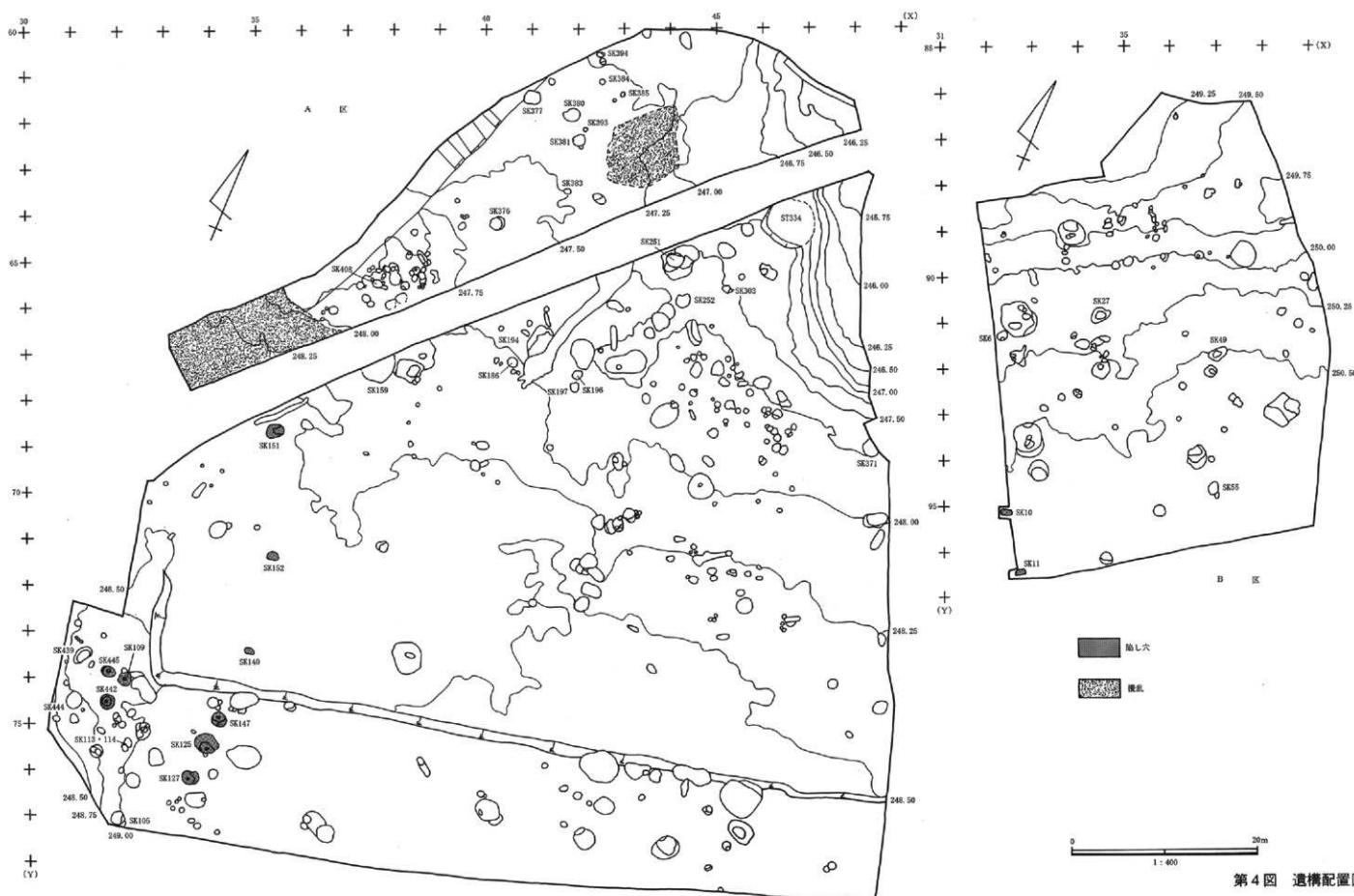
VII層：黄橙色粘土層である。川砂を帶状に混入している。

VIII層：灰褐色を基調としたシルト層で、全体に粗い川砂が混入する。

遺跡内の地形は大きくは二段の段丘面で構成されており、A区を低位から高位の、B区は高位の段丘面に設定した。段丘の成因は横川の解釈によると判断でき、A区の土層柱状図ではIII層以下でも砂礫や川砂が帶状に堆積していることから、低位面では河川の氾濫が幾度となく繰り返されたと考えられよう。しかし、構造覆土には川砂の流れ込みが認められないため、縄文時代に当地に集落が形成されて埋没するまでの間には、大きな氾濫がなかったと考えられる。



第3図 調査概要図 ($S = 1 : 2,500$)



第4図 遺構配置図

(2) 遺構と遺物の分布

検出された主な遺構には整穴住居跡1棟、住居内炉跡2基(重複関係)、陥し穴11基、土坑・ピット390基以上、及び倒木痕跡などがある。整穴住居跡はA区北東側の沢へ向かって下り始める緩やかな斜面に位置し、その他には認められなかった。陥し穴はB区南西隅に2基存在する他は、A区の西側において集中的に分布する。土坑は各調査区のほぼ全域で検出されたが、A区中央部では削平が著しいことから遺構の存在そのものが希薄であった。

A区における遺構分布の概観では、大まかに3区域に分けることが可能であろう。すなわち、住居跡とその南側に密集する土坑群からなる調査区北東域、特徴的な袋状形態の土坑を含め狭い範囲に土坑群が重複する段丘縁辺の北西域、陥し穴群はじめ他に比べ掘り方の深い土坑群が分布する南西域の大別3区分である。北東域は東側の沢に沿って下がる傾斜地形を利用して住居が配され、その南側の平坦な場所には等高線に沿うような配置で大小の土坑群が存在する。分布状況は住居跡を中心として、半円状に密集してまとまりを作るように窺える。ただ、住居跡西側の段丘縁辺部には近年まで家屋があったため、地山層に及ぶ攪乱が見られる。この部分に土地の改変がなければ、土坑群は半環を成して存在した可能性が考えられる。北西域も同様に家屋の土台等による攪乱を受け、さらに道路によって分断されるが、土坑が重複して集中的に検出されている。A区南西域は高位の河岸段丘面に位置し、陥し穴他の遺構群がまとまりある分布状況を呈している。この北側は低位面でも特に削平が顕著な区域であり、検出できたものは陥し穴など比較的深く掘り込まれた遺構の下部のみが遺存した結果と考えられる。なお、調査区南東部では倒木痕跡が多く認められた。

B区からは陥し穴・土坑や倒木痕跡など約70基の遺構を検出しているが、集中あるいはまとまりとして捉えられるものではなく、散発的な分布状況と言える。また、包含層・遺構内を含めて出土遺物が極めて少なく、配置や覆土の状況等から積極的に縄文時代の構築と判断されるものは少なかった。

一方、出土した遺物は量的に土器が12箱、打製石器・フレイク等12箱、凹石・石皿等の疊石器が3箱相当分で、相対的にも遺物の量は少ない状況であった。開田による遺物包含層の大幅な削平はこれまでにも述べてきたことであり、全体数の約71%は遺構内から出土している。この内、質的・量的にその主体となったのは整穴住居跡とSK377・381等一部の土坑であり、A区北側の河岸段丘縁辺部に配されたものに限られた。

A区における遺物分布の概観は、遺構の分布と比例するものではなく、特に中央東半部の遺構群内からはほとんど出土していない。また、土器を包含する遺構の分布を見る限り、調査区南西側から北側にかけての縁辺部、すなわち段丘縁辺に沿って分布している。遺構内出土土器は縁辺部配置のものにしか伴わず、他から皆無であるのは興味深い。表土及び包含層出土の遺物分布では、段丘端部にあたる43~45-60グリッド内と住居跡南側にあたる45~64グリッド付近に集中して認められた。B区からの出土遺物は総じて少なく、全体数の約7%にしか過ぎない。遺構毎またはグリッド単位で土器細片やフレイクが数点出土する程度で、まとまりや一括性に乏しい。概観では、標高の低い北半部にやや多いと言えそうである。

2 検出遺構

(1) 穴住居跡（第5・6図、巻頭図版1・図版2）

位置 調査A区北部の46・47-63・64グリッド、段丘縁辺から東側の沢へ向かって一段下がる傾斜面にかけて検出された。

重複 複式炉と推測される石圓部（E L 451）と土器埋設部（E L 452）の検出状況から、炉を造り替えたことが窺え、さらには住居の建て替えが行われた可能性も指摘される。

平面形・規模 耕地整理による削平と北東半部が傾斜面にかかる等の事由から、全体的な規模や形状は明らかにできなかった。南西半部の状況と等高線の在り方から円形になると推測され、推定規模の直径は約5mを測る。

覆土 薄い表土直下が遺構確認面となり、石圓部の露出状況などからほぼ住居跡の床面に近いと思われた。現道の通る西側ほど厚く削り取られた様相が窺え、覆土は中央部に掘り窪められたE L 452複式炉にかかる堆積土を認めるのみであった。大別3層まで確認した黒褐色土層は、大小の礫を多く含む砂礫層である。

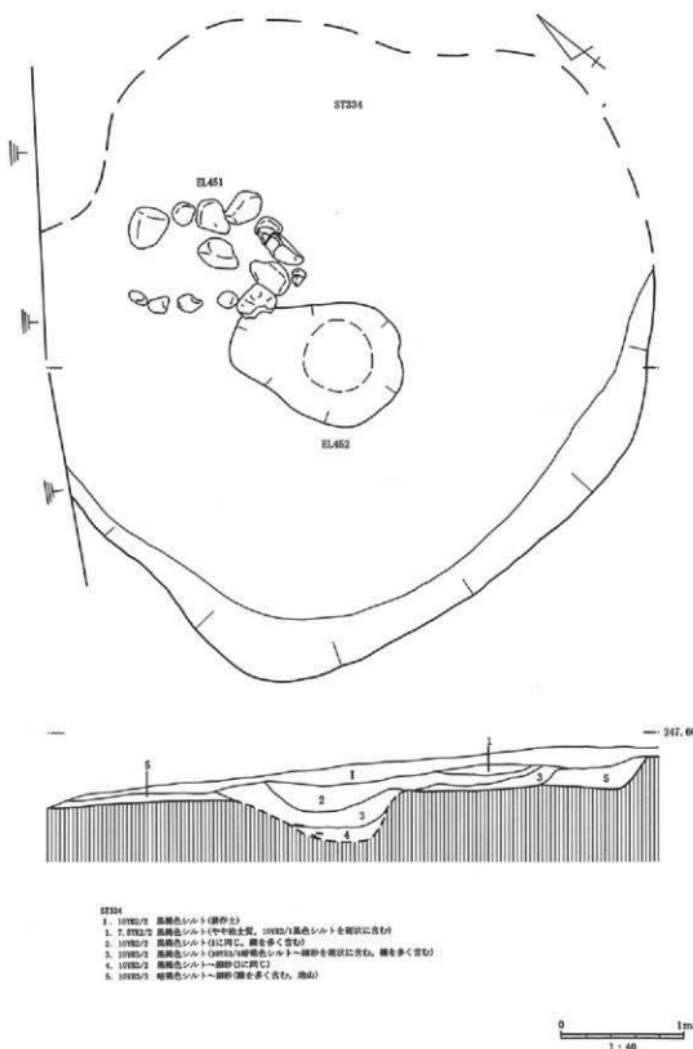
壁・床面 検出面がほぼ床面という状況であったため、壁の掘り込み面は確認し得なかった。床面は細かな凹凸があつたりして、必ずしも平坦ではない。河岸段丘の基盤層が砂礫層で、傾斜面付近は特に顕著な礫層であった。掘り下げ状況から床面下でも拳大から人頭大の礫が多く散在しており、床面の起伏は礫石の有無と関連しそうである。床面は貼り床であったものと考えられ、特に炉跡から西側部分が堅く打ち固められていた。

炉 複式炉と考えられる石圓部及び土器埋設部を検出したが、それぞれの主軸方向が異なるため造り替えたものと思われる。E L 452は石組みが認められないものの土器周辺に炭化物や焼土粒が散在していたこと、また燃成部と考えられる隅丸方形の落ち込みを伴うことなどから、複式炉の埋設土器のみが残存したものと考えられる。2基埋設された土器はいずれも深鉢の底部から体部下半であり、正位の状態で設置されている。R P 28の周囲には土器破片を敷き詰めており、熱効率を高めるための構築法と考察された。基軸方位はほぼ磁北に沿っている。なお、燃成部の掘り込みは最終的に60cm強を測り、一部の壁面がオーバーハングする形状から考え、住居構築前に存在した土坑と重複したことが窺われた。

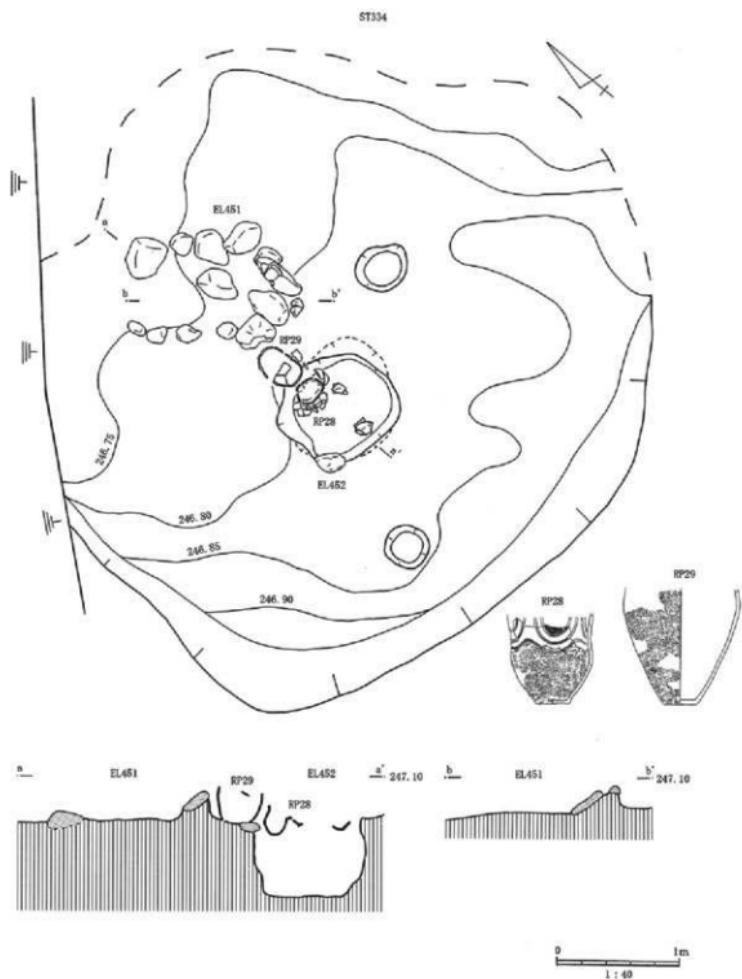
E L 451はU字状となる石圓いのみが認められ、被熱により破碎した礫や先端部の配石状態から炉跡と思われる。検出長150cm・幅90cm前後を測り、石圓いの形態等から複式炉と考えられるが、敷石や埋設土器も認められず廃棄後に取り除かれたものと想定された。

柱穴 住居内から2基のピットが検出され、規模や位置から見て主柱穴と考えられるものである。いずれも略円形を呈し、径40cm前後で床面からの深さ25cm程を測る。複式炉を持つ住居の主柱は、炉両側の各1本と炉の長軸線上の1本とからなり、3本の柱を結ぶ線が三角形状を呈することが多い。検出した2柱穴は、E L 452土器埋設部の東側とその長軸線上のやや西側に位置するものである。

出土遺物 住居南西半に遺物の集中が認められ、土器の他に石鏃・石籠等の成品とフレイク137点、石皿片1点と磨石等の円礫数点が出土した。土器は大木10式新相に比定される。



第5図 S T 334竪穴住居跡(1)



第6図 S T 334 壁穴住居跡(2)

(2) 陥し穴 (第7~9図、図版3~5)

土坑のうち底面中央にピットを有するもの、またはピットがなくても掘り方の形態がこれらと類似するものを「陥し穴」として扱った。調査区内より11基検出されており、その分布状況から配列を成すと考えられる一群（I類）と、配列を成さず極く近接して配置される一群（II類）とに大別できる。以下では、陥し穴の形態・規模や陥し穴群の配列・用途などについて確認できた内容を記述する。

立地 従来、陥し穴は丘陵地の緩斜面や尾根で多く検出され、付近に谷地形や湧水のあることが立地の条件となる傾向が指摘されてきた。河岸段丘上に立地する本遺跡の東西両側は沢によって区切られており、谷状の地形が発達していることから地理的要因の整った場所での構築と言えそうである。

配列 A区西側で検出されたSK127・125・147・140・152・151の6基は、段丘平坦部において緩く弧状を描いて配置されている。分布は高位・低位の段丘面に各3基が列を成し、高位面では近接した配列状況を呈している。陥し穴の距離は高位面のSK127・125・149間で2.6m等間、高位から低位に至るSK149・140間で7.4m、低位面のSK140・152・151間では各々10mと12.6mを測る。低位面においては間隔がそれぞれ2.6mずつ、すなわち高位面配列の一間隔に相当する長さが延長されていることになり興味深い。B区南西隅ではSK10・11の2基が確認されており、主軸方向や規模等が同じであることから、数基によって構成される配列の一部と判断される。間隔は6mを測り、高位の段丘縁辺に沿って構築したことが窺われる。

II類の陥し穴はA区南西隅で検出したSK109・442・445の3基であり、5m方形の範囲内に近接して三角形状に配置される。

長軸方向 I類の陥し穴では、長軸方向が配列中心線に対して直交する向きに構築されている。配列を成す陥し穴は、谷の方向に長軸が向いている点で一様の傾向が窺える。

形態 上面の平面形には多様な形態が認められるが、底面形状から次の2形態に分類できる。すなわち、長方形または長楕円形を呈するもの（A型）と、円形を基調とするもの（B型）である。形態の相異は配列構成と関連し、I類の陥し穴はA型で、II類のそれはB型によって構成されている。さらにA型には掘り方の相異により、上端から底部までほぼ垂直に掘り込まれるもの（A1型）と、途中に段を形成して狭まりながら底部に至るもの（A2型）の別がある。前者はSK10・11に見られ、上端平面形も長方形のプランとなる。後者はA区検出の6基であり、配列中間のSK140・152については上半部が削平されているが、他と同様の形態であったと推測されよう。

底面はA・B型に限らず平坦であるが周壁の掘り方はバラエティーに富み、SK10では底部周辺がオーバーハングして抉り込まれる形態となる。また、SK127・147・151・445では周壁途中にいくつかの段が認められ、周壁の一部が抉られる特徴を有する。これらは側壁の地山崩壊というより意図的な掘り方と思われ、特にSK147の中段には南北双方に半円状の窪みが掘り込まれている。これらの段や窪みは構築者の掘り方の際の足場、及び捕らえた獲物を引き上げるための足場として利用されたと考えられる。

規模 A1型の2基は上端平面形の長さ126cm・幅75cm、確認面からの深さ114~121cmを測り、同一規模であると言える。A2型は長さ160~188cm、幅108~144cm、深さ122~130cmを測る。上端平面形態の相異により一様ではないが深さはほぼ近似した数値を示しており、ある一定の深さまで掘る必要があったものと推察される。円形を呈するB型の一群は、長径142~170cm・短径124~156cm、深さ104~133cmの規模を有する。

S K11・151を除いて存在する底面ピットの規模は、形態の相異により大小の別がある。A型のピットは径16cm前後・深さ4~10cmと小規模であるのに対し、B型では径が30~40cm・深さは18~40cmを測り、総じて大型を呈している。

底部施設 底面ピットの存在は、陥し穴の機能との密接な関係が考えられることから施設と理解される。ピットが存在する陥し穴の一般論として、棒状のものを立てるための掘り方、あるいは直接打ち込んだことによる痕跡かと推定されている。

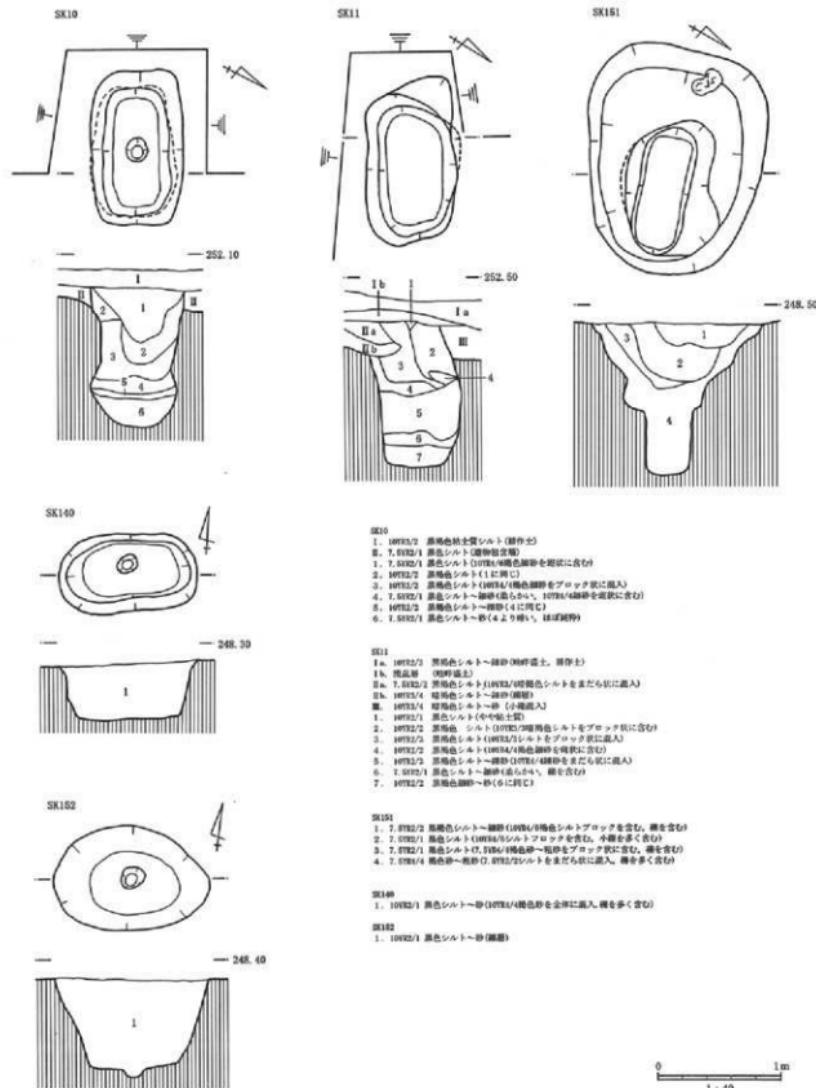
11基中9基の陥し穴で確認されたピットでは断面観察を行っていないので明らかではないが、規模の大きいB型のピットについては掘り方と推察される。また、S K127等に見られる極めて浅い壅み状のものは、陥し穴を掘った時に生じた用具の痕跡かとも考えられる。ピットの規模に大小が見られるのは、棒状のものを1本ずつ立てたものと、何本かと一緒に立てるという構築法の違いとして把握される。ピットは同一配列の中でも有無が認められることから、陥し穴の機能を左右するものではないと考えられる。

用途 本遺跡より検出された陥し穴群は、分布や配置状況から2類に分類できた。その使用法について想定した場合、I類における配列を「けもの道」の痕跡と捉え、仕掛けとして陥し穴を掘り偶然動物が落ちるのを待ったものと考えられる。一方、II類の陥し穴群は狩猟の際に動物を追いつめて追い落とすためのものと考えられ、狩猟法の違いが配置や形態の差異であろうと思われた。

陥し穴の機能は対象獣を落とし行動の自由を奪うこと、あるいは足を踏み入れることによる骨折等を目的としたものと捉えられる。底部に立てたと仮定される棒（逆茂木）は捕獲するという目的の他、動物の足を拘束して外に出られないようにする仕掛けの一部とも考えられている。また、先に述べた掘り方内に段を持つ形態の陥し穴は、その「機能を高めるための補助的な付属施設と考えられ、異的なものが想定される。」（斎野1983）との指摘もなされている。

出土遺物と時期 11基中7基の堆積土内に遺物が含まれており、S K109・127・442から土器片13点、S K11・109・127・140・151・442・445から搔器2点とフレイクが計27点出土している。S K442より出土した土器10片は、R Lの縄文が施される深鉢形土器の同一個体と認識され、遺跡の主体となった住居跡等出土土器と同時期に比定された。S K127出土土器は摩滅しているものの（網目状？）撚糸文が施され、胎土には纖維の混入が認められる。

これら出土土器から、A区検出で配列を成す一群が機能していた時期は縄文時代前期、またII類としたS K109・442・445の一群は同中期とと考えられる。したがって、縄文時代中期には河岸段丘北側縁辺部を居住域として利用したと同時に、段丘上の一部は水場へ行く対象獣を追い込んだ狩猟域・採集域としての性格を持っていたものと理解される。



第7図 SK10-11-140-151-152 陥し穴

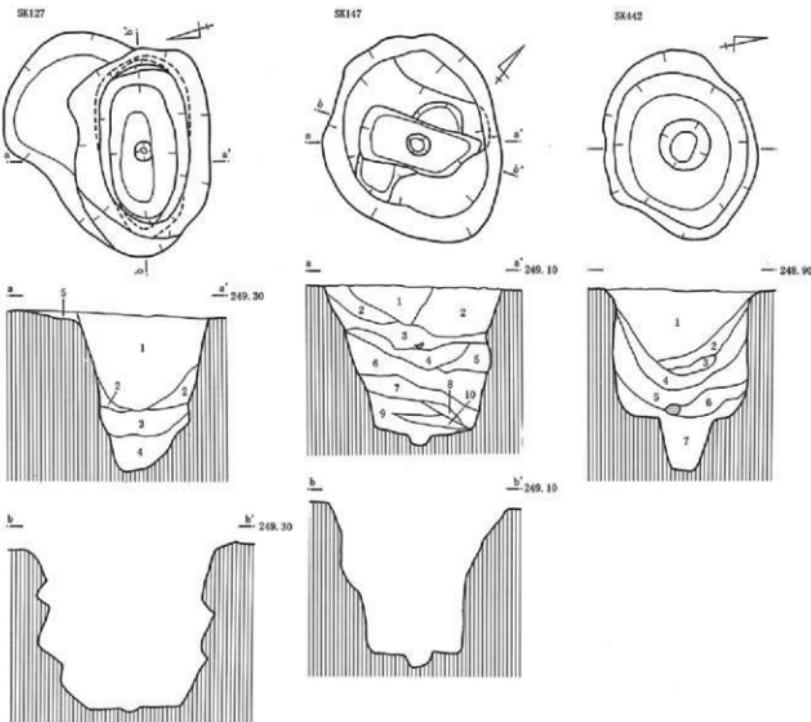


図8

1. IWE2/2 黄褐色シルト(小礫を含む)、(厚さ30cm)
2. IWE2/2 黄褐色シルト(0.05m/6mm砂利一部を含む。礁を含む)
3. IWE2/1 黒褐色ヘーフ(小礫を多く含む。厚さ30cm)
4. IWE2/2 黄褐色泥層～礁(厚さ10cm)、IWE1/69をブロック状に含む
5. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(小礫を含む)

図8

1. IWE2/2 黄褐色シルト(小礫を含む)、(厚さ30cm)
2. IWE2/2 黄褐色シルト(IWE1/69を複数層をブロック状に混入。礁を含む)
3. IWE2/1/2 黄褐色シルト～礁(1.1m開口)
4. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(2.4m開口)
5. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(4.4m開口)、礁(4.4m開口)、礁(4.4m開口)
6. 7. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(4.4m開口)、礁(4.4m開口)
7. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(0.05m/2mm砂利一部を含む。礁を含む)
8. IWE2/2 黄褐色泥層～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁を含む
9. IWE2/4 黄褐色泥層～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁を含む
10. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)

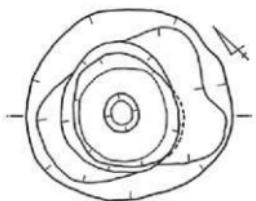
図8

1. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(0.05m/6mm砂利一部を含む。礁下部に1.0m/4mm砂利層を混入)
2. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(0.05m/2mm砂利シルトをブロック状に含む。小礁を含む)
3. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(2.4m開口)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)
4. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)
5. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)
6. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)、礁(0.05m/4mm砂利を含む)
7. IWE2/1 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)
8. IWE2/2 黄褐色シルト～礁(0.05m/4mm砂利を含む)

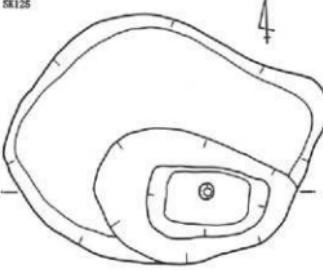
0 1m
1:40

第8図 SK127・147・442 陥穴

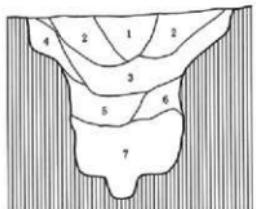
SK445



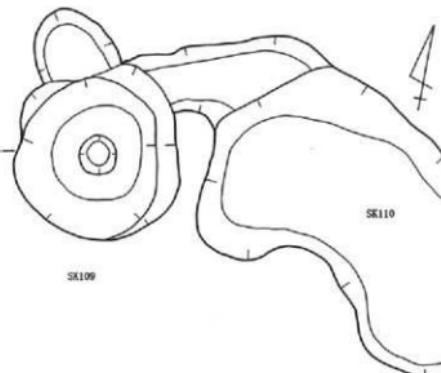
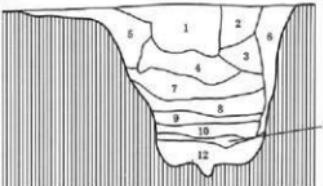
SK125



— 248.90

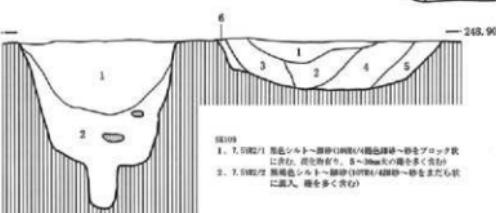


— 248.20



SK110

SK109



— 248.90

SK109

1. 7.5m2/1 黒褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑～砂をブロック状に含む。底生植物。8~30cmの箇所多く含む。
2. 7.5m2/2 黒褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層～砂をまだら状に含む。砂を多く含む。



- SK445
 1. 10m2/2 黒褐色シルト～砂卵(底生)
 2. 10m2/2 黒褐色シルト～砂卵(底生)砂を含む。小礫を多く含む。
 3. 10m2/2 黒褐色シルト～砂卵(底生)砂を多く含む。
 4. 10m2/2 黒褐色シルト～砂卵(底生)砂を多く含む。底生植物。
 5. 10m2/2 黒褐色シルト～砂卵(底生)砂を多く含む。底生植物。
 6. 7.5m2/1 黒褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑～砂をブロック状に含む。
 7. 7.5m2/1 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑～砂をブロック状に含む。6. と
り切ら。

- SK125
 1. 10m2/2 黑褐色シルト(本層を含む)
 2. 10m2/2 黑褐色シルト(100m/4層)4層色薄緑をブロック状に含む。
 3. 10m2/2 黑褐色シルト(本層を含む)
 4. 10m2/2 黑褐色シルト(本層を含む)
 5. 10m2/2 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑をブロック状に含む。小礫を含む。
 6. 10m2/4 1層色薄緑(0.1m)/1.5mトモドリを複数に含む。小礫を多
く含む。
 7. 10m2/2 黑褐色シルト(底生)を含む。11.5m厚
 8. 10m2/2 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑を含む。
 9. 10m2/2 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑を含む。底生植物。
 10. 7.5m2/1 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑を含む。
 11. 10m2/4 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑を含む。
 12. 10m2/2 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑をブロック状に含む。

- SK110
 1. 10m2/2/3 黑褐色シルト～砂卵(107m/4層)4層色薄緑～砂をブロック
状に含む。小礫を多く含む。
 2. 10m2/2 黑褐色シルト～砂(小礫を多く含む。底生植物)
 3. 10m2/2/1 黑褐色シルト～砂(小礫を多く含む。底生植物)
 4. 10m2/2 黑褐色シルト～砂(107m/4層)4層～砂を全体に含む。
 5. 10m2/2 黑褐色シルト～砂(107m/4層)4層～砂を複数に含む。
 6. 地山

第9図 SK109・125・445陥し穴、SK110土坑

(3) 土坑（第10～14図、図版6～10）

調査で土坑として登録した数は335基であり、その分布状況等は前述したとおりである。ここでは、遺構内よりまとまった遺物が出土したものを中心として取り上げ、掲載した順に従い形態や堆積土等についてその概略を記す。

S K377 A区北辺部40・41-61グリッドで検出された土坑で、西側上端部を河川へ下る近代の道路跡によって切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径186cm・短径140cmの規模で、確認面からの深さは60cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、壁面の掘り込みが急激であることから鍋形の断面形態となる。黒褐色を基調とする覆土は基本的に5層に分かれ、全体的に炭化物に富む自然堆積層である。遺物を含むのはF 1・2層（堆積土番号1～4）で底面に密着するものはないものの、坑内からは質・量とも一括した遺物が出土している。平面的な分布に特に片寄りは見られず、均一的な出土状況と捉えられた。土器に完形品はないが、器形を窺い知ることのできる資料は住居跡出土のものより多い。第16・17図に示した深鉢等15点の他に土器片112点、フレイク35点を数えた。これら出土遺物は縄文時代中期末葉のものであった。

S K376 A区北縁部の40-64グリッドで、孤立して検出された梢円形状の土坑である。規模は長径162cm・短径140cm、深さ50cmを測り、断面形は鍋形を呈する。壁面はほぼ垂直的で、形態としては円筒状に掘り込まれる。南西側を除き2段階に掘り込んでおり、テラス状の平場が構築され、また底面にはピット状の浅い窪みが存在する。4層からなる覆土の堆積は、上半部で南側からの流れ込みによる状況を示しており、第1層に集中する遺物の在り方からも窺えた。出土遺物には土器片101点と57点のフレイクがあり、いずれも細片であるが内6点の土器を第18図に示した。これらの遺物の時期は縄文時代後期初頭に比定されるものである。

S K384 A区北縁部42-61グリッドに位置する。円形を呈する平面プランの直径が50cm強、検出面からの深さ30cm程を測る規模的に小型の土坑である。断面形は中膨らみの袋状となり、土坑中程の径が60cmを測る。土層断面では壁面の崩壊も予測され、構築及び機能当時の形態ではないと考えられた。覆土は3層に分けられ、遺物を包含するのは1・2層である。遺物は一括性のある土器片のみ81点が出土している。復元できず図示していないが、2点認められた口縁部資料の特徴等から、LR縄文が施文される粗製の鉢形土器と判断された。時期は縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

S K408 A区北西域の38-65グリッドで検出した。東西に長い鍵穴状の平面形を呈し、東西長164cm、円形部の南北径87cmを測る。底面は中心に向かって緩い傾斜をなしており、東側の張り出し部は階段状に構築されている。確認面からの深さは、中央最深部で30cmである。覆土の堆積過程から判断すれば、一旦埋まった後に東半を掘り込んだ様相が窺い知れ、再度の掘り返しがあったか、あるいは遺構3基重複の結果の平面プランと考えられた。壁面は東端部を除けば全周で抉り込んだ掘り方がなされ、特に西・南側において底部付近が広くオーバーハングを受ける。底部が広いフラスコ状の断面形態となることから、貯蔵穴としての用途が想起された。遺物は土器片6点とフレイク8点を数え、第18図32・33の土器はほぼ坑底密着の状態で出土した。遺物の時期から縄文時代前期中葉の所産に捉えられる。

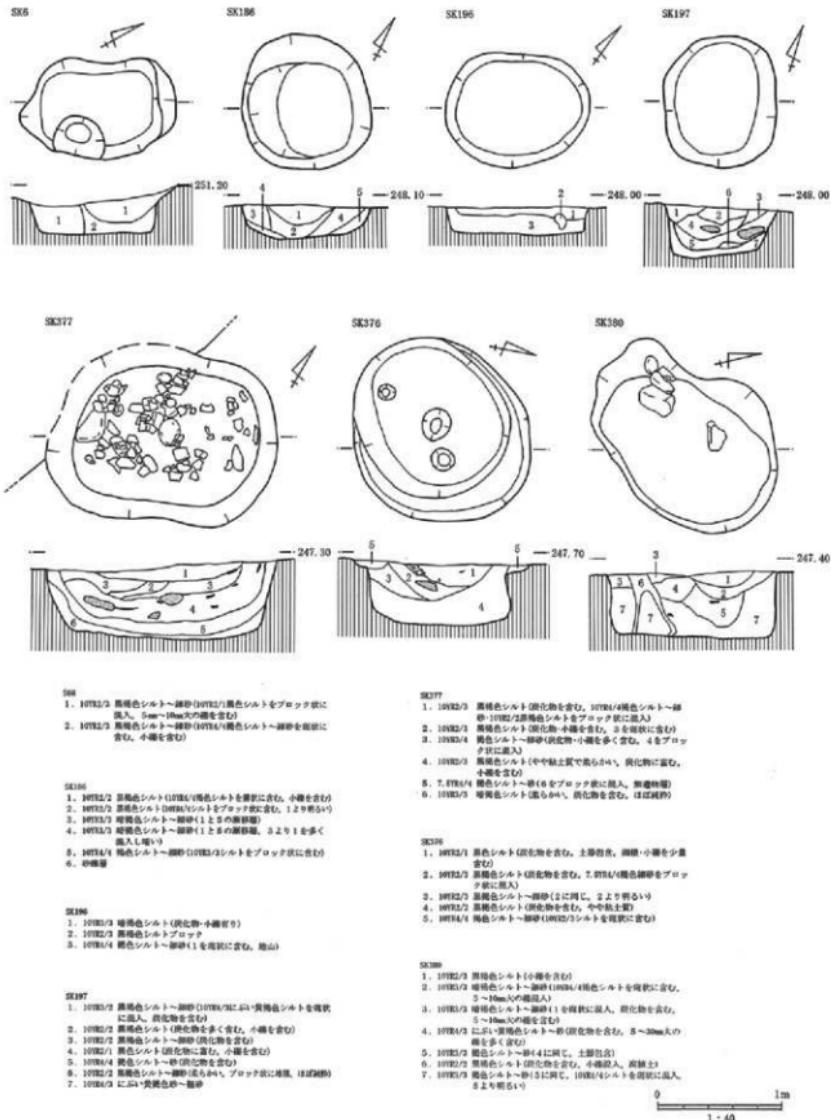
S K113・114 A区南西部の32-75グリッドで検出された重複関係にある土坑で、SK114がSK113を切る。南北長152cmを測る8の字状のプランで、深さはSK113で60cm・SK114が51cmである。坑底は各々において起伏が無いものの、壁面には段や抉り込みが見られ複雑な形状を呈している。覆土はそれぞれ6層の別を認め、黒褐色の砂質土を基調とするものであった。坑内出土遺物は少なく、SK113から石皿1点（第24図75）が、SK114より土器片2点・フレイク15片と削器1点（第22図58）が出土している。土器片には纖維が含まれていることから、時期は縄文時代前期に比段されよう。

S K381 A区北縁部41・42-62グリッド、SK377の東方で検出した土坑である。平面形は略円形を呈し、南東隣に接する浅いピット状の遺構（SP382）を切る。規模は直径が約130cm・深さ50cm程を測り、断面形態は船底形となる。掘り方は中段を形成して底面に至り、北西側ほど垂直な壁面となる。シルト質の覆土は4層からなり、土坑中央部には焼土混じりの褐色土がレンズ状に堆積する。出土遺物は第2層を主体に土器細片を多く認め、第17図26・27の土器資料以外に218片、フレイク32点等がある。縄文時代中期末葉の時期が当てはめられる。

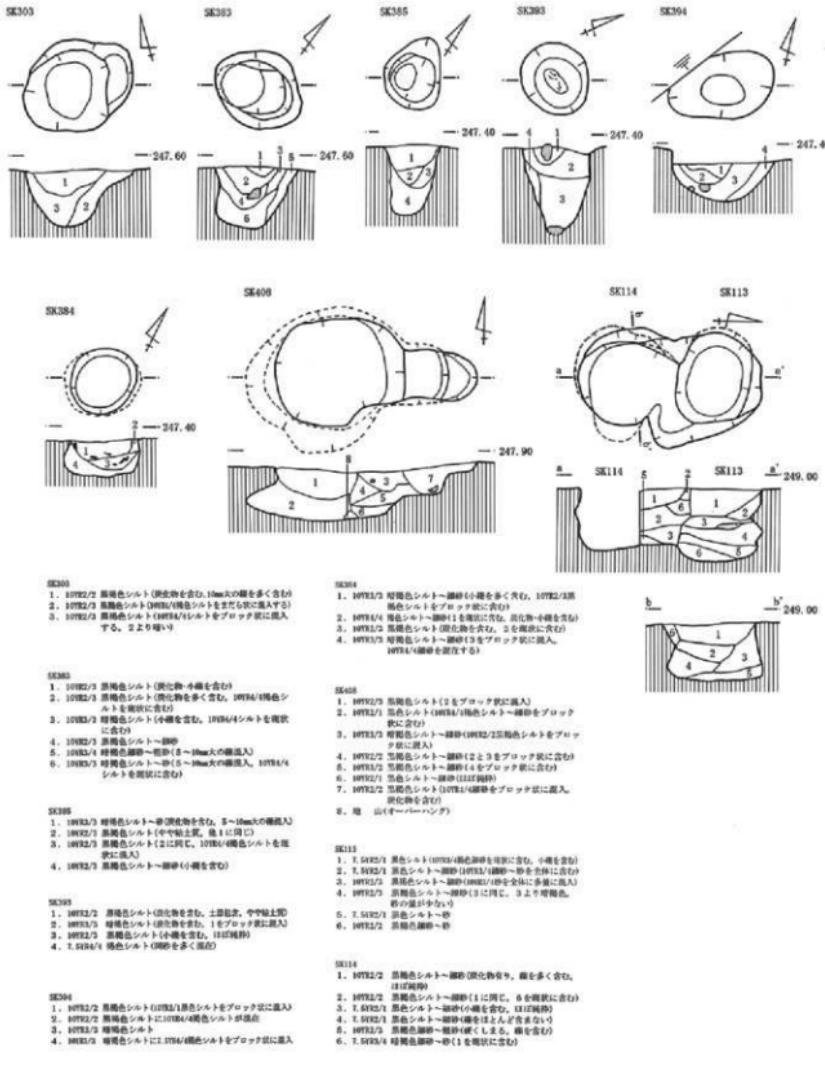
S K159 A区北西域、37-67グリッドで検出された大型の土坑である。その北西半分は現在の道路によって切られる。検出直径370cm強を測る円形のプランを呈し、規模的にも堅穴住居跡の一部と想定されたが、掘り込みや床面の状況等からは断定できず土坑とした。南側に段を設けて底面に至り、ほぼ平坦な底面から立ち上がる周壁は比較的緩やかである。底面には大小のピットが掘り込まれるが、いずれも深さ4~8cmの浅いものであった。覆土は4層の別が認められるが、大部分には炭化物を含む黒色土層（F1）が堆積する。遺物はこの黒色土層内より出土しており、土器片9点とフレイク36点を数えた。出土土器からの時期判定は難しいが、縄文時代中期末葉～後期初頭の所産と考えられる。

S K251 A区北部の43・44-64・65グリッドにおいて、住居跡より南西方向へ10mの場所で検出された重複関係にある土坑である。プラン検出時は北東側に張り出しを持つ隅丸方形の大型遺構と認識したが、底面まで何段にも掘り下げられることと土層断面に切り合いを認めたことから、遺構3基以上の重複があると判断された。中段以下の平面形は長径168cmを測る東西に長い隅丸方形を呈し、確認面からの深さは82cmである。覆土は礫石を多く含む大別4層の堆積過程を示し、重複関係にあるSK453を切る。遺物は第17図24・25に示した深鉢片と第23図64の凹石の他、土器片91点・フレイク35点・石皿1点が出土している。遺物の年代はすべて縄文時代中期末葉に属すると思われる。

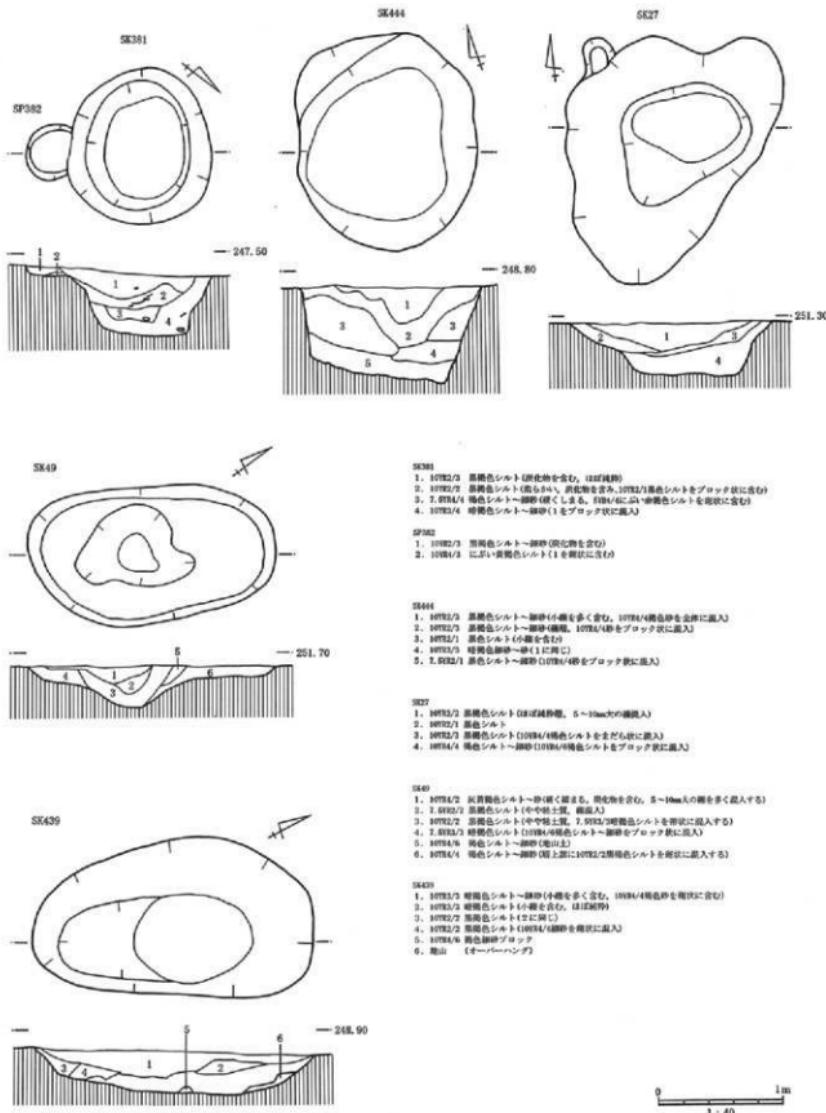
S K105 A区南西隅部、31-77グリッドにおいて確認された土坑である。平面形は直径135cm程を測る円形を呈している。掘り込みは検出面から156cmと深く、起伏の無い底面だが中央部でやや落ち込むため、断面形はU字状となる。東側では途中に段を形成して壁面が比較的緩やかに立ち上がるのに対し、西半部ではほぼ垂直的な掘り方となっている。覆土は5層に分かれる自然堆積層だが、断面観察により東側の一部では埋まる途中に壁面の崩壊による地山土の混入が認められた。覆土中に礫石を多数混入するものの、遺物として取り上げたのはフレイク5点のみであるため時期の比定は難しい。



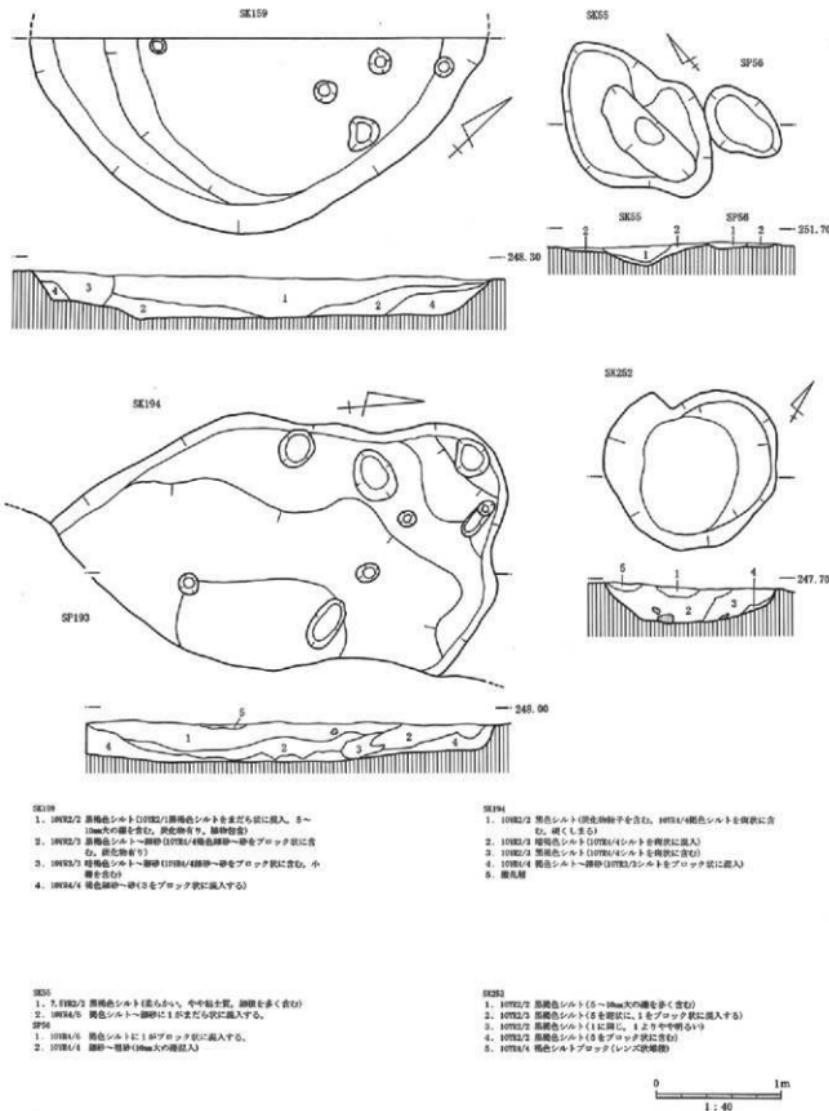
第10図 S K 6・186・196・197・377・378・380土坑



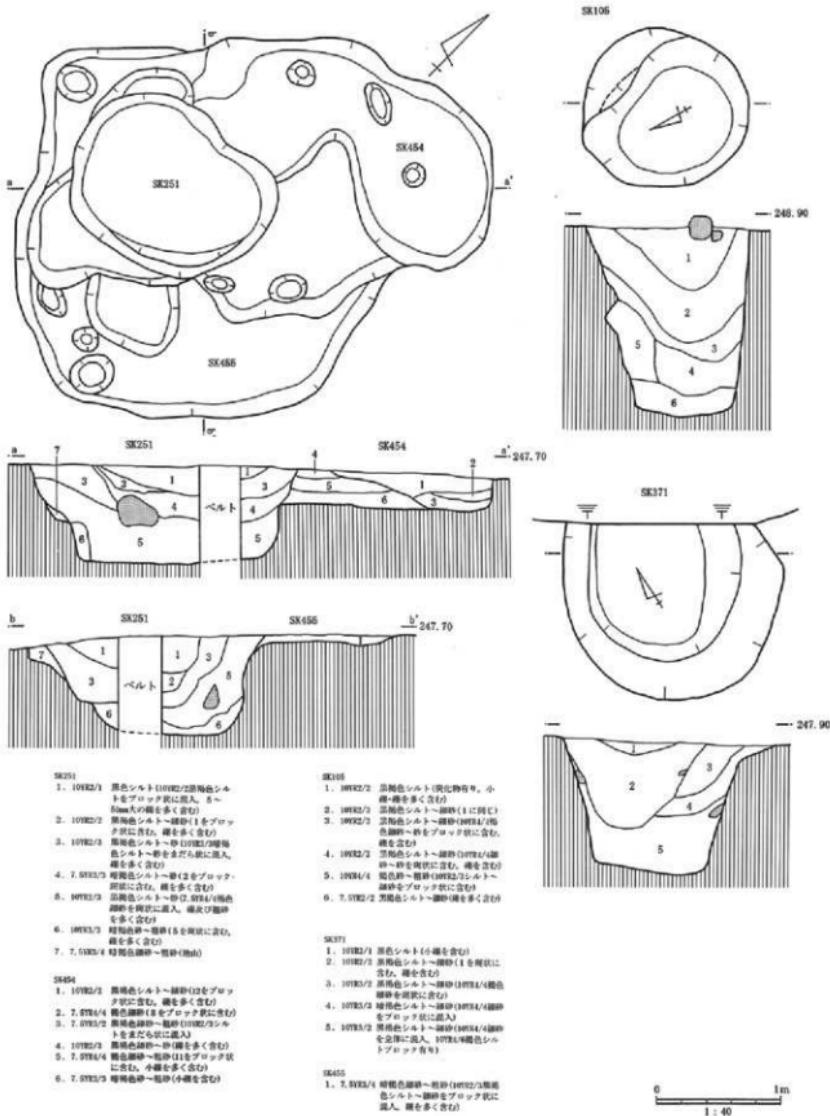
第11圖 SK113:114:303:384:385:393:394:408土墳



第12図 S K27・49・381・382・439・444土坑



第13図 SK 55-56-159-194-252土坑



第14図 S K 105・251・371土坑

3 出土遺物

(1) 繩文土器 (第15~18図、図版11~14)

例示資料は遺構内出土土器を取り上げ、一括的な遺物が出土した住居跡とSK377土坑の器形復元土器を主体に、その他の遺構内から出土した帰属時期を推測できる破片資料の実測・拓影図を掲載した。以下には、遺構毎の土器様相を概観して述べる。

S T334住居跡出土土器

2・8はEL452複式炉に埋設された土器で、ともに口縁部が欠損する深鉢である。2は緩く張り出す胴部から頸部で僅かにくびれ、口縁部が弱く外反する器形を呈する。胴部中央に波状の沈線が引かれ、この沈線によって文様が描かれる胴上部と、地文(縄文)のみとなる胴下部に区画される。文様は沈線で4単位のU字状文を施し、U状に囲まれる内部に地文となるRL縄文が充填され、沈線区画内の地文を磨消している。文様帶が胴上部に限定されるため、文様は横方向へ展開するものである。8は胴部最大径から口縁部が緩く内寄する器形を呈し、文様帶を持たない地文のみの粗製土器と認識された。

1・3~7は覆土内より出土した一群で、器種に深鉢(1・6・7)、鉢(3・4)、小型の壺(5)が認められる。鉢の器形は口縁部が大きく外反するものである。器形が窓い知れる1は、球形状を呈する胴部から口縁部が外反するものである。頸部に横位沈線を引いて区画し、胴部に○状の文様を描いてその内部には複節縄文(RLR)が施される。その他4・5・7にはC字状・U字状・楕円状文が沈線で施され、内部に縄文を充填している。

これらの土器群は大木10式に属するものであり、文様が器面上半部に集約される傾向が指摘できることから、新相を示す土器群として理解される。

S K377土坑出土土器

器種には深鉢と鉢が存在する。深鉢に全形を窺える資料はなく、口縁部破片を主体に例示した。口縁部の器形は外反するもの(11)、胴部との間に僅かなくびれを持ち外反するもの(9・14)、直立するもの(21)等が認められる。また、鉢の器形には口縁部が外反するもの(15)と、内寄して直立するもの(10)等の別がある。9・11の文様は、胴上部に幅広の沈線で横長のC字状文を描き、内部に縄文を充填している。文様外の器面はよく研磨されている。その他15・18・19の口縁部資料も、同様の文様内地文充填土器として捉えられた。

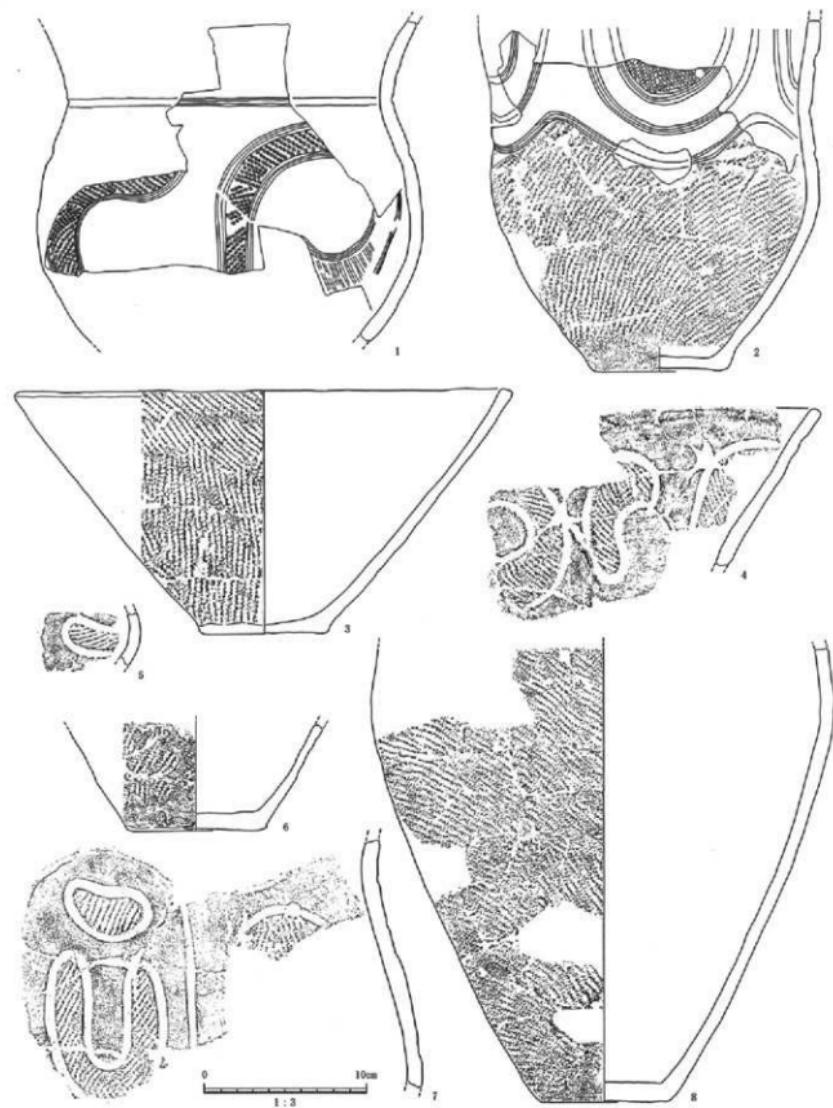
大木10式土器に位置付けられる出土土器群は、文様の構成と沈線を引いた後に磨き調整が加えられる等の特徴から、古相を示す一群として把握される。

S K251・380・381土坑出土土器

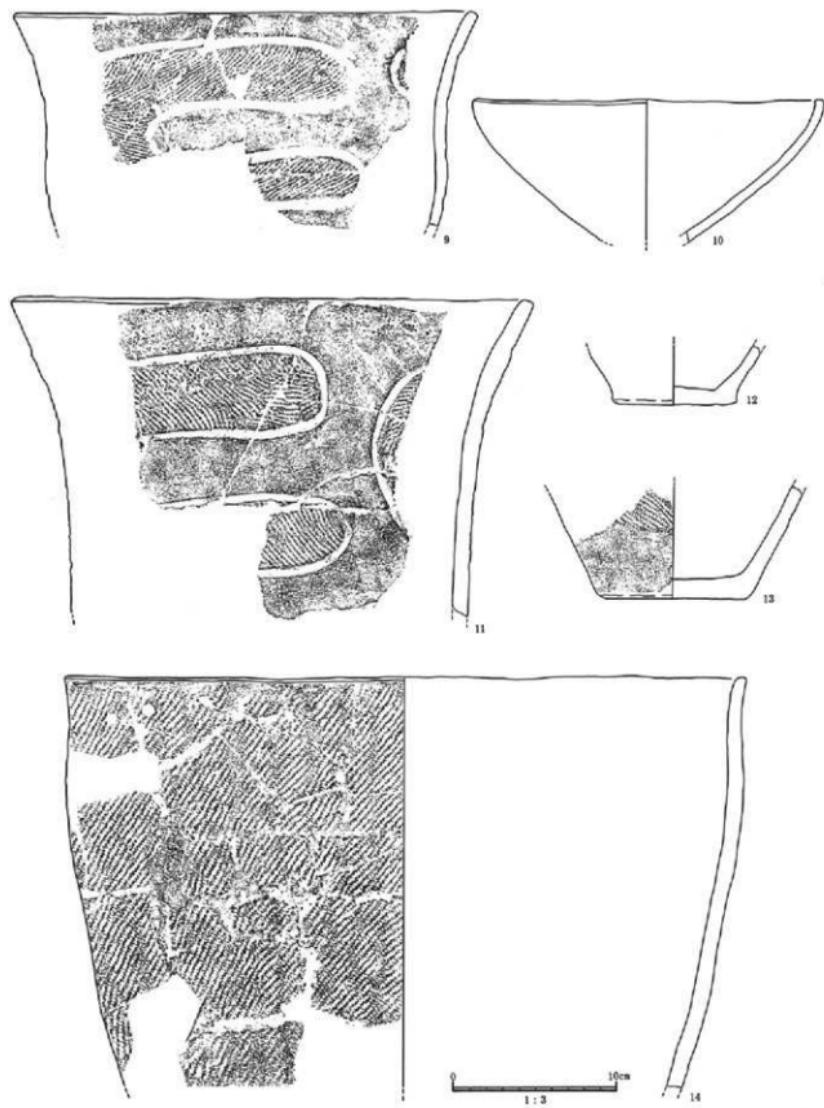
図示し得た資料はSK251出土の深鉢破片2点(24・25)、SK381出土の深鉢口縁部片と小型壺が各1点(26・27)、それにSK380から出土した2点の深鉢口縁部片(28・29)である。

24は渦巻状もしくは○状文様が沈線によって施され、波形やU字状が描かれる25とともに文様内地文の単節縄文が充填されたものである。これらは住居跡出土土器と同様の文様構成と観察されることから、大木10式新相の要素を持つ土器と捉えられる。

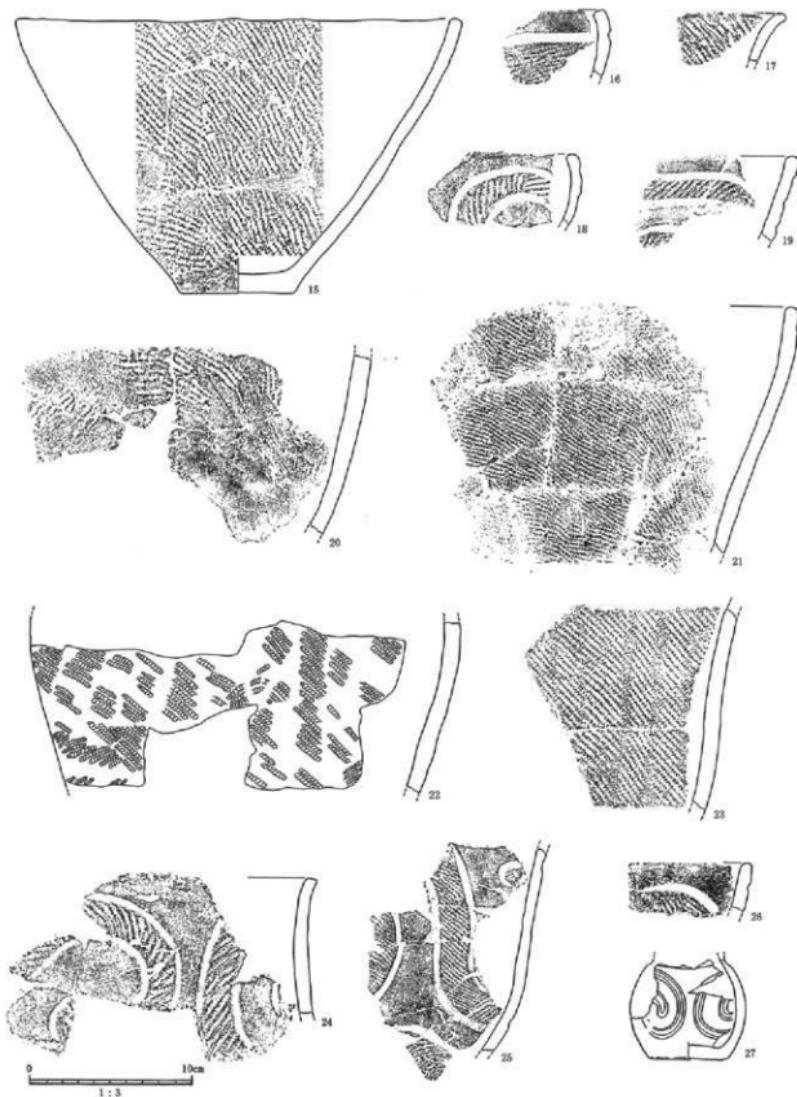
一方、外反する深鉢口縁部片に当たる26や28・29は、文様の線描後に磨かれる調整沈線が施



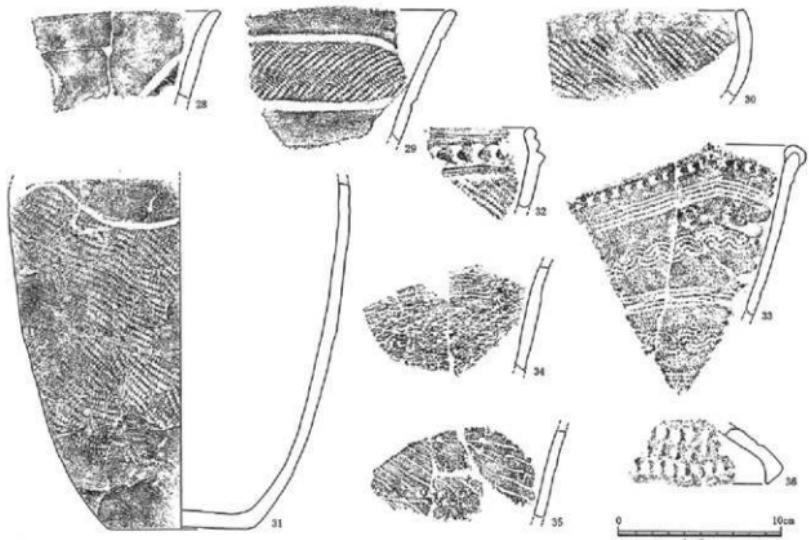
第15図 繩文土器(1)



第16図 繩文土器(2)



第17図 繩文土器(3)



第18図 繩文土器(4)

される様相から、SK377土坑出土土器群と同時期の大木10式古相に比定されよう。

S K408・446土坑出土土器

この2基の土坑から出土した土器群は、前期中葉の大木2a式に相当すると考えられる一群である。検出遺構において主体となる時期ではないことから、当該期の土器はかなり少ない。

SK408から出土した32・33は、深鉢口縁部資料である。平縁と思われる32は、2条の沈線で区画した口縁文様帶にC字状の連続刺突文が巡り、文様帶下には斜縄文が施される。33は4対の山形口縁を持つと想起される深鉢で、突起先端部に疣状の隆帯が貼り付けられる。口縁には32同様のC字状刺突文が巡らされ、体部には4条1単位の平行沈線文とコンパス文が交互に施文されている。SK446出土の34・35には、波状沈線文や網目状撚糸文が全面に認められ、胎土には若干ながら纖維の混入が観察される。

S K376出土土器

36は爪形の連続刺突文が全面に施される蓋の口縁部資料である。この他土坑内からは、図示しえなかつたが同文様の深鉢細片や、櫛齒条線文または区画隆線文を伴う土器片が認められた。これら土器群は三十稻場式の所産と認識され、帰属時期は後期初頭と判断できる。

以上、遺構毎の土器様相を概括的に説明したが、掲載資料個々の文様・地文等については観察表に記した。なお、表中の時期・分類の基準は、後章の市野々向原遺跡及び千野遺跡出土土器を含めて行ったものであり、編年表（第99～101図）に拠ったことを付記しておく。

表2 土器觀察表

標印 番号	遺物 番号	出土地點 層位	時期 分類	器種	文 様	備 考
15	1	ST334 F3	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(○字状)→充填繩文(RL)	
	2	ST334 F3	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(U字状・波溝状)→充填圓文(RL)、圓文(RL)	RP26
	3	ST334 F3	Ⅷ2	鉢	圓文(RL)	
	4	ST334 F3	Ⅷ2	鉢	区画沈線文(C字状・梢円状)→充填圓文(RL)	
	5	ST334 F3	Ⅷ2	壺	区画沈線文(梢円状)→充填繩文(RL)	
	6	ST334 F3	Ⅷ2	深鉢	圓文(RL)	
	7	ST334 F3	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(U字状・梢円状)→充填圓文(RL)	
	8	ST334 F3	Ⅷ2	深鉢	圓文(RL)	RP29
16	9	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文(C字状)→充填圓文(RL)	
	10	SK377 F1	Ⅷ1	鉢	無文	
	11	SK377 F2	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文(C字状)→充填繩文(RL)	
	12	SK377 F2	Ⅷ1	深鉢	無文	
	13	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
17	14	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	15	SK377 F1	Ⅷ1	鉢	圓文(RL)	
	16	SK377 F2	Ⅷ1	鉢	区画沈線文→充填圓文(RL)	
	17	SK377 F2	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	18	SK377 F1	Ⅷ1	鉢	区画沈線文(S字状)→充填繩文(RL)	
	19	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文(S字状)→充填繩文(RL)	
	20	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	21	SK377 F2	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	22	SK377 F2	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	23	SK377 F1	Ⅷ1	深鉢	圓文(RL)	
	24	SK251 F1	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(彌倦状)→充填繩文(RL)	
	25	SK251 F1	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(U字状・波溝状)→充填圓文(RL)	
	26	SK381 F2	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文→充填圓文(RL)	
	27	SK381 F2	Ⅷ1	壺	区画沈線文(彌倦状)	
18	28	SK380 F2	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文	
	29	SK380 F2	Ⅷ1	深鉢	区画沈線文(C字状)→充填繩文(RL)	
	30	SK383 F2	Ⅷ	鉢	圓文(RL)	
	31	45-60 II	Ⅷ2	深鉢	区画沈線文(波溝状)、圓文(RL)	
	32	SK408 F2	Ⅸ	深鉢	連續刺突文(C字状)、区画沈線文、圓文(RL)	
	33	SK408 F2	Ⅸ	深鉢	波状線形帶粘付文、連續刺突文(C字状)、平行沈線文+コンバス文	
	34	SP446 F1	Ⅸ	深鉢	波状沈線文、網目状攝糸文	
	35	SP446 F1	Ⅸ	深鉢	網目状攝糸文	
	36	SK376 F1	Ⅷ2	壺	多段連續刺突文(爪形)	

(2) 石 器(第19~24図、図版15~23)

石器は打製と磨製及び礫石器の別があり、打製石器には石鎌・尖頭器・石匙・石箋・搔器・削器などの定形的器種が認められた。一方、磨製石器・礫石器では磨製石斧・凹石・磨石・石皿などを認めている。以下では各器種毎に形態的特徴から分類を行い、その概要を記す。

石鎌 基部の形態的な差異により3類に大別され、さらに細分できる。

I類：基部側に抉り込みの入るもので、4形態が認められる。

a：凹弧状の深い抉り込みが入るもの(1)。

b：半円もしくは「く」の字状の抉り込みが入るもの(2・3)。

c：小さな半円形の抉り込みが入るもの(4)。

d：丸みを帯びた僅かな抉り込みが入るもの(5)。

II類：基部側が直線状をなすいわゆる平基鎌(6)。周辺加工で形を仕上げている。

III類：基部側が丸みを帯びて突出する形態となる(7)。円基鎌と把握できるものである。

尖頭器 両面加工もしくは片面加工によって尖った先端部を作出した石器を尖頭器とした。大きさの相異で以下のように分類できる。

I類：最大幅25mm未満の細身のもの(8~10)。薄身で精巧な作りとなる。

II類：最大幅25mm以上、幅広であるが全長は100mm未満の中型のもの(11・12)。

III類：全長が100mmを越える大型のもの(13・14)。

石錐 素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端に尖った先端部を作出した石器を石錐とした。剥片の一端を尖らせて刃部としたものが2点(15・16)出土している。

石匙 相対する二つのノッチを入れることによって、作出されたつまみを持つ石器を石匙とした。つまみを上方に置いた時に側縁が刃部となる縦長のものが4点出土している。4点とも左右が非対称であり、側縁の形態によって以下のように分類される。

I類：右側縁が直線状をなし、左側縁が弧を描くもの(17)。左側縁が両面加工、右側縁は片面加工によって刃部が作出される。

II類：右側縁が直線状をなし、左側縁が「く」の字状に曲がるもの(18)。左側縁が両面加工、右側縁は片面加工によって刃部が作出される。

III類：右側縁が凸弧状となり、左側縁が「く」の字状に曲がるもの(19)。刃部は背面側の周辺加工によって作出される。

19は製作段階の途中のもので、直線状となる右側縁に微細な剥離が認められる。

石箋 素材となった剥片の背面と主要剥離面の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になるとされる一群を石箋とした。また背面側の片面加工であっても、刃部となる末端の刃角が小さく、搔器とはなり得ないものもここで扱った。これらは、平面的な形や刃部の形態、加工部位の相異により以下のように分類される。

I類：撥形で刃部が片刃状のもの。次のように細分される。

a：両面加工のもの。刃部が丸みを帯びるa1(21~24)、直線状となるa2(27)がある。

調整は素材のほぼ全体におよぶものが多い。

b : 素材の背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの (25)。

c : 素材の背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剥離面側は刃部となる先端部に浅い加工が認められるもの (28)。

d : 周辺部だけに加工が施され、刃部の加工が背面側のみに認められるもの (26)。

II類：撥形で刃部が両刃状となるもの。

a : 両面加工となり、素材のほぼ全面が調整加工面で覆われるもの。刃部が丸味を帯びる a1 (32)、直線状となる a2 (30・31) がある。

b : 両面加工であるが、調整は主に素材の周辺部に施されるもの (29)。

III類：短冊形となり得るもので、刃部が片刃状のもの。

a : 両面加工のもの。刃部が丸みを帯びる a1 (33)、直線状となる a2 (34) がある。

b : 素材の背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの (35・36)。刃部は丸みを帯びる。

搔器 急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を搔器とした。素材には縦長剥片が用いられ、その長軸端には必ず刃部を作出している。刃部の位置と数により分類される。

I類：素材の一縁辺を除く三縁辺が刃部となり得るもの。

a : 素材の打面側が長軸端の刃部となるもの (37)。

b : 素材の打面側が基部となるもの (38)。

II類：素材の左側縁と末端が刃部となり得るもの (39・40)。

III類：素材の右側縁と末端が刃部となり得るもの (41・42)。

IV類：素材の長軸先端部に刃部を作出したもの (43・44)。43は刃部を両面加工によって作出している。

削器 剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器を削器とした。不定形であり、素材や刃部の作出方法、その位置関係の相異で分類できる。

I類：縦長剥片を素材とし、両面加工によって刃部が作出されるもの (45)。素材の右側縁が刃部となる。

II類：横長剥片を素材とし、両面加工によって作出された刃部と片面加工により作出された刃部を合わせ持つもの (46)。素材の左側縁が両面加工、右側縁が片面加工の刃部となるものである。

III類：縦長剥片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの。

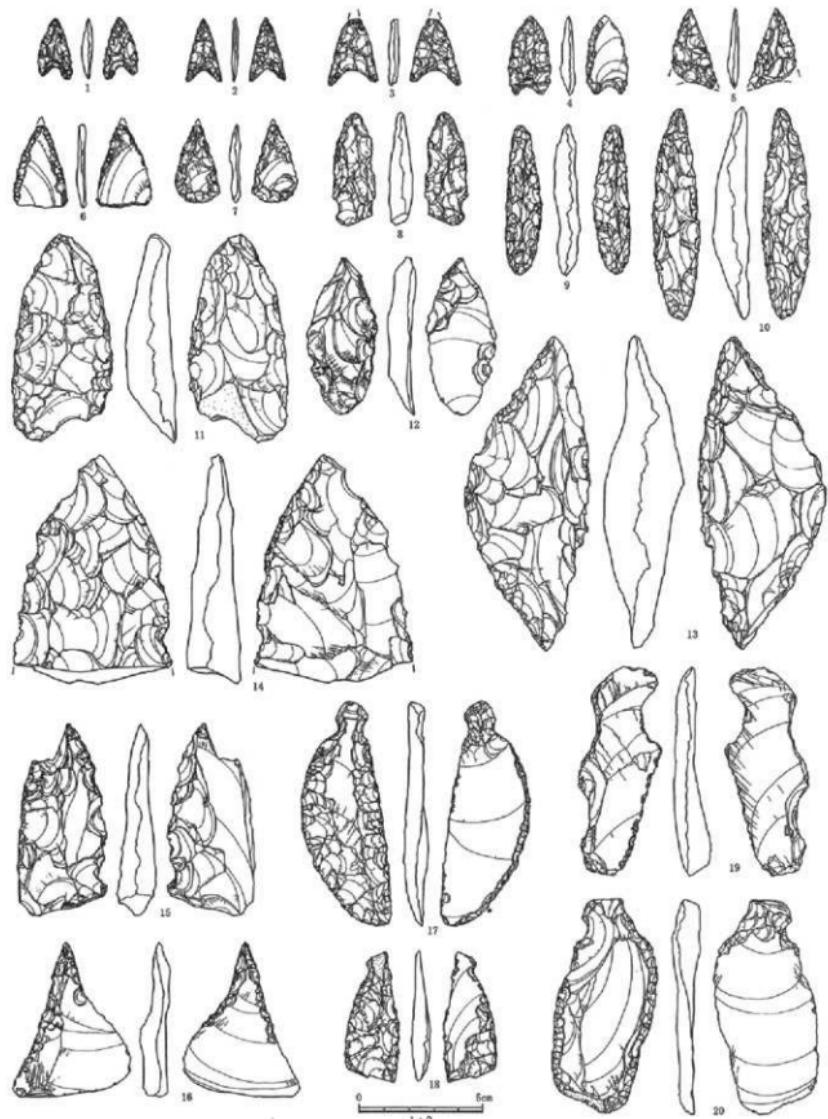
a : 素材の左側縁が刃部となるもの (47・48)。背面側に加工が施される。

b : 素材の右側縁が刃部となるもの (49)。背面側に加工が施される。

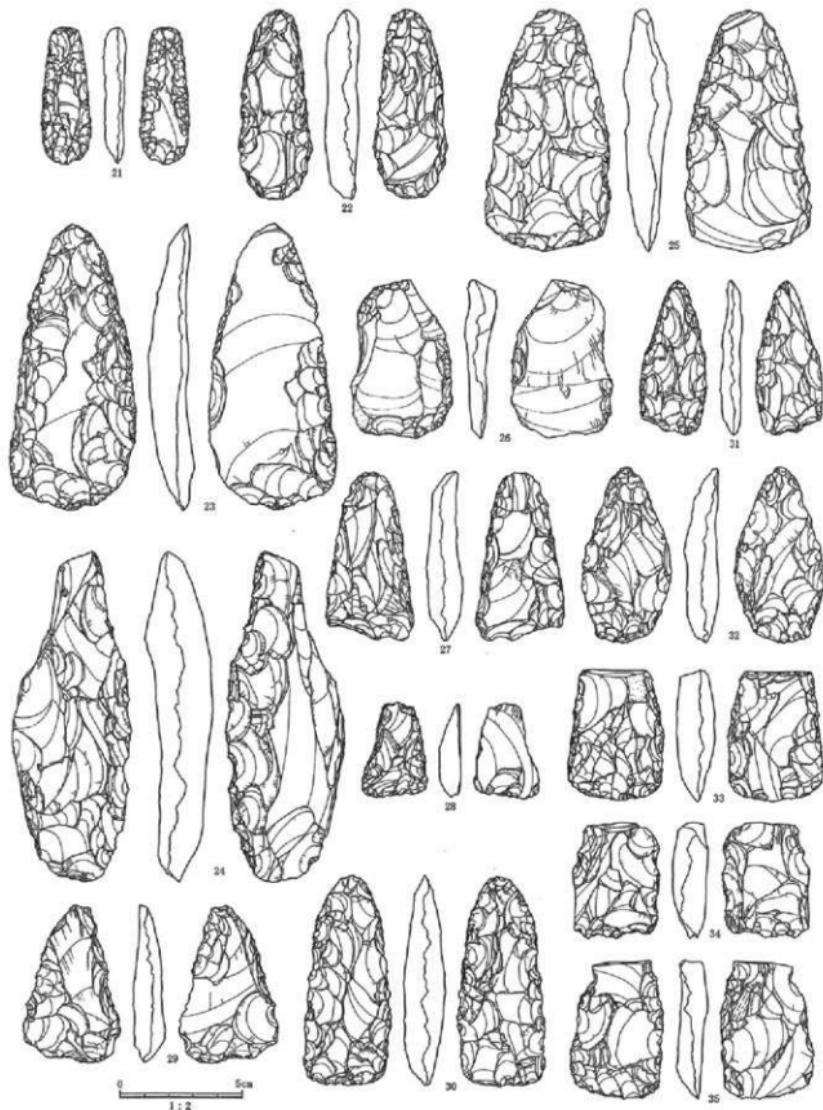
c : 素材の末端部が刃部となるもの (52)。背面側に加工が施される。

d : 素材の両側縁が刃部となるもの。両側とも背面側に加工が施される d1 (53～55)、左側縁が主要剥離面側に、右側縁は背面側に加工が施される d2 (56) がある。

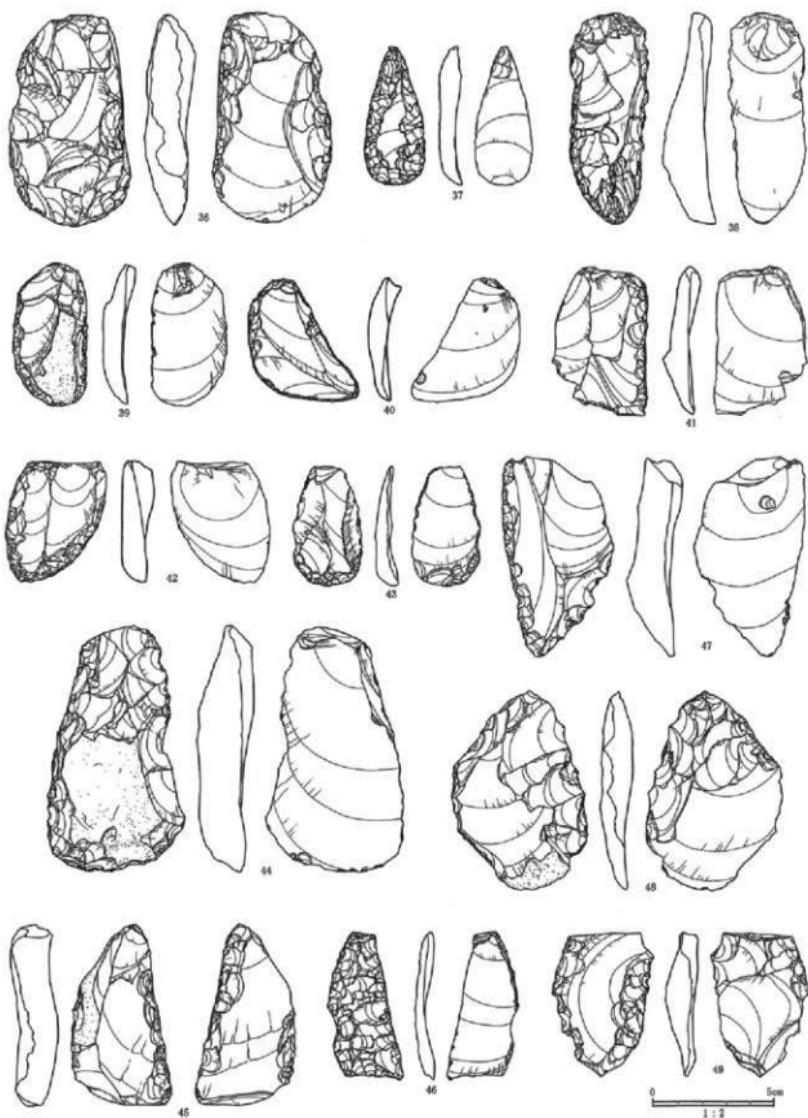
e : 素材の左側縁と末端が刃部となるもの (50・51)。両縁辺とも背面側に加工を施す。



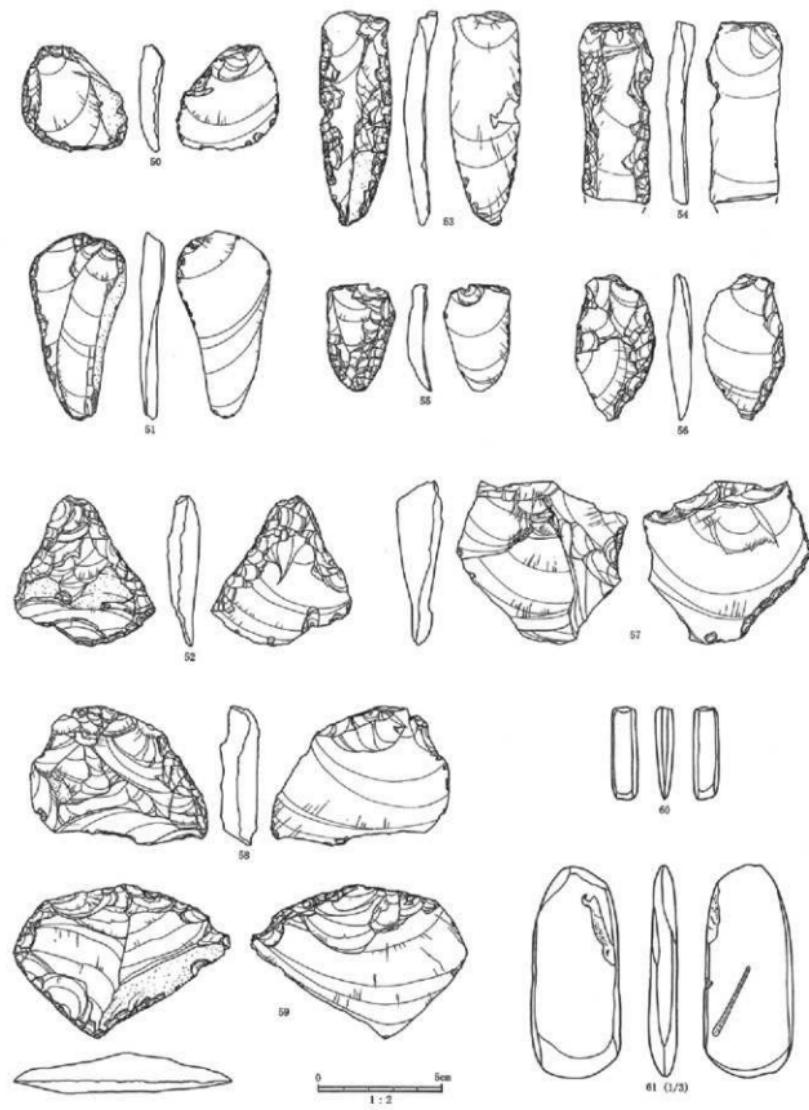
第19図 打製石器(1)



第20図 打製石器(2)



第21図 打製石器(3)



第22図 打製石器・磨製石器

IV類：横長剝片を素材とし、両面加工によって刃部を作出したもの(57)。素材の左側縁が刃部となるものである。

V類：横長剝片を素材とし、片面加工によって刃部を作出したもの。

a : 素材の左側縁と末端部が刃部となるもの(59)。両縁とも背面側に加工が施される。

b : 素材の右側縁と末端部が刃部となるもの(58)。両縁とも背面側に加工が施される。

磨製石斧 折損するものを含めて3点しか出土しておらず、完形品に近い2点を図示し得た。61は全長130mmを測る大型のもので、両側縁には面取りが成され定角式の石斧と言うことができる。刃部は両刃で丸味を帯びている。60は全長38mmという大きさ等から、ノミのように使用されたものまたは模倣品と考えられるものである。表裏ともよく研磨されて光沢がある。

凹石 楕円形や円形状の河原石の平坦面に敲打によると考えられる凹痕を有するもので、そのほとんどが磨痕を合わせ持つ。石材は安山岩が多いが、花崗岩や砂岩もある。図示した中で63・65は礫の一面に、62・64・67は二面に凹痕を持つものである。

磨石 石皿と組み合わされて使用された結果、礫面に磨痕が認められる河原石である。これらは、磨面数や形態の特徴から分類できる。

I類：礫の一面を磨面として使用した平面形が楕円形となるもの。磨面が平坦なため断面形が蒲鉾形を呈す71と、楕円礫の側縁を磨面とした72がある。

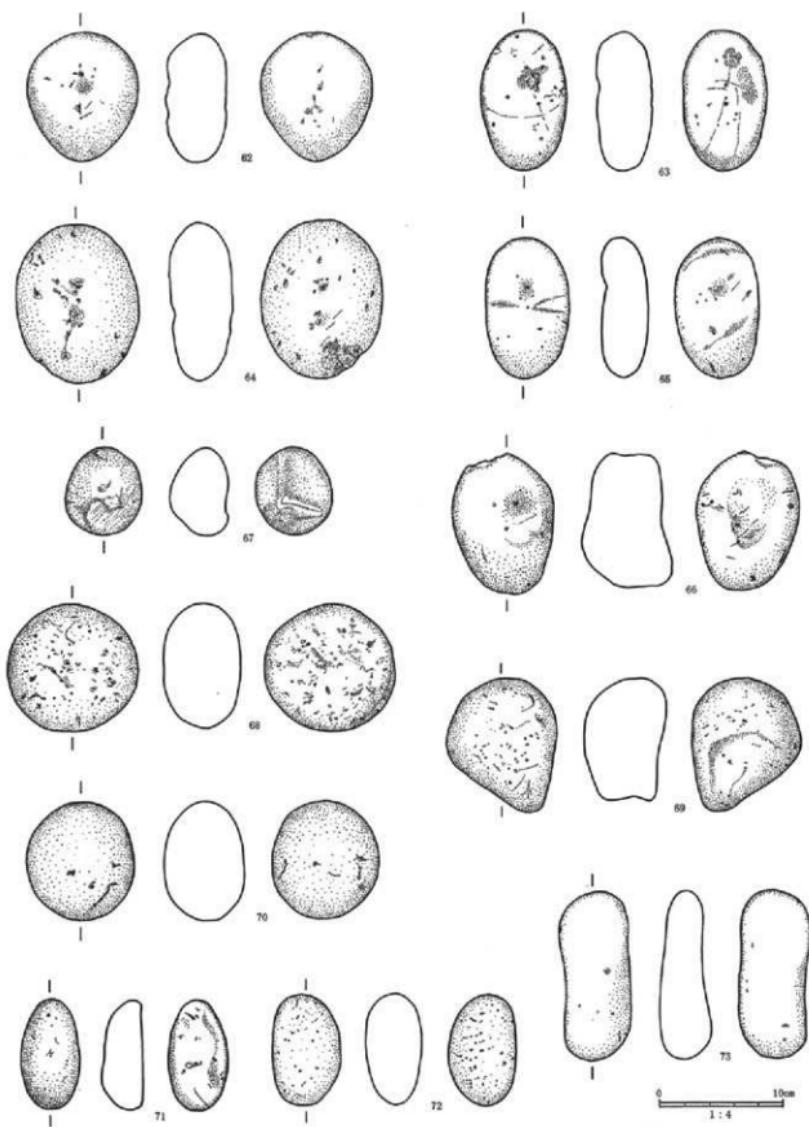
II類：礫の二面を磨面として使用したもの。扁平円形または棒状礫の両面が磨面となる68・70・73、断面蒲鉾状の台形様礫の一面と側面が磨面になる69を認める。

III類：いびつな球形となる礫の変則三面を磨面として使用したもの(67)。

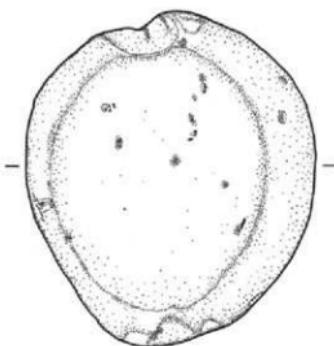
石皿 扁平でやや大型の安山岩の片面に、円形状の凹んだ磨面を有するものである。75は2箇所に磨面を有し、中央部が峰状の山形となる。

表3 石器計測表(1)

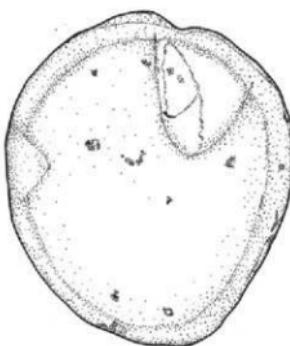
測定番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	出土地点層位	分類
			長	幅	厚				
19	1	石 矽	26.0	14.0	4.5	1.04	玉 鋸	ST334 F2	I a
	2		27.5	15.0	2.5	0.70	珪質頁岩	45-64 II	I b
	3		(27.0)	20.5	4.5	1.56	珪質頁岩	40-62 II	I b
	4		32.5	17.0	6.0	2.87	珪質頁岩	SK5 F1	I c
	5		(34.0)	(16.0)	4.5	1.89	珪質頁岩	41-63 II	I d
	6		(34.5)	22.0	3.5	2.16	珪質頁岩	31-75 II	II
	7		(31.0)	17.0	4.0	1.99	珪質頁岩	41-61 II	III
8	8	尖頭器	46.5	17.5	10.0	7.32	鈍石斧	SK112 F1	I
	9		61.5	14.5	9.0	8.56	珪質頁岩	40-63 II	I
	10		87.0	19.5	15.5	19.60	質 砕	SK225 F1	I
	11		86.0	41.0	19.0	58.14	珪質頁岩	X-O	II
	12		65.0	27.5	10.5	16.85	鈍石斧	31-75 II	II
	13		129.0	50.5	33.0	157.88	珪質頁岩	31-72 II	III
	14		(94.5)	(64.5)	21.5	113.08	珪質頁岩	31-75 II	III
15	15	石 瑚	76.5	35.5	15.5	37.19	珪質頁岩	SK448 F1	
	16		66.0	48.5	10.5	19.47	珪質頁岩	SK252 F2	
	17		93.0	33.0	9.5	24.33	珪質頁岩	31-73 II	I
	18		54.0	20.5	7.5	7.36	珪質頁岩	35-64 II	II
	19		86.5	29.0	13.0	25.89	珪質頁岩	38-68 II	
20	20		89.0	40.0	11.5	30.61	珪質頁岩	SK237 F1	III



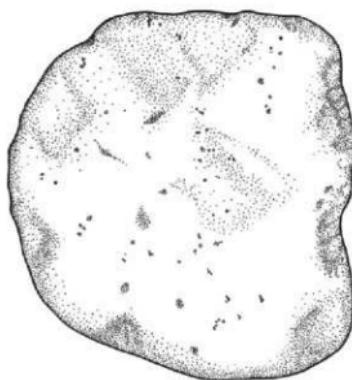
第23図 磚石器(1)



74



75



0 10cm
1:4

第24図 碓石器(2)

表4 石器計測表(2)

擇因 番号	遺物 番号	種類	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
20	21	石 鋸	56.0	21.0	9.5	12.29	珪質頁岩	32-90 II	I a 1
			78.0	36.5	13.0	34.77	頁岩	42-63 II	I a 1
			118.0	51.0	16.5	93.62	珪質頁岩	31-76 II	I a 1
			136.5	49.0	26.0	149.01	珪質頁岩	SK158 F1	I n 1
			100.0	52.0	18.0	81.92	頁岩	SK444 F2	I b
			65.5	42.0	12.0	25.39	頁岩	SK194 F1	I d
			68.5	36.0	14.5	32.20	珪質頁岩	31-72 II	I a 1
			40.0	26.0	8.5	8.20	珪質頁岩	46-71 II	I c
			65.0	39.5	13.0	26.26	頁岩	45-61 II	II b
			87.5	35.5	17.0	52.56	珪質頁岩	42-61 II	II n 2
			64.0	27.0	9.0	13.95	珪質頁岩	40-61 II	II n 2
			70.0	36.0	13.5	34.41	珪質頁岩	X-O	II a 1
			53.0	38.5	16.0	36.24	珪質頁岩	ST334 F3	III a 1
			46.5	37.0	14.0	29.15	珪質頁岩	42-63 II	III a 2
			57.0	37.5	11.5	26.71	珪質頁岩	42-60 II	III b
			87.0	48.5	18.5	85.87	珪質頁岩	43-60 II	III b
			57.0	24.5	9.0	11.86	珪質頁岩	SK127 F3	I n
			96.5	31.5	18.0	46.79	珪質頁岩	SK394 F2	I b
			59.0	31.0	9.0	16.55	珪質頁岩	41-57 II	II
			59.5	44.5	8.5	13.89	珪質頁岩	ST334 F2	II
			58.5	38.0	11.5	26.90	珪質頁岩	X-O	III
			51.5	39.0	13.0	23.50	珪質頁岩	42-63 II	III
			49.5	27.0	8.5	9.60	珪質頁岩	31-75 II	IV
			97.0	55.0	23.0	120.22	珪質頁岩	SK151 F1	IV
21		擦 盆	75.0	39.0	16.0	48.84	珪質頁岩	31-75 II	I
			61.0	26.0	6.5	8.19	珪質頁岩	X-O	II
			82.0	44.0	17.5	52.76	珪質頁岩	36-63 II	III a
			82.0	54.5	13.0	50.31	珪質頁岩	SK138 F1	III a
			59.0	38.5	12.5	28.64	珪質頁岩	X-O	III b
			51.0	39.0	19.0	15.72	珪質頁岩	41-63 II	III c
			77.0	39.0	9.5	18.61	珪質頁岩	SK333 F1	III e
			63.0	56.5	13.5	32.96	珪質頁岩	41-61 II	III c
			88.0	39.0	9.0	23.65	珪質頁岩	41-63 II	III d 1
22		磨圓石斧	(73.0)	30.5	8.5	24.44	珪質頁岩	31-75 II	III d 1
			45.5	27.0	7.0	9.06	珪質頁岩	SK301 F1	III d 1
			60.5	32.5	19.0	18.36	珪質頁岩	37-65 II	III d 2
			70.5	76.0	18.5	62.40	珪質頁岩	SK27 F3	IV
			58.0	70.5	18.0	64.81	珪質頁岩	SK114 F1	V b
			64.5	88.5	16.5	65.71	珪質頁岩	43-74 II	V a
			36.0	10.0	8.0	5.40	蛇紋岩	ST334 F3	
			130.0	52.0	17.0	162.00	流紋岩	34-88 II	
			106.0	91.0	49.0	660		ST334 F2	
			115.0	70.0	43.0	530		46-65 II	
			130.0	100.0	51.0	810		SK251 F2	
			115.0	69.0	38.0	435		36-65 II	
			123.0	63.0	44.0	377		ST334 F2	
			72.0	63.0	47.0	193		46-67 II	
			104.0	107.0	64.0	940		39-62 II	
23		圓 石	110.0	63.0	61.0	840		44-60 II	
			97.0	88.0	65.0	790		46-60 II	
			92.0	48.0	33.5	199		SK364 F3	I
			92.0	56.0	46.0	333		ST334 F3	I
			137.0	67.0	41.0	463		X-O	II
			235.0	278.0	45.0	4260		X-O	
			283.0	300.0	52.0	6820		SP113 F4	
24	24	石 鋸							

4まとめと考察

遺跡は山形県西置賜郡小国町大字市野々字野向に所在し、飯豊山より北流する横川中流域右岸の河岸段丘に立地する。段丘上の東西150m・南北250mが遺跡範囲と推定され、段丘縁辺を中心とした約7,900m²を対象に第2次の発掘調査を実施した。以下に今回の調査で得られた成果について要約し、若干の考察を加えてまとめとする。

- 1) 検出された遺構は、堅穴住居跡・陥し穴・土坑・倒木痕跡など総数約450基である。遺構分布の概観は、河岸段丘縁辺域が主体となる様相が窺われた。
- 2) 住居跡は複式炉と推測される石器部と土器埋設部の検出状況から、炉を造り替えたあるいは住居の建て替えが行われた可能性を指摘した。炉体土器として据えられた深鉢は、口縁部を欠いたものであったが胴部文様から、大木10式新相に位置付けられた。
- 3) 陥し穴は形態的特徴や配置状況等より対称的な2類が認められ、それぞれの用途について検討した。遺構内出土土器からこれら2類の構築・機能時期は異なることが判明し、縄文時代前期中葉のものと中期末葉の一群に識別された。
- 4) 土坑は調査区ほぼ全域に分布しているが、坑内に遺物を含むものは少なく、特に土器を包含する土坑は縁辺域配置の一部に限られた。これらには前期中葉→中期末葉→後期初頭という3期の時期変遷が認められ、数的主体となったのは住居跡と併行する中期末葉のものであった。
- 5) 出土した遺物は土器・石器など27箱相当分であり、縄文時代遺跡としては調査面積に対しても極めて少量であった。耕地整理に伴う削平が大きな要因となっており、遺物包含層のみならず地山層にまで及ぶ区域も存在した。分布の概観では、遺構のそれと対応するものではなく、質・量的に主体となったのは住居跡の他、段丘端部に配された一部の遺構内に限られた。
- 6) 縄文土器は大木10式に帰属するものが大半を占め、文様構成や施文位置等より新・古相の2段階に分類した。これに後続するものは、細片ながら連続刺突文や櫛歯条線文を認めることから三十稻場式土器の範疇で捉えられた。また、先行する一群は口縁部文様帯に刺突や貼付けによる装飾文が施されるか、網目状撚糸文を地文とする大木2-a式土器に属するものであった。
- 7) 石器は打製と磨製・礫石器の別があり、toolの器種には石鏃・尖頭器・石匙・石鎧・搔器・削器が認められた。これら打製石器は礫石器等の出土数に対し、その比率がやや高いと思われた。このことは、土器の出土量と相応して遺跡における生産行為を反映するものと考えられる。すなわち、調理具としての礫石器類よりも狩猟・加工具の割合が高いことを示し、遺跡の性格を考慮する上でも重要な要素と認識された。

(1) 陥し穴について

陥し穴は分布状況から、配列を成すもの（I類）と狭い範囲に近接して配される一群（II類）が認められ、それぞれの形態・規模や用途等については先に検討したとおりであり、前者と後

者の差異は狩猟法の違いと考えた。陥し穴の使用法については、「偶然動物が落ちるのを待ったもの」と「動物を追いつめて追い落としたもの」の2通り（今村1973）が想定されており、各々に「仕掛け獣」と「追い込み獣」の名称（鈴鹿1982）が与えられている。前者の配列を成す一群は、けもの道に沿って構築した結果と推測されることから、動物が落ちるのを待つて捕る仕掛け獣に用いられたと考えられる。これに対し、後者の一定範囲に集中する一群は、その場所への追い込み獣を行ったものと思われる。

狩猟域においては水場が重要な要素となり、遺跡の立地する段丘は前面に横川が流れ、東西が横川に注ぎ込む2本の沢によって区切られる地形を呈している。横川へ至るには急崖が多いが、西側の沢へ下るのは比較的容易であり、途中の斜面に恒常的な湧水や不定期的に水の溜まる窪地も見られる。したがって、狩猟の対象獸は西側の沢やこれらの湧水点を水場にした可能性が充分考えられ、遺跡における陥し穴の配置はこうした地理的条件から、対象獸の通り道を想定しての構築と理解されるのである。I類とII類の構築には時期差が認められることは本稿でも述べたが、遺跡が長い間捕獲の場としての条件を備えていたことは確かである。時期幅があったにせよ、陥し穴は対象獸の行動の上に成り立つものであり、合理的な構築法を探っているものと考えられる。

(2) 遺跡の性格

野向遺跡で検出された遺構は出土土器の検討より、主に縄文時代前期中葉と中期末葉のものが存在することが判明した。河岸段丘縁辺に構築された堅穴住居跡は、複式炉を持つことから中期末葉の所産であり、当該期には水利条件を備えた居住域としての性格が窺われる。また、調査区西側で検出された11基の陥し穴の存在から、遺跡は狩猟域あるいは採集域としての性格も持っていたものと判断された。

住居跡1棟は段丘縁辺部の東側沢へ下り始める緩やかな傾斜面に位置し、その他の区域には認められない。遺構・遺物の分布状況から、段丘端部と北東域が生活の場となったものと理解されるのである。ただ、住居が構築されたのは中期末葉の一時期であり、しかも1棟しか存在していないことから考え、集落とは異なる生活空間であったと推測される。すなわち、定住を目的としたものではなく、一時的に滞在したキャンプ地であったと考えられる。とすれば、出土土器等から陥し穴II類もほぼ同時期の所産と捉えられるので、狩猟域において季節的に使用した住居と想定されるのである。ただし、住居と陥し穴が同時に機能していたかは、資料不足もあり断定できず考察にしか過ぎないが、陥し穴II類の使用法は「追い込み獣」と推定され、人間の介在なしには成り立たないことを考え合わせれば、同時存在の可能性を否定しても大過はないと思われる。

IV 市野々向原遺跡

1 遺跡の概観

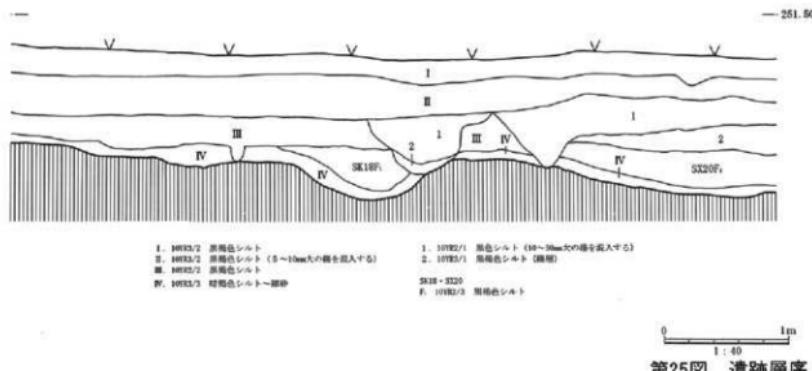
市野々向原遺跡は、昭和45年刊行の『飯豊連峰学術調査報告書』に記載されてからその存在が知られるようになり、「山形県遺跡地図」には縄文時代の散布地として登録されている。山形県教育委員会が平成元年度に行った小国町東部地区基礎調査による遺物散布の広がりから、範囲は東西・南北とも220mと確認された。遺跡面積は約47,700m²と推定されている。発掘調査前の地目は、一部が荒蕪地の他は水田である。第2次調査区は、予備調査の結果を基に設定した8,100m²であり、遺跡南半の段丘縁辺部と一段高い台地上が中心となる。

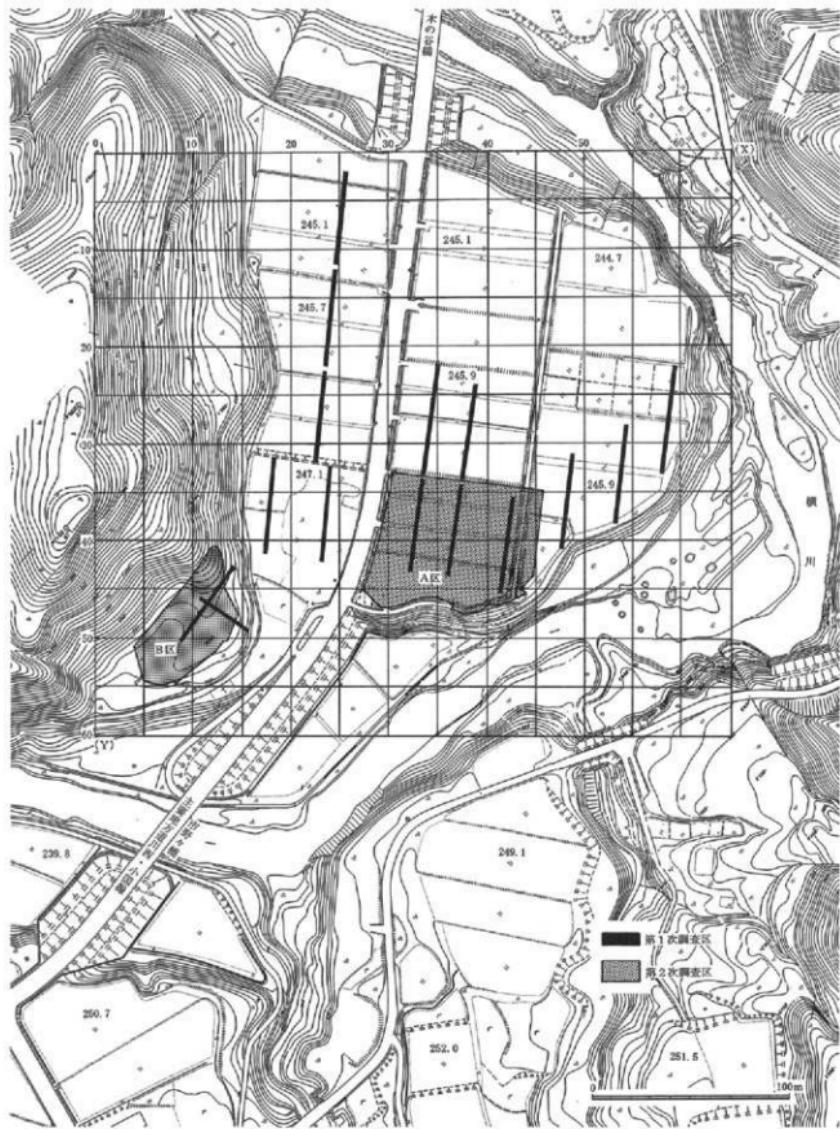
(1) 遺跡の層序

遺跡の立地する横川河岸段丘の基盤層は、礫・砂及び粘土からなる未固結の堆積物で形成されている。また、大観すれば飯豊山系に属する遺跡南西部の丘陵面の基盤層は、第三紀中新世の礫岩・砂岩及び小国層と呼ばれる泥岩から成る。

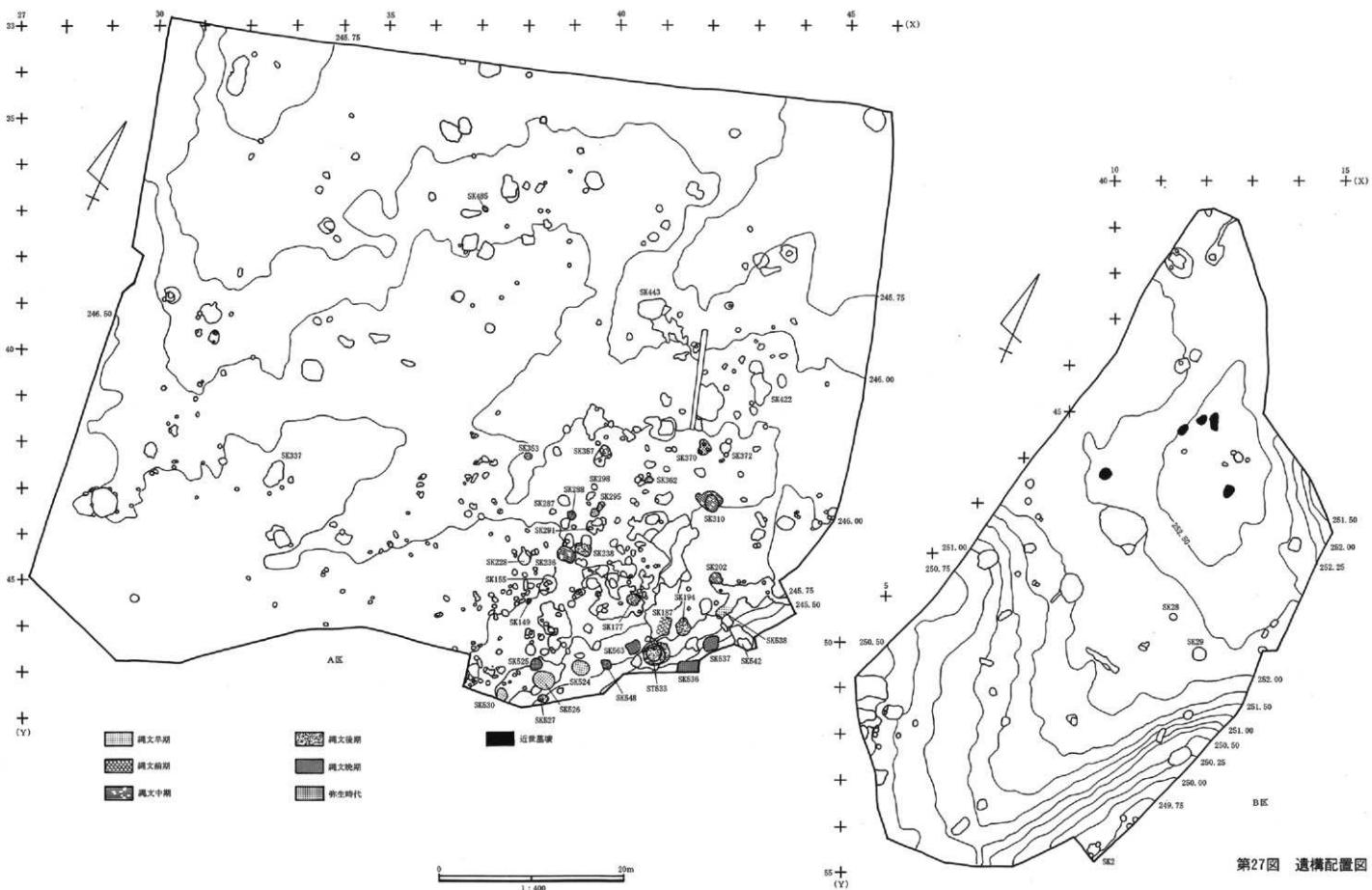
A区では地目が水田であることから、ほ場整備の影響で地山層やその直上まで破壊されており、20cm程の表土直下が遺構検出面となる区域が多かった。したがって、河岸段丘基盤の基本的な層序は、野向遺跡A区の土層観察所見に準じると思われた。ただし、調査区南東辺の段丘縁辺沿いには、15cm内外の良好な遺物包含層が遺存していた。

台地状の傾斜地に設定したB区の遺構検出面までの層序は、調査区の南壁面で観察し下図に示した。ここでの層序は基本的に4層の別が認められ、I層は表層腐植多湿黒ボク土壌の表土、II層は畑等の旧耕作土で礫を混入している。III層は遺物包含層であり一部でII層直下から時期的に新しい遺構の掘り込みが確認された。IV層は丘陵を形成している地山層で、この上面が遺構検出面となる。なお、B区の南西部を除けばI・II・IVの層序となり、遺物包含層の大半が削り取られたものと考えられる。





第26図 調査概要図 (S=1:2,500)



第27図 遺構配置図

(2) 遺構と遺物の分布

検出された主な遺構には竪穴住居跡1棟、石組炉2基(住居跡に伴うものを含む)、種実貯蔵穴1基、集石土坑3基、埋設土器2基、土坑・ピット500基以上、及び近世の墓壙5基などがある。竪穴住居跡はA区南東縁辺の横川へ向かって下り始める段丘端部の斜面に位置し、その他には認められなかった。貯蔵穴・集石土坑・埋設土器等はいずれもA区の南東部において集中的に分布する。近世墓はB区の北半域で検出されており、かつては墓地であったことが窺われる。A区南東域以外では削平が著しいことから遺構の存在そのものが希薄であった。

A区を設定した段丘面は開田によって平坦化した地形であったが、表土除去後の遺構プラン確認面において、調査区中央部を南北方向に走る比高差の小さい段丘傾斜面が線状に現れた。したがって、調査区の東半と西半では構成面が異なることや、高位にあたる西半部はかなり削平を受けているものと理解された。遺構の密集する範囲はこの段丘区分の東側であり、低位面の段丘端部を主体的に利用したと判断できよう。B区からは近世墓を含め土坑や倒木痕跡など64基の遺構を検出しているが、集中あるいはまとまりとして捉えられるものではなく、散在的な分布状況と言える。また、遺構内からの出土遺物が極めて少ないので、配置や覆土の状況等から積極的に縄文時代の構築と判断されるものは存在しなかった。

出土した遺物は量的に土器が16箱、打製石器・フレイク等32箱、凹石・石皿等の礫石器が15箱の他、貯蔵穴より採取した炭化種実などがあり、石器・フレイクの出土量が多い割合を占めた。開田による遺物包含層の大幅な削平はこれまでにも述べてきたことであるが、包含層出土と遺構内出土の割合は48:52となっている。また、質的・量的にその主体となったのはA区南東域の河岸段丘縁辺部に配された遺構及びこの区域に遺存した包含層であり、遺物分布の概観は遺構の分布と相關する状況が窺われた。

調査では、縄文時代早期から晩期と弥生時代の遺構・遺物の存在が確認されている。縄文時代早期の遺構は出土土器によりSK538と認められ、その北西域(42-44グリッド付近)を中心とした包含層内にも土器が分布する。前期に比定される遺構は竪穴住居跡北側に接するSK187があり、その東西10m範囲内の包含層に土器の分布が見られる。中期の土器分布はSK202・236・310等の遺構内とA区南東部一帯の包含層内に認められ、時期別の遺物出土量では主体を占めていると言える。後期の土器はSK177・194・238・353・357・362・527等の各遺構内で、晩期の土器はSK149・288・485・525・536・537・548・563等の遺構内より出土しており、A区南東域において比較的広範に分布しているが、包含層からの出土点数は少ない。この事例からは、段丘縁辺部において中期の遺物を含む包含層までは削平されず遺存したが、その上位の層すなわち、後期以降の堆積層は削り取られて動かされた結果と考えられる。弥生時代に比定される遺構にはA区南東域で北側に位置するSK295・370があり、段丘端部の包含層内にも土器分布が認められたが、原位置とは異なる二次的な堆積と判断された。

以上のように、遺構・遺物の概観はA区南東部に集約されるものであり、いずれの時期においても河岸段丘縁辺が集落構成の主体になったと理解される。ただ、石器成品(tool)の分布に関してはやや異なり、両尖匕首などの優品がB区包層からも出土している。

2 検出遺構

(1) 竪穴住居跡（第28図、巻頭図版2・図版25）

位置 調査A区南東端部の40-46グリッド、河岸段丘縁辺の傾斜面において検出された。

重複 住居跡南辺部でS X565と重複し、これを切って構築している。

平面形・規模 平面形は北東側に階段状の張り出し部を有するが、略円形のプランを呈している。直径約2.8mを測り、周溝を有する極めて小規模な住居跡である。

覆土 覆土は暗褐色のシルト質土を基調とするもので、いずれも地山ブロックが混入している。10種に細分した土層が複雑に入り組む様相から、人為的な埋土であろうと思われる。堆積土内には炭化物や有機物の遺体なども認められない。

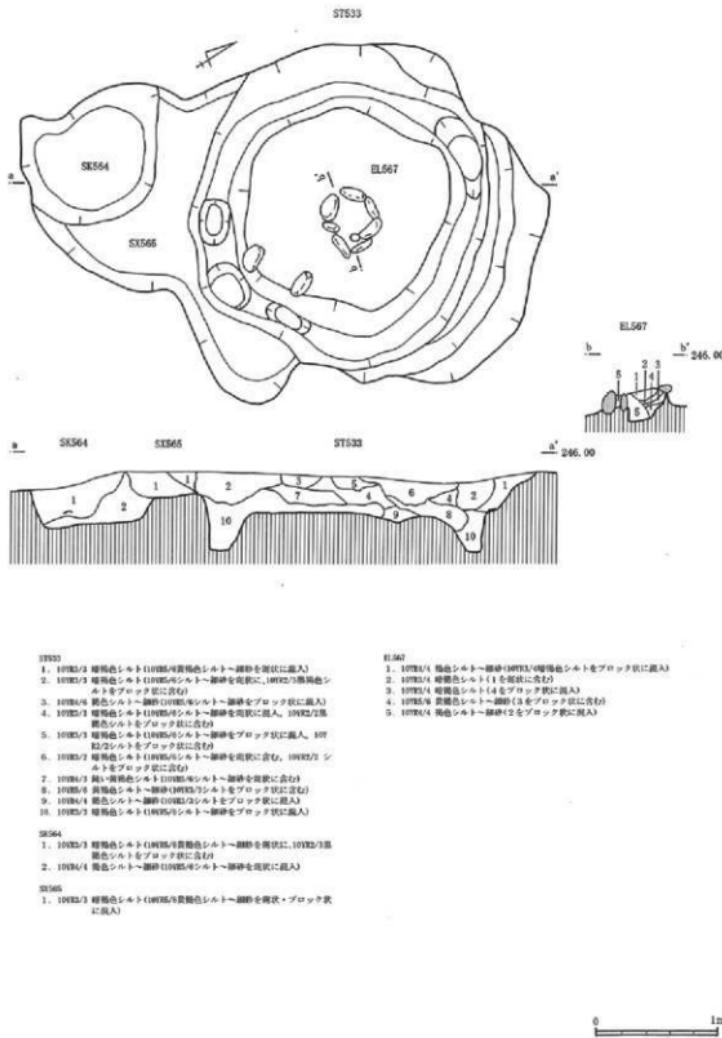
周溝・床面 周溝は上端幅32~55cm、床面からの深さ30cm前後を測り、住居規模に比べて幅広の在り方が特徴となる。床面はやや傾斜するがほぼ平坦であり、縮まりを有している。直径160cm程の略円形を呈する床面上の面積は、僅か2.5m²余に過ぎない。壁面の掘り方は、北東部で段を形成し狭い平場を設けるために緩やかとなる。周溝部では内側面が住居床面からある程度の傾斜を付けて掘り込まれるが、外側面の掘り方は垂直的である。

柱穴 周溝内底面に橢円形状の掘り込みが4基検出され、位置関係や規模等から見て壁柱穴であると判断した。柱穴は北側に1基と南側に3基が存在し、北側柱穴と南側3基の内その中央に位置する柱穴は、床面を二分する対角線上に配置される。この2柱穴は深さがほぼ等しく、他の2基に比べて掘り方も大きいことから主柱穴と考えられる。南側ではこの主柱穴の両脇に、長径38cm・周溝底面からの深さ15cm程を測る掘り込みがある。主柱穴を挟んで等間隔に配される在り方や規模から、主柱を支えた側柱の掘り方と推察された。また、住居北東側の張り出し部にも幾つかの小穴を認めており、不規則性から積極的に柱穴とは判断できなかったが、補助的な柱が存在した可能性も否定できない。

炉 住居床面中央で、扁平礫の側縁を立てて円形状に巡らした石組炉(E L567)を検出した。長軸53cm・短軸44cmであり、7個の円礫と棒状礫1個が配されている。東側では配石の一部が重なり合うように組まれ、内側に生じた隙間に小型の棒状礫を立てている。平面形は円形状となるが、この部分では直角になるよう縁石が組まれている。炉内の覆土は5層に分かれ、炭化物等の混入は認められない。

その他の施設 これまで述べた住居の構成要素以外に、南側床面壁際で扁平礫2個が炉石同様に側縁を立てた状態で確認された。主柱穴及びその東隣の支柱穴内側に、径25cm程の扁平礫を半ば埋め込んで袖石状に構築したものである。性格については不明であるが、柱の傾きを調整した固石などの用途があったかもしれない。

出土遺物 住居跡より出土した遺物は極く少なく、土器片21点を数えるに過ぎない。いずれも細片で、堆積土上層部から散在しての出土状況であった。また、重複するS X565やS K564内からも数点の土器片・フレイクや磨石等の石製品を認めたが、時期を明確に窺い知ることのできる資料はなかった。住居跡の年代を石組炉の形態等により推定するのは危険な感もあるが、縄文時代後期前半の構築と捉えておきたい。



第28図 S T 533竪穴住居跡

(2) 土器埋設石組炉（第29図、図版26）

A区南東端部の37-47グリッドから、住居跡に伴わない石組炉（E L567）が1基検出されている。扁平礫あるいは円礫で半円状に囲うもので、一部では二重に巡らされる。さらにその内側には3個の礫をコの状に配した石組みがあり、内部に炉体となる土器を埋め込む土器埋設石組炉である。直径約50cmを測り、石組みの開口部は南東方向を向く。

北側の炉石に近接して埋設土器（E U568）が認められた。埋設土器は深鉢形部片が僅かに遺存しただけであり、形状等を窺うことはできなかったが、正位の状態で据えられたと思われる。炉体土器も二次焼成により摩滅が著しく文様等は確認できなかったが、炉の構築時期は後期初頭頃と推察される。

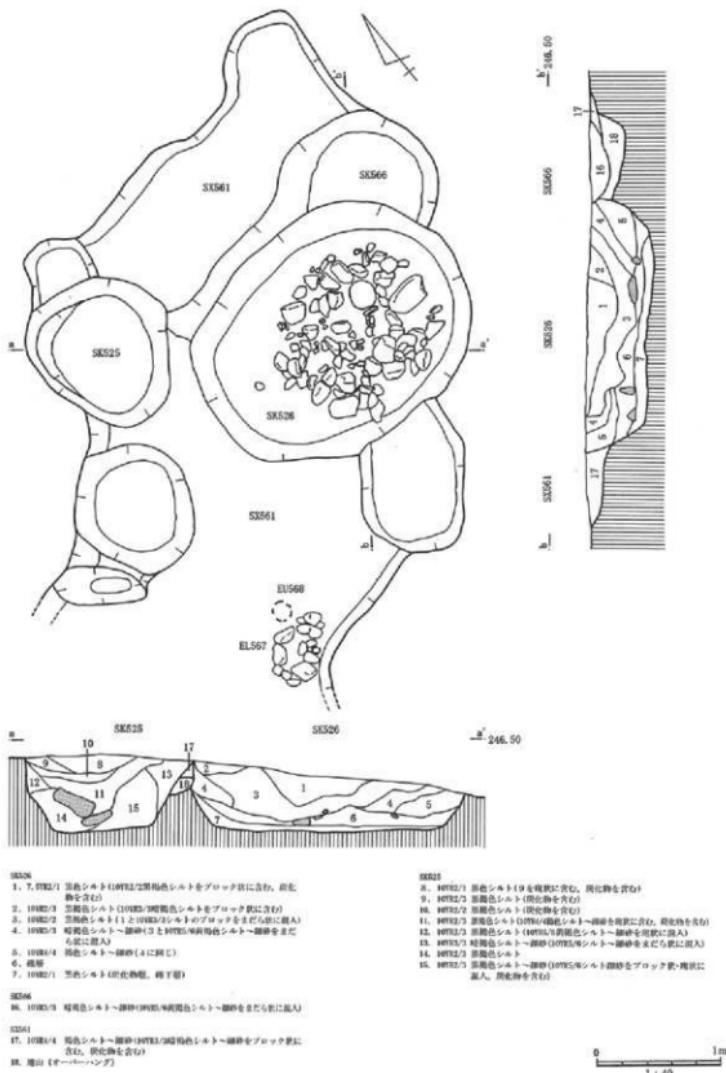
(3) 集石土坑（第29・30図、図版26・27）

検出した土坑の中で、遺構内に礫石を人為的に据えたあるいは意識的に投げ入れたと考えられるものを、集石土坑と呼称して扱った。A区南東端部で3基確認されており、等高線に沿って直線上にほぼ等間隔で並ぶ位置関係が特徴的である。

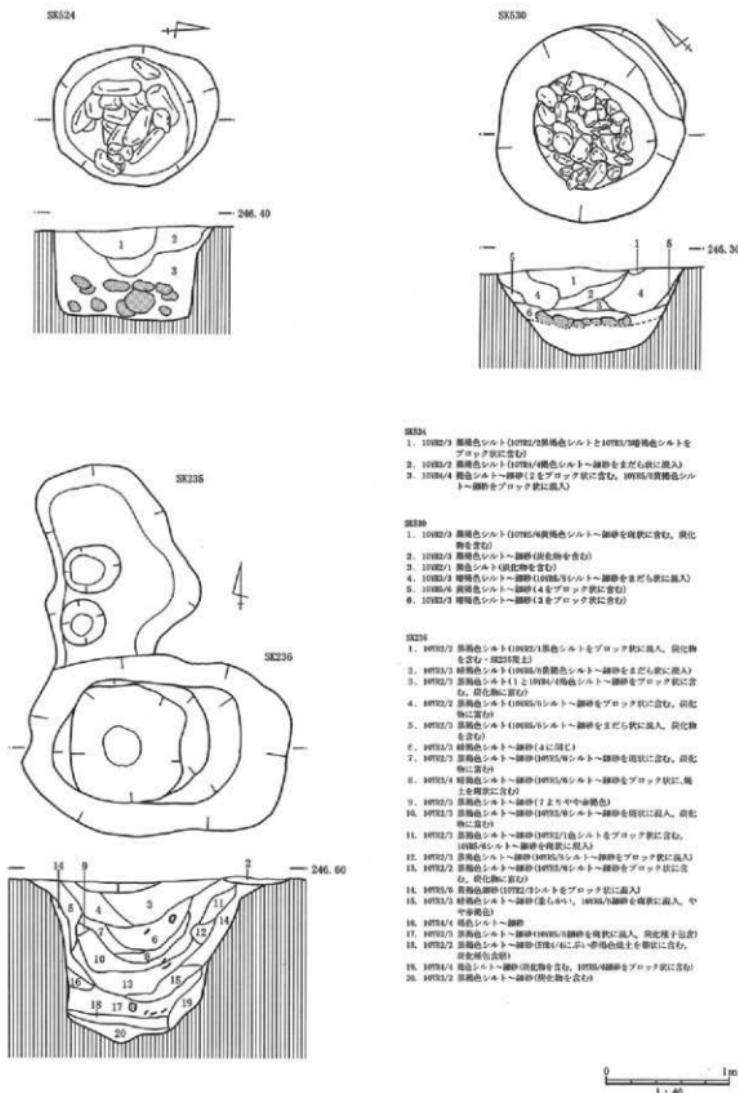
S K526 河岸段丘縁辺にあたるA区38-47グリッドにて検出された。重複するS X561を切り、北東端部をS K566によって切られる。平面プランは梢円形を呈し、長径237cm・短径181cmの規模で、確認面からの深さは50cm前後を測る。底面には多少起伏があり、必ずしも平坦ではない。壁面はやや膨らみを持って比較的穏やかに立ち上がる。黒褐色基調の覆土は7層の別が認められ、土坑周辺部から埋没していった自然堆積の様相が土層断面により観察された。検出面から約20~30cm程掘り下げたところ、ほぼ全面に礫石が認められた。礫石には径5~40cm内までの大小があり、扁平・円・破碎礫など様々なものが90個以上あった。集石の中には加熱を受けて赤変しているものも含まれる。検出状況からは何かを意図して礫石を配置したとは考えられず、投げ入れられた状況を呈していた。これら集石の下には厚さ10cm程の炭化物層（第7層）が堆積しており、多量の炭化材が出土している。炭化材については樹種同定及び放射性炭素年代測定を実施し、その結果は巻末に掲載しておいた。坑内から出土した遺物には、土器片6点と石鏸1点や40点余のフレイクがあり、いずれも集石上層の覆土中に含まれていた。

S K530 S K526の東側3mの所で検出した土坑である。直径150~160cmの円形を呈し、深さは約70cmを測る。東側壁面途中に段を形成して底面に至るが、掘り方は全周において緩やかであり、断面形は摺鉢状となる。底面は西側にやや傾斜するが平坦である。覆土は集石上面に堆積した6層までを確認できた。集石はプラン検出面からの深さ約40cm、東側に中段が形成されるのとほぼ同じレベルで検出されている。集石には大きさや形状など様々なものが認められ、長径1m程の範囲の中に約60個の礫石が底面まで2段ないし3段重なっていた。S K526同様に赤変した礫石も含まれ、覆土には炭化物が混入している。集石の検出状況から敷き並べて構築した様相は窺えなかったが、北半の縁部を巡る礫群だけは配置されたように見受けられた。遺物は土器片3点と石鏸1点やフレイクが80点以上、磨石1点等が出土している。

S K524 S K526の西方3.5mに位置する梢円形の土坑で、S X561を切って構築される。規模は長径137cm・短径116cmで、深さ75cm前後を測る。壁面はほぼ垂直的に掘り込まれ、形態と



第29図 E L 567土器埋設石組炉、S K 526集石土坑、S K 525土坑



第30図 S K 524・530集石土坑、S K 235・236土坑

しては円筒状となる。集石は25個程の礫石からなり、長方形で大型のものが多い。これらは底面から30cm程の高さで、幾重にか積み重なった状態で出土しており、投げ込まれて堆積した状況が窺い知れた。覆土や底面に炭化物等の堆積や混入は認められない。坑内からの遺物は、上層より出土した土器3片とフレイク4点を数えるのみであった。

以上、各々の形態・集石状況や出土遺物等について確認できた内容を記述した。調査ではこれら集石土坑の性格や、各々の構築された時期を明確にできるだけの根拠は得られなかつた。3基の土坑では形態や集石の構成等に相異が見られるが、単なる廃棄穴とは想定しにくく、集石は人為的に意図して行われたと理解される。位置的関係などから見て3基が同時期に機能したと仮定すれば、SK526出土炭化材の分析結果を基に縄文時代早期末葉に位置付けられる。

(3) 土坑(第30~38図、図版27~32)

調査で土坑として登録した数は約370基がある。遺構内より出土した遺物には、縄文時代早期から弥生時代中頃までにわたる時期幅が認められた。ここでは、出土土器を中心にして土坑を各時期毎に分けて取り上げ、主なものについてその概要を説明する。

縄文時代早期 A区47-45グリッドで検出されたSK538(第31図)がある。南隣に重複するSK199を切り、さらに北側では溝状のSD201と重複関係にある。全体の規模は明らかでないが深さ20cm前後を測り、平面プランは梢円形状になると思われる。出土した土器の内、3点の資料を第39図に示した。復元により全形が判明した尖底の深鉢は、山形県内でも資料が少なく貴重な優品と言える。これら沈線文系土器から比定される時期は早期中葉である。

縄文時代前期 当該期の遺物が含まれるのは、ST533堅穴住居跡の北側に位置するSK187である。検出時には長径2mを測る隅丸長方形のプランが確認されたが、掘り込みが浅く完掘時点では隣接する遺構群と併合される形となつた。出土した土器には、粘土紐貼付文が施されたいわゆる金魚鉢形深鉢の口縁部資料(第39図16)があり、大木6式土器の様相を認めることがから前期末葉の所産と判断された。

縄文時代中期 中期の遺物を包含する代表的なものに、SK202・236・310等の土坑がある。SK236とSK310のそれぞれから出土した土器は、同一個体であり接合されたことから、この2基は同時期に機能していたことが解る。

SK202(第31図)はA区42-15グリッドに中心を置く略円形の土坑で、南側でSD201と重複関係にある。直径130cm強、底面までの深さ96cmを測る。底面のほぼ中央にピット状の掘り込みを有し、規模や形態的特徴が野町遺跡検出の陥れ穴と類似するが、ここでは土坑として扱うこととした。覆土には焼土の堆積層が含まれ、検出面では立石と思われる棒状礫を認めている。坑内からはF2層を中心に一括した遺物が出土しており、復元された深鉢(第40図21)は全形を窺い知れるものである。これら出土遺物から、中期末葉の時期が当てはめられた。

なお、本坑の南東部において埋設土器(EU569)1基が検出されている。口縁部を上にした正位の状態で埋設されるが、下半部が北側にずれていくびつな状況を呈していた。地震による影響等が原因として考えられるが、詳細は不明である。埋設された深鉢は斜縄文が施された粗製土器であったが中期末葉に比定され、SK202土坑と関連して機能したものと推測される。

S K236（第30図）はA区38-44グリッドに位置し、北側の一部を重複するS K235に切られる。長径210cmの隅丸長方形を呈し、壁面・底面には段や凹凸が認められる。深さは最深部まで133cmを測る。約1m掘り下げたところで炭化した種実が大量に出土し、10cm程の堆積層を形成していた。層間に厚さ1cm程の焼土層が確認され、部分的ではあるが広がりを見せていた。種子はトチノキであり、焼け膨れ状の亀裂があること等から熱を帯びて炭化したもの、と同定結果（付録参照）を得ている。出土土器には第41図に示した撚糸文が施された深鉢や、陰線文が付く注口土器などがあり、中期末葉の所産と捉えられた。

A区41・42-43グリッドで検出されたS K310（第38図）は、周囲にテラス状の平場を有する土坑である。平面規模は長軸約210cmの不整な隅丸方形となり、土坑主体部は楕円形を呈する。深さ120cm前後を測り、北側底面には径50cm程の礫石が地山に埋もれている。図示できた遺物には深鉢等の土器資料（第41図）の他、石籠・削器の成品2点がある。

縄文時代後期 後期に属する代表的なものは、S K177・194・238・353・357・362・527の各土坑である。土器同一個体の破片がS K177とS K527から各々出土し、接合している。

S K177（第32図）はA区40-45グリッドにおいて検出され、先行するS X175埋没後に構築された土坑である。楕円形状の平面プランで、長径150cm・深さ114cmを測る。上面に比べ底面が狭く、中段からの急傾した掘り方がその断面形態から窺える。出土した遺物に石皿等の大型石製品が多いのが特徴で、層位に拘わらず出土する様相が土層断面から見て取れた。中層以上の覆土には炭化物が多く含まれ、土器を包含するのもこれらの堆積土内であった。第42図に示した土器の特徴から、後期初頭に属するものと判断された。

S K527（第33図）はA区の段丘端部38-47グリッドで確認した土坑で、S K177とは約18m離れて位置する。平面規模は長径108cmの楕円形で、深さ30cm余を測る。遺物は底面からやや浮いた状態で出土している。三十稻場式に比定される土器資料（第42図）が含まれることから、後期初頭の時期が当たはめられる。

S K357（第34図）はA区39-42グリッドにある。円形状の土坑で、直径110cm・深さ45cmの規模を持つ。南に隣接するS K356と重複し、これを切っている。覆土は5層に分けられる自然堆積層で、検出面においてレンズ状に堆積する薄い焼土の広がりが認められた。坑内より称名寺式に併行する深鉢片（第42図）が出土していることから、後期初頭に比定された。

S K194（第35図）は、A区41-15・16グリッドにて検出された土坑である。長径180cm・短径140cmの楕円形を呈し、上端に対して底面積の小さい掘り方が特徴的である。深さ110cm弱を測り、形態的にはS K177に類似する。出土遺物が少なく、図示できた資料も深鉢口縁部（第42図40）1点であった。蛇行する櫛歯条線文が施されており、堀之内式や南三十稻場式に当たると思われ、後期前葉に位置付けた。

縄文時代晚期 出土土器から当該期に属す代表的な土坑は、S K149・288・485・525・536・537・548・563等である。この内S K536からは、二次的に混入したと考えられる後期前葉の土器も出土しているが、大洞B C式に比定される羊齒状文を施す注口土器（第43図53）等の存在から、主体となる時期は晚期前葉に位置付けられた。

S K525（第29図）は、S K526集石土坑の北西側に隣接して検出された土坑である。不整円形の平面プランとなり、長径126cm・短径110cmの規模で深さは60cm前後を有する。覆土には炭化物が多く含まれ、埋没途中に大型の礫石が混入している。出土遺物には石製品が多く見られ、図示できたものに石籠や凹石・磨石等がある。時期を判断できる土器資料は少ないが、綾络文のある深鉢等の特徴から晩期前半の所産と考えられる。

S K548（第33図）はA区39-46グリッドにある。円筒状に掘り込まれ底面が僅かに広がる形態を呈し、壁面は全周において垂直的となる。平面規模が長径106cm・短径93cmの梢円形で、深さ70cm程を測る。黒褐色を呈す覆土は下層ほど細分され、埋没の速度が緩やかであったことが窺われる。遺物は主に上層より出土しており、時期決定資料として頸部に羊歯状文が施される浅鉢（第43図52）等がある。晩期前葉の大洞BC式に属する土器である。

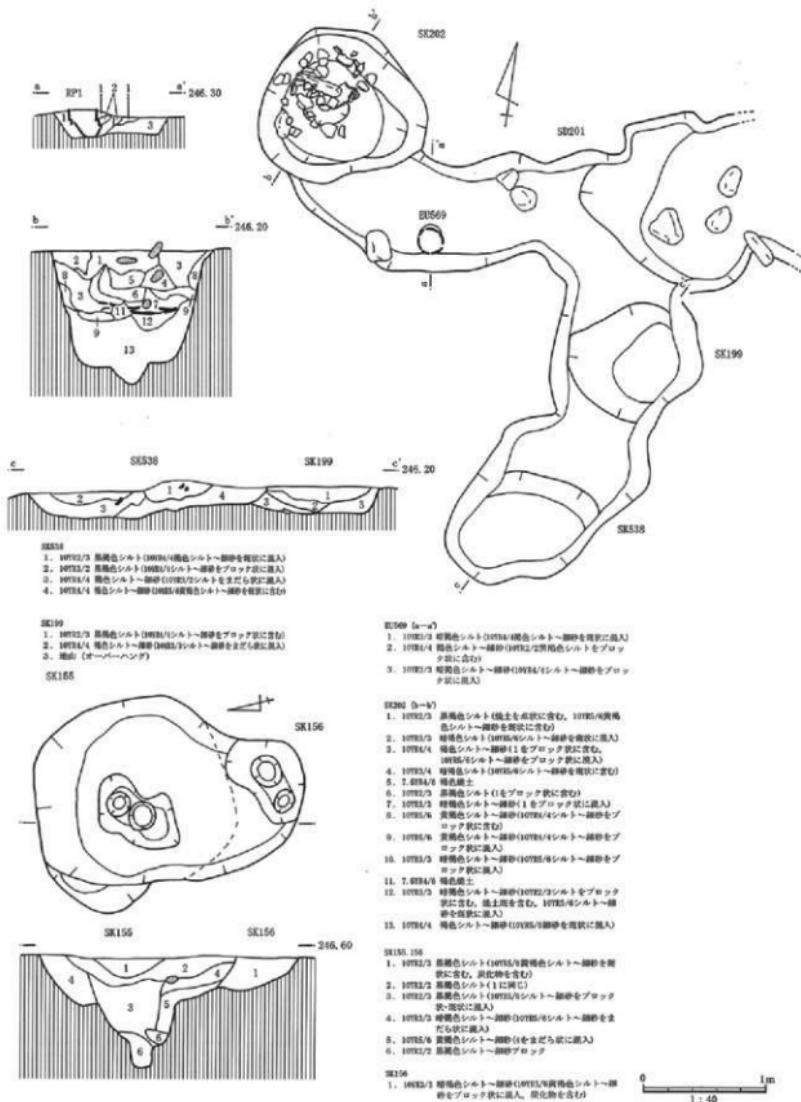
S K563（第33図）はS K548より北東方向へ約2.5m、S T533住居跡のすぐ西側で検出した土坑である。規模は長径160cm・短径130cmで、不整な隅丸長方形を呈している。長軸側の壁面は緩やかな傾斜を持って掘り込まれ、底面までは深さ60cm前後を測る。出土遺物は土器・石器点数とも少ない。図示できたものに、朱彩を施した壺の下半部資料と石籠成品等があり、晩期前半の時期が当てはめられる。

S K537（第37図）はA区41・42-46グリッドに位置する土坑で、一辺約150cmを測る不整な隅丸方形を呈している。段丘縁辺の傾斜面を利用して構築されており、検出面の標高でも40cm程の高低差が生じるが、底面はほぼ水平である。遺物は南西半に多く認められ、基本的に2層からなる覆土の上層より出土している。土器破片であるが壺の口縁部資料3点（第43図）を認め、文様帶施文から大洞B式（入組文）と大洞C1式（平行沈線）土器が共伴していることが解った。断面観察により、一旦埋没後に土坑中央部が再度掘り込まれたものと思われ、平面プランでは区別できなかった重複関係が原因した結果と考えられた。

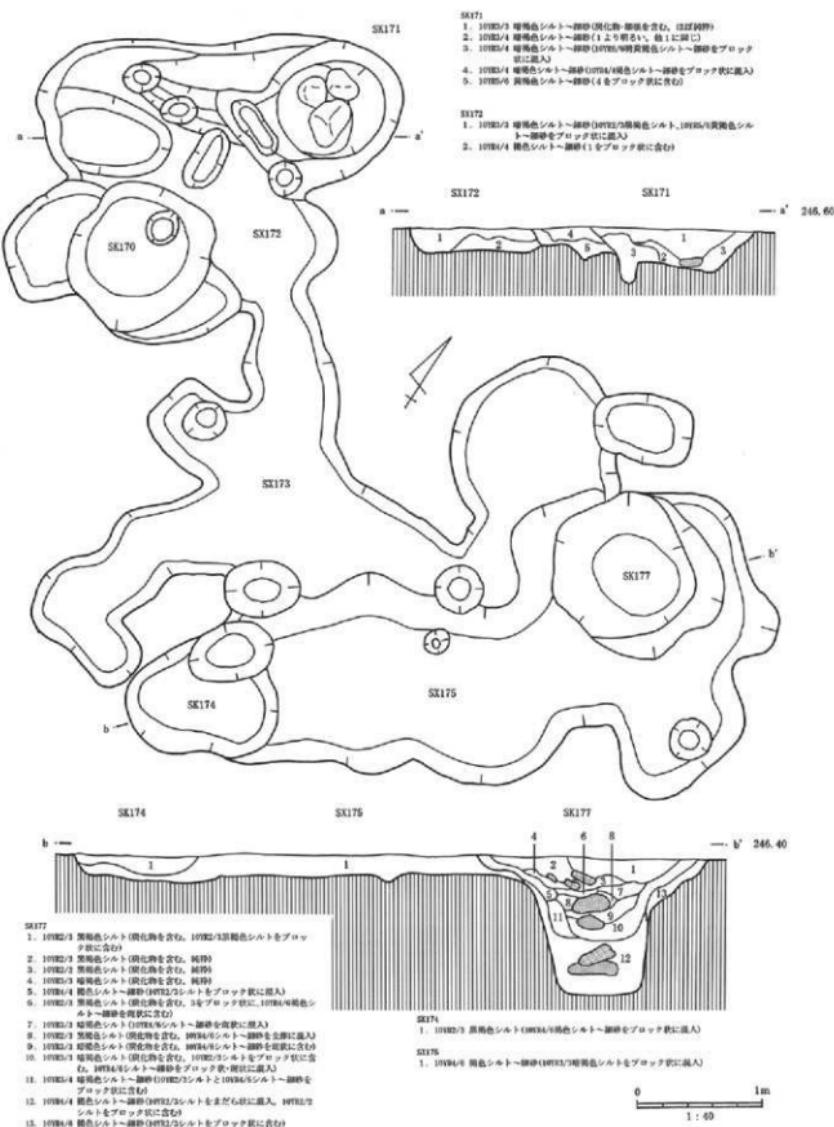
弥生時代 弥生土器が出土した遺構にはS K295・370の土坑2基がある。弥生土器は包含層出土のものを含めて10点程を数え、内4点の資料を第44図に示した。これらの土器は一括性に乏しいことなどから敢えて土器型式における細分はせず、弥生時代前期後葉から中期前葉のものとして捉えた。

S K370（第33図）は、A区41-42グリッドにて確認した不整な梢円形状を呈す土坑である。長径184cm・短径130cmの規模で、東側に膨らみを持つ。底面には凹凸や起伏が見られるため、深さが一定しない。単層となる覆土内より出土した遺物は、数点のフレイクのみであった。ほぼ形状を留どめる壺形土器の蓋（第44図78）は検出面上において出土していることから、遺構に伴わない二次的な堆積による可能性も残る。

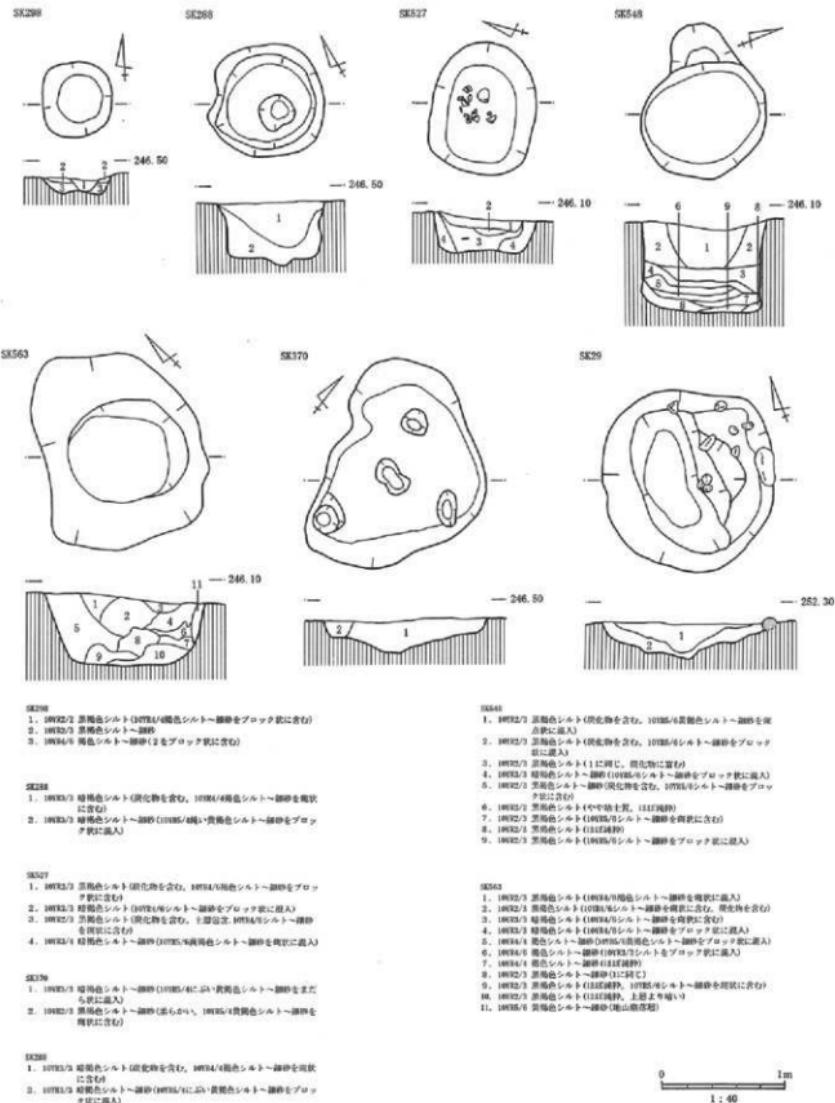
S K295（第38図）はA区39-43グリッドに所在する土坑で、南側を重複するS K294に切られる。深さ15cm程の長梢円形を呈するが、北端部のみ円形状に一段深く掘り込まれ、最深部までは40cm弱を測る。坑内からは、変形工字文が施文された鉢形土器の口縁部資料（第44図75）1点が出土している。なお、重複するS K294内からも変形工字文が認められる土器小片が出土しており、近接した時期での構築であったことが窺える。



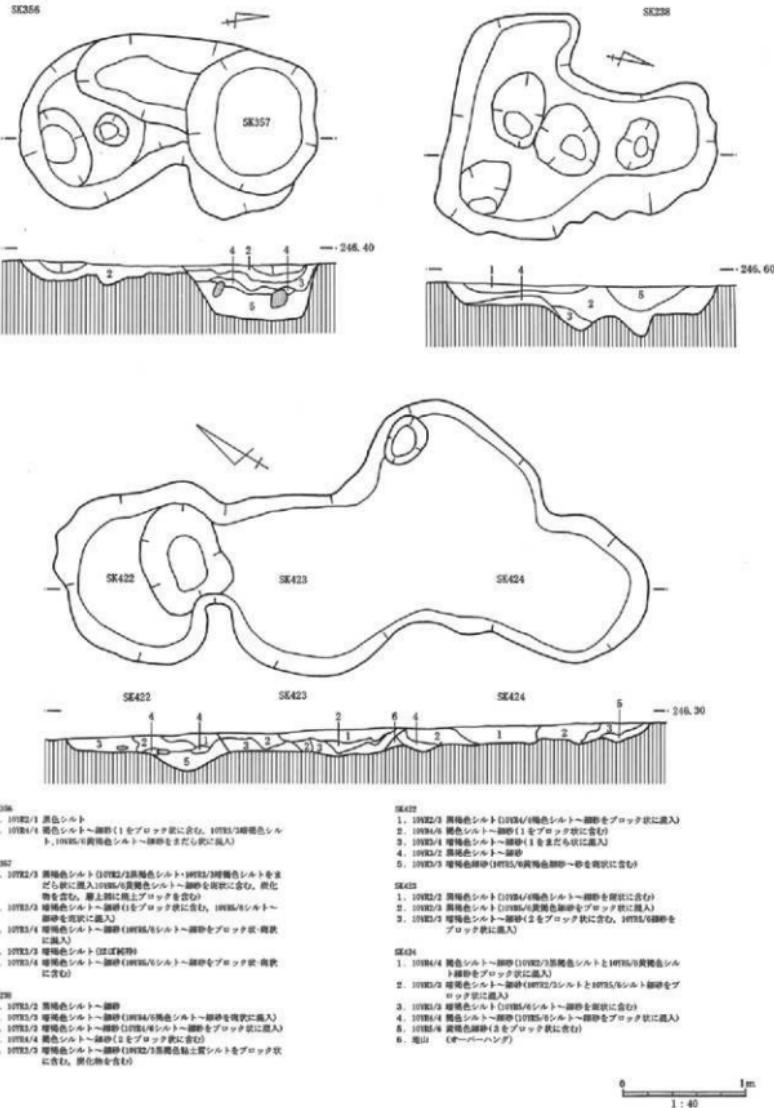
第31図 S K155・156・199・202・538土坑



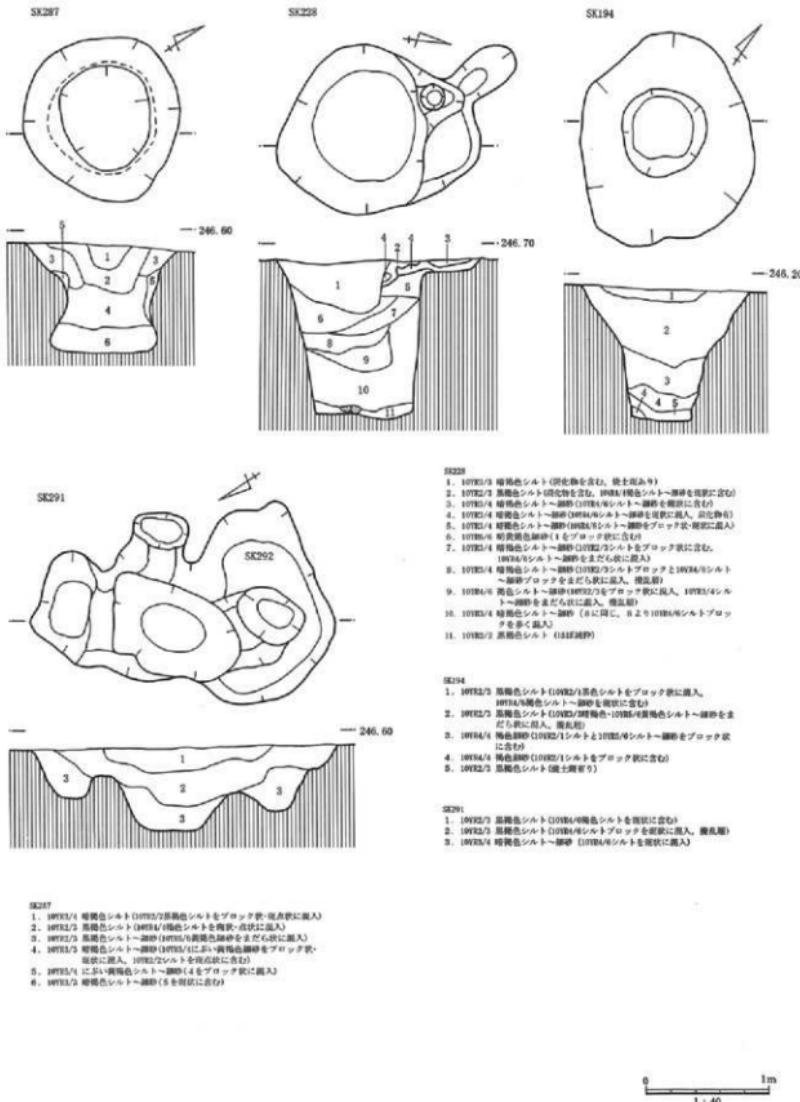
第32図 S K170・171・174・177土坑



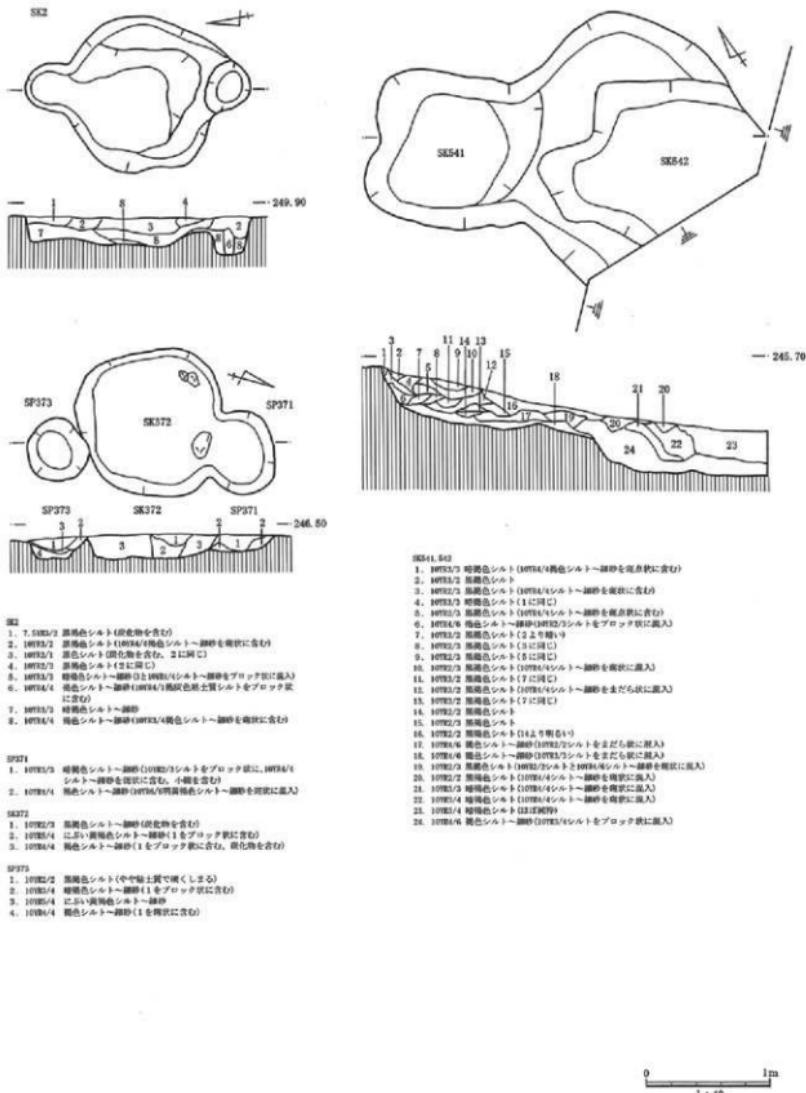
第33図 SK29・288・298・370・527・548・563土坑



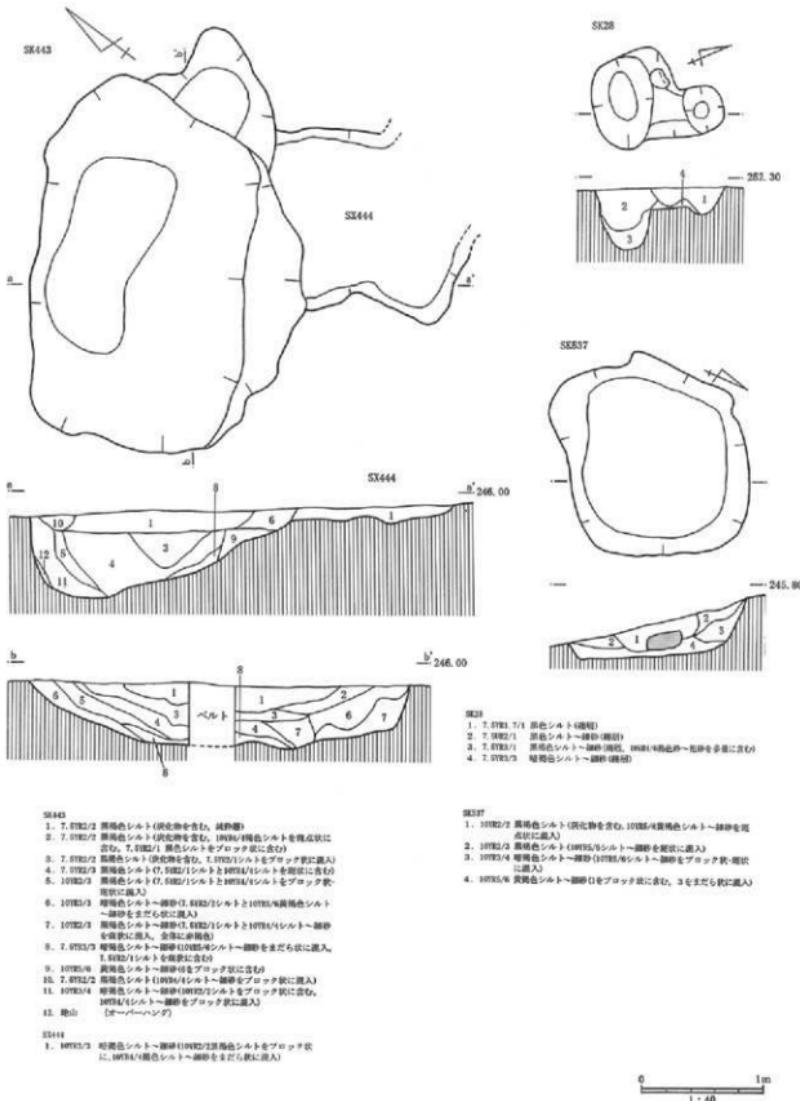
第34図 S K 238・356・357・422・423・424土坑



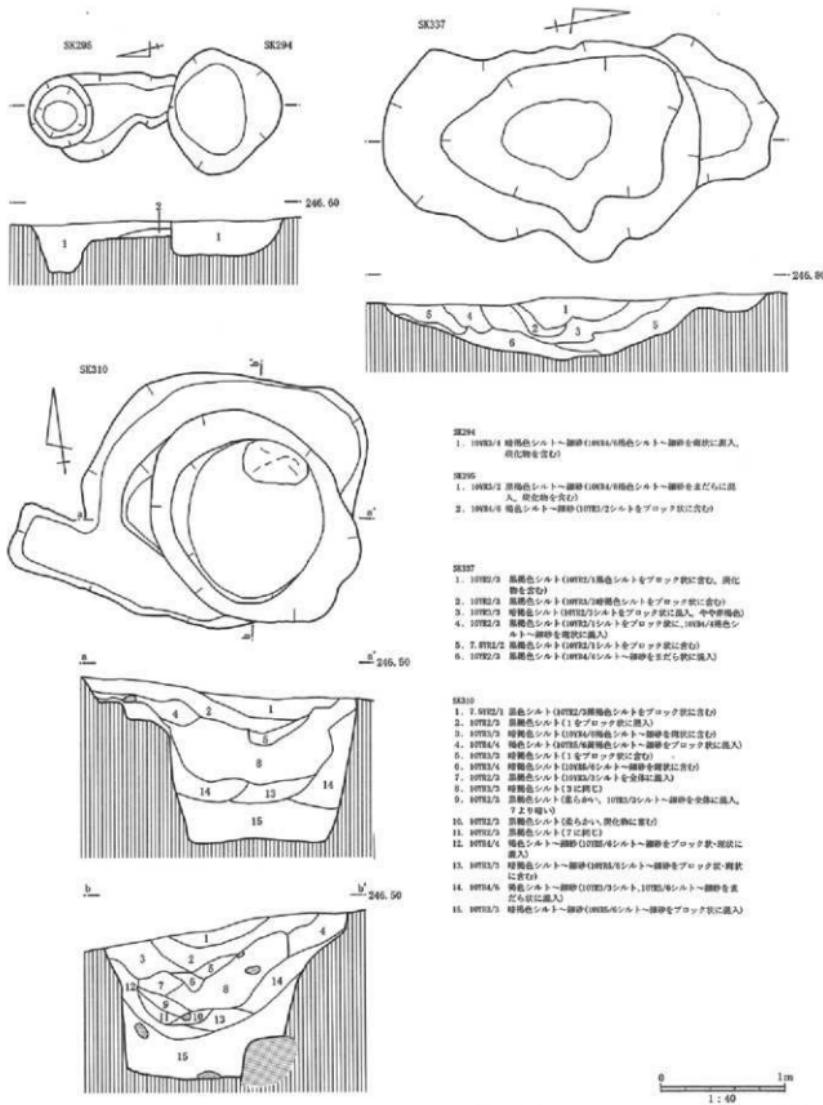
第35図 SK194・228・287・291・292土坑



第36図 SK2・372・541・542土坑



第37図 SK28・443・537土坑



第38図 S K294・295・310・337土坑

3 出土遺物

(1) 繩文土器 (第39~44図、図版33~38)

本遺跡の縄文時代の土器としては、断続的ながら早期から晩期に至る時期のものが出土している。数量的な主体は中期末葉から後期前葉にかけてと晩期前半の時期であり、概ね集落の存続期間に比例した結果と理解される。以下では、所属時期毎に器形や文様構成等について説明する。なお、掲載資料個々の文様等については観察表5・6に譲るが、時期・分類に際しては野向遺跡同様に、後章の千野遺跡も含めた土器編年表（第99~101図）に拠ったものである。

早期の土器 (第39図1~9)

貝殻文や沈線文を主体とするもので、早期前～中葉に属する。器種は尖底深鉢で、平縁もしくは波状縁となる器形と認識される。7は斜格子状沈線を施文する沈線文系土器である。器面は内外面の削り・磨き調整が丹念に行われ、焼成も良好である。胎土に纖維は含まれない。1~6・8・9は貝殻沈線文系土器で、沈線文・貝殻腹縁压痕文・連続刺突文等により文様構成される。器厚8mm前後の厚手のものが多いが、1・2は薄手となる。胎土中には纖維を含まず、砂粒の混入が目立つ。2は口縁部に貝殻腹縁による刺突文が巡る。6は曲線的なモチーフと、く字状の押引文が主体を成す。9は砲弾形の器形を呈する鋭角な尖底深鉢で、器面全体の文様構成を知ることができる。文様帶は胴部上半と下半とに分割され、上半部文様帶は横位沈線によって3区画される。

前期の土器 (第39図10~20)

10は撚糸压痕文が主体的に施され、前期初頭に位置付けられるものである。口縁部文様帶に藤手常撚糸压痕文を施しており、胎土に纖維を多量に含んでいる。

13は半截竹管工具により沈線文・押引文が施され、15は刻目のある粘土紐の貼付けによって文様構成される。いずれも胎土中への纖維の混入は微量である。17~20は口縁が大きく外反して開く形態の深鉢口縁部資料で、口唇や口縁に刻目ない粘土紐貼付文が施される。文様単位として細い粘土紐を小波状に巡らし、19・20では太紐にてV字状や波状の装飾文を作出している。これらの土器は前期中葉～後葉に属するものである。

11・12・14・16は前期末葉に比定されるもので、半截竹管や棒状工具による沈線文・押引文及び粘土紐貼付文が施文される。11の口縁部には縄文原体の圧痕文が認められる。16は4単位の山形突起を持つ深鉢で、頸部がくの字状に縫れる様相から脣張り長胴形の形態が窺い知れる。これら頸部で縫れる器形の出現に伴って、文様帶も口縁部・頸部・胴部で構成される。

中期の土器 (第40図21~第42図37)

21は復元により全形が把握できた器高59cmを測る大型の深鉢である。頸部には頂部に稜を持つ断面三角形の隆帯が横位に巡らされる。山形状の貼付けとなる2単位の箇所に渦巻状文が施され、内部には刺突文が充填される。これらの隆線文は、後続する後期初頭の土器に受け継がれるものである。胴部上半に沈線によって縫った連続J字状文様を描出し、地文の撚糸文を磨消している。中期末葉に属する土器である。22~25はSK236土坑出土の深鉢で、いずれも地文のみの粗製土器である。4単位の波状・山形縁となる器形を呈し、頸部で縫れるものとそ

でないものが認められる。22は口唇に内傾する面を有する。これらの土器も器形や胎土等の特徴から、中期末葉の所産と考えられる。27は注口上に円窓を持つ橋状把手が付加された、中期末葉の注口土器である。口縁部に横走する区画隆線と沈線を巡らし、体部には方形やY字状と窺える微隆起線文が施される。

31は北陸地方の新崎式に比定されるもので、半截竹管による縦位の平行沈線を施して半隆起線文を描出している。中期前葉に属する土器である。

後期の土器（第42図38～51、第43図65）

38・40～42・48～50・65は、文様等から後期初頭に位置付けられるものである。41・42は同一個体と判断される深鉢であり、口縁部資料の41は肥厚する口唇が沈線によって区画されている。胴部資料には連続刺突が施された隆帯が垂下しており、器面全体に幅広の沈線によってジグザグ文等が描出され、磨消繩文が施文される。文様は構成が崩れて複雑に入り組む様相から、称名寺II式の影響が窺い知れる。40・65は櫛齒状工具にて条線文が施される類、48・50は突瘤状文及び連続貼瘤文が特徴的なもので、ともに三十稻場式古段階に比定される。49は堀之内1式併行とした鉢の中空注口状突起部である。突起部より垂下する隆帯を持ち、沈線区画内に地文を充填している。

43・44は後期前葉に位置付けられるもので堀之内2式に当てはめられ、文様が横方向に展開し、器面が黒色化される特色を有している。

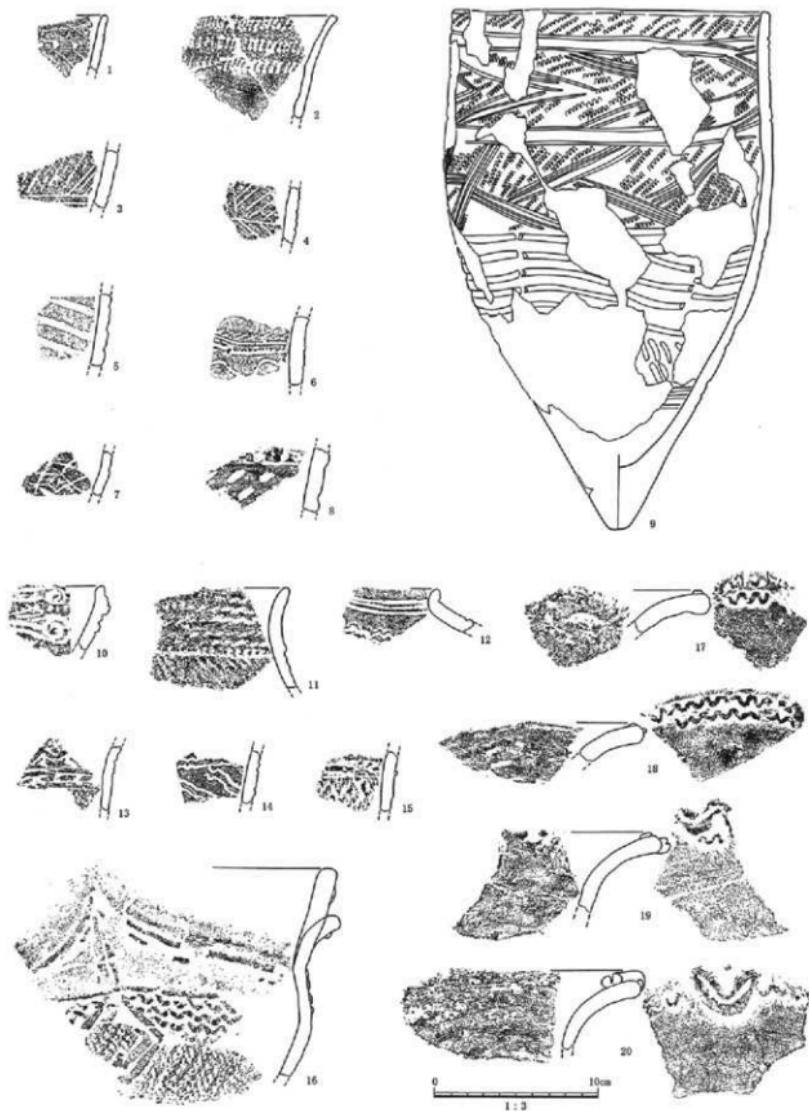
晩期の土器（第43図52～64・66～70）

出土資料は晩期前葉から中葉に位置付けられるものであった。粗製土器の割合が高いが、精製及び半精製のものも一定量出土している。大洞B式に比定される54の口縁部資料には、曲線的な三叉状入組文が認められる。口唇に横位のB字形突起が付加され、口縁には刻目文を施している。器面は入念に研磨される。52・53・55は、大洞BC式に特徴的な羊歯状文が施された土器である。52は頸部で屈曲し口縁部が外反する器形の浅鉢で、頸部にのみ文様が施文される半精製土器である。53はB字形突起を持つソロバン玉形の注口土器であり、口縁部に羊歯状文の文様帶が施され、肩部には陽刻手法による浮彫装飾文が描出される。55は口唇に大きな刻目が付され、右上がりの羊歯状文が施文される。56・61は羊歯状文が簡略化され、横位に連続する方形の珠文状文様が主体となるものであり、大洞C1式に比定される。

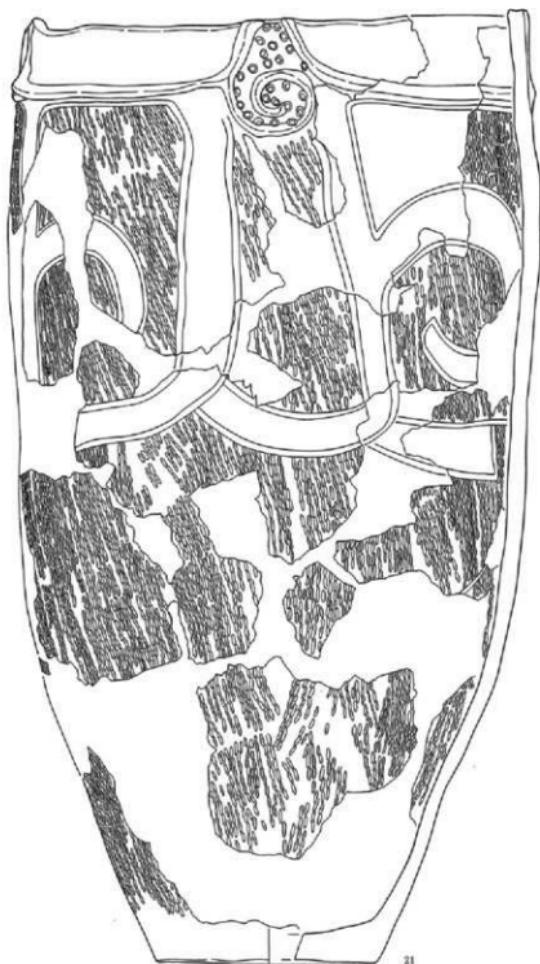
（2）弥生土器（第44図75～78）

弥生土器は包含層出土も含め11点を確認しており、断片資料ながら器種は鉢・壺・蓋等と認識される。実測図には文様の窺える3点と、器形が明らかな蓋1点を掲載した。75・76は口縁部に変形工字文が施される類で、磨消繩文手法が観察される。77は三角形もしくは菱形の区画文が主体となるもので、同様に磨消繩文が施される。78は下半部に繩文が認められる粗製品の蓋である。

これら弥生土器は、量的にも限られ遺構内からの出土も散発的な状況から、一括して中期前葉を主体とする時期に位置付けした。型式的には東北地方南部の南御山式、または今和泉式に併行するものと考えられる。

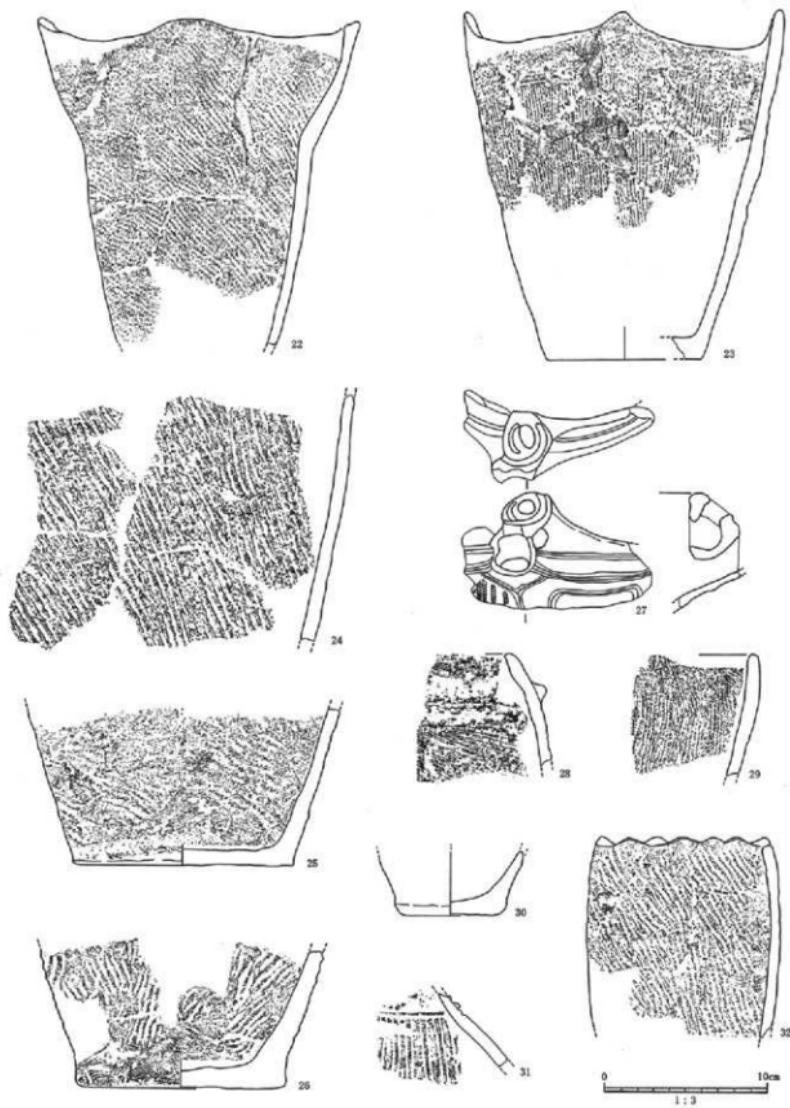


第39図 縄文土器 (1)



0 10cm
1 1 3

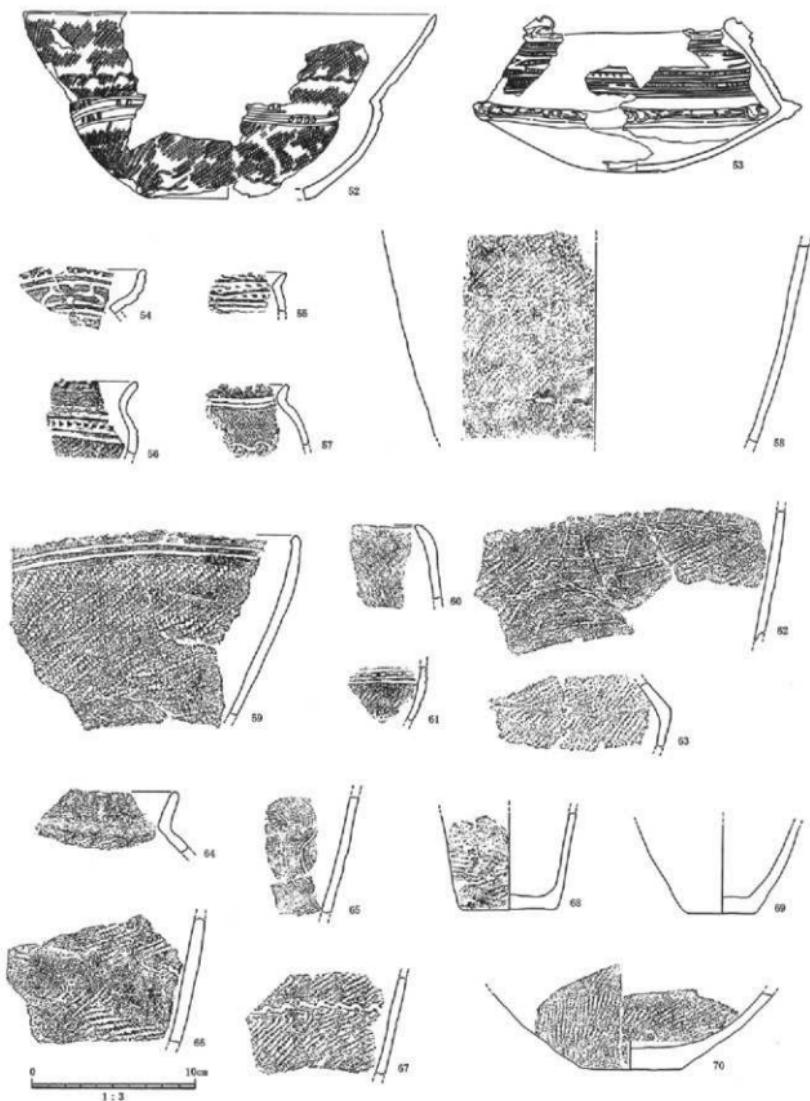
第40図 繩文土器 (2)



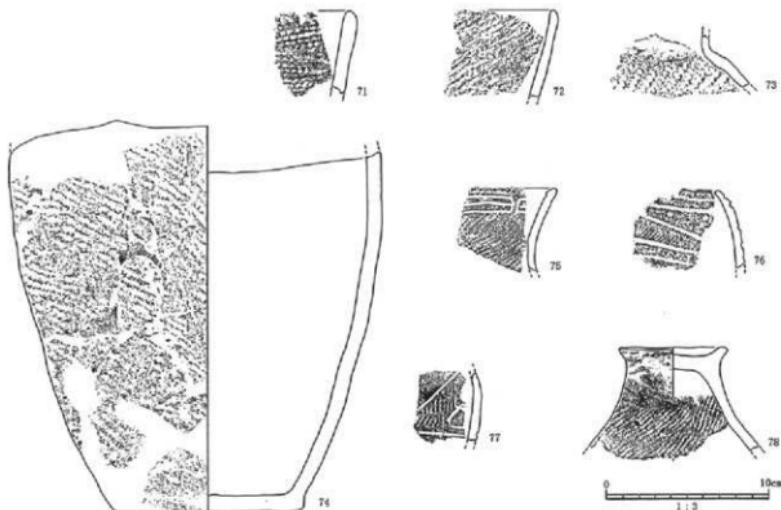
第41図 縄文土器（3）



第42図 繩文土器 (4)



第43図 繩文土器（5）



第44図 繩文土器・弥生土器

表5 土器觀察表(1)

井田 番号	遺物 番号	出土地點 層位	時期 分類	器種	文様	備考
39	1	43-43 II	I 3	深鉢	貝殻散縫H直文、平行沈線文内D字状刺突文	
	2	41-45 II	I 3	深鉢	貝殻散縫連続刺突文	
	3	SK538 F1	I 2	深鉢	交互多段沈線文	
	4	39-46 II	I 2	深鉢	交互多段沈線文	
	5	SK538 F1	I 2	深鉢	太沈線文	
	6	42-45 II	I 2	深鉢	貝殻散縫圧痕文、區画沈線文、△字状底壓引文、波状捺糸圧痕文	
	7	38-42 II	I 1	深鉢	倍子状沈線文	
	8	43-43 II	I 2	深鉢	爪形刺突文、区画沈線文、斜行連續刺突文	
	9	SK538 F1	I 2	深鉢	区画沈線文+交互多段沈線文、貝殻散縫圧痕文、半纏竹管沈線文、粗沈線文	
	10	45-43 II	II	深鉢	綱手状捺糸圧痕文、粗沈線文	
	11	SK187 F1	V	深鉢	圓文原体側面圧痕文(RL), 半纏竹管連續押引文、圓文(RL)	
	12	39-47 II	V	深鉢	横走平行沈線文(3条)、離塵状沈線文	
	13	39-46 II	IV1	深鉢	山形沈線文、△字状連續刺突文、半纏竹管押引文	
	14	41-46 II	V	深鉢	横走・斜行吸光沈線文(2条)	
	15	42-45 II	IV1	深鉢	則目付粘土細貼付文	
	16	SK187 F1	V	深鉢	区画粘土細貼付文(山形・菱形・巻曲状)、圓文(RLR)	
	17	41-45 II	IV2	深鉢	小波状粘土細貼付文	
	18	42-45 II	IV2	深鉢	小波状粘土細貼付文(2段)	
	19	42-45 II	IV2	深鉢	小波状粘土細貼付文、蓋状粘土太繩張筋文(内部沈線)	
	20	41-45 II	IV2	深鉢	小波状粘土細貼付文、V字状粘土太繩張筋文(内部沈線)	
40	21	SK302 F2	VI2	深鉢	窓下・区画沈線文、溝状粘土細貼付文(内部円形刺突文充填)、区画沈線文(追加J字形)、正彌拂捺文(L)	RP12

表6 土器觀察表(2)

擇回 標号	遺物 番号	出土地点 層位	時期 分類	器種	文 様	備 考
41	22	SK236 F3	VI2	深鉢	正整彌条文(L)	
	23	SK236 F1	VII	深鉢	区画沈線文、正整彌条文(L)	SK310出土土器と兼合
	24	SK236 F2	VII	深鉢	正整彌条文(L)	
	25	SK236 F2	VII	深鉢	正整彌条文(L)	
	26	37-47 II	VII	深鉢	正整彌条文(L)	
	27	SK236 F1	VI2	口付土器	円窓横状手付口(8字状)、区画沈線文(横走・方形)、綱文(RL)	
	28	SK310 F1	VII	深鉢	区画沈線文、柳条縞文	
	29	SK310 F1	VII	深鉢	正整彌条文(L)	
	30	SK236 F2	VII	深鉢	無文	
	31	40-46 II	VI	鉢	半截竹管沈線文(辰巳)、周目付施起綱文	
	32	38-47 II	VII	深鉢	正整彌条文(L)	
42	33	37-46 VII	VII	深鉢	区画沈線文、押圧綱文(RL)	
	34	42-45 II	VII	深鉢	区画沈線文、綱文(LR)	
	35	37-46 II	VII	鉢	綱文(LRL)	
	36	34-44 II	VII	深鉢	区画沈線文、綱文(LR)	
	37	38-45 II	VII	深鉢	非結束斜状綱文(RL・LR)	
	38	SK238 F1	VI3	深鉢	区画沈線文(帯状)→器条体压痕文	
	39	SK238 F1	VI3	鉢	綱文(LR)	
	40	SK194 F1	VI5	深鉢	柳条縞文(半円・蛇行)、押圧綱文	
	41	SK357 F1	VI2	深鉢	区画沈線文、磨消綱文(LR)	
	42	SK357 F1	VI2	深鉢	垂下墜垂・D字状連續刺突文、区画沈線文(ジグザグ状・痕手状)、磨消綱文(LR)	
	43	SK353 P2	VI6	深鉢	区画沈線文(多条)、磨消綱文(RL)	
	44	SK353 P2	VI6	深鉢	柳条縞文	
	45	SK362 F1	VII	深鉢	柳条縞文(斜行交差)	
	46	SK527 F2	VI2	深鉢	区画沈線文、正整彌条文(R)	
	47	SK177 F1	VI3	深鉢	不整彌条文(L)	
	48	38-47 II	VI2	深鉢	方形連續刺突文(突瘤文)	
	49	SK177 P2	VI3	鉢	中空口状突起、垂下墜垂、区画沈線→光埴綱文(RL)	
	50	SK527 F1	VI2	深鉢	多段連續貼繪文	
	51	SK177 P2	VI3	深鉢	柳条压痕文(格子状)	SK327出土土器と兼合
43	52	SK548 F1	IX2	浅鉢	平面状文、綱面綱文(LR)	
	53	SK536 F1	IX2	注上土器	口緣浮彫装飾(二字形突起)、羊首状文、横走平行沈線、浮彫猪鼻突起	
	54	SK537 F1	IX1	壺	三叉文、横走平行沈線、劍目文、B字形突起	
	55	41-46 II	IX2	深鉢	羊首状文、横走平行沈線	
	56	SK537 F1	IX3	壺	連續劍目文、横走平行沈線、綱文(LR)	
	57	SK149 F1	IX	壺	横走平行沈線、綱面綱文(RL)	
	58	SK525 F2	IX	深鉢	綱面綱文(RL)	
	59	SK149 F1	IX	鉢	横走平行沈線文、綱文(LR)	
	60	SK537 F1	IX	壺	綱文(RL)	
	61	40-46 II	IX3	壺	珠文状浮文、横走平行沈線、綱文(LR)	
	62	SK536 F1	IX	深鉢	綱面綱文(LR)	
	63	45-43 II	IX	壺	綱文(LR)	64と同一個体
	64	45-43 II	IX	壺	綱文(LR)	63と同一個体
	65	SK536 F1	VI5	深鉢	柳条縞文(蛇行)	
	66	SK536 F1	IX	深鉢	綱路綱文(LR)	
	67	SK548 F1	IX	深鉢	綱路綱文(LR)	
	68	SK295 F3	IX	壺	綱文(LR)	
	69	SK563 F2	IX	壺	無文	朱影
	70	SK485 F1	IX	浅鉢	綱文(LR)	
44	71	42-45 II	IV	深鉢	口唇削目、柳条压痕文(L)	
	72	ST533 F1	壺	深鉢	綱文(LR)	
	73	40-45 II	壺	綱文(LRL)		
	74	EU569	VII	深鉢	綱文(RL)	RPI
	75	SK295 F1	X	鉢	区画沈線文(変形工字文)、磨消綱文(LR)	
	76	43-45 II	X	壺	区画沈線文(変形工字文)、磨消綱文(LR)	
	77	39-45 II	X	鉢	区画沈線文(三角形)、磨消綱文(LR)	
	78	SK370 F1	X	壺	綱文(LR)	

(3) 石 器

石器は打製石器と礫石器の別がある。打製石器には石鎌・尖頭器・石錐・石匙・石籠・搔器・削器などの定形的器種が一定量認められ、各々その大小や形態から細分される。礫石器では、凹石・磨石・砥石・石皿などを認めている。

打製石器の組成割合は多い順に、石籠46%・石鎌21%・削器19%・石匙8%となり、尖頭器・石錐・搔器は1%に満たない。これらtoolは包含層から出土したものが大半で、遺構内からの出土でも一括した例は見受けられず、散発的な状況であった。ただ、包含層出土ながら第46図に示した両尖匕首(55)と、これと規模の等しい完全な左右対称形態で丹念な両面加工によって作出された石匙(56)が、ほぼ同地点から揃って出土した在り方には、埋納などの特別な意味合いを想起させられたところである。

以下では、各器種毎に分類を中心とした概要を記していく。

石鎌 (第45図、図版39・40)

出土数は折損品や未成品と考えられるものを含めると48点を数える。石材は大半が頁岩であるが、僅かに玉髓と硬砂岩製品が混じる。これらは基部の形態的な差異により大別される。

I類：基部側に抉り込みの入るもので、次の3形態が認められる。

- a : 凹弧状の深い抉り込みが入るもの (1・2)。
- b : 半円もしくは「く」の字状の抉り込みが入るもの (3~14)。
- c : 丸みを帯びた僅かな抉り込みが入るもの (15~24)。

II類：基部側が直線状をなす平基鎌 (25~33)。

III類：基部側が丸みを帯びて突出する形態となる円基鎌 (34~39)。

IV類：基部に茎を持つ有茎鎌 (40~43)。

尖頭器 (第45・46図、図版41)

両面加工によって尖った先端部を作出した石器である。折損品を含め9点の出土があり、大きさや形態の相異から以下のように分類できる。

I類：最大幅25mm未満の細身のもの (44~46)。

II類：最大幅25mm以上で幅広、全長100mm未満の中形のもの (47~49)。

III類：全長が100mmを越える大形のもの。次の2形態に分けられる。

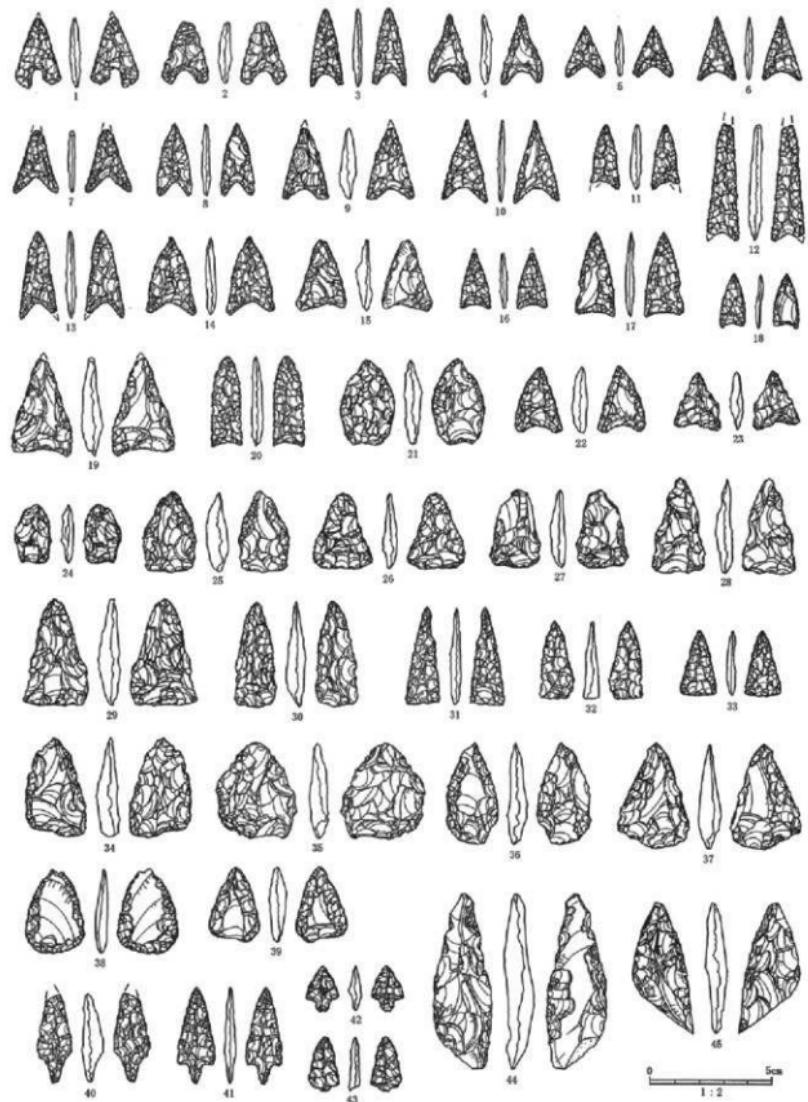
- a : 幅広で木葉形となるもの (50)。
- b : 幅が狭く柳葉形となるもの (51)。

石錐 (第46図、図版41)

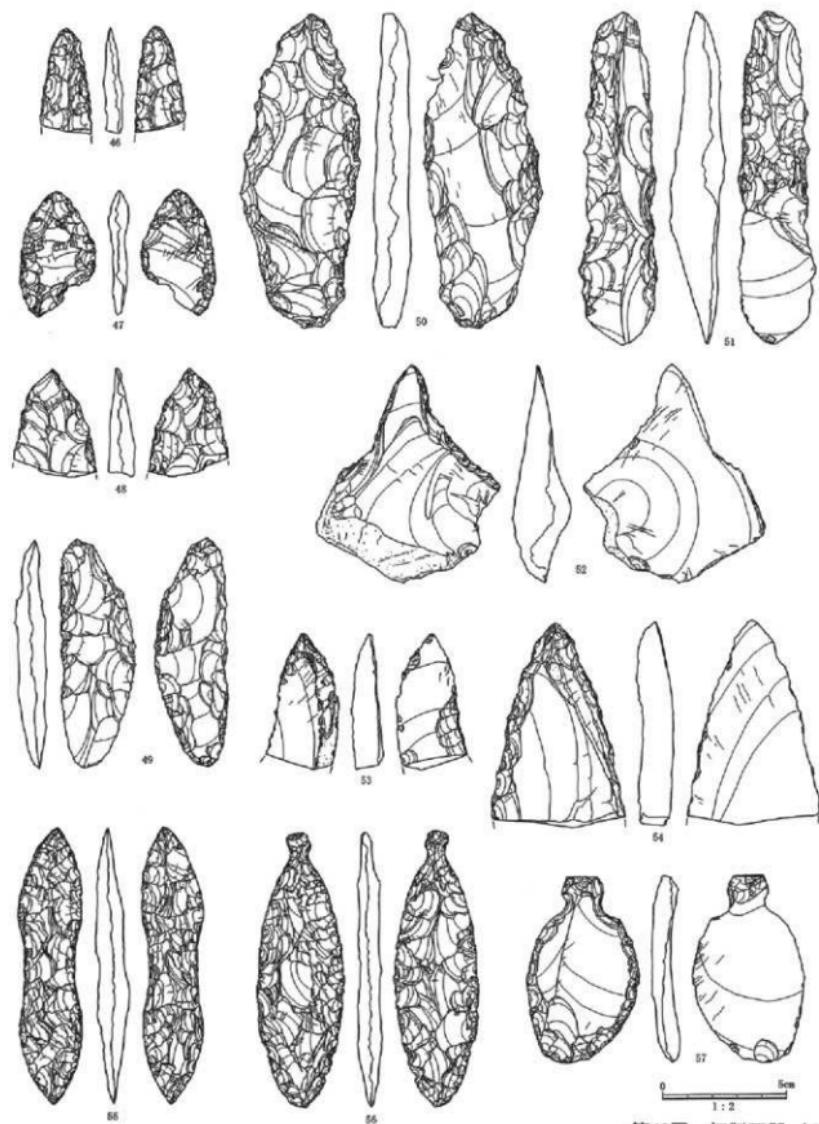
素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端に尖った先端部を作出した石器である。尖頭器と比較すると全体的に厚身となり、先端部に摩耗が認められることにより区別できる。3点の出土であるが、以下のように分類される。

I類：長い尖頭部を持つもの (52)。尖頭部と基部との間にノッチが入ることにより、その区別は明瞭である。

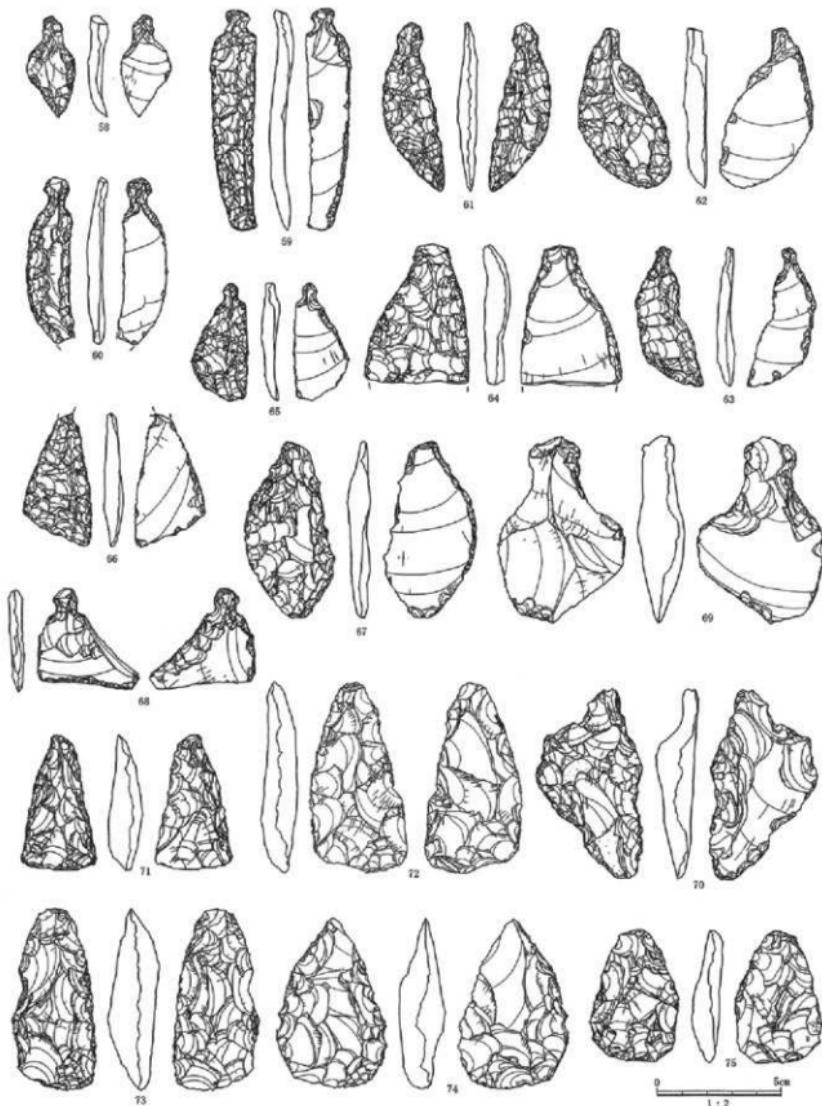
II類：剥片の一端を尖らせて刃部としたもの (53・54)。



第45図 打製石器（1）



第46図 打製石器（2）



第47図 打製石器（3）

両尖匕首（第46図、図版42）

両面加工によって両先端が三角形の槍先状を形成し、中央部にやや細い抉入部分を作出した石器を両尖匕首とした(55)。二次加工は素材の全面におよび、非常に丹念な調整面で覆われる。両先端部とも完全な対称形となるものである。

石匙（第46・47図、図版42・43）

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみを持つ石器である。全部で18点の出土があり、石材はすべて頁岩である。これらは、つまみと刃部の位置関係によって以下のように分類される。

I類：原則とした側縁が刃部となる縦形のもので、次の2形態に細分できる。

a : 左右が対称形となるもの。これらはさらに先端部の形態の相異から、完全な両面加工となり尖頭器のような先端部を持つa1(56)、片面加工であるが尖頭器のような先端部を持つa2(58)、片面加工で丸みを帯びた幅広の先端部を持つa3(57)、細長い短冊形の形状となり先端部も刃部となるa4(59)に細分される。

b : 左右が非対称のもの。これらは、左側縁が弧を描き右側縁が直線状をなすb1(60～63)、左側縁が「く」の字状に曲がり右側縁が直線状をなすb2(65・66)、左側縁が弧を描き右側縁が「く」の字状に曲がるb3(67)、折損のため先端部の形態が不明なb4(64)に細分できる。61は完全な両面加工で仕上げられる。

II類：つまみを上方に置いた時、その下端の縁辺が刃部となる横形のもの(68)。

69・70は、製作段階の途中と考えられる未成品である。

石箇（第47～53図、図版44～51）

素材となった剥片の両面または背面側だけの片面に加工を施し、その長軸の末端が刃部になる石器である。この定義に合致する石器は103点の出土があり、打製石器での割合は46%と約半数を占めている。これらは平面形や刃部の形態、加工部位の相異によって以下のように分類される。

I類：撥形で刃部が片刃状となるもの。

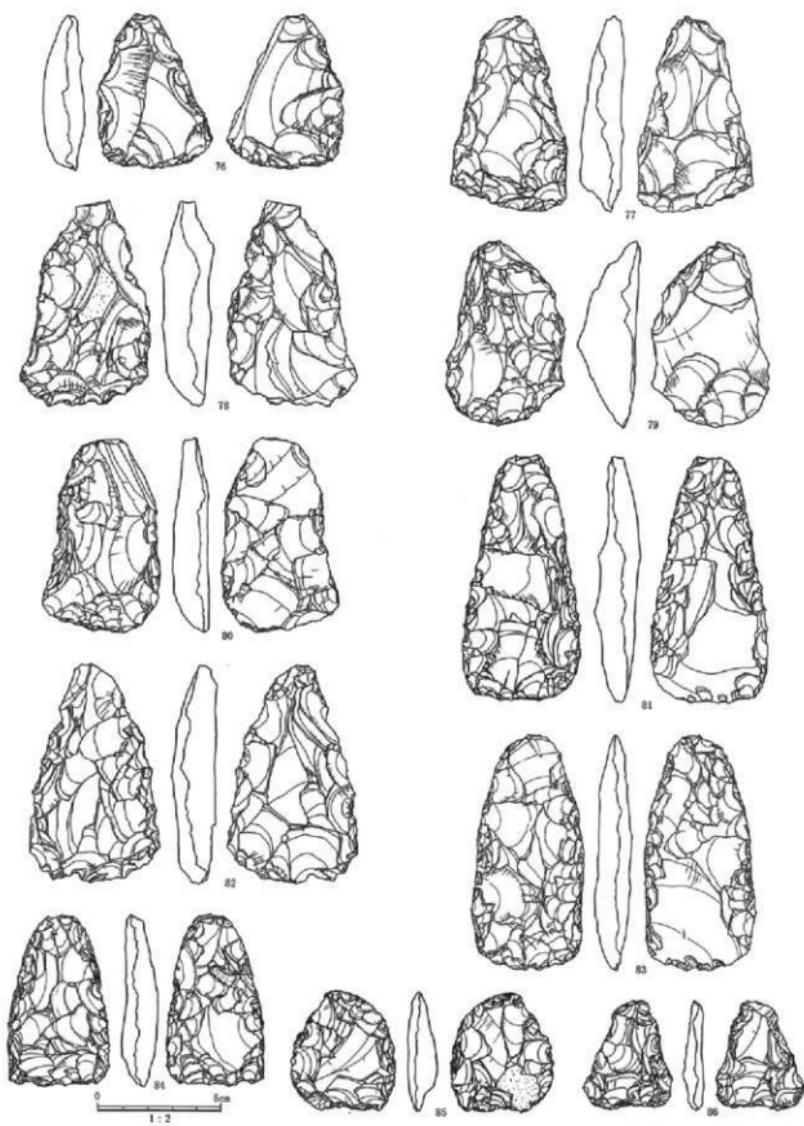
a : 調整が素材のほぼ全面におよぶ両面加工のもの。刃部が丸みを帯びるa1(71～83)と、直線状をなすa2(84～88)がある。

b : 素材の背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの。刃部は丸みを帯びるb1(89～93)と、直線状となるb2(94～97)がある。

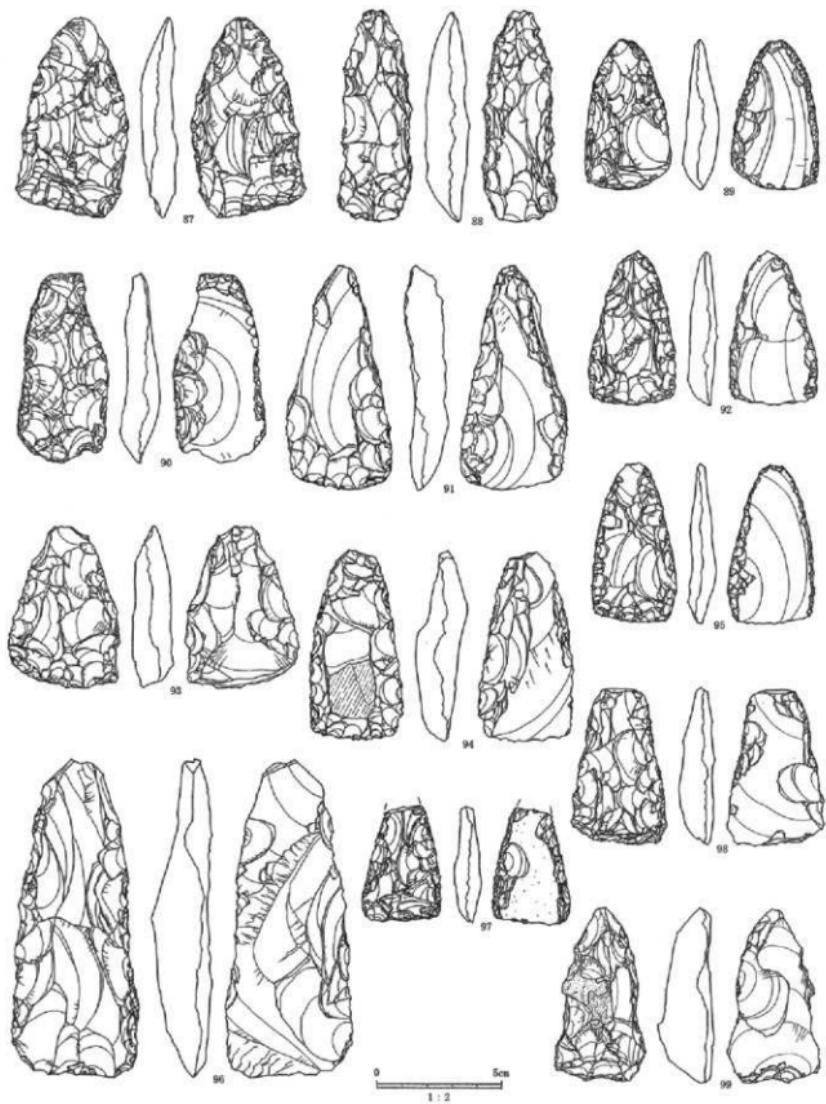
c : 素材の背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は刃部となる先端部に僅かに浅い加工が認められるもの(98・99)。2点とも刃部は直線状をなす。

d : 主要剥離面側に一切の加工が認められないもの(100～102)。3点の出土があり、刃部は丸みを帯びる。

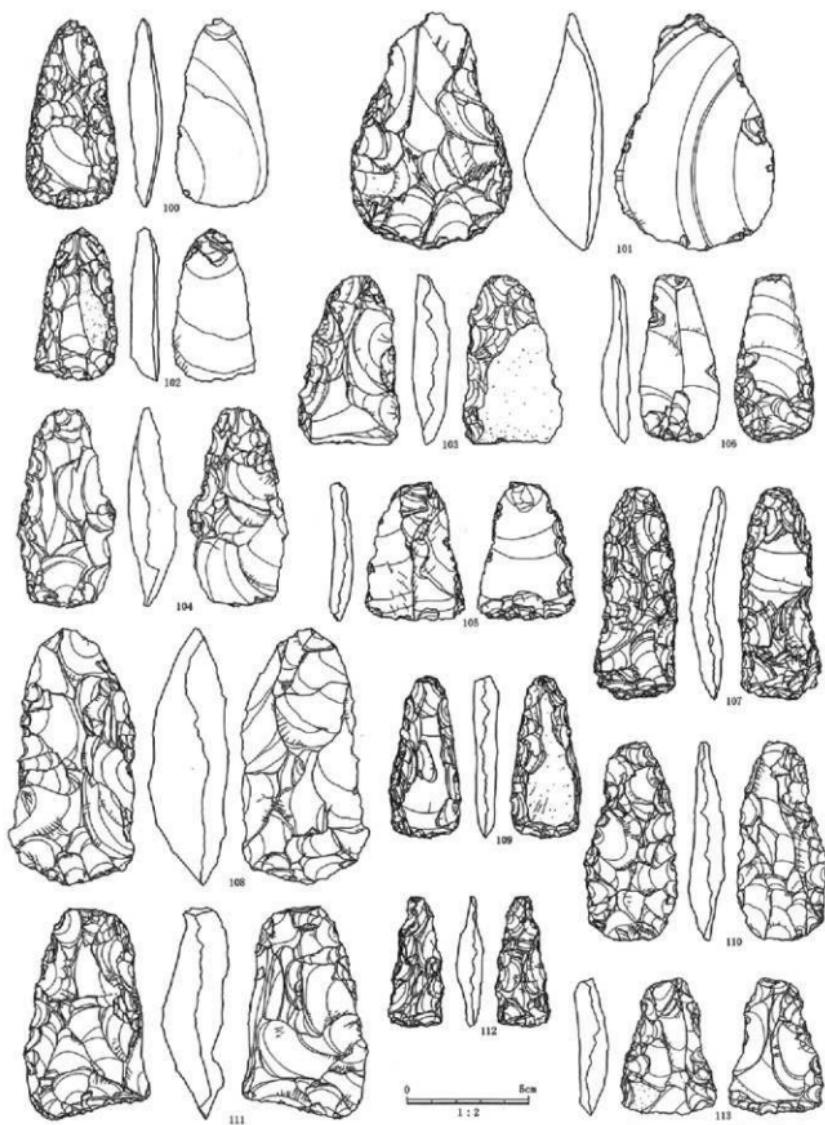
e : 刀部が素材の剥離面や自然面で構成され、刃部加工の認められないもの(103)。いわゆるトランシェ様石器である。刃部は直線状となる。



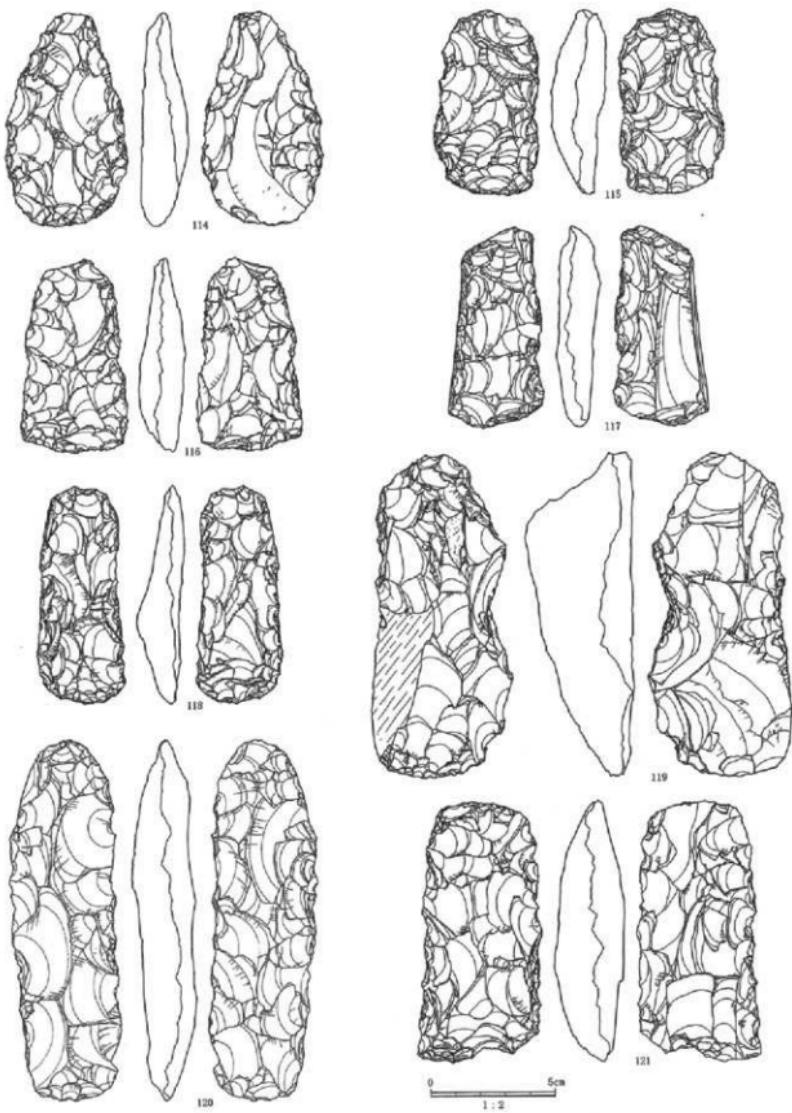
第48図 打製石器 (4)



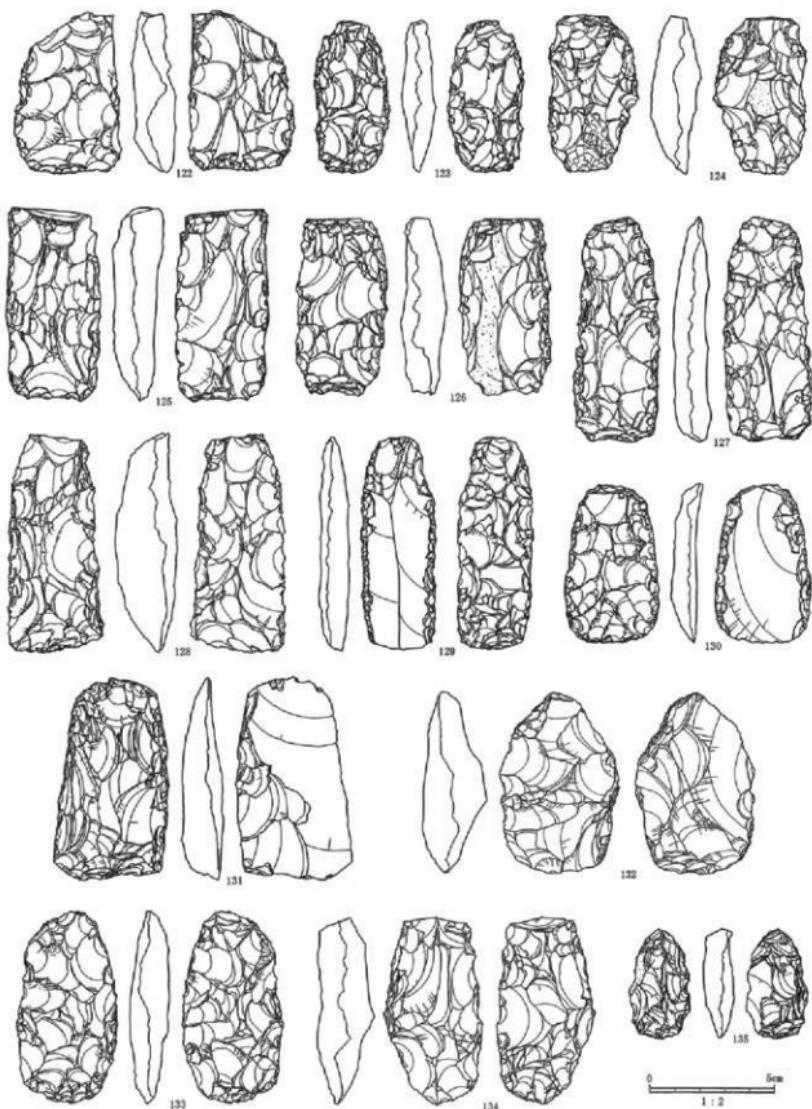
第49図 打製石器（5）



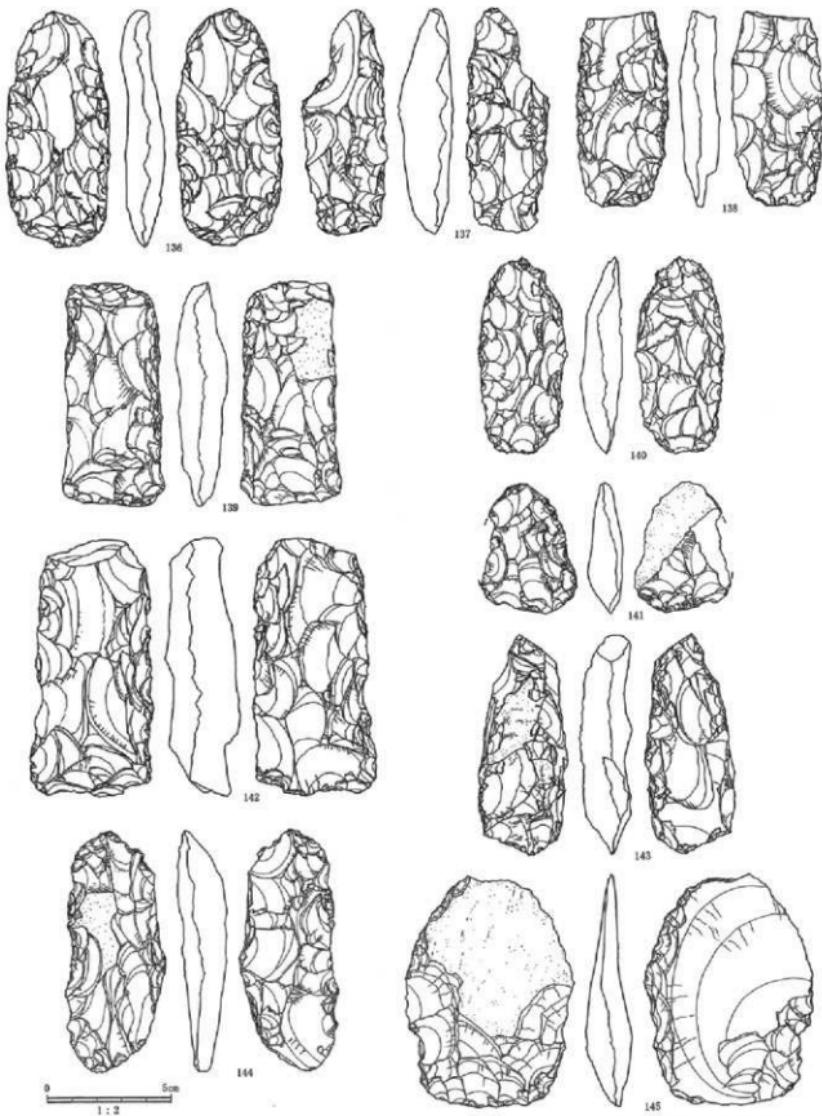
第50図 打製石器（6）



第51図 打製石器（7）



第52図 打製石器 (8)



第53図 打製石器（9）

f : 背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剥離面側の刃部に素材面を残すもの（104）。直線状の刃部となる。

g : 周辺部だけに加工が施され、刃部加工が主要剥離面側のみに認められるもの（105）。直線状の刃部となる。

h : 素材の刃部側は両面とも加工が施されるが、基部側には一切の加工が認められないもの（106）。背面側の加工は極く浅く、丸みを帯びた刃部となる。

II類：撥状で刃部が両刃状のもの。

a : 両面加工となるもの。刃部が丸みを帯びる a1 (107～110)、直線状となる a2 (111・112) がある。

b : 素材の背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの（114）。刃部は丸みを帯びる。

c : 背面側の刃部に素材面を残すもの（113）。刃部の加工は主要剥離面側に認められ、直線状となる。

III類：短冊形で刃部が片刃状となるもの。

a : 両面加工となるもの。刃部が丸みを帯びる a1 (115～120) と、直線状となる a2 (121～128) がある。

b : 素材の背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの（130・131）。2点とも刃部は丸みを帯びる。

c : 素材の主要剥離面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、背面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの（129）。丸みを帯びた刃部となる。

IV類：短冊形で刃部が両刃状となるもの。両面加工となるものが9点出土している。

a : 刃部が丸みを帯びるもの（132～138）。

b : 直線状をなすもの（139・140）。

V類：製作段階の途中（141～145）、もしくは刃部や基部の折損により廃棄されたとみられる一群。全部で33点の出土がある。

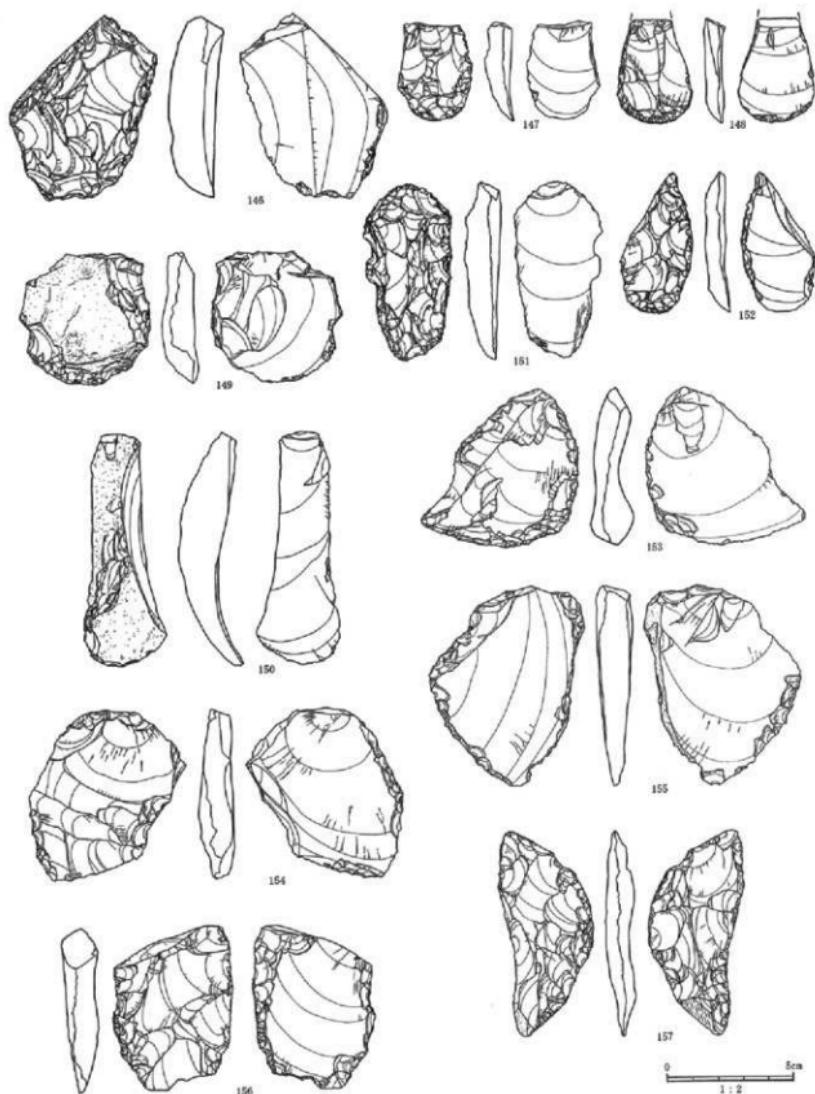
搔器（第54図、図版52）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器である。頁岩製のものが8点出土しており、刃部の作出には撻状剥離が多用される。素材は縦長剥片の他に横長剥片も用いられるが、いずれの場合のその長軸端には必ず刃部を作出している。これらは、刃部の位置と数により以下のように分類できる。

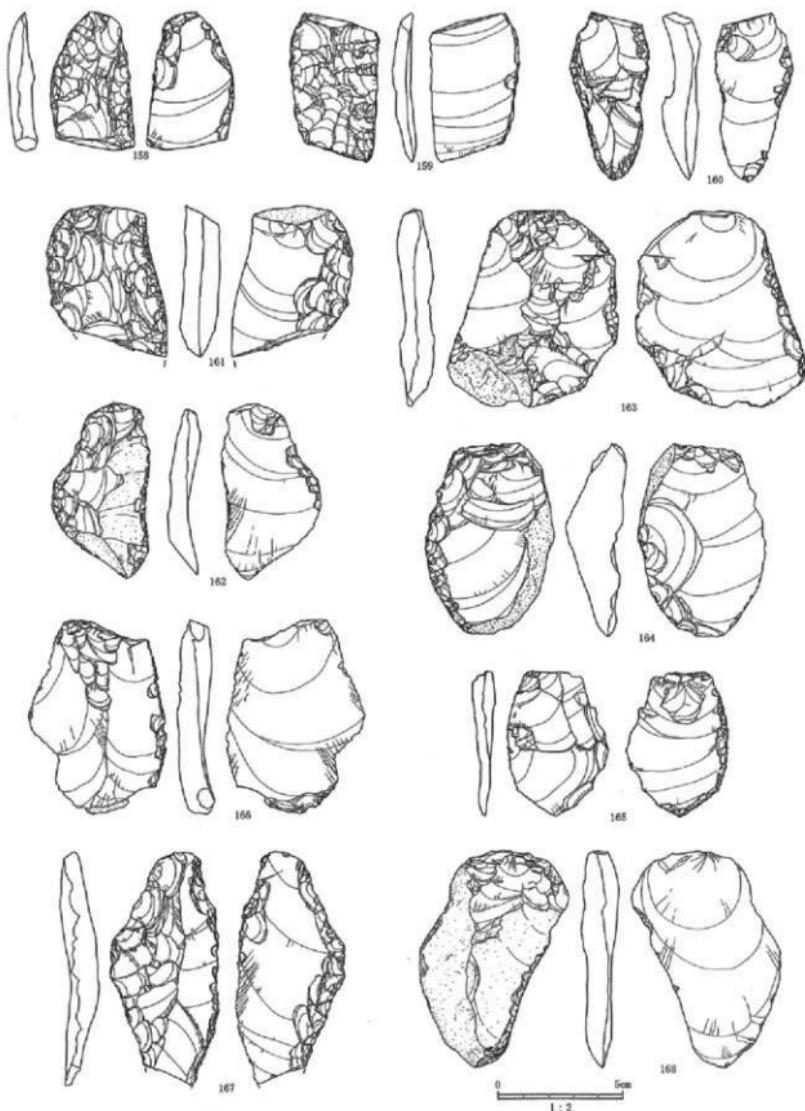
I類：縦長剥片が素材として用いられ、その右側縁と末端が刃部となり得るもの（146）。

II類：素材の長軸先端部に刃部を作出したもの（147～151）。他の側縁には調整加工が認められても、角度が浅く搔器の刃部とはならない。

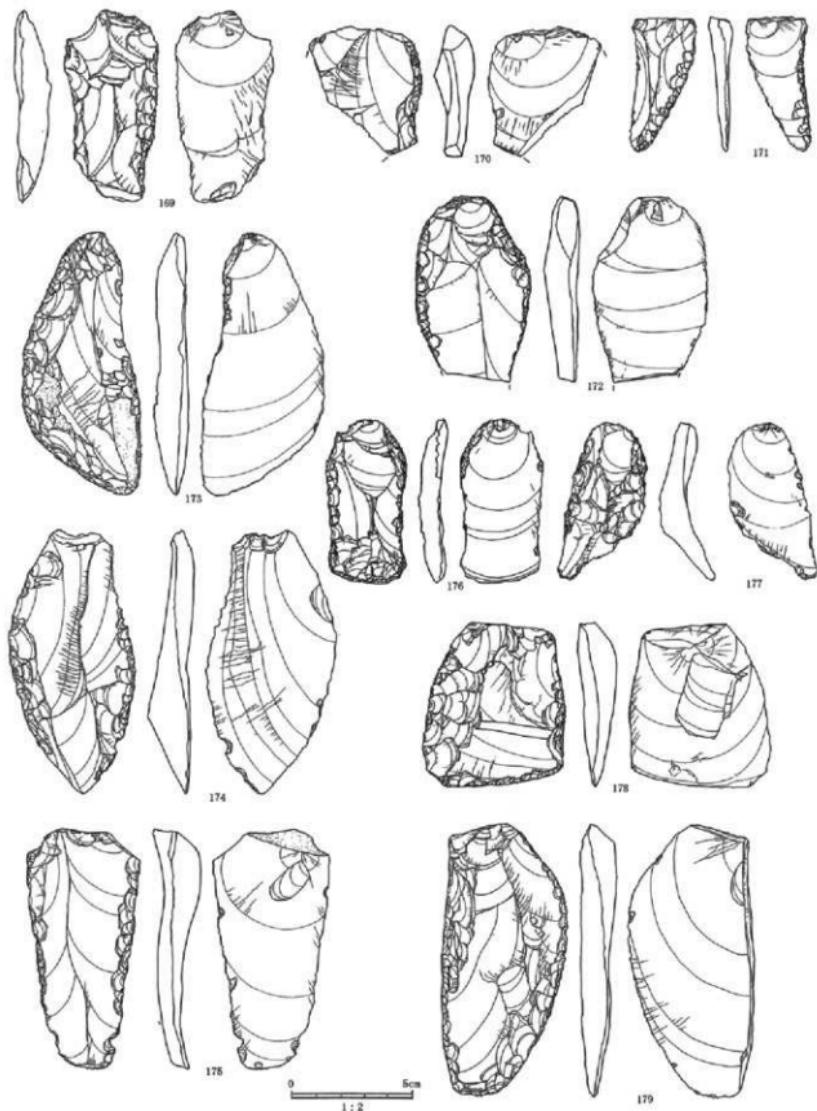
III類：搔器の刃部と削器の刃部を合わせ持つもの（152・153）。2点出土しており、素材の長軸先端部は搔器の刃部となるが、右側縁には両面加工によって削器となり得る刃部が作出される。



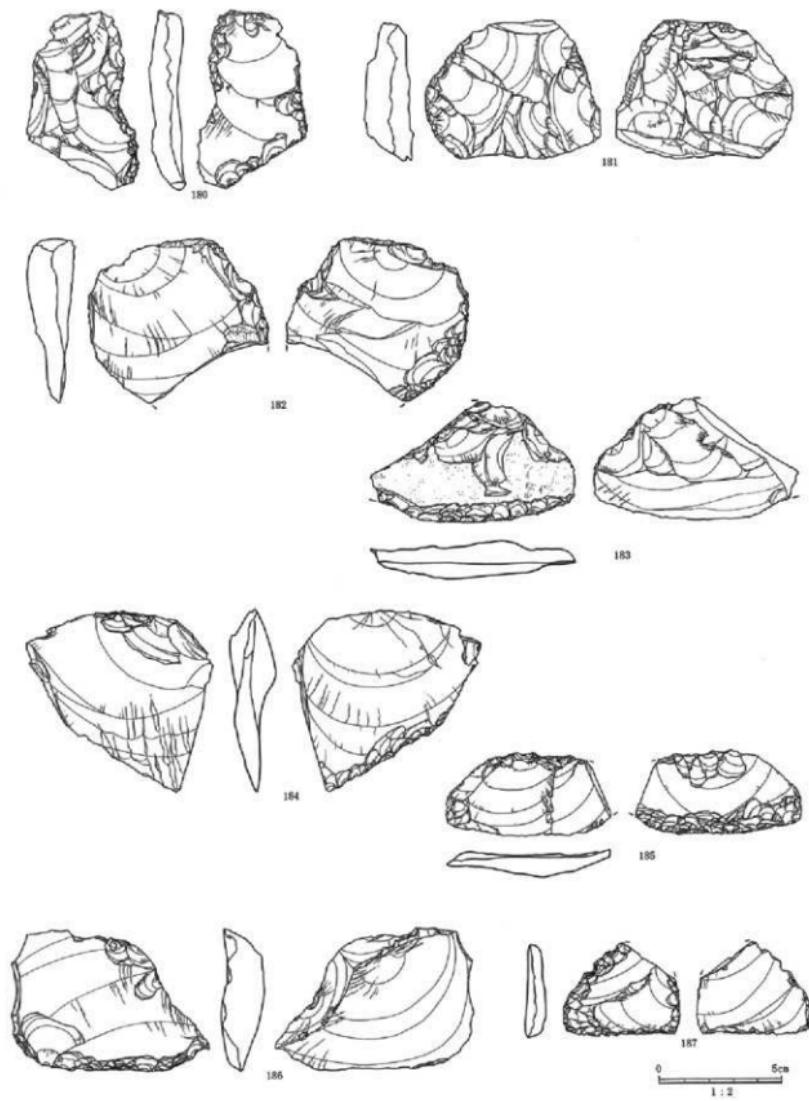
第54図 打製石器 (10)



第55図 打製石器 (11)



第56図 打製石器 (12)



第57図 打製石器 (13)

削器（第54～57図、図版53～56）

剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器である。全部で42点出土しており、これらは素材の形状や刃部の作出方法・位置関係などから分類できる。

I類：縦長剥片を素材とし、両面加工によって刃部が作出されるもの。

- a : 素材の左側縁が刃部となるもの（154・155）。
- b : 素材の右側縁が刃部となるもの（156）。
- c : 素材の両側縁が刃部となるもの（157・158）。

II類：縦長剥片を素材とし、両面加工によって作出された刃部と片面加工によって作出された刃部を合わせ持つもの。

- a : 素材の左側縁が両面加工、右側縁が片面加工の刃部となるもの（159～162）。
- b : 素材の左側縁が片面加工、右側縁が両面加工の刃部となるもの（163）。

III類：縦長剥片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの。

- a : 素材の左側縁が刃部となるもの。背面側に加工が施されるa1（164）と、主要剥離面に加工が施されるa2（165）がある。
- b : 素材の右側縁が刃部となるもの（166～170）。5点とも背面側に加工が施される。
- c : 素材の両側縁が刃部となるもの。両側とも背面側に加工が施されるc1（172～177）、左側縁は主要剥離面側に、右側縁が背面側に加工が施されるc2（171）がある。
- d : 素材の右側縁と末端が刃部となるもの（178・179）。両縁辺とも背面側に加工を施したもののが2点出土している。
- e : 素材の三縁辺が刃部となるもの（180）。右側縁が背面側に、左側縁と末端の刃部は主要剥離面側に加工が施される。

IV類：横長剥片を素材とし、両面加工によって刃部を作出したもの（181）。素材の左側縁が刃部となる。

V類：横長剥片を素材とし、片面加工によって刃部を作出したもの。

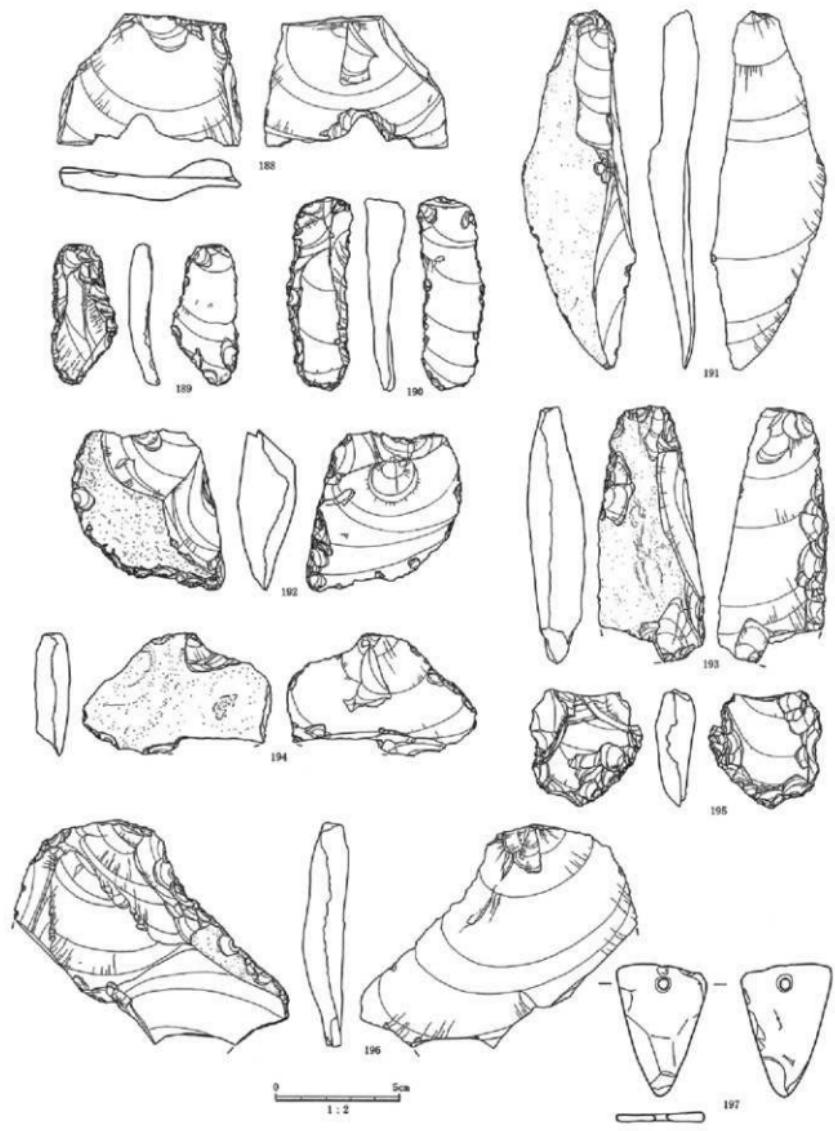
- a : 素材の左側縁が刃部となるもの（182）。主要剥離面側に加工が施される。
- b : 素材の末端が刃部となるもの。背面側に加工を施したb1（183）と、主要剥離面側に加工が施されるb2（184・185）がある。
- c : 素材の左側縁と末端が刃部となるもの（186）。両縁辺とも背面側に加工が施される。
- d : 素材の三縁辺が刃部となるもの（187）。刃部は三縁辺とも背面側に認められる。

異形石器（第58図、図版56）

特殊な形態となる石器を異形石器とした。188は大形の横長剥片を素材として、主要剥離面側の末端に調整加工を施し、ノッチを入れた石器である。

加工痕ある剥片（第58図、図版57）

剥片に二次加工を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなっていないもの、もしくは、製作途中のものや折損により廃棄されたものなどである。全部で32点の出土があり、その一部を189～196に図示した。



第58図 打製石器・石製品

凹石（第59図、図版58）

図示した資料はすべて二面に凹痕を有するもので、平面形や凹部の在り方等から類別できる。

I類：平面形が円または梢円で、平坦両面の中央部に1箇所づつ凹部を持つもの（198～202・204）。この中には、中央部2箇所の凹痕が連結したもの（199・204）も含めた。これらの平坦両面は磨石として使用される例がほとんどのため、平滑な形状を呈するものが多く認められる。

II類：平面形が梢円で、両面もしくは片面の中央部に2箇所の凹部を持つもの（203・205）。I類同様、平滑な形状となる。

III類：平面形が幅の狭い長梢円形で、複数個の凹部を持つもの（206・207）。206は両面中央部より両側に長く連続する凹部列を形成しており、中央部で折損している207も同様の例と認識される。

磨石（第60図、図版59）

磨石は磨面数や形態の特徴から、以下の4類が識別された。

I類：平面形が円または梢円で、穂的一面を磨面として使用したもの。扁平礫の片面に磨痕を持つ212・215と、円形扁平礫側縁の幅広部分を使用した208の2種が認められる。

II類：平面形が円または梢円を呈す扁平礫の二面が磨面として使用されたもの（209・210・211・214・216）。この内211・214は、一方の平坦面と208同様に側縁の一部が磨面となるものである。

III類：平面形が撥形、断面形が台形様となる扁平礫の三面を磨面として使用したもの（217）。

IV類：球形を呈す穂の全面が磨面として使用されたもの（213）。

砥石（第61図、図版60）

長さ24cm程の柱状を呈する、大型の砥石と推測されるもの（222）が1点出土している。表面の中央部に幅の広いV字形の凹みがあり、内面は磨痕により平滑となる。また、背面にも浅い溝状の凹みが観察される。磨製石斧や骨角器などを研磨したものであろうと考えられる。

石皿（第63・64図、図版62・63）

図示した資料（224～226）は、石材に丁寧な敲打と磨きを加えて明瞭な外縁を持つ容器状に整形されたものである。226は両面が使用された例の石皿である。

(4) 石製品

石製品は装身具である垂飾り（第58図197）1点と、祭祀具である石棒が出土している。垂飾りは蛇紋岩製で、二等辺三角形の短辺中央に穿孔している。

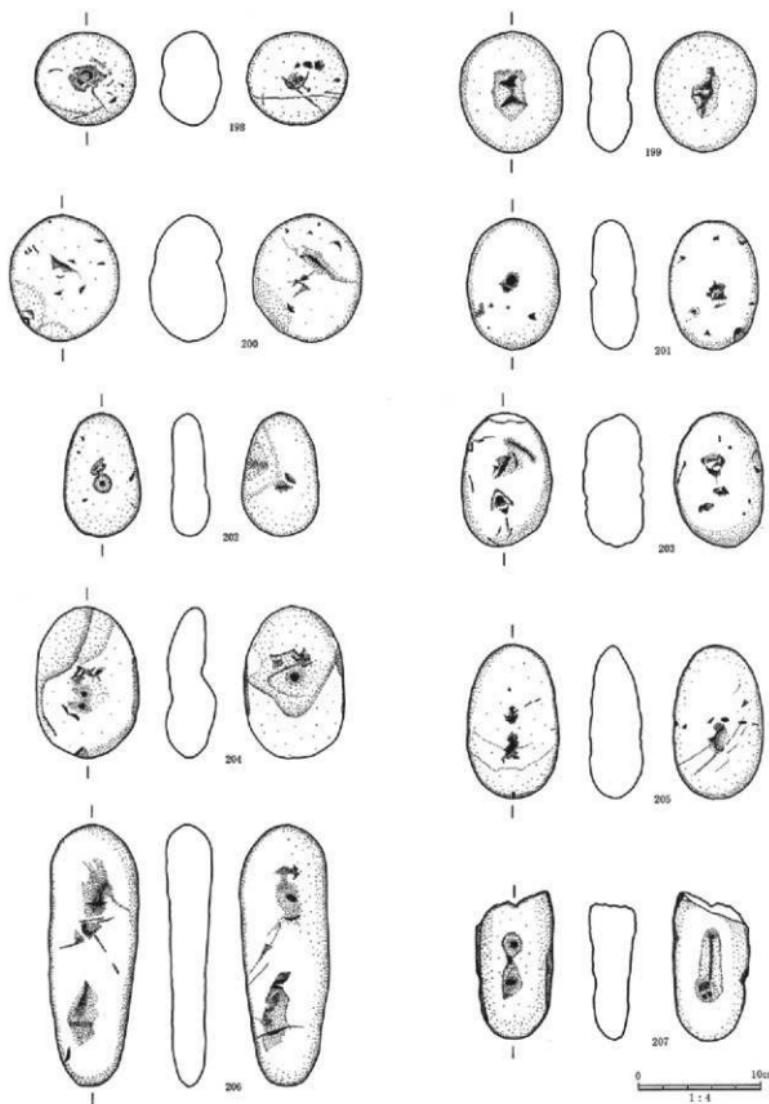
石棒（第61～63図、図版60～62）

6点の該当例が認められ、法量の大小により2分できる。

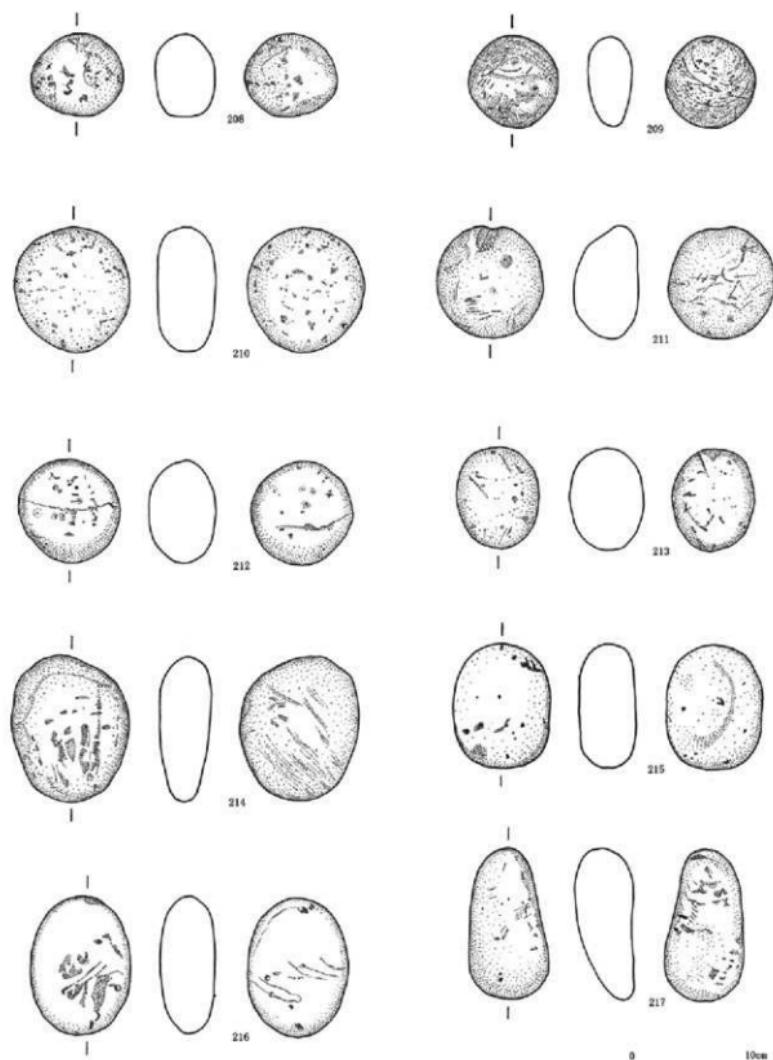
I類：全長14～20cm範疇の小型のもの（218～220）。

II類：全長40cm内外を測る大型のもの（223～225）。

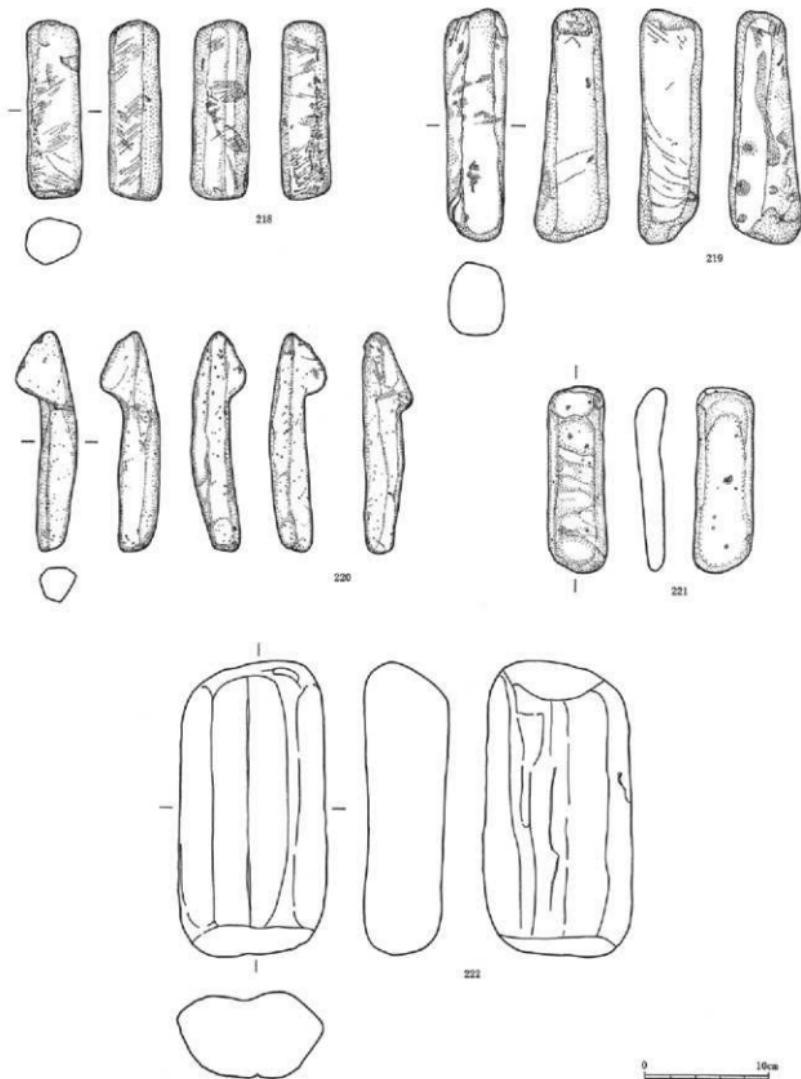
小型品の1点（220）のみ男根形の頭部を作出しているが、他は素材となった棒状河原石の側縁の一部を敲打・研磨して整形する程度に留まっている。



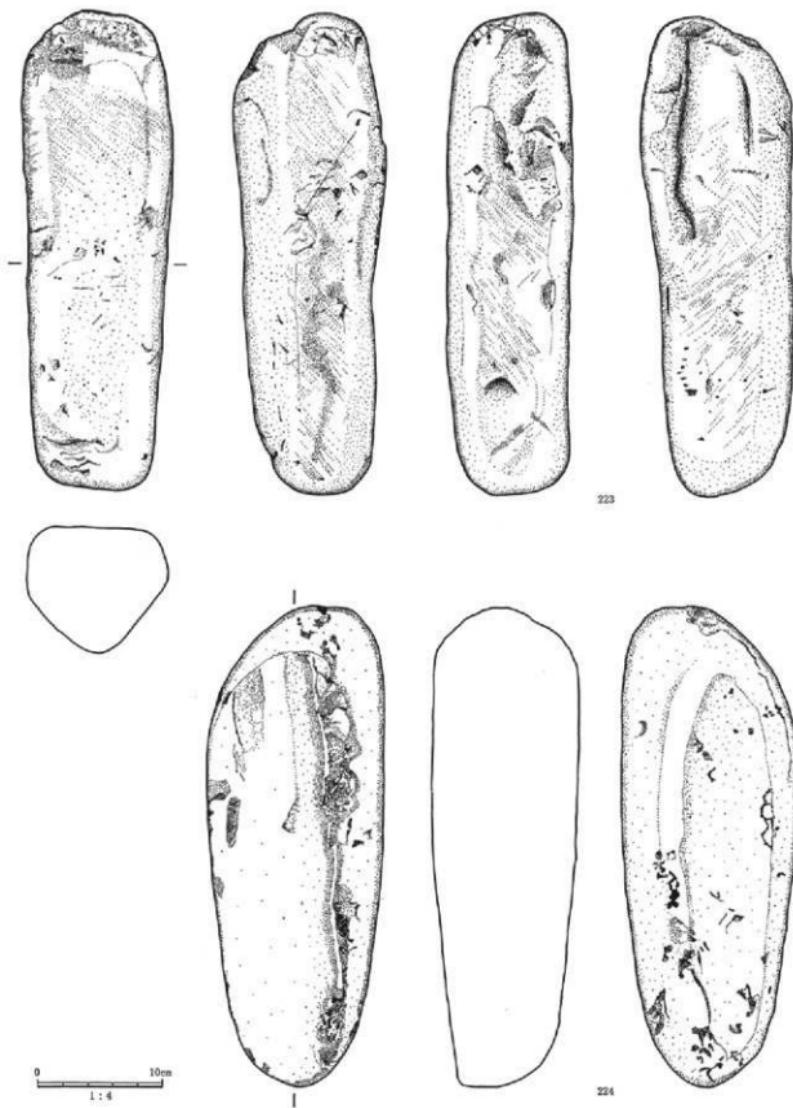
第59図 磚石器 (1)



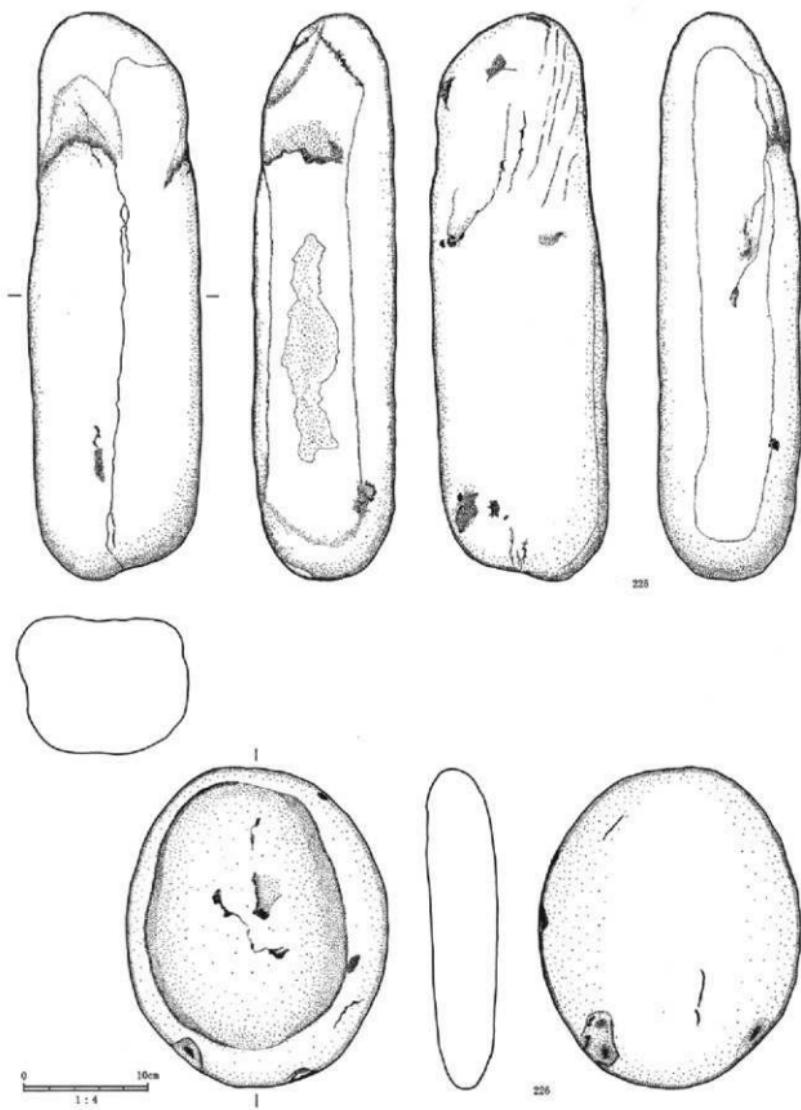
第60図 磚石器 (2)



第61図 石製品・礫石器（1）



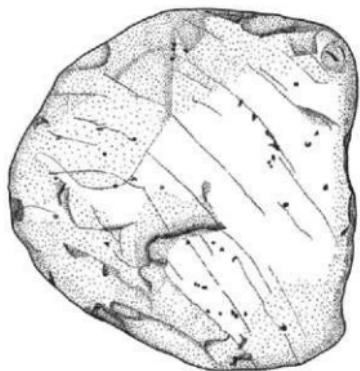
第62図 石製品



第63図 石製品・礫石器（2）

第64図 石製品・礫石器（3）

227



228



1 : 4
10mm

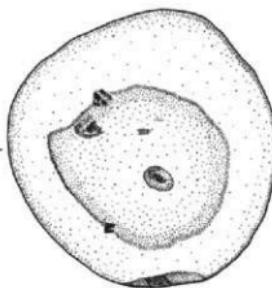
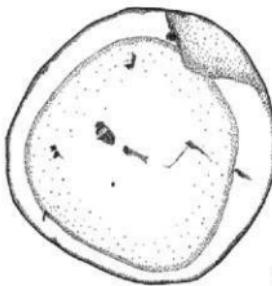
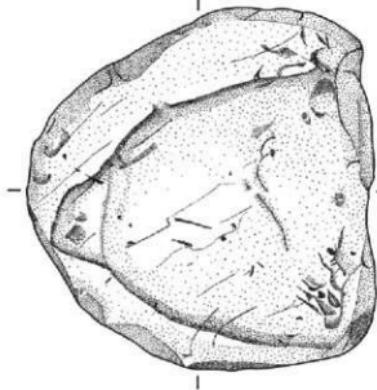


表7 石器計測表(1)

擇図 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
45	1	石 鋸	29.5	19.0	4.5	1.46	玉 鏊	38-47 II	I a
	2		26.5	19.0	5.5	1.66	珪質頁岩	39-41 II	I a
	3		32.5	13.0	3.5	1.10	珪質頁岩	43-38 II	I b
	4		38.5	17.0	4.5	1.29	珪質頁岩	40-45 II	I b
	5		22.0	16.5	3.5	0.71	珪質頁岩	41-45 II	I b
	6		27.0	16.0	4.0	0.76	珪質頁岩	SD201 F1	I b
	7		(27.5)	19.0	3.5	0.84	玉 鏊	45-43 II	I b
	8		30.0	14.5	3.5	1.05	珪質頁岩	42-45 II	I b
	9		(30.0)	19.5	7.5	2.31	珪質頁岩	41-46 II	I b
	10		34.5	18.5	3.0	1.06	珪質頁岩	41-46 II	I b
	11		27.0	(12.0)	5.0	0.84	珪質頁岩	SK228 F2	I b
	12		(48.0)	(13.5)	6.0	2.89	珪質頁岩	43-39 II	I b
	13		36.5	(15.5)	4.0	1.84	珪質頁岩	42-37 II	I b
	14		33.5	20.5	4.5	1.51	珪質頁岩	SK548 F2	I b
	15		30.0	20.5	6.0	2.19	珪質頁岩	12-47 III	I c
	16		(23.5)	13.0	3.5	0.61	珪質頁岩	42-45 II	I c
	17		34.5	16.5	4.0	1.46	珪質頁岩	SK526 F1	I c
	18		23.0	11.0	3.0	0.47	珪質頁岩	42-45 II	I c
	19		(40.0)	26.0	7.5	6.19	珪質頁岩	41-40 II	I c
	20		37.5	12.5	5.0	2.29	珪質頁岩	39-45 II	I c
	21		25.5	21.5	8.0	4.74	珪質頁岩	43-44 II	I c
	22		28.5	19.5	6.5	2.60	輕砂岩	42-38 II	I c
	23		23.0	19.0	5.5	1.55	珪質頁岩	SK530 F1	I c
	24		14.5	15.5	5.5	1.89	珪質頁岩	41-45 II	I c
	25		33.5	22.0	9.0	5.85	珪質頁岩	42-45 II	II
	26		30.5	24.0	6.0	3.13	珪質頁岩	SK155 F2	II
	27		32.0	21.0	6.0	3.85	珪質頁岩	43-38 II	II
	28		38.5	22.0	7.0	4.58	珪質頁岩	45-43 II	II
	29		43.5	26.0	8.5	7.56	珪質頁岩	40-37 II	II
	30		43.5	17.0	7.0	4.72	珪質頁岩	37-42 II	II
	31		39.5	14.5	4.5	1.93	珪質頁岩	39-43 II	II
	32		32.0	13.5	6.5	2.09	珪質頁岩	40-45 II	II
	33		27.0	15.5	4.0	1.10	珪質頁岩	SK323 F1	II
	34		41.5	25.0	8.5	7.82	珪質頁岩	45-43 II	III
	35		40.5	32.5	7.5	9.79	珪質頁岩	44-41 II	III
	36		41.0	21.5	8.5	6.52	頁 岩	43-38 II	III
	37		43.0	29.5	9.5	8.86	珪質頁岩	43-41 II	III
	38		34.5	25.0	4.5	3.90	頁 岩	45-43 II	III
	39		31.0	21.5	7.0	3.99	珪質頁岩	39-44 II	III
	40		(37.0)	15.0	9.0	3.07	珪質頁岩	45-43 II	IV
	41		40.0	15.0	5.0	1.82	珪質頁岩	45-43 II	IV
	42		18.0	13.0	5.0	0.67	玉 鏊	42-45 II	IV
	43		22.0	12.0	4.0	0.93	頁 岩	43-44 II	IV
	44	尖頭器	72.5	23.5	11.0	16.94	珪質頁岩	40-40 II	I
	45		55.5	22.5	9.0	7.26	珪質頁岩	42-42 II	I
	46		(42.5)	20.5	7.5	5.88	珪質頁岩	37-42 II	I
	47		82.5	30.0	8.5	10.01	珪質頁岩	42-45 II	II
	48		(43.5)	43.0	11.0	11.77	頁 岩	41-45 II	II
	49		94.0	30.0	12.5	32.61	珪質頁岩	43-41 II	II
	50		129.5	46.5	9.0	94.25	珪質頁岩	42-45 II	III a
	51		137.0	32.0	21.0	71.25	頁 岩	40-45 II	III a
46	52	石 鋸	90.0	69.0	23.0	78.44	珪質頁岩	13-47 III	I
	53		(57.0)	27.5	12.5	16.69	珪質頁岩	X-O	II
	54		(83.0)	55.5	14.0	59.53	珪質頁岩	40-42 II	II
	55		113.5	26.5	13.5	33.78	珪質頁岩	12-46 III	
56	56	石 鋸	112.0	35.0	10.5	35.94	珪質頁岩	12-46 III	I a 1
	57		76.5	47.0	9.5	31.34	珪質頁岩	SK204 F1	I a 3

表8 石器計測表(2)

発掘 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
47	58	石 剣	42.0	20.0	7.5	4.42	頁 砂	42-42 II	I a 2
	59		91.0	18.0	7.0	14.25	珪質頁岩	41-46 II	I a 4
	60		(68.0)	18.5	7.0	9.02	珪質頁岩	41-46 II	I b 1
	61		71.5	21.0	8.0	9.53	珪質頁岩	45-43 II	I b 1
	62		68.0	35.5	9.5	20.48	珪質頁岩	43-44 II	I b 1
	63		59.5	21.5	7.0	6.94	珪質頁岩	37-43 II	I b 1
	64		57.0	42.0	11.0	23.40	珪質頁岩	SK258 F1	I b 4
	65		49.0	22.5	7.0	6.83	珪質頁岩	45-43 II	I b 2
	66		(58.5)	29.0	8.0	10.32	珪質頁岩	44-43 II	I b 2
	67		72.5	37.0	10.5	23.85	珪質頁岩	40-45 II	I b 3
	68		90.0	42.0	6.0	7.60	珪質頁岩	41-42 II	II
	69		76.5	63.0	19.0	52.02	珪質頁岩	43-41 II	
	70		78.0	44.0	16.0	38.41	珪質頁岩	43-42 II	
	71		55.0	31.5	14.0	19.37	珪質頁岩	39-45 II	I a 1
	72		78.5	38.0	13.5	42.06	珪質頁岩	43-44 II	I a 1
	73		75.0	33.4	19.0	43.22	頁 砂	SK424 F1	I a 1
	74		70.0	45.0	19.0	47.05	珪質頁岩	SX520 F1	I a 1
	75		53.5	36.0	11.0	21.56	珪質頁岩	SK465 F1	I a 1
48	76	石 刃	63.0	47.0	17.0	37.73	頁 砂	45-43 II	I a 1
	77		80.0	47.0	17.0	53.48	頁 砂	44-43 II	I a 1
	78		84.0	52.5	21.0	76.93	珪質頁岩	40-46 II	I a 1
	79		76.5	48.0	23.5	72.38	頁 砂	SX163 F1	I a 1
	80		80.0	47.0	16.0	62.71	珪質頁岩	45-43 II	I a 1
	81		101.0	48.5	28.0	74.09	珪質頁岩	43-43 II	I a 1
	82		90.0	53.0	18.5	80.77	珪質頁岩	40-42 II	I a 1
	83		97.0	45.0	14.5	61.52	頁 砂	45-35 II	I a 1
	84		70.5	41.0	14.0	44.86	珪質頁岩	42-42 II	I a 2
	85		50.0	41.0	13.0	20.53	珪質頁岩	42-43 II	I a 2
	86		47.0	36.0	9.0	12.29	珪質頁岩	SID203 F1	I a 2
49	87	石 刃	83.0	44.0	14.5	50.16	頁 砂	SK179 F1	I a 2
	88		87.0	29.0	17.5	44.94	珪質頁岩	43-44 II	I a 2
	89		62.0	35.5	13.5	28.85	珪質頁岩	38-43 II	I b 1
	90		77.0	37.0	15.0	41.05	珪質頁岩	SK563 F1	I b 1
	91		92.0	43.0	14.5	46.56	頁 砂	40-43 II	I b 1
	92		64.0	36.5	10.5	26.84	珪質頁岩	42-44 II	I b 1
	93		66.0	46.0	16.0	48.48	頁 砂	41-46 II	I b 1
	94		77.5	48.5	18.0	49.83	頁 砂	39-44 II	I b 2
	95		66.0	36.0	10.0	23.51	珪質頁岩	41-46 II	I b 2
	96		130.0	52.5	23.5	144.99	頁 砂	45-43 II	I b 2
	97		47.0	32.0	11.5	16.78	珪質頁岩	SK443 F1	I b 2
	98		63.5	39.5	13.0	31.61	珪質頁岩	40-46 II	I c
	99		70.5	37.0	22.5	52.41	珪質頁岩	45-43 II	I c
50	100	石 刃	77.5	37.5	13.0	34.38	珪質頁岩	37-47 II	I d
	101		97.5	65.5	32.0	153.16	珪質頁岩	42-35 II	I d
	102		63.0	33.0	11.5	26.08	珪質頁岩	SK298 F1	I d
	103		69.0	41.0	15.0	35.79	頁 砂	45-43 II	I e
	104		82.5	39.5	19.5	51.63	珪質頁岩	43-43 II	I f
	105		56.5	40.0	48.0	17.88	珪質頁岩	38-44 II	I g
	106		68.5	32.0	11.5	20.52	珪質頁岩	42-42 II	I h
	107		87.0	33.0	11.5	29.29	頁 砂	SK197 F1	II a 1
	108		105.0	51.5	32.5	103.82	珪質頁岩	43-41 II	II a 1
	109		66.5	29.5	10.5	21.29	珪質頁岩	12-41 III	I a 1
	110		81.5	37.5	14.5	37.71	珪質頁岩	SK525 F2	II a 1
	111		85.5	50.0	24.5	99.39	珪質頁岩	39-17 II	II a 2
	112		53.0	22.0	10.5	10.53	珪質頁岩	40-41 II	II a 2
	113		56.0	40.0	11.5	26.01	珪質頁岩	40-45 II	II c
51	114		87.5	50.0	19.5	76.89	珪質頁岩	37-47 II	II b

表9 石器計測表(3)

擇因 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
51	115	石 鋸	76.0	43.0	22.5	70.38	珪質頁岩	45-43 II	III a 1
	116		79.5	42.5	19.5	58.80	珪質頁岩	45-41 II	III a 1
	117		84.0	38.5	17.0	58.20	珪質頁岩	45-43 II	III a 1
	118		90.0	35.5	18.0	44.74	珪質頁岩	41-46 II	III a 1
	119		132.5	57.5	43.0	295.86	珪質頁岩	X-O	III a 1
	120		148.5	42.0	25.0	136.19	珪質頁岩	SK538 F1	III a 1
	121		106.0	28.5	23.0	149.90	珪質頁岩	34-38 II	III a 1
	122		65.5	46.5	17.0	50.28	珪質頁岩	47-37 II	III a 2
	123		63.0	30.0	14.0	25.42	珪質頁岩	38-44 II	III a 2
	124		64.5	37.5	18.5	45.78	珪質頁岩	42-45 II	III a 2
	125		78.0	39.0	21.0	60.16	頁 岩	SK310 F1	III a 2
52	126	石 刨	72.0	36.5	18.0	50.98	珪質頁岩	42-43 II	III a 2
	127		93.0	36.0	14.0	53.83	珪質頁岩	39-45 II	III a 2
	128		90.0	36.5	25.5	78.63	頁 岩	38-42 II	III a 2
	129		88.0	31.5	12.0	34.86	珪質頁岩	43-44 II	III c 2
	130		65.0	39.5	11.0	30.97	珪質頁岩	37-47 II	III b 2
	131		82.5	45.0	17.0	69.34	頁 岩	32-44 II	III b 2
	132		75.0	48.5	26.0	79.08	珪質頁岩	45-43 II	IV a
	133		79.0	41.5	16.5	53.62	珪質頁岩	41-46 II	IV a
	134		78.0	41.5	22.5	67.40	頁 岩	46-45 II	IV a
	135		45.0	23.5	12.0	13.41	珪質頁岩	38-47 II	IV a
	136		97.5	43.0	16.0	65.48	珪質頁岩	36-41 II	IV a
	137		91.5	33.5	22.5	64.30	珪質頁岩	41-42 II	IV a
	138		80.0	37.0	16.0	45.92	珪質頁岩	39-45 II	IV a
53	139	石 破	91.5	41.5	21.0	77.36	頁 岩	37-47 II	IV b
	140		81.5	37.0	17.0	44.01	珪質頁岩	42-45 II	IV b
	141		54.0	39.5	14.5	27.42	珪質頁岩	39-45 II	V
	142		105.5	49.5	29.0	130.22	頁 岩	42-45 II	V
	143		91.5	35.5	21.0	69.13	珪質頁岩	35-40 II	V
	144		100.0	39.0	19.5	77.06	珪質頁岩	45-43 II	V
	145		94.5	69.5	19.0	103.04	頁 岩	38-43 II	V
54	146	研 磨	80.0	52.0	19.5	87.98	珪質頁岩	45-43 II	I
	147		39.5	29.0	11.0	13.62	珪質頁岩	SK548 F1	II
	148		(43.0)	31.0	8.0	12.22	珪質頁岩	SK521 F1	II
	149		54.0	53.0	13.5	42.80	珪質頁岩	39-41 II	II
	150		95.5	34.0	19.0	45.96	頁 岩	43-44 II	II
	151		72.0	35.0	14.0	34.64	珪質頁岩	43-42 II	II
	152		58.5	30.0	9.0	13.52	珪質頁岩	40-45 II	III
	153		72.5	60.0	18.5	45.96	珪質頁岩	42-45 II	III
	154		77.0	58.0	14.5	51.49	頁 岩	43-35 II	I a
	155		83.0	58.0	14.5	78.83	頁 岩	43-44 II	I a
	156		73.0	48.0	14.5	47.06	珪質頁岩	41-42 II	I b
	157		84.5	35.0	11.5	32.53	鍛石斧	37-47 II	I c
55	158	刮 刀	58.0	33.0	11.0	23.34	珪質頁岩	40-43 II	I c
	159		56.0	36.0	7.5	17.59	珪質頁岩	44-44 II	II a
	160		70.5	32.0	15.0	25.36	珪質頁岩	5-51 III	II a
	161		(58.0)	47.0	15.0	46.22	珪質頁岩	SK547 F1	II a
	162		73.0	38.5	9.0	24.19	珪質頁岩	40-43 II	II a
	163		81.0	66.5	14.5	72.18	珪質頁岩	42-43 II	II b
	164		78.0	53.0	23.0	81.01	珪質頁岩	40-46 II	III a 1
	165		60.0	42.0	9.0	16.43	珪質頁岩	45-43 II	III a 2
	166		79.5	55.5	12.5	50.96	珪質頁岩	41-43 II	III b
	167		(95.0)	44.0	13.0	43.61	珪質頁岩	41-42 II	III b
56	168	研 磨	89.0	49.0	10.0	55.98	頁 岩	41-42 II	III b
	169		77.0	38.5	14.5	30.56	砂 粉 岩	SK310 F1	III b
	170		82.5	(43.5)	16.0	26.66	珪質頁岩	42-45 II	III b
	171		55.0	25.0	9.5	9.20	頁 岩	SK561 F1	III c 2

表10 石器計測表(4)

擇因 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
56	172	削器	(75.0)	45.5	14.0	46.41	珪質頁岩	SX163 F1	III c 1
			108.0	48.5	14.5	73.10	珪質頁岩	43-43 II	III c 1
			108.5	51.0	17.0	63.39	珪質頁岩	40-45 II	III c 1
			99.5	47.5	16.5	55.61	珪質頁岩	42-38 II	III c 1
			67.5	34.0	9.5	23.39	珪質頁岩	45-43 II	III c 1
			67.0	32.5	12.5	22.55	珪質頁岩	36-43 II	III c 1
			67.0	56.5	15.5	46.63	珪質頁岩	43-40 II	III d
			110.5	50.0	14.5	79.47	頁岩	43-45 II	III d
			73.5	45.0	12.5	36.71	珪質頁岩	36-43 II	III e
57	180		56.0	72.0	18.5	77.99	珪質頁岩	43-44 II	IV
			(65.0)	72.5	19.5	74.98	珪質頁岩	42-43 II	V a
			50.0	(83.5)	14.0	53.37	頁岩	42-45 II	V b 1
			71.0	77.0	18.0	67.92	頁岩	43-39 II	V b 2
			34.5	(66.0)	9.5	22.46	珪質頁岩	42-42 II	V b 2
			67.5	81.0	16.5	72.61	珪質頁岩	38-46 II	V c
			(38.0)	46.5	8.5	12.16	珪質頁岩	37-42 II	V d
			61.0	74.5	10.0	39.88	珪質頁岩	43-44 II	
			58.0	27.0	9.5	16.32	珪質頁岩	SK563 F2	
58	188	異形石器 ある石器	81.0	25.0	16.0	27.70	珪質頁岩	39-42 II	
			148.0	43.0	15.0	68.70	珪質頁岩	41-53 II	
			64.0	58.0	23.0	87.95	珪質頁岩	38-43 II	
			(106.0)	42.5	22.5	94.63	珪質頁岩	43-43 II	
			(49.0)	77.0	14.0	51.48	珪質頁岩	43-42 II	
			50.0	48.5	16.0	30.91	珪質頁岩	43-43 II	
			(88.0)	(120.0)	17.0	137.61	珪質頁岩	42-41 II	
			54.0	37.0	2.5	6.84	蛇紋岩	SK369 F1	
			75.0	79.0	46.0	369		42-15 II	I
59	198	圓石	99.0	83.0	36.0	396		42-12 II	I
			104.0	98.0	58.0	780		SX172 F1	I
			107.0	74.0	37.0	457		SK525 F2	I
			102.0	60.0	28.0	248		37-17 II	I
			110.0	73.0	48.0	590		SX172 F1	II
			124.0	82.0	30.0	520		SK303 F1	II
			126.0	73.0	46.0	570		43-8 II	III
			214.0	71.0	38.0	650		SK564 F1	III
			121.0	63.0	36.0	389		SK537 F1	I
60	208	磨石	68.0	76.0	49.0	341		SK537 F1	I
			75.0	72.0	36.0	174		SX172 F1	II
			102.0	95.0	47.0	620		SK525 F2	II
			92.0	86.0	53.0	590		40-15 II	II
			85.0	82.0	53.0	470		40-15 II	I
			83.0	68.0	67.0	452		SK188 F1	IV
			119.0	96.0	32.0	670		SP198 F1	II
			101.0	78.0	46.0	530		SK541 F2	I
			113.0	81.0	45.0	560		40-45 II	II
61	218	石棒	124.0	65.0	48.0	520		11-43 III	III
			146.0	47.0	38.0	413		42-45 II	I
			192.0	58.0	55.0	700		29-46 II	I
			180.0	32.0	28.0	264		38-46 II	I
			152.0	49.0	23.0	254		SK187 F1	
			241.0	132.5	68.0	3180		45-43 II	
			394.0	123.0	103.0	6850		SK202 F3	II
			393.0	144.0	120.0	10500		SK177 F3	II
			463.0	140.0	108.0	12000		SK177 F2	
62	223	石棒	262.0	214.0	58.0	4930			
			283.0	297.0	91.0	16500		40-40 II	
			220.0	226.0	42.5	4149		SK177 F1	
64	227	石盤							

4まとめと考察

遺跡は山形県西置賜郡小国町大字市野々字向原に所在し、野向遺跡の対岸に開けた舌状の河岸段丘に立地する。段丘上の東西・南北とも220m区画が範囲と推定され、遺跡南半の段丘縁辺部と一段高い台地上を中心にした約8,100m²を対象に第2次発掘調査を実施した。以下に今次調査で得られた成果を要約して述べ、若干の考察を加えてまとめとする。

- 1) 市野々向原遺跡では、断続的ながら縄文時代早期から晩期までと弥生時代中期頃の遺構・遺物の存在が確認された。これらは段丘端部の一定範囲に密集しており、いずれの時期においても縁辺部が居住域の主体になったと理解された。
- 2) 検出された主な遺構は、竪穴住居跡・土器埋設石組炉・集石や貯蔵穴を含む土坑・埋設土器など総数約570基である。分布の概観は、A区南東域に集約される様相が窺われた。
- 3) 住居跡は床面積2.5m²程の小規模のもので、段丘縁辺の傾斜地形を利用して構築されていた。周溝内に壁柱穴を掘り込む構造で、住居規模に比較して幅広の周溝が特徴的であった。床面中央には円形様の石組炉を認め、形態等から後期前半の構築と推定した。
- 4) 土器埋設石組炉は住居に伴わないものであった。一部で二重になる半円状の石組炉内に小型の深鉢形土器が埋め込まれており、付近には埋設土器が認められた。構築時期は後期初頭と推察した。
- 5) 遺構内に礫石を人為的に据えた、あるいは意識的に投げ入れたと考えられるものを集石土坑と呼称した。これらは3基確認され、ほぼ等間隔で等高線沿いに配置される特徴を指摘した。集石の何個かは加熱を受けて赤変した礫もあり、SK526の集石下からは大量の炭化材が検出された。炭化材は同定によればブナ材であり、放射性炭素年代測定の結果得られた計測値はB P 6,280±70であった。
- 6) SK236は炭化した種実を大量に包含することから、貯蔵穴と判断した。種子はトチノキであり、焼け膨れ状の亀裂があること等から熱を帯びて炭化したものと判明した。所属時期は覆土内出土土器より、中期末葉に比定された。
- 7) 土坑はA区南東域より集中的に検出された。本稿ではこれらを、出土土器によって各時期毎に包括した。所属時期毎の分布状況や形態・規模等に特別な傾向は認められなかった。
- 8) 出土した遺物は縄文土器・石器・石製品など63箱相当分で、出土量は土器に比較して石器類の割合が高いと窺えた。野向遺跡同様に開田による表層の削平が顕著であったが、段丘端部においては縄文中期頃までの遺物包含層の遺存が確認できた。分布の概観は遺構のそれと相關する状況と把握され、全体の約92%がA区南東域からの出土であった。ただ、toolや剥片の分布に関してはやや異なり、B区包含層からも一定量が出土した。
- 9) 土器の出土量はコンテナにして16箱であり数量的に多いとは言えないが、縄文時代早期から弥生時代中期に至る多様な内容を包括するものであった。所属時期別の比率では縄文時代中期末葉から後期前葉にかけて多く、次いで晩期→前期→早期の順となり、弥生時代の土器は若干量存在した。本稿では出土土器を時期別に取り上げ、従来の編年研究の成果を基に、主に文様構成要素の観点から型式分類を行った。

10) 打製石器には石鏃ほかの定形的器種が一定量認められ、各々その形態や大小等から分類した。石鏃の比率が高くtool全体の46%を占め、次いで石鏃・削器の順に多く、この3種で86%に達した。これら打製石器は包含層から出土したものが大半であり、遺構内出土で土器と共に伴したもの以外は時期別に分けることができなかった。石製品は大小の石棒と装身用の垂飾りを認めた。

(1) 出土土器群について

市野々向原遺跡出土の土器は、先に述べた如く縄文時代早期から弥生時代までの広範な内容のものであった。出土した土器の大方は摩滅の著しい小破片で、分類不能なものが多数を占めたが、掲載できた資料は従来の土器型式で16類型に及んだ。

縄文時代早期の土器は貝殻文や沈線文を主体とするもので、田戸下層式を中心に竹之内式・明神裏Ⅲ式・常世式などに比定された。前期の土器は4型式が認められ、初頭の上川名Ⅱ式・中葉の大木3・4式、末葉の大木6式に比定した。中期に属するものでは大木10式が量的主体であったが、7b式に併行する北陸地方の新崎式土器も出土した。後期の土器は初頭～前葉に位置付けられる綱取I・II式に併行するもので、三十稻場式や南三十稻場式または称名寺式や堀之内式の影響が多分に観察された。晩期のものは大洞B C式を中心に、先行する大洞B式と後続する大洞C1式の3型式を認めた。

弥生土器は量的に限られ遺構内からの出土も散発的な状況から、一括して中期前葉を主体とする時期に包括した。型式的には南御山式または今和泉式に帰属させた。

(2) 遺跡の性格

調査区より検出された竪穴住居跡は、後期前葉に位置付けた極めて小規模な1棟だけであった。遺構・遺物分布の在り方から、各時期において段丘縁辺部が生活域となったことは明らかであるが、野向遺跡同様に集落とは異なる居住域であったと言える。検出住居跡の規模や構造から察して定住性を持つものは考えられず、狩猟や採集のため季節的に逗留したキャンプサイトと推測される。また、竪穴住居以外に石組炉を検出した事例から、竪穴を伴わないテント式のいわゆる平地住居の存在も想定すべきであろう。

一方、出土遺物の比率に見られる特徴は、打製石器の占める割合が高いことである。内訳では、木や骨に対する工具または皮なめし等の機能が考えられる石鏃が46%、次いで石鏃が21%、動植物の切裁具と考えられる削器が19%を占めた。これらの事実からも、遺跡が狩猟・採集城としての性格を持っていたものと窺われる所以である。また、横川は頁岩が分布する河川であり、遺跡内においても石核が多く出土している。このことから、石器生産が行われていた可能性も想定され、原産地型の石器生産跡として的一面も充分考えることができる。

いずれにせよ、本遺跡は居住域としての性格を有するものであり、植物質食糧の調理に拘わる礫石器類の存在がこのことを立証しているものと捉えられる。

V 千野遺跡

1 遺跡の概観

千野遺跡は、昭和39年刊行の『朝日連峰学術調査報告書』に立石遺構を伴う縄文時代中期・後期の遺跡として掲載されている。過去に県立小国高等学校による発掘調査が行われており、出土遺物が同校に保管されている。県教育委員会が平成8年度に実施した試掘調査により、遺跡範囲は東西40m・南北80mと推定された。発掘調査前の地目は荒蕪地である。調査区は試掘調査の結果を基に遺跡南半部に設定し、面積は1,600m²である。

(1) 遺跡の層序

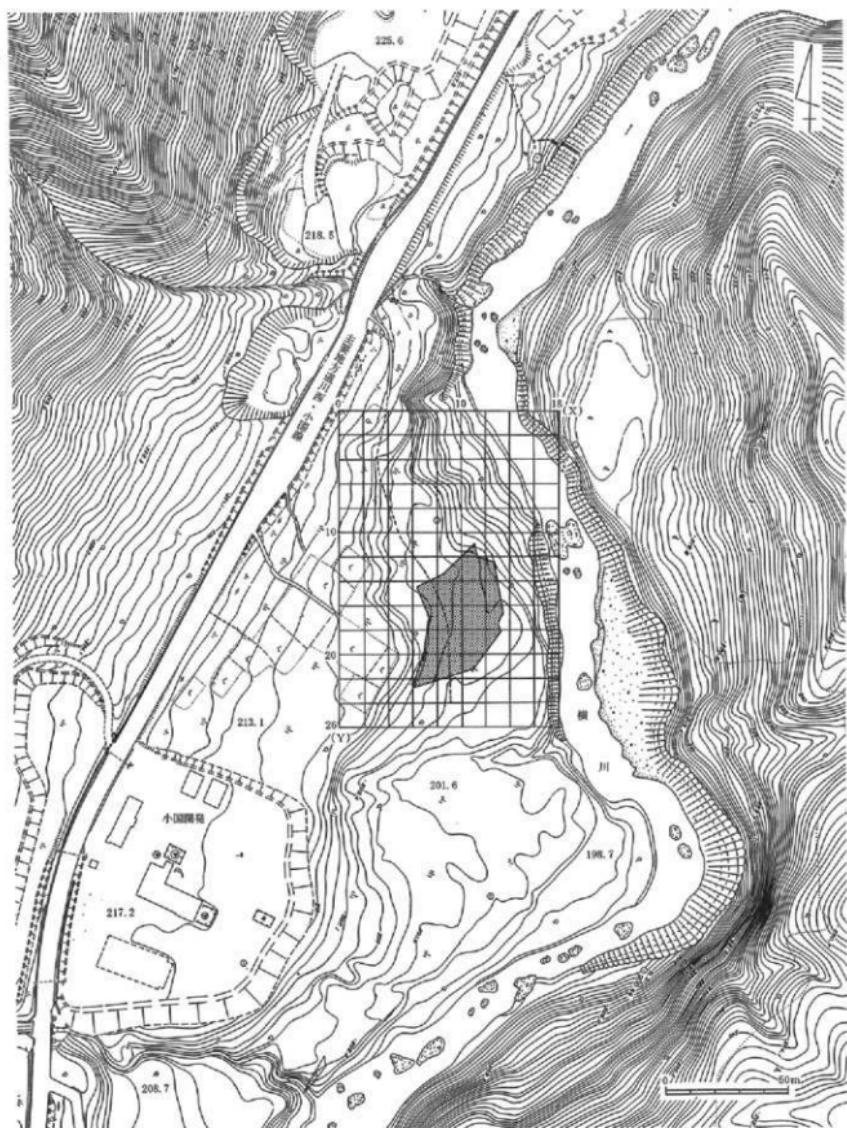
遺跡は横川によって開拓された谷底平野に立地し、付近の基盤層は礫及び砂からなる現河床堆積物で形成されている。調査区は東（横川）に向かって緩やかに傾斜する中位段丘面に設定したが、調査区中央部で南北方向に発達した小規模な段丘地形が認められた。このため、東半部の中位面と西端の高位面には約1.6mの比高差が生じる。中央部の傾斜面付近には高位面からの流出による土砂が厚く堆積しており、北側では良好な遺物包含層を形成していた。調査区近辺は古くから雜木林で、耕作等の人的営力による搅乱は少ないと想であった。

第67図は、表土除去後に調査区北半において観察した遺構検出面までの堆積層序である。表土（I層）剥離後の層位は、北端に腐植土の搅乱層（I'）が認められるものの基本的に4層に区分された。II層は遺物包含層で、西側の高位面では観察されず表土直下が遺構検出面（IV層）となった。III層は地形的に谷状の鞍部となる北端域に存在する遺物包含層であり、一部で下位に漸移層を挟んで地山（IV層）となる。

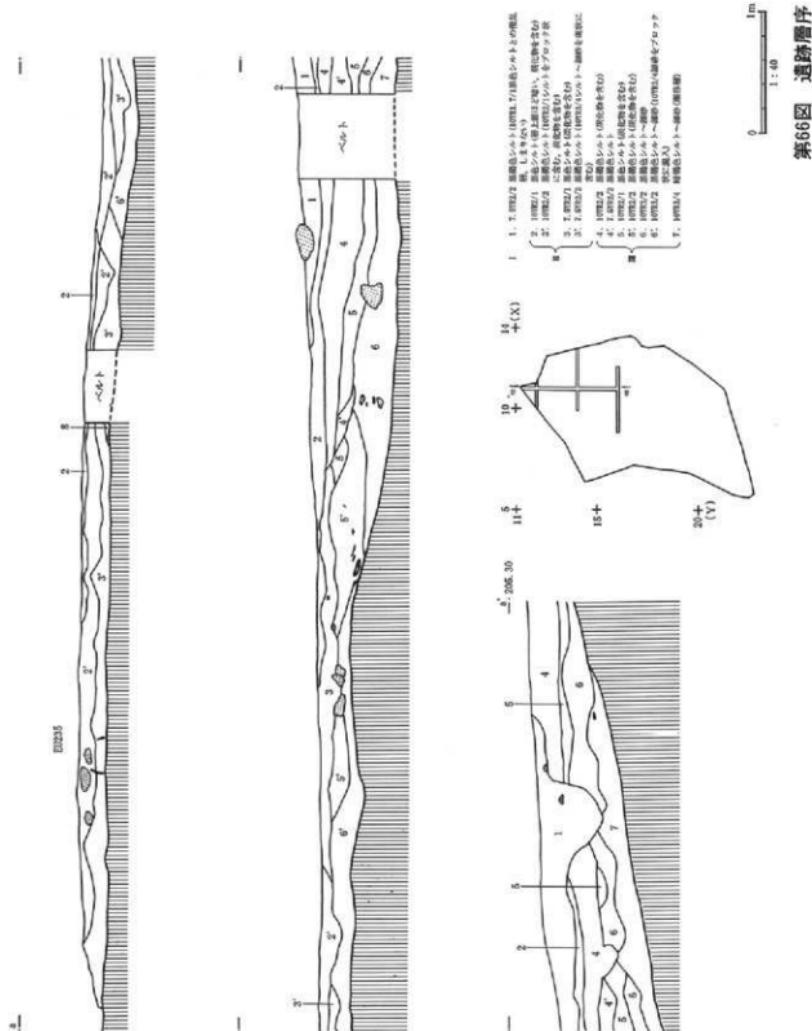
(2) 遺構と遺物の分布

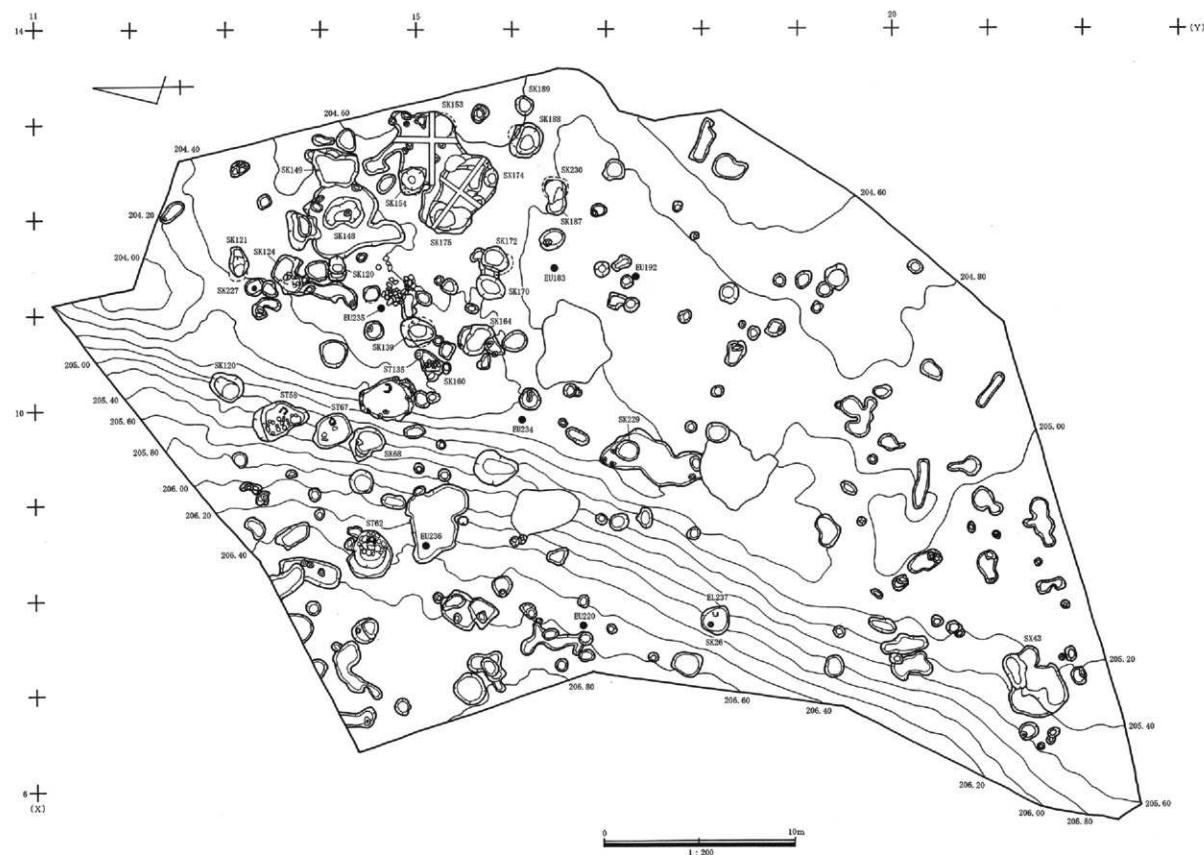
検出された主な遺構には竪穴住居跡4棟（敷石を伴う1棟を含む）、石組炉5基（住居跡に伴うものも含む）、配石・集石遺構3基、埋設土器7基（調査区外の1基を含む）、土坑200基以上などである。竪穴住居跡は調査区北半の傾斜面に隣合わせて3棟が分布し、西側の高位面には敷石住居跡が位置する。石組炉は各住居跡に伴うもの他、SK26土坑検出面で確認した土器埋設石組炉がある。配石遺構や埋設土器などいずれも北半部より検出されており、分布の概観でも集落の主体地域であると理解された。この中心域の遺構の広がりを探るために、調査区東側外辺の段丘端部についてトレンチ調査を行ったところ、埋設土器1基（E U242）を検出した以外に新たな遺構は確認されなかった。

一方、出土した遺物は量的に土器が63箱、打製石器等20箱、磨製石斧や礫石器が25箱程である。完形品がないものの土器の出土量が多い割合を占め、打製石器における成品（tool）の点数が非常に少ないと想いや、配石遺構はじめ礫石器類が多く出土しているなどの特徴がある。包含層出土と遺構内出土の割合は79:21となり、遺物分布の概観でも調査区北半に集中する傾向が指摘される。また、遺構内からまとまった遺物が出土したのは住居域ではなく、地盤の低い段丘中位面に配置された北東部検出の土坑群であった。特にSX174・SK175土坑からは、質的・量的にも一括した出土が認められた。



第65図 調査概要図 ($S=1:2,000$)





第67図 遺構配置図

2 検出遺構

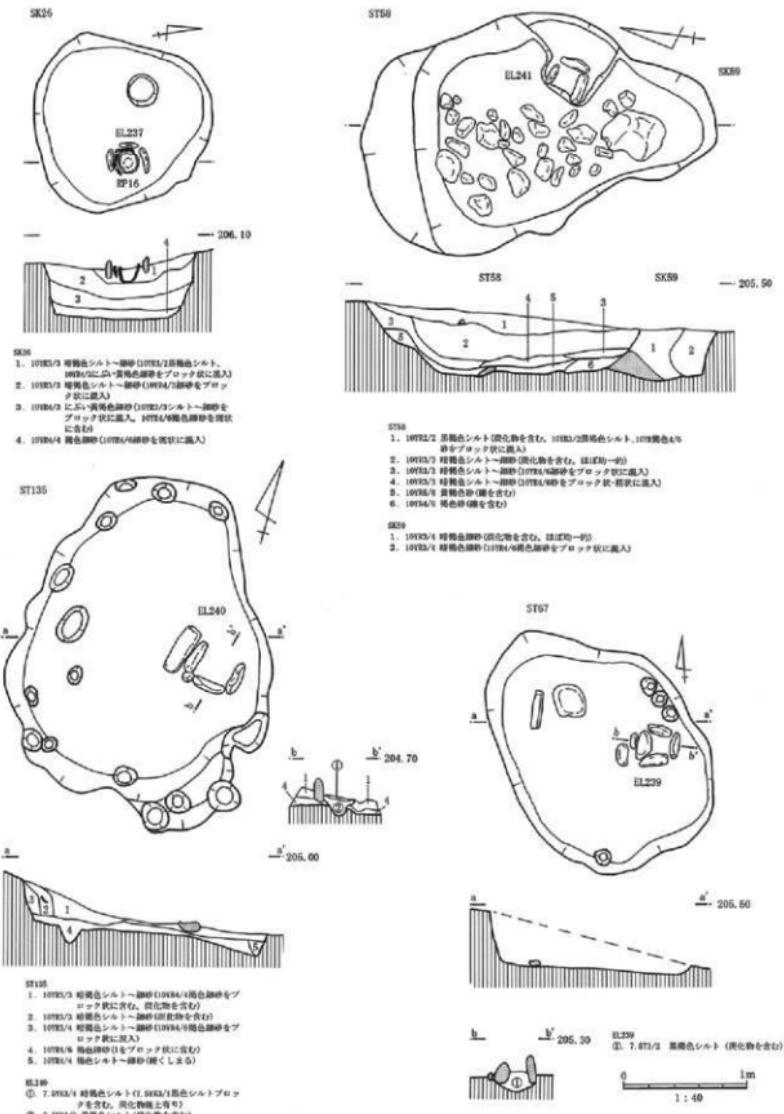
(1) 穫穴住居跡（第68図、図版67）

住居跡と認定したのは4棟であり、内1棟は敷石住居跡とした。いずれも石組炉を有し、径2m程の小規模なものである。住居跡は調査区北側の傾斜面に構築されており、近接した位置関係で検出されている。以下に、敷石以外の各住居跡についてその概要を説明する。

S T 58 9・10・13グリッドに位置し、IV層上面で検出された。傾斜面東西では、検出面の標高に50cm程の高低差が認められる。南側でS K 59土坑と重複し、これを切って掘り込んでいる。平面プランは南北にやや長い梢円形状を呈し、長径240cm・短径170cmの規模を測る。暗褐色のシルト質土を基調とする覆土は大別3層であり、石組炉の検出レベルから砂を混入した3層下面が住居跡床面であったと考えられる。調査時は土坑と想定して掘り下げ、この床面上では縮まりがなく凹凸があったため、さらに掘り下げを行っている。北西側に段を形成し、床面からの壁の立ち上がりは膨らみを有して開く様相が、土層断面からも窺われた。柱穴は確認できおらず不明であるが、他の住居跡例から考えて壁柱穴であった可能性が高い。南東側に位置する石組炉（E L 241）は、3個の扁平や棒状の礫をコの字状に配置したものであり、住居内側が開口部である。覆土内より出土した遺物には第80図に示した深鉢片等があり、これらは南三十番場式に併行するものであった。

S T 67 S T 58の約1.5m南側に位置する住居跡で、IV層上面で検出された。他遺構との重複はない。南北方向に長い梢円形状の平面形で、規模は長径210cm・短径160cmである。S T 58同様に傾斜面に掘り込まれることから、検出面の標高は30cm程西側が高い。壁の掘り方はほぼ垂直的で、確認し得た壁高は東辺で8~10cm、西辺では40cm前後を測る。床面はほぼ平坦かつ水平であり、中央部ほど縮まりを有する。石組炉北側の床面周縁部に3基連続した小穴が掘り込まれ、他は南縁部に1穴を認めるだけであるが壁柱穴跡と考えられた。小跡群は15cm程の径に、深さ10cm規模のものであった。石組炉（E L 239）は住居中央東側に付設され、扁平礫を立てて一辺30~40cmを測る台形様に組んだもので、内部と周辺の床面は炭化物によって黒ずんでいた。覆土内より深鉢片10数点が出土したが、実測可能なものは無い。また、西半部に扁平・棒状礫を多く認めたが、床面から浮いた状態で堆積しており住居に付随するものではなかった。

S T 135 S T 67の南東方向へ約3.5mの場所に中心を置く住居跡である。傾斜面下位に位置し、遺物包含層であるII層掘り下げ後に検出した。平面形は北東隅が欠けて、南東部に張り出しを持つ不整な梢円形状を呈している。南北方向に長く、長径275cm・短径210cmの規模を有する。壁面の掘り込みはほぼ垂直に近く、東辺約20cm・西辺約35cmの壁高を確認した。床面は平坦であるが、石組炉付近より東側は緩い角度で傾斜している。炉跡以西の床面中央には、灰白色粘土による薄い貼り床が見られた。床面や壁際及び壁面に、円形や梢円形の小穴が巡る壁柱穴は計15基認められ、特に北側では4基が等間隔に掘り込まれている。南東の張り出し部にはテラス状の平場が設けられており、住居の出入口施設であったと推測される。住居中央東寄りに存在する石組炉（E L 240）は、S T 58同様に扁平礫をコの字形に配して構築したものであり、開口部は北を向く。石組みの南西角にに当たる部分には、隙間を埋める様に小型の棒状礫を立



第68図 S T 58・67・135竪穴住居跡、E L 237土器埋設石組炉

てている。内部には薄い焼土層が広がっていた。また長さ40cm程の、上面が平らで良く磨かれた砥石状の棒状礫が、西側炉石に平行して置かれていた。コの字形に組まれた石組みの開口部が住居中央を向かないことから、本来は方形に配された北側の炉石が抜き取られた可能性を考えることができる。出土土器には堀之内I式古相ないし三十稻場式新相に併行するジグザグ状の区画波線文が施された深鉢（第84図105）があり、上半部が復元できた。

（2）敷石住居跡（第69図、巻頭図版3・図版66）

位置 中位段丘高位面に当たる調査区北西部、8-14グリッドで検出された。

重複 住居跡北東辺でSK63・64土坑と重複し、これらを切って構築している。また、完掘状況で中央部が摺鉢状に落ち込むことから、床面レベルよりさらに下がる深い掘り込みを伴う遺構の存在が推測された。

平面形・規模 平面形は凹凸のある橢円形状を呈し、規模は長径250cm・短径200cmを測る。

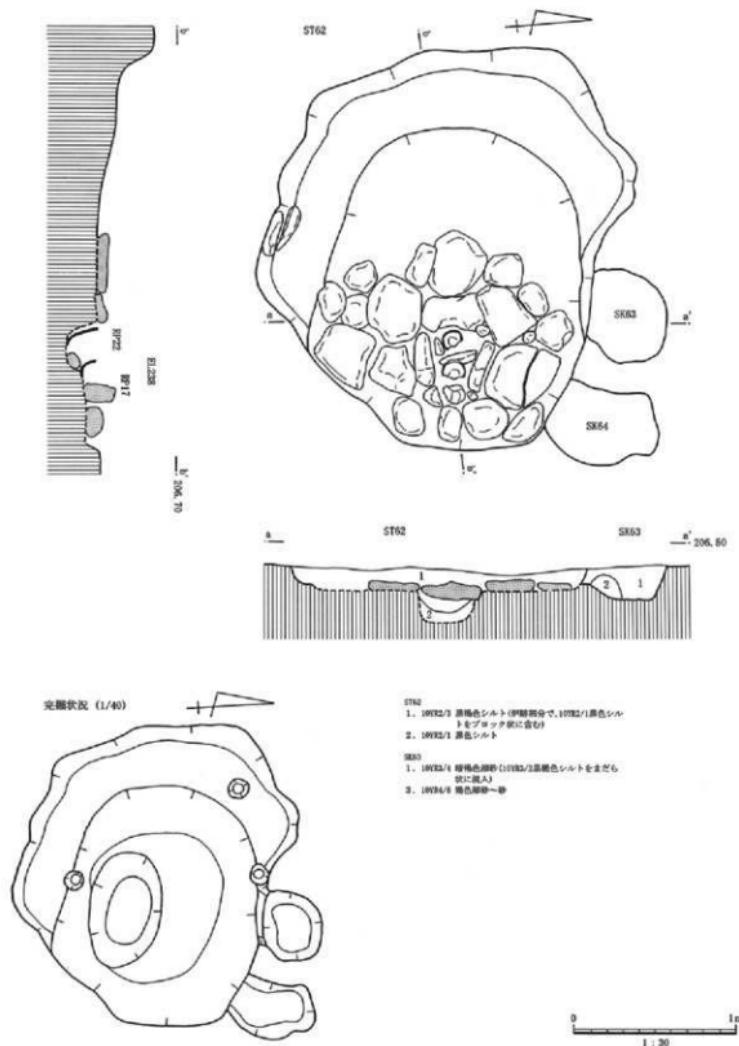
敷石・床面 プラン検出面から4~10cm掘り下げたところ、東半部において敷石が確認された。敷石は石組炉（EL238）を中心にして、これを取り囲むように南北160cm・東西130cmの橢円形の範囲に配置される。17個程の扁平礫からなる敷石部分は上面がほぼ平坦になるように敷かれており、石組炉周辺にある大型で特に扁平な礫群は被熱を受けて赤変している。

住居跡西半には敷石を認めていないが、周辺より中央部が一段下がる掘り方が成されていた。すなわち、敷石を行うために掘り窪めたものと考えられ、この部分の敷石は住居廃棄後に取り除かれた可能性が想定された。したがって、本来敷石が施された範囲は東西200cm・南北150cm内外と推定することができる。また、西半部には敷石の無い床面が30cm程の幅で巡っていたことが解る。この部分の床面は敷石上面と同レベルであり、凹凸がなく平坦であった。

炉 敷石部分の中央には、土器埋設石組炉（EL238）がある。石組炉は棒状や扁平の礫を用いて台形様に組んだもので、内部に2個体の土器が埋設されている。東側を正面として配置された石組みは西辺に扁平な礫を据え、東に向かってハの字形となる様に径35cm程の棒状礫を袖石状に組んでいる。東辺には3個の棒状礫が立てた状態で設置され、北西角にも小型の棒状礫を立てて隙間を埋めている。さらに石組み中央にも棒状礫が南北方向に据えられており、炉体内部が東西に仕切られていた。炉体にはこの仕切りを境に深鉢の胸部下半が1個体づつ埋設されており、南・北辺の炉石には被熱による破碎が認められる。

柱穴 西半部より柱穴と考えられる3基の掘り込みを確認した。径約15cmを測る円形のもので、床面からの深さは10~15cm程である。この内の2基は敷石を施すために窪めた掘り方の境に配され、住居を中央で東西に二分する線上に位置している。北西側の床面端に掘られた1基を含め、3柱穴を結ぶ線が二等辺三角形を呈する位置関係にある。

出土遺物 石組炉内に埋設された2個体の土器の他、床面に密着する遺物は認められなかつた。覆土中からは土器片24点が出土しているが、細片あるいは無文であるため図示していない。炉体となった埋設土器の深鉢（第87図110・111）は器面の状態が良くなかったが、RP17では垂下または弧状の区画波線文が観察された。覆土内出土のものを含め、これらは堀之内1式に併行する土器であり、住居構築の時期は縄文時代後期前葉と判断された。



第69図 S T 62敷石住居跡

(3) 土器埋設石組炉 (第68図、図版68)

調査区中央部西側から、住居跡に伴わない石組炉 (E L237) 1基が検出された。遺構確認面においてその存在が判明し、径140cm程の円形を呈すSK26土坑上に位置する。断面観察から、SK26が埋没した後に再度掘り込んで構築したものと想定された。石組みは径20cm前後の扁平礫3個をコの字状に配したもので、開口部は東側を向く。内部には残存器高15cmを測る深鉢の下半部 (R P16) を据え、その外側に同一個体の胴部破片をL字形に巡らしている。炉体土器は、二次焼成のためか器面がかなり荒れた状態であった。

(4) 土坑 (第70~75図、図版69~72)

調査で土坑として登録した数は202基である。平面形は基本的に円形ないし梢円形を呈すが、一部重複等から不整となるものも多く認められた。断面形態では、開口部よりも底部が広がるフラスコ状や袋状を呈するものが多い状況であった。以下では、掲載した検出土坑を対象に規模や形態的特徴の他、構築場所あるいは配石関連等の観点からグルーピングを行い、それぞれの概略について説明する。

SK68及びSK120は傾斜面に構築された土坑で、調査区北側の竪穴住居跡群と近接した位置関係にある。南北径175cm程の不整な円形を呈するSK68(第72図)は、ST67住居跡の南側及びST135住居跡の北西側に隣合うものである。土坑西側において等高線に対し直角方向になるような段を有する掘り方が成され、検出面からの深さは中央部で約60cmを測る。覆土上層を中心に遺物が出土しており、時期を考定できる資料としては多条沈線文を施す注口土器の橋状把手部位(第81図66)が認められ、後期前葉の南三十稻場式に比定された。なお、坑内出土土器は西隣にあるSK66及び調査区南部に位置するSK36出土土器と接合(第88図119)しており、これらの土坑出土遺物についても同時期の所産と言えよう。

SK148(第73図)は立石を伴う土坑であるが、断面観察から土坑埋没後に立石を施すための遺構が掘り込まれたと判断された。土坑は長径206cmを測る不整梢円形を呈しており、西辺部を立石遺構の構築によって切られる。中央西寄りが狭い底面となる穏やかな掘り方が成され、断面形態は船底形を呈する。深さは最深部まで80cm程度である。立石遺構の掘り込みは垂直的なためU字状の断面形となり、深さ68cmを測る。立石は棒状礫が用いられ、検出面の他に底部にも認められた。SK148からは110点程の土器片が出土しており、第80図57に示した土器には南三十稻場式に特徴的な、口縁に連続した刻目状の沈線文等が施されるものである。

SK124及びSK160(第73図)は、坑内に人為的に投げ入れられたと考えられる集石が認められた土坑である。この内、SK124の集石は掘り方南西側でのみ存在することやその状況から、プラン検出段階で検出できなかった円形様の遺構が重複していたものと判断された。また、円形状に堆積する集石状況からは、礫を含む側の遺構が後に構築されたものと理解された。覆土内からは、コンテナ1箱相当分の土器片が出土している。土器底部や口縁部の破片数より判断して、深鉢2~3個体分の資料と思われる。復元して器形を窺い知ることのできたものに第84図104に示した深鉢があり、口縁部に見られる連結した区画隆線文の存り様から三十稻場式古相に当てはめられた。

断面形態がフ拉斯コ状ないし袋状となる土坑に、SK121・139・152・153・172・188・228・230等がある。これらはすべて底部が広がる形状であるが、全周においてオーバーハングを受ける土坑（SK139・228・230）と、一方向のもの等に分類される。

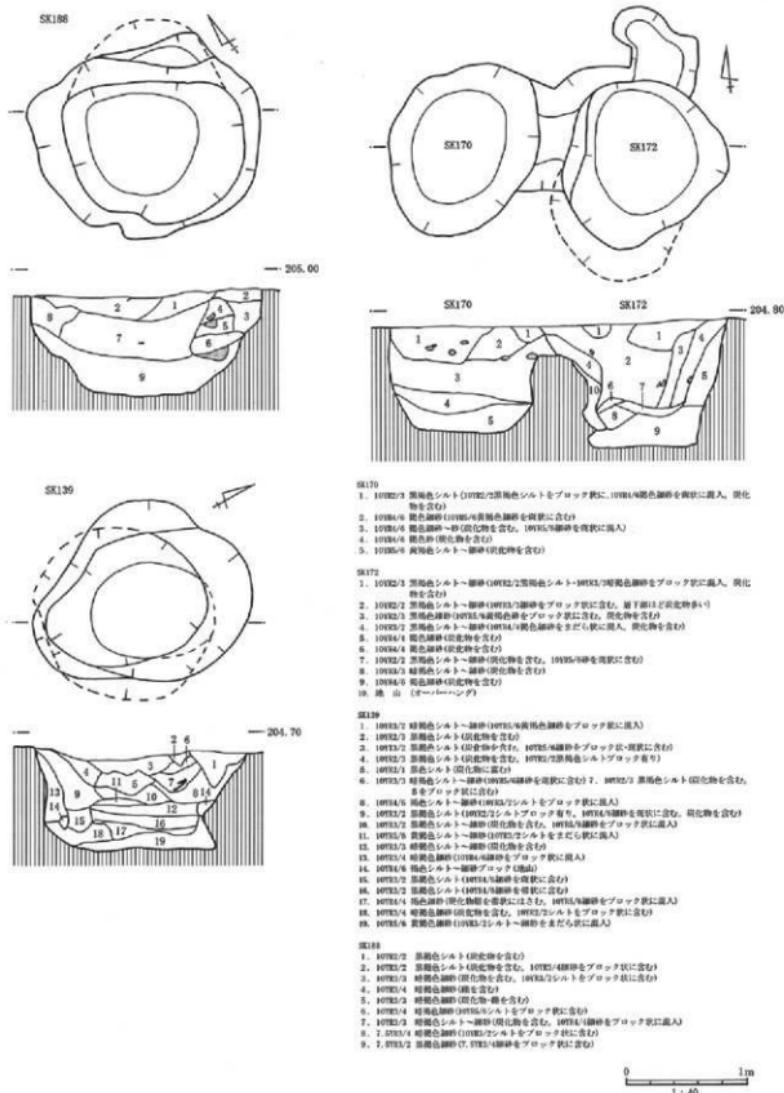
SK172（第70図）は直径約140cmの略円形を呈す土坑で、西隣に規模・形態ともほぼ同様なSK170がある。掘り方は、底部付近の壁面が南西方向へ大きく掘り込まれる。開口部より最大26cm外側に広がり、断面形が袋状となるものである。底面は平坦で固く締まっており、深さは検出面から100cm程を測る。堆積土は全体的に炭化物を含む層で、中位層（F2）を主体に遺物が出土している。土器の器種に蓋が多く認められ、三十稻場式に特有な花弁形等の連続刺突文を充填するもの（第82図）である。また深鉢の文様には、口縁部に刻目が付された隆線文を施すもの（第79図26）等があり、三十稻場式新相に比定できた。

SK228（第72図）は、北側に接するSK227と重複する梢円形状の土坑である。長径104cm・深さ55cm前後の規模を有し、掘り方は開口部から途中一旦狭まるが、中段から底部に至るまではほぼ全周で外側に掘り広げられる。SK227との新旧関係は、土層断面により本坑が先に構築されたことが解る。坑内から出土した土器点数は30点余であったが、橋状把手を持つ深鉢口縁部片（第78図11）と連続刺突文様の蓋（第82図79）の存在から、三十稻場式古相に属すと判断された。また、SK227出土土器（第79図）には多条沈線文が認められるため、後続する南三十稻場式古相の土器群と位置付けられた。

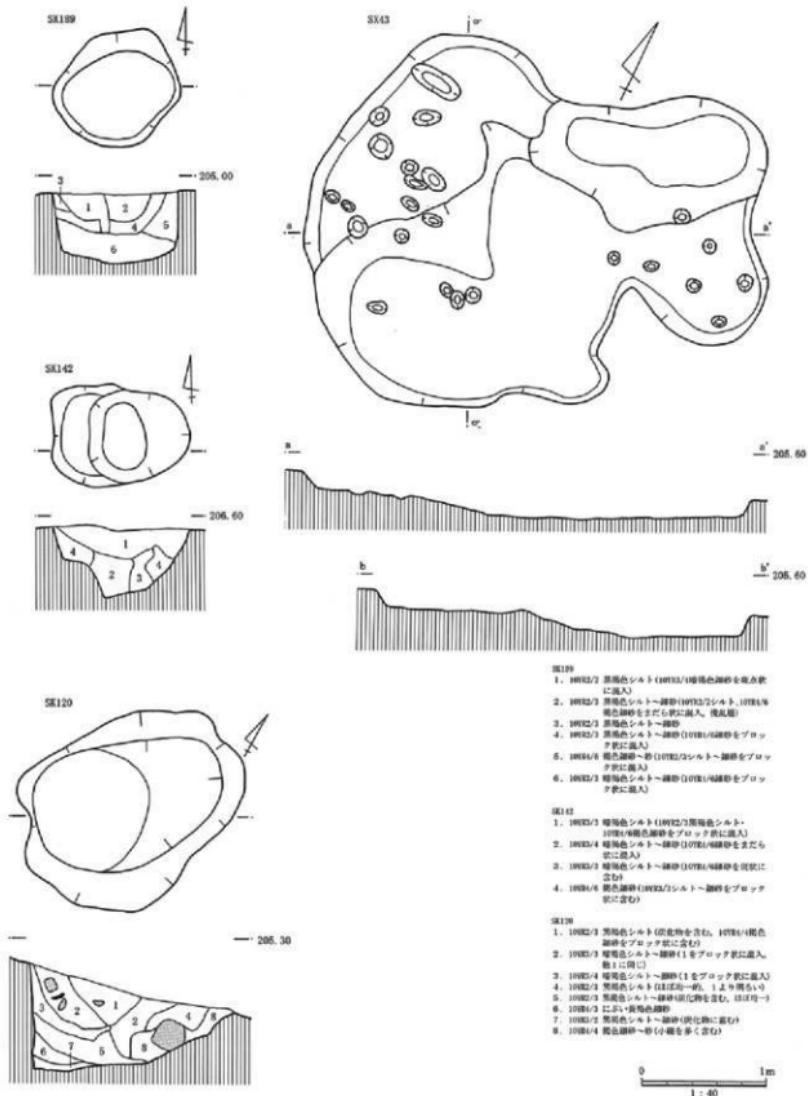
SK149及びSK204土坑からは、器形の窓える良好な精製土器が底面密着で出土している。SK149（第74図）は平面形が台形様となる土坑で、東辺210cm・西辺140cm程の規模を測り、西辺部で重複するSX222を切る。東辺部で段を形成して掘り込まれる以外は、ほぼ垂直的な掘り方で底面に至る。底面は平坦であるが、南側より北側がやや深いため緩やかに傾斜しており、深さは北側で約70cmを有する。出土遺物にはコンテナ1箱分の土器がある。底面北端において、全周の3分の1程を欠く深鉢（RP15）が内面を上に向け、押し潰された状態で出土した。第85図106に示した実測図により底部を除く全形が窓い知れ、口縁部の区画隆線文が連鎖しないエ字状となる特徴から、三十稻場式古相の土器と認められた。

一方、12-18グリッドで検出されたSK204より出土した底面密着土器（第83図97）は、文様内に地文が充填される大木10式併行の深鉢であった。したがって、本土坑の構築時期は中期末葉と判断され、検出遺構では最も先行したと考えられるもののひとつである。

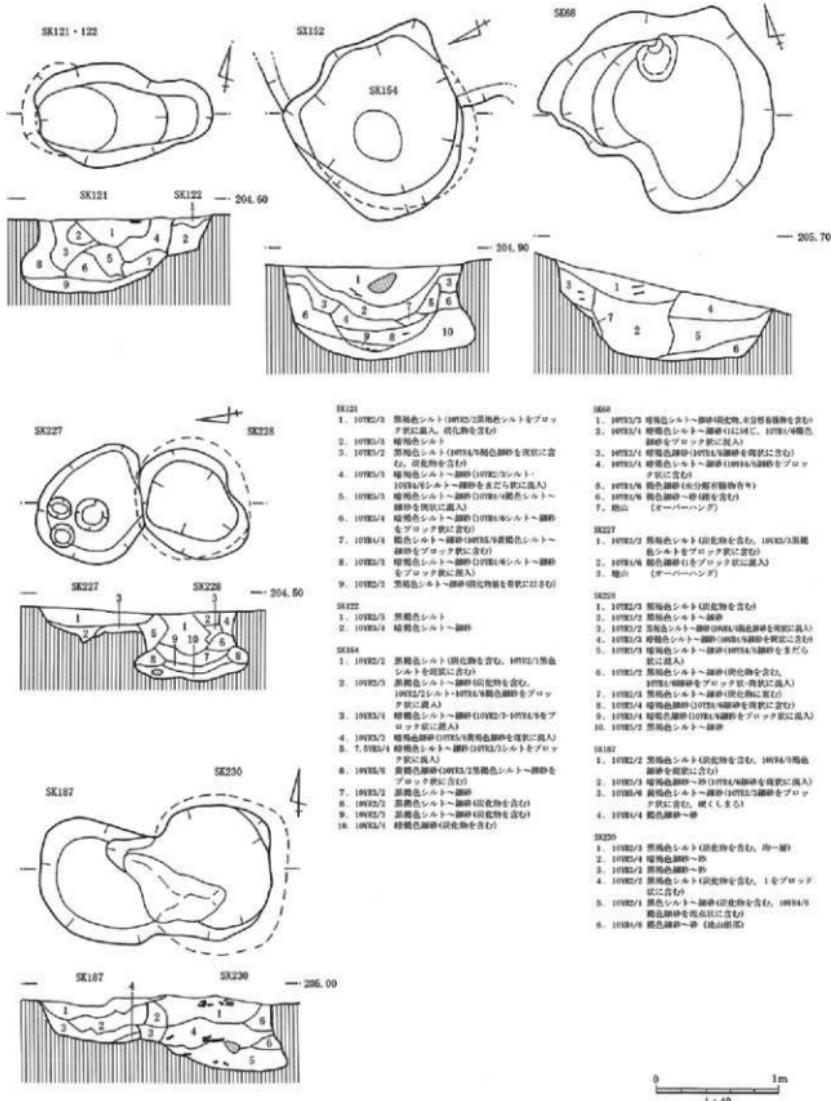
その他、SX174・SK175（第75図）は、長軸約480cmの梢円形プラン内に何基かの遺構が重複しているものである。断面観察や全掘後の平面形状から、SX174では最低4基以上の遺構重複が確認できた。これらからは、コンテナ4箱分に相当する一括したまとまった量の遺物が出土している。出土土器群は南三十稻場式に属し、綱取II式及び堀之内1・2式に併行する後期前葉の良好な資料である。SK175出土の深鉢（第86図108）は、垂下する多条沈線文を施すことから南三十稻場式古相に比定される。SX174出土土器群（第80図）には、弧状や蛇行する多条沈線文等が多く見られることから、南三十稻場式新相土器が量的主体であると思われる。これらはSK175土器群に後続するものであり、遺構の切り合い関係とも合致している。



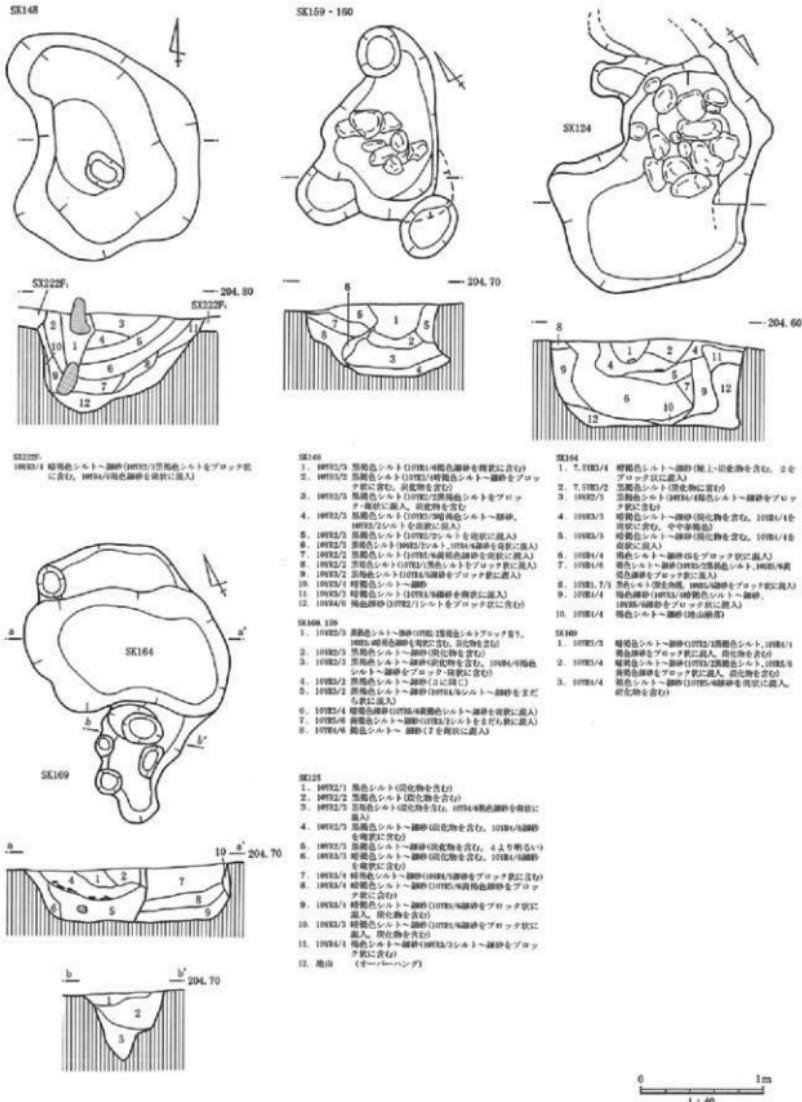
第70図 S K139・170・172・188土坑



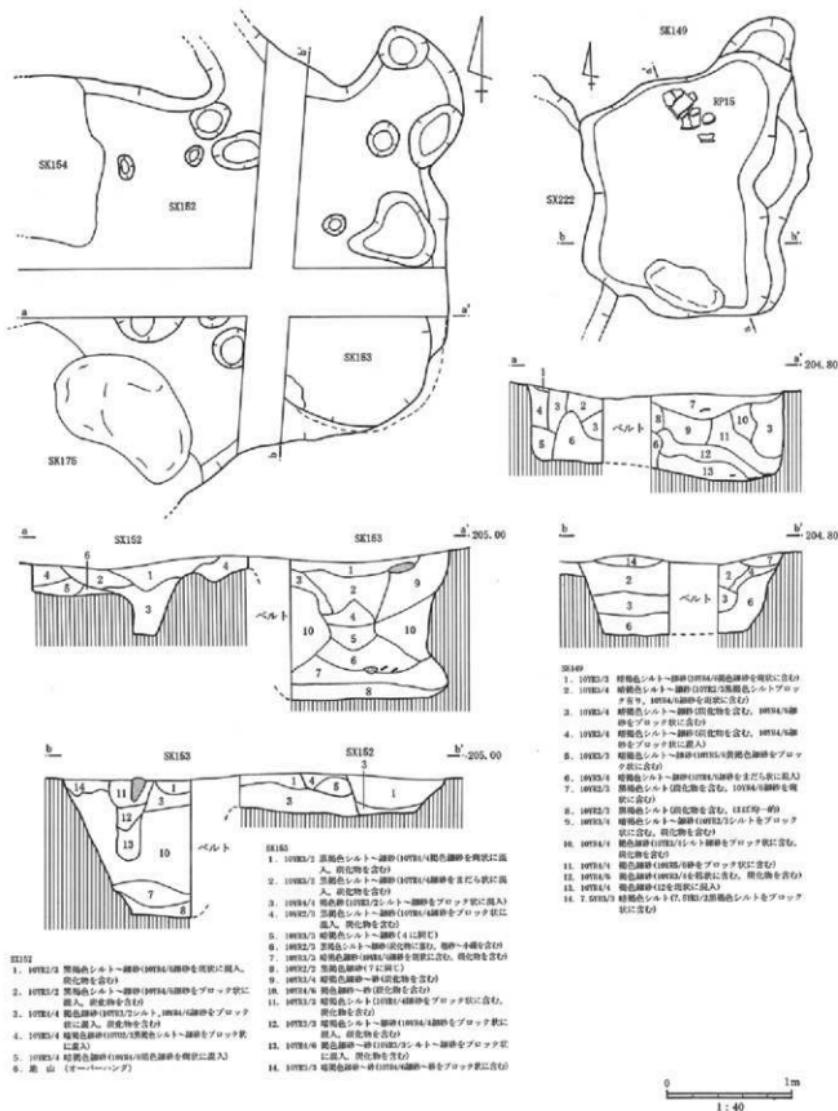
第71図 SK120・142・189土坑、SX43性格不明遺構



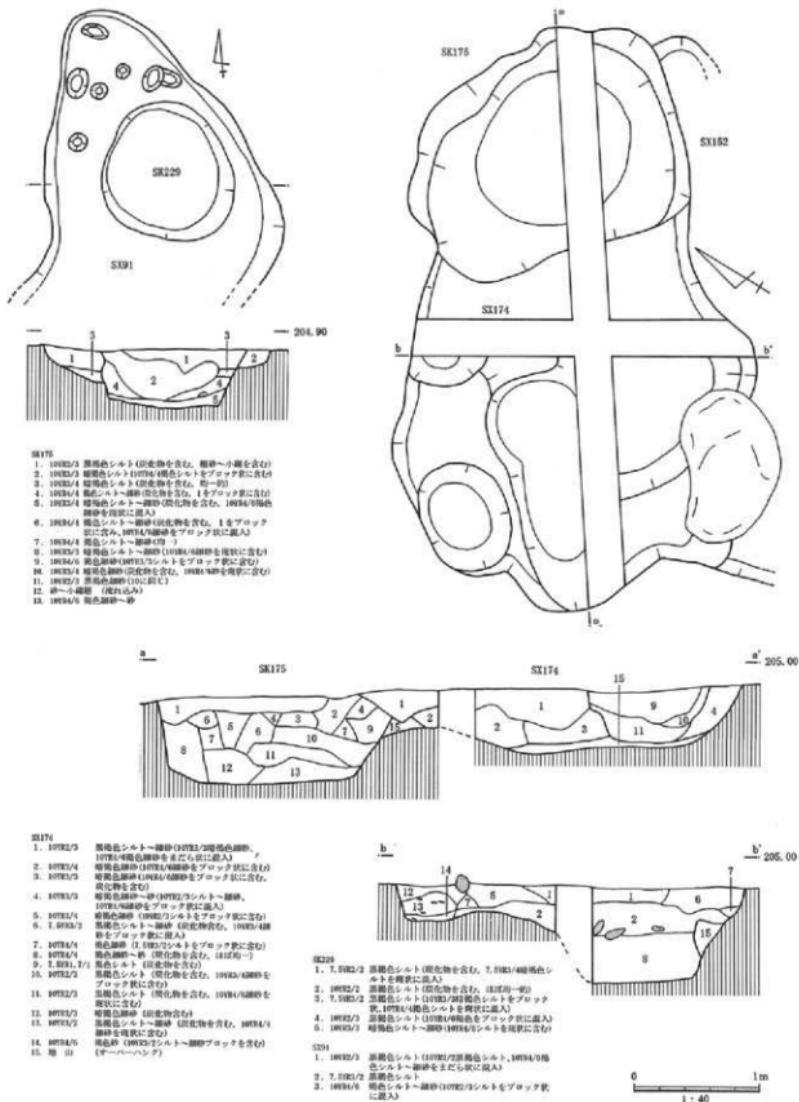
第72図 SK 68・121・122・154・187・230・227・228土坑



第73図 SK124・148・159・160・164・169十抗



第74図 SK 149・153土坑、SX 152性格不明遺構



第75図 S K175・S K229土抗、S X91・SX174性格不明遺構

(5) 配石遺構 (第76図、図版73)

配石遺構は調査区北東域において、確実なもので2基が認められた。10・11-14グリッドに位置しており、検出層位はII層の下部であった。

11-14グリッドにある1基は、約180cm四方の範囲に30個程の扁平や棒状の礫が据えられる。配石は西側を起点に東側に向かって扇形に広がっており、先端部には礫石が認められない。縁石の据え方は中央部を長方形に囲うように配され、内側に向かって傾くよう斜めに置かれている。西側と南側では配石が2~3列行われるため、上からは鱗状にも見受けられた。配石状況から判断して、東辺部の縁石は抜き取られたと考えられる。配石遺構の北西約90cmの場所には、埋設土器 (E U235) がある。

10-14グリッドに位置する1基は、II層上部で検出されている。13個の扁平な礫石が橢円状に置かれており、長径は約140cmを測る。北端にある2個の礫石は側縁を立てて据えた縁石と考えられたが、他は敷き詰めた状態で配置されていた。橢円形もしくは長方形状に配石されたと仮定すれば、縁石が抜かれたものと思われる。

これら配石遺構の下より、土壤に当たる掘り込みは確認できなかった。なお、これらの周辺部にも多数の礫石群が散見され、縁石と考えられるような石列も認められたが、積極的に配石遺構として捉えられるものではなかった。また、11-13グリッド付近に集石が見られたが、この部分は周囲に比べて平坦であることから、地形的要因によるものと理解された。

(6) 埋設土器 (第77図、図版68)

調査区内より6基 (E U183・192・220・234・235・236) と、東側段丘縁辺に設定したトレーナー内から1基 (E U242) の計7基を検出している。

分布 埋設土器の分布状況に規則性はなく、散在していると言える。

検出層位 基本層序のII層中にて確認している。他遺構との重複では、E U236がS X76プラン内に埋設される。東半部に位置するE U183・192・235・242が、遺構検出面に当たるIV層を堀り込んでいるのに対し、西半部検出のE U220・234はII層内で埋設される。

埋設姿勢 土器はいずれも中型の深鉢であり、E U235のみ口縁を下にした倒位の状態で、他は正位で据えられていた。また、蓋石が確認されたものはE U235・236の2基である。

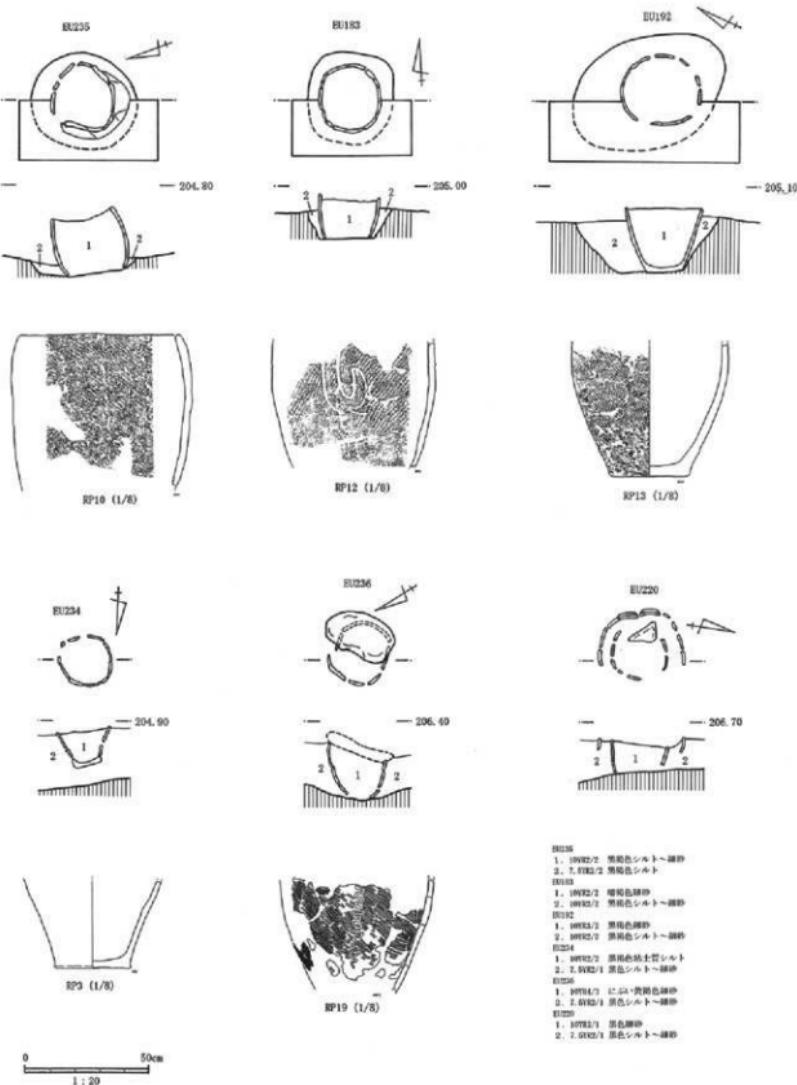
残存部位 土器に完形のものではなく、深鉢を倒立されたE U235は上半部を、E U192・234は深鉢下半から底部までのものを埋設している。他は深鉢胴部を埋設したものであったが、E U220では半円状に据えた深鉢胴部の内側に別個体の土器が認められた。

土器型式 E U192・220・234・235の深鉢は、無文もしくは地文のみの粗製土器である。E U183深鉢は胴部にJ字状の沈線文が施されることから、後期初頭の称名寺I式に比定される。垂下するジグザグ状の沈線によって胴部が区画されるE U236深鉢は、堀之内1式に属すると考えられる。また、E U242深鉢には器面全体に横位に連続した刺突文が認められ、三十稻場式の所産と判断された。

なお、これら埋設土器に遺体が埋納された可能性を検証する目的から土壤分析を実施しており、その結果については巻末に付した。



第76図 配石・集石遺構群



第77図 E U 183・192・220・234・235・236埋設土器

3 出土遺物

(1) 繩文土器 (第78~92図、図版74~88)

本遺跡より出土した土器の年代は縄文時代中期末葉から後期前葉のものであり、量的主体は後期に属する土器群である。掲載資料は拓影図を主にした破片資料の断面実測図(第78~82図)と、器形復元から図化できた土器実測図(第83~90図)等である。これらは住居跡・土坑等の遺構に関連するものの他、包含層出土の資料についても分類作業を通して、時期や器形が判断できるものは積極的に取り上げて採録した。以下では器形が復元図化された土器を中心に、器形的特徴や文様構成等について器種毎に類別して概述する。

深鉢形土器

深鉢は胴部上半から口縁部にかけて文様帯の施される精製土器の一群と、主として縄文地文のみのもの及び無文地の粗製土器とに大別できる。精製のものでは、破片資料においても主体を占めた隆帶の貼付けや沈線文あるいは刺突によって文様を描出する類が大半で、これ以外の類型は時期的にやや遡る中期末葉に属する若干例に限られる。

深鉢の器形は口縁部形態等によって、

- ①胴部との間に縫れを持たず、口縁部が直立するもの(第83図98、第84図105、第86図109)。
- ②胴部最大径から緩く内弯するもの(第84図104、第90図131・133)。
- ③口縁部がくの字状に内傾するもの(第90図130)。
- ④胴部との間に縫れを持ち、口縁部が直立するもの(第83図100、第86図108)。
- ⑤胴部との間に縫れを持ち、口縁部がくの字状に外反するもの(第85図106、第87図112)。
- ⑥口縁部は外反し、胴部が角ばって張るもの(第78図4、第83図97)。

など主要な6類型が認められる。これらには平口縁のもの、波状口縁のもの、及び口縁に突起もしくは把手の付くものが存在する。また、鉢の器形では口縁部が内弯する形態のもの(第79図32・34)に代表される。

97・98は中期末葉の大木10式及び加曾利EIV式に併行するものである。97は胴部上半に蕨手状の隆沈線文がダイナミックに描出され、内側の一部に雨垂状の刺突文が充填される。隆沈線区画外には充填縄文を施している。全形が窺える98は8単位の大小波状口縁を呈す深鉢で、各々の波状部より列点刺突文が垂下している。破片資料では第78図1・2が同時期に属すると思われる。第81図63の円窓を付した山形突起部片は、大木10式から奥羽南部の後期初頭型とされる門前式に至る時期のものと捉えられる。

99は胴部に称名寺式に特有なJ字文やジグザグ文が沈線によって描かれる深鉢で、I式に比定されよう。4・100は口縁部に施された区画隆帶が特徴的な土器で、綱取I式の影響が窺えるものである。4の隆帶沿いには沈線が添付され、隆帶上に刻目が付けられる。口縁内外面に沈線を巡らし、さらに垂下隆帶のある口縁内側部分にも隆線が半円状に貼付けられる。100の頸部隆帶以下には爪形の連続刺突文が認められる。102は胴部破片のほぼ全面が花弁状連続刺突文によって覆われている。104・106も頸部に刻目などのある隆帶を巡らすものであり、104では地文の綱文を押圧している。104の隆帶は口縁で4単位の山形突起となるよう、コの字状に貼付け

られ一周しているが、106では連鎖しないx字状を呈している。104の貼付け形態は、市野々向原遺跡出土の大木10式併行土器（第40図21）に看取されることから、より古相を示す形態と認識できる。これらの土器群は三十稻場式古段階に位置付けられるものであり、破片資料においても刺突文が主体的になされる第78図7・10・11・13・14、ボタン状貼付文や連鎖状隆線文を施す13・19、櫛歯条線文を施す16・18・20、橋状把手資料の11・21・23等は同時期の所産に比定される。

105・107は胴部に縦位のジグザグ状曲線文が沈線によって描かれる深鉢で、堀之内1式の古段階に併行するものである。105は地文に複々節繩文が用いられ、口縁部と胴部の間を横走する沈線によって区画している。口縁形態は平縁であるが低い山形状の突起部を4単位持ち、対面する2単位の突起部は二重口縁となっている。突起部下には円孔を伴う。これらに併行すると考えられる破片資料は、第78図3・第79図25～29である。25・26は刺突のある隆帶を頸部や口縁部に貼付けるもの、27・28は弧状や蛇行する沈線文が認められるもの、29は扁平な小型化した把手が付くものである。29様の把手はやがて退化して橋状部がなくなり、口辺に癒着した突起となる傾向が指摘されており（藤巻他1991）、27の突起や25の突起部貼付け連鎖状隆線文などはこの事例に当たると推測できる。これらの土器群は三十稻場式新相の範疇に捉えられる。

108・109は次段階に比定される深鉢であり、繩文地に弧状や縦位の多条沈線を施すものである。頸部の縫れが穏やかな108は口唇が複合口縁状に屈曲して立ち上がり、2単位の突起を持つ波状縁となる。突起部及び波状部に円窓・盲孔を設け、口縁には縁帶文を巡らせている。頸部に2条の沈線を引いて区画し、区画内は刺突文が2段にわたり充填される文様帶となる。地文繩文は底部付近までは施文されず、胴部下半の途中で終わる。多条沈線文は頸部文様帶を挟んで、口縁部と胴部に直線状に施される。109は胴部から口縁部までが直立するバケツ形の形状を呈しており、口縁部に断面三角形の区画隆帶が周巡している。口縁部は無文であり、文様は隆帶下に描かれ、多条沈線文が弧状もしくは半円状に施される。これらは堀之内1式に併行する南三十稻場式に属する土器で、沈線の施文法等の特徴から古段階に位置付けられる。110は敷石住居跡の石組炉埋設土器で、胴部に描出された区画沈線文の様相から同時期に比定されると思われる。拓影掲載資料では第79図30～第80図45が当該期の所産と考えられ、文様の種類にはボタン状貼付文（31）、円形押捺文（36・41）、円形刺突文（39）、縁帶文（38）、刻目入隆線文（41・42・44）、盲孔・沈線入隆線文（37）、多条沈線文（30・33・36・38）、曲沈線文（43・45）などがある。口縁に押捺等を施す36・41・42は、押捺部で口唇が内傾するために口縁上面形が波状に見える。

112・114は南三十稻場式新段階に位置付けられ、堀之内1式新段階に併行するものである。前段に比較して沈線文は多様性に富んで盛行し、胴部の多条沈線は全体的に曲線で描かれ、交差するものや集合沈線間に縦ぐように斜行する文様構成が特徴となる。112は口縁に最大径を有する頸部の屈曲が強い深鉢で、6単位の波状縁になるとと思われる。口縁部に縁帶文を伴い、頸部には区画線を持たずに縁帶文下から文様が描かれる。文様は繩文地に蛇行する縦位の多条沈線文が施され、文様間に斜位の沈線を引いて区画するものである。114は鉢の胴部全面に多条沈線

文が認められるもので、無文地に描出された曲線文に沿って弧状沈線を充填している。当該期に比設される拓影資料（第80図46～第81図62・64・65）は主に口縁部片を掲載したが、口唇が複合口縁状に屈曲して立ち上がるものが多い。口縁形態は波状線となることや、平縁に突起を持つことが特徴と認識される。口縁部文様帶には縁帶文が主体的に施文され、突起下には例外なく円窓や円文が設けられる。文様は縁帶文上の口唇にも刻目状の沈線が施文され、円文内に沈線を引くものもある。また突起は立体的となり、頂部に沈線文様を施すもの（51・56）や、盲孔・円孔を有するもの（62・64）が認められる。胴部文様は蛇行・斜行する多条沈線文が縄文地上に描かれ、屈曲する頸部に横位沈線を引いて区画するもの（56）は少ない。

第81図67～69は破片資料ながら、沈線で横方向に展開すると考えられる幾何学的な文様を描出し、磨消縄文が施されるものである。本遺跡出土土器の中では最も新しい範疇に捉えられ、堀之内2式に併行する一群と理解される。67は口縁部に刺突のある隆帶を巡らし、口唇裏面に沈線を施している。

一方、粗製土器は破片資料が多いため不明確ながら、深鉢の器形には口縁部が内弯・直立・外傾する大別3形態が知られる。これらには幾つかの埋設土器や、土器埋設石組炉の炉体土器が含まれていた。地文は縄文・撚糸文・条線文を施すものに分かれ、無文のものは器面に指ナデ等の痕跡を明瞭に残したり、加熱を受けた痕が著しい土器もある。また、胴部下半資料の中にミガキ調整を施したもののが目に付き、製作手法上の時期的特徴かと思われた。

なお、土器底部に認められる圧痕文には網代痕と木葉痕がある他、線状になるものを見るがその内容は不明である。また、ナデやミガキ等により無文のものも多い。

(浅)鉢形土器

浅鉢を含めた鉢類の出土数は少なく、器形が判断できる資料は1点のみである。第87図113は図上復元にてほぼ全形が窺えるもので、器面全体に文様が施された精製土器である。器形は底部から緩やかに開いて立ち上がり、口縁部においてくの字状に強く内傾するものである。口縁形状は6単位の波状線となり、内3単位には突起が付くと想定される。複合口縁風を呈す屈曲部縁辺に、突起部を経由する刻目文を周巡させ、突起下にも同様の刻目文が弧状に描かれる。胴部文様は器面全体に多条沈線による対称弧状文が施された後、中央部で口縁形状に相対した区画沈線2条を波状に施している。いずれの沈線も浅く太目であり、区画沈線間は文様が磨消される。第79図32・34は口縁部の破片資料である。2点とも口縁部が内弯する形状で、口辺には刻目の入った隆帶が貼付けられ、両端に沈線が引かれる。胴部文様は斜行縄文（32）や、極浅で太く短い多条沈線文（34）を施している。

これらの鉢類は網取II式に併行する南三十稻場式に比定され、沈線文の様相から32・34が古段階に、113は新段階に属すると考えられる。

注口土器

例示した注口土器は4点あり、器形をある程度窺うことのできる資料も存在する。第83図101はいわゆる土瓶形の形状を呈するもので、注口には円窓の付いた橋状把手が連結している。またこれとは別に、盲孔や沈線の入った大型で装飾的な橋状把手を付加する。地文や文様等は施

されず、器面にはミガキ調整が認められる。口縁部を除く外面に煤が付着している。第79図24は同様の形状を呈すと考えられる小型のもので、独立した注口部に隣接して橋状把手が付加される。同図22は橋状把手と一体になるよう作出された注口部の資料である。第81図66は注口上の立体的な橋状把手が目立ち、把手上面に縦位に貫通する円窓を持つ。

時期的には、沈線による文様が認められる66を綱取II式または南三十稻場式に位置付け、101等の一群はこれより前段の綱取I式ないし三十稻場式の範疇で捉えておきたい。

蓋形土器

三十稻場式土器の特徴のひとつでもある蓋（第82図79～96）は一定量存在し、基本的な器種構成の一角を担っている。出土資料に完形品がなく器形による分類は困難であるが、つまみや把手及び端部の抉りの存否などの別が認められる。頂部につまみを持つものは2点が知られ、85は渦巻状に作出したつまみの縁辺に刻目を施して、隆線文を描出している。隆線文の起点には盲孔があり、その下部に楕円状の沈線文を施す文様モチーフが見られ、この部分が土器の正面として認識されたものと受け取られる。86は小型宝珠様のつまみが特徴的な蓋で、体部に刺突のある隆帯が施文される。地文は刺突文が多様されるが、前者に対し後者は整然と列状に施文される様相が指摘できる。これらつまみ形状や施文手法の差異から前者を古段階に、後者は新段階に位置付けられると考える。

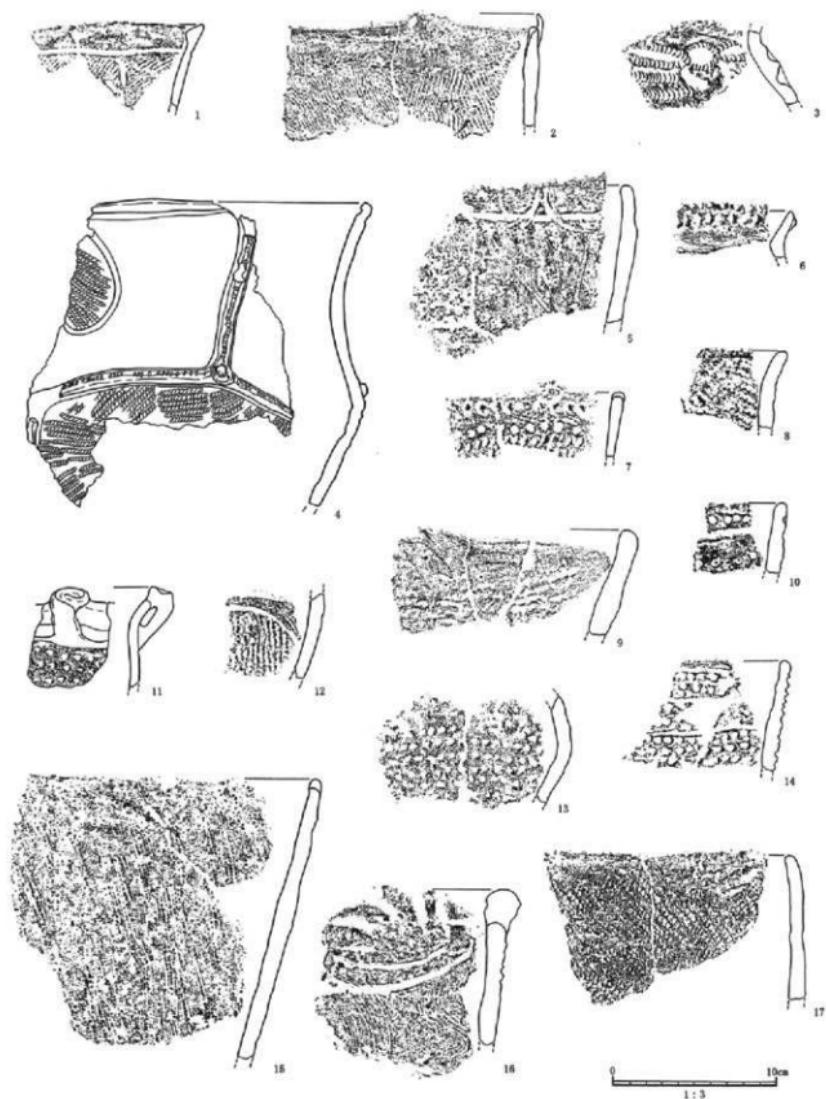
79～82は古段階に比定される事例であり、体部全面に刺突文が施されるか、貼付けた隆帯に沿った列点状の刺突文を特徴とする。新段階に比定される83・84・87～96の一群は、いずれも端部に並行する沈線文や刻目のある隆帯を施している。地文・文様とも複雑になると同時に、バラエティーに富む特徴がある。端部の抉りは前段より大きくなる傾向を示し、深鉢の波状口縁に対応して山形にめくれるように作出される。一对の環状把手は、両段階とも抉り部に対応して取り付けられている。

その他の土器

いわゆるミニチュア土器と称される小形土器（第92図156～161）と、手捏土器（同162・163）が出土している。小形土器は深鉢や鉢などのミニチュア版で、出土品はいずれも下半部資料である。竹管による刺突文や縄文を施すものが認められる他、底部付近をミガキにより器面調整するものもある。161は底部に記号様の丸印が付けられる。手捏土器は指頭痕が明瞭に観察できるもので、鉢様・盃様の形状を呈している。

（2）土製品（第92図164～171）

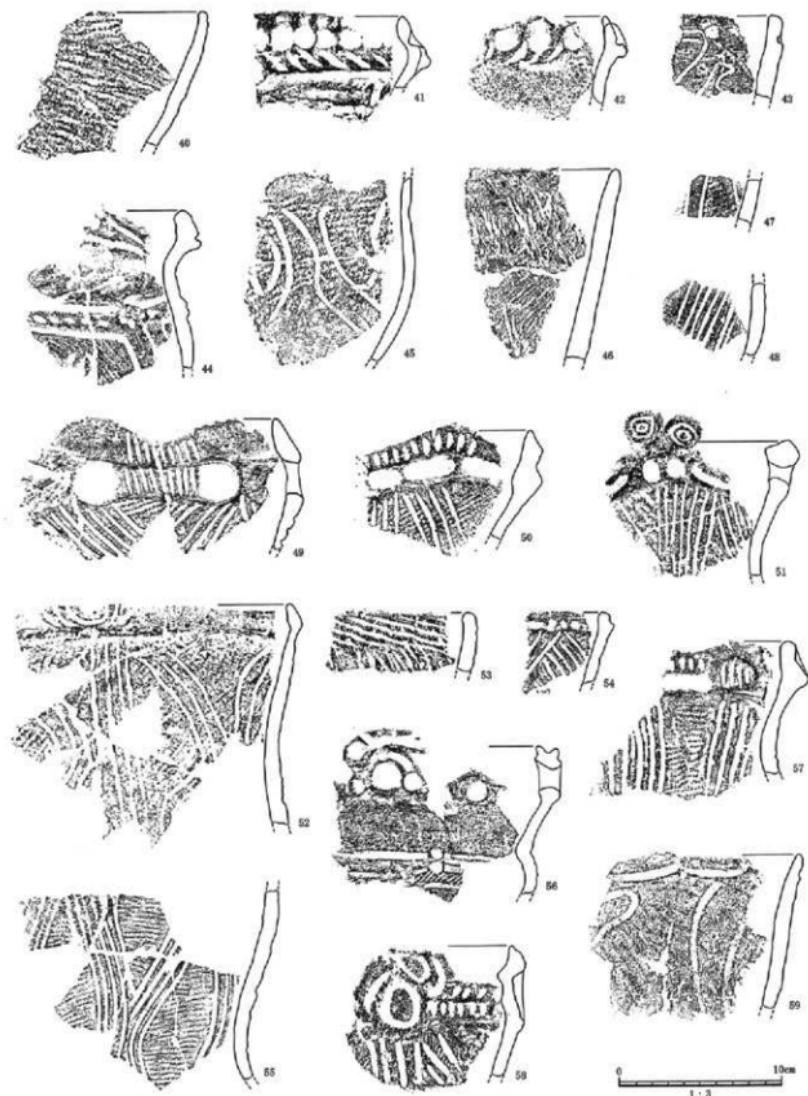
土器片を二次的に再利用したと判断される円盤状土製品が15点程出土している。土器片の周縁を敲打調整して円盤状に仕上げており、器面には本来の土器に施された縄文ほかの地文が観察される。例示した資料で171は土器の底部を利用したと思われるが、他は胴部片からの転用と窺える。大半が包含層からの出土であり、遺構内より出土したものは2点のみである。法量的には径4～5cmに統一され、機能・用途別の在り方は認められない。文様から時期を判断できる資料は少ないが、出土土器群の年代と同時期の所産と見なされ、中期末葉から後期前葉までの範疇で捉えておく。



第78図 繩文土器（1）



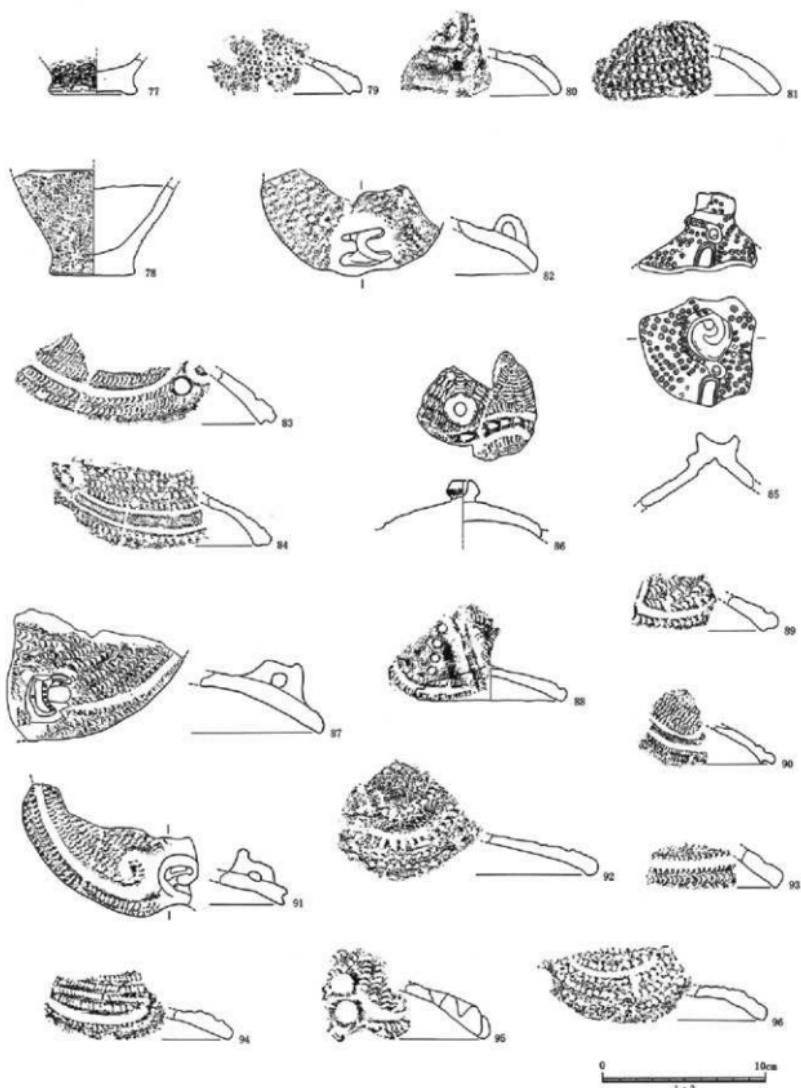
第79図 繩文土器 (2)



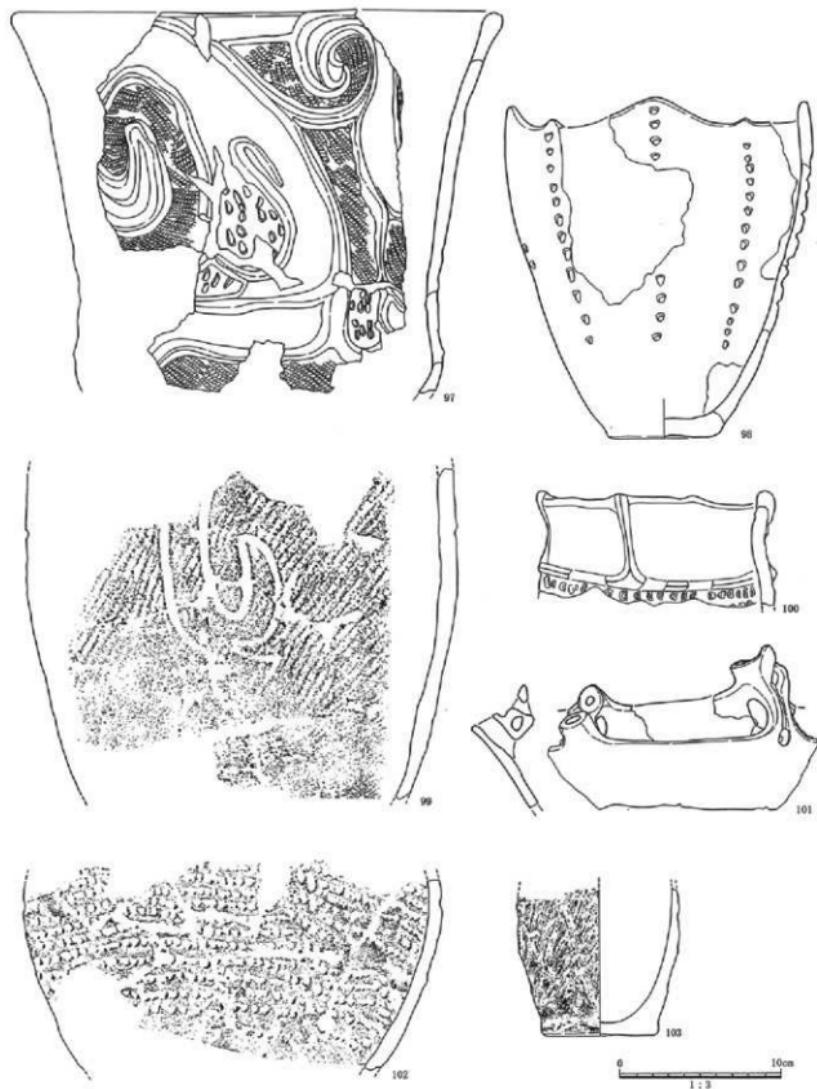
第80図 繩文土器（3）



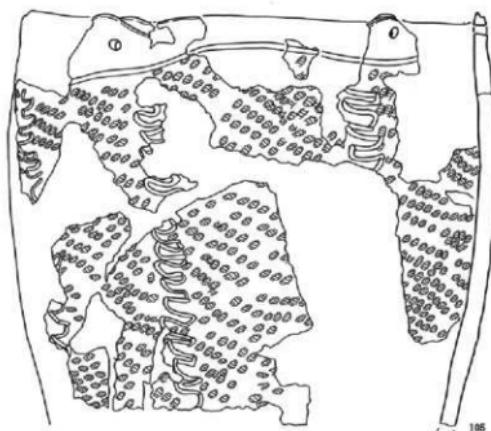
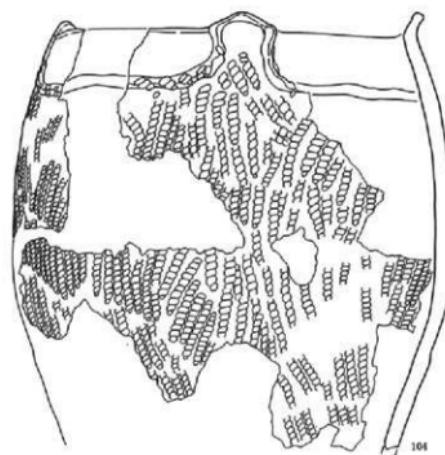
第81図 繩文土器 (4)



第82図 繩文土器（5）

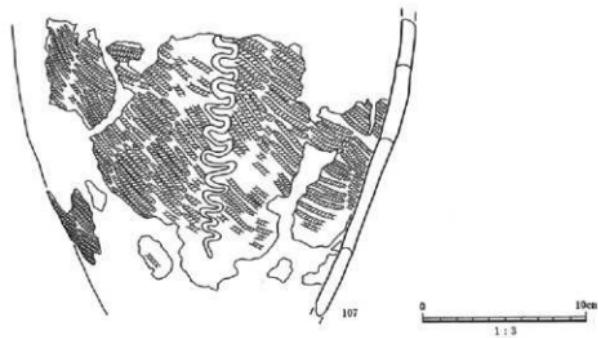
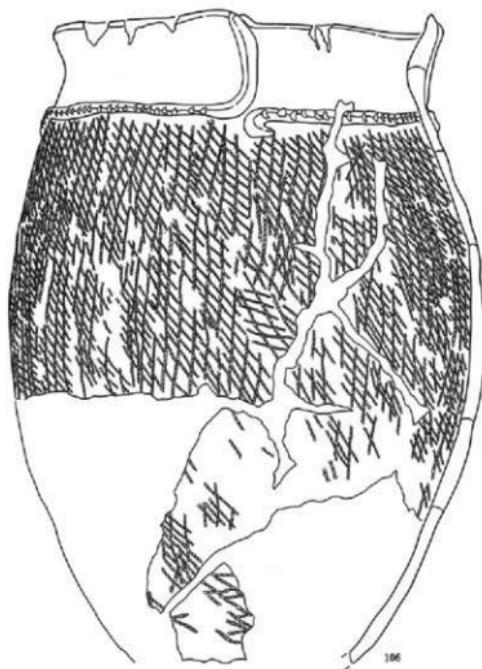


第83図 繩文土器（6）

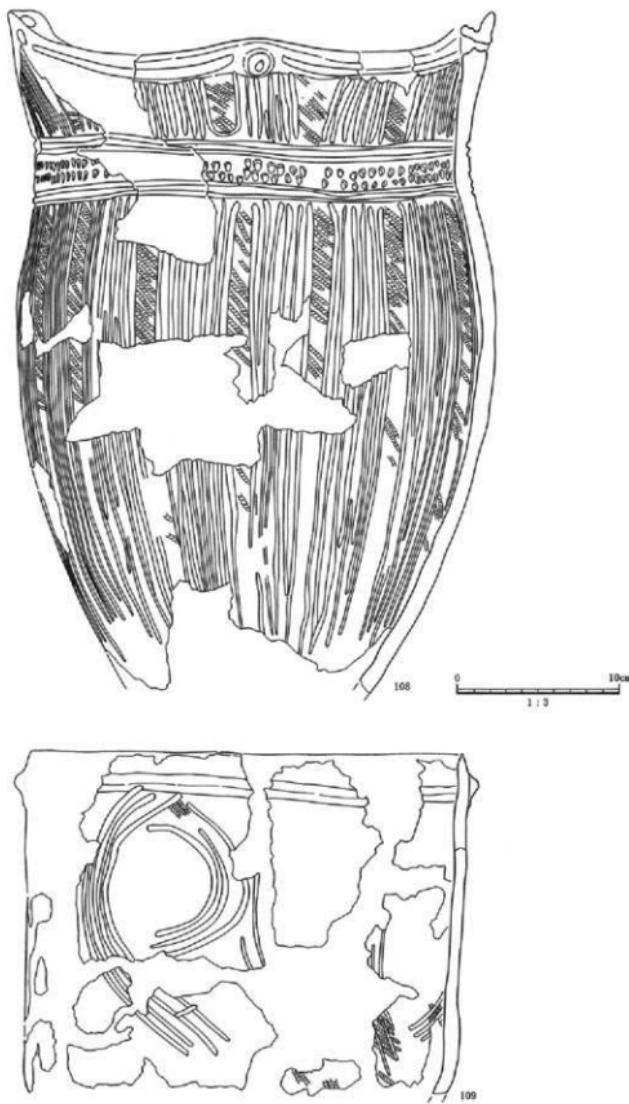


0 10cm
1 : 3

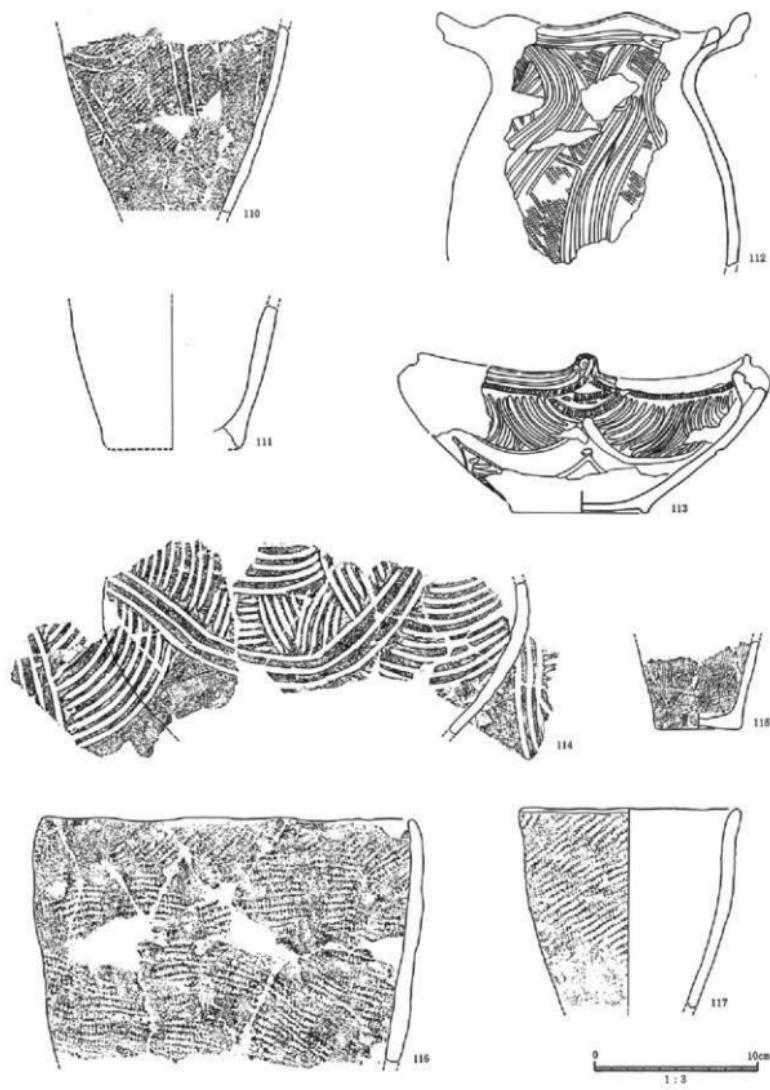
第84図 縄文土器 (7)



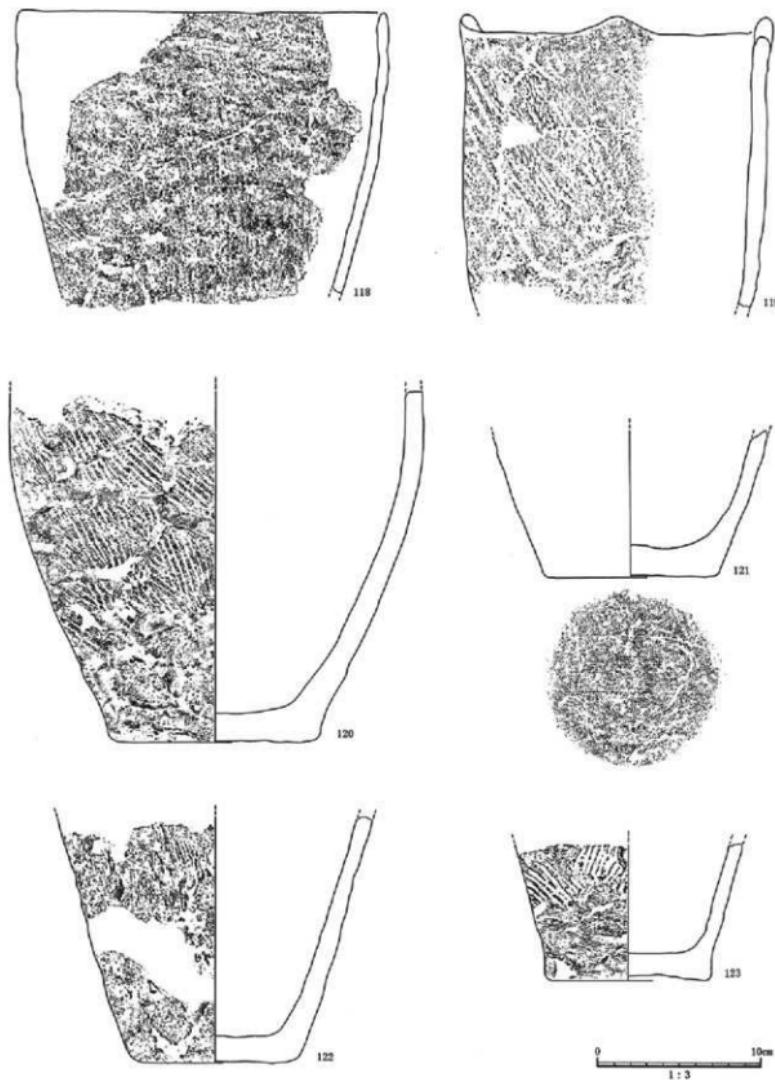
第85図 縄文土器（8）



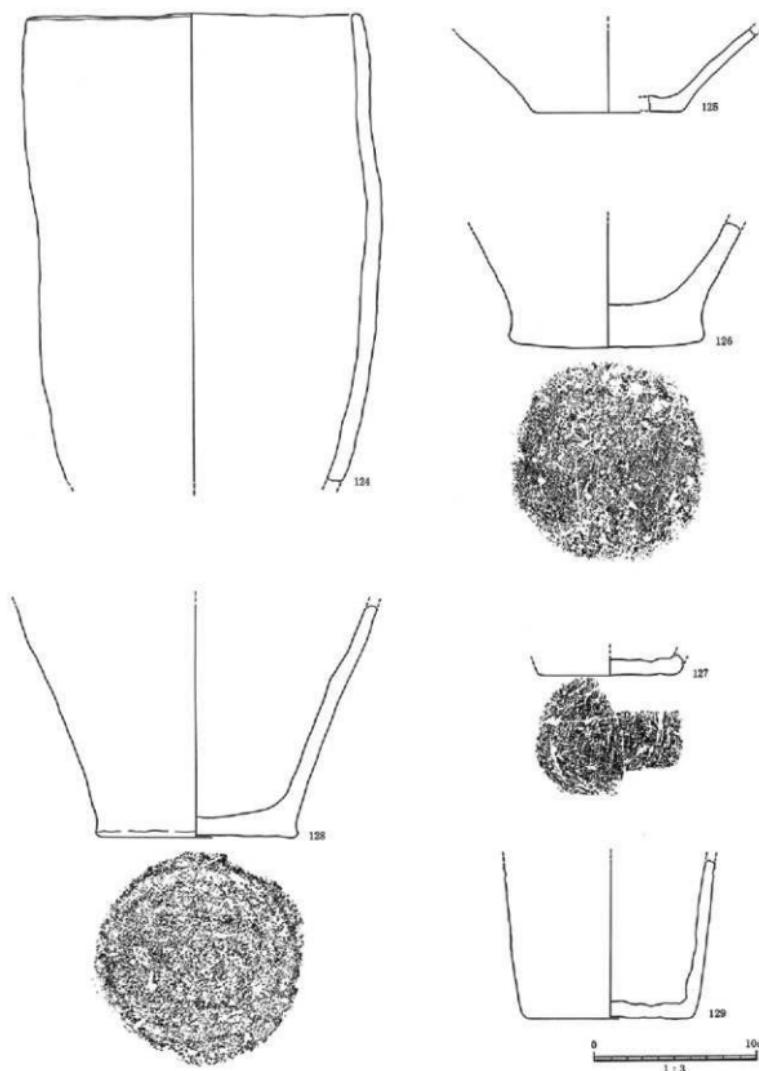
第86図 繩文土器（9）



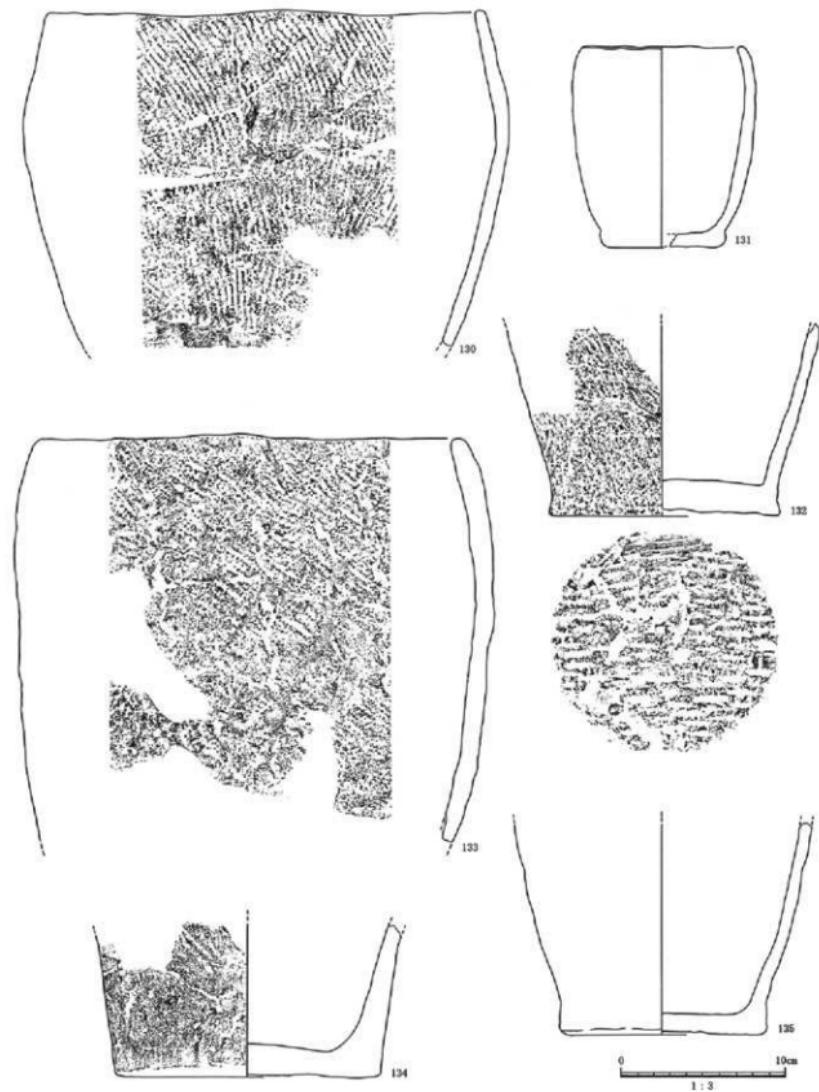
第87図 繩文土器 (10)



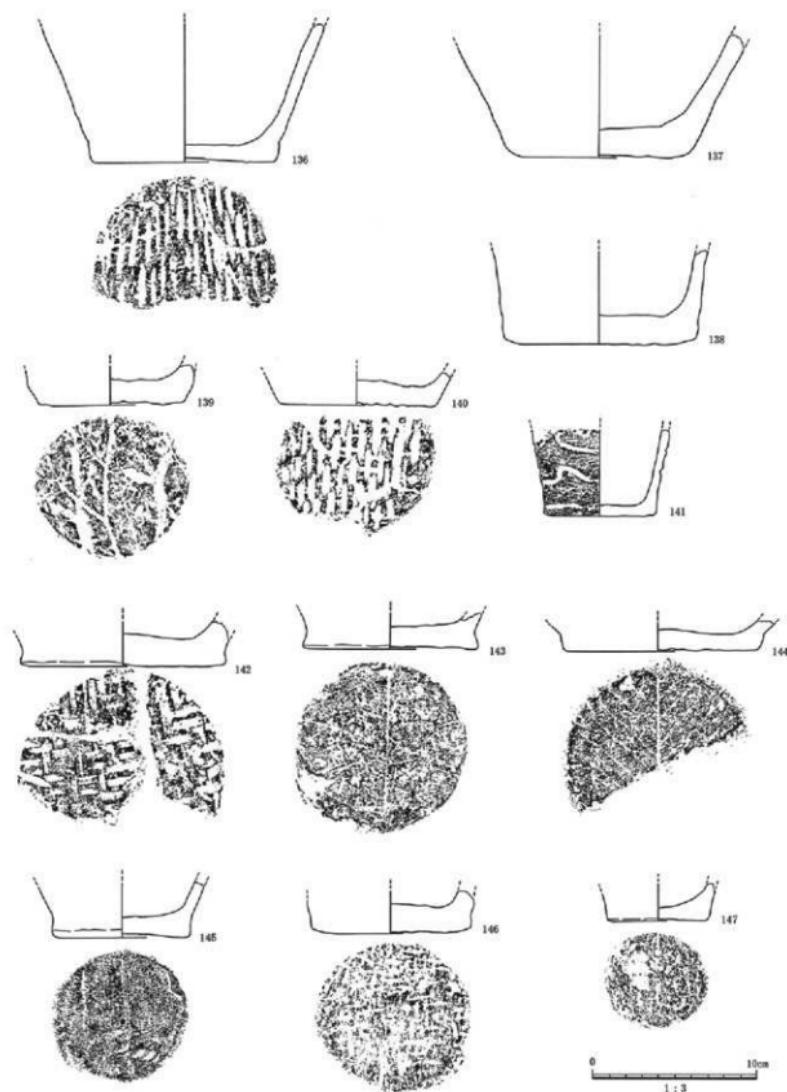
第88図 繩文土器 (11)



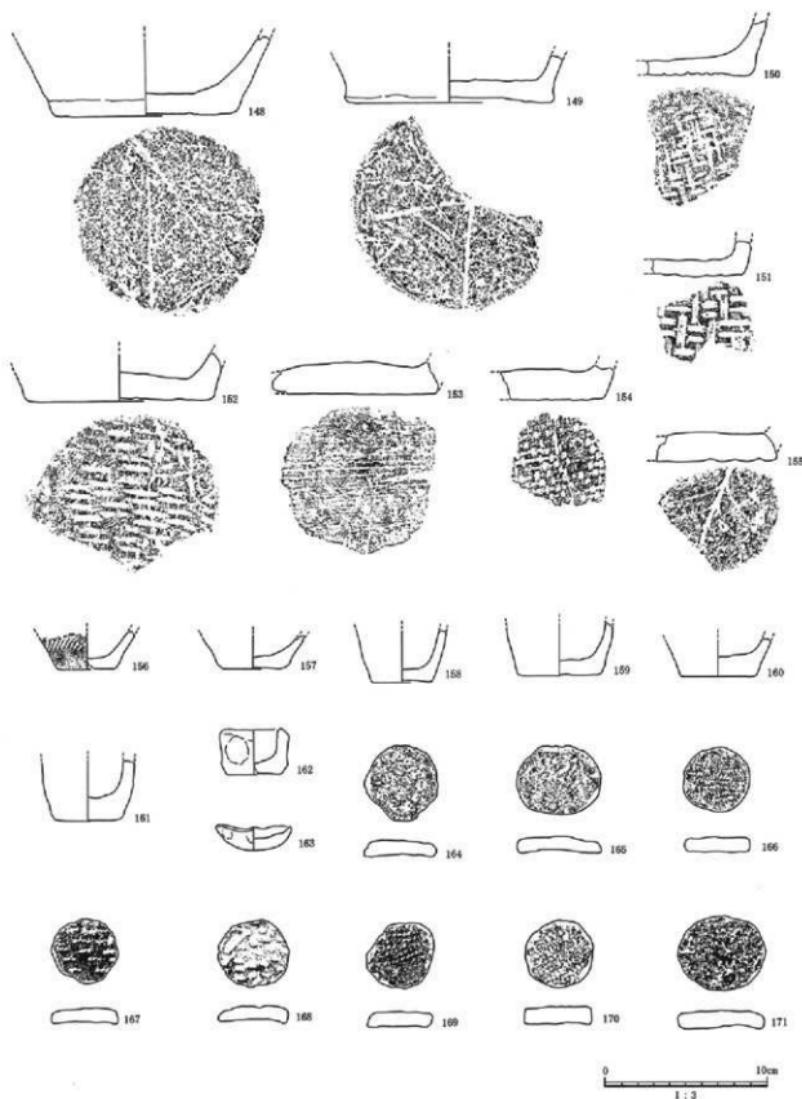
第89図 繩文土器 (12)



第90図 縄文土器 (13)



第91図 繩文土器 (14)



第92図 繩文土器・土製品

表11 土器觀察表(1)

埠 番 号	遺物 番 号	出土地點 層 位	時期 分類	器 種	文 様	備 考
78	1	9-15Ⅲ	VII	深鉢	区画沈線文、縄文(LR)	
	2	10-13Ⅲ	VII	深鉢	正彫捺糸文(R)	
	3	10-15Ⅲ	VII	深鉢	区画陰線文(内部沈線・盲孔、刻目入)、ノ字状沈線文、多段連続刺突文(爪形)	
	4	SK152 P3	VII	深鉢	区画沈線文、充填繩文(LR)、垂下・区画陰線文(盲孔・刻目入、沈線捺付)、縄文(LR)	
	5	SK152 P1	VII	深鉢	区画沈線文、对称弧形文(ノ字状)	
	6	SK149 P1	VII	深鉢	口唇削付、区画陰線文(刻目入)	
	7	SX181 P1	VII	深鉢	横伝連続貼付文、円形刺突文、多段連続刺突文(爪形)	
	8	SX181 P1	VII	深鉢	縄文(LR)	
	9	SX181 P1	VII	深鉢	縄文(LR)	
	10	11-17Ⅱ	VII	深鉢	円形刺突文、区画沈線文、竹管連続刺突文	
	11	SK228 P1	VII	深鉢	禹譽状贴付横状把手、多段連続刺突文(花弁形)	
	12	SK152 P1	VII	深鉢	区画沈線文(張狀)、縄文(LR)	
	13	10-13Ⅲ	VII	鉢	ボタン状贴付文、多段連続刺突文(花弁形)	
	14	13-17Ⅱ	VII	深鉢	区画沈線文、多段連続刺突文(花弁形)	
	15	SK139 P1	VII	深鉢	正彫捺糸文(R)	
	16	SK139 P1	VII	深鉢	横伝連続沈線文(2条)、縄垂条線文(蛇行)	
	17	SK139 P1	VII	深鉢	縄文(LR)	
79	18	9-15Ⅲ	VII	深鉢	帶前条線文(弧状)	
	19	12-15Ⅱ	VII	深鉢	通額状陰線文	
	20	10-16Ⅱ	VII	深鉢	帶前条線文(縱横交差)	
	21	11-12Ⅲ	VII	深鉢	横次把手(盲孔・竹管入)、区画陰線文(半截竹管横位刺突入)	
	22	9-16Ⅱ	VII	注口土器	横状把手(手・体往口(8字状))	
	23	11-12Ⅲ	VII	深鉢	円孔(貫通孔)突起横状把手(手孔入)	
	24	11-12Ⅲ	VII	注口土器	横状把手(突起頂上部盲孔・沈線)	
	25	10-12Ⅲ	VII	深鉢	通額状陰線文、区画陰線文(直線刺突入)、縄文(LR)	
	26	SK172 P2	VII	深鉢	区画沈線文(口縁内外面)、横円状陰線文(目口・盲孔入)、横裂刻目文	
	27	11-12Ⅲ	VII	深鉢	内面突起直縫区画陰線文(化藤感付)、弧状沈線文、盲孔	
	28	12-15Ⅱ	VII	深鉢	区画沈線文、蛇行沈線文、縄文(LR)	
	29	10-14Ⅲ	VII	深鉢	横状把手(腰元状斜線入、腰元部撻系压痕)、横円状陰線文(捺痕压痕)、押圧痕	
	30	SK227 P1	VII	深鉢	円窓、多条沈線文	
	31	SK227 P1	VII	深鉢	区画沈線文、交叉ボタン状貼付文・盲孔	
	32	10-12Ⅲ	VII	鉢	区画沈線文(輪縫刻目入)、縄文(LR)	
	33	SX174 P2	VII	深鉢	区画沈線文、多条沈線文、縄文(LR)	
	34	12-15Ⅱ	VII	鉢	区画沈線文(輪縫刻目入)、多条沈線文(浅淡・太幅)	
	35	10-15Ⅲ	VII	深鉢	頂上部削状突起、捺糸压痕(L)	
	36	11-15Ⅲ	VII	深鉢	円形押圧痕、多条沈線文(太幅)、縄文(LR)	
	37	11-13Ⅲ	VII	深鉢	弧状把手(腰元)、区画陰線文、麻手状沈線文、縄文(LR)	
	38	10-14Ⅲ	VII	深鉢	横円状沈線文、区画陰線状文(斜行沈線入)、多条沈線文、縄文(LR)	
	39	10-12Ⅲ	VII	深鉢	横應竹管連続刺突文	
80	40	ST62 P1	VII	深鉢	縄文(LR)	
	41	12-14Ⅱ	VII	深鉢	円形押圧痕、区画陰線状文(斜行沈線入)	
	42	8-13Ⅲ	VII	深鉢	指屈圧痕状縫み内盲孔、区画陰線状文(斜行沈線入)	
	43	12-13Ⅲ	VII	深鉢	盲孔・縫手状沈線文、正彫捺糸文(?)	
	44	10-14Ⅲ	VII	深鉢	横走沈線文、区画陰線文(陳縫盲孔・連続刺突入)、縄文(LR)	
	45	10-12Ⅲ	VII	深鉢	垂下沈線文(曲線)、縄文(LR)	
	46	ST58 P1	VII	深鉢	縄文(R)	
	47	ST58 P1	VII	深鉢	多条沈線文、磨削縄文(?)	
	48	ST58 P1	VII	深鉢	多条沈線文	
	49	SX174 P1	VII	深鉢	円窓(ガネ状)、区画横内文、多条沈線文、縄文(LR)	
	50	SX174 P1	VII	深鉢	連続横刻目文、区画横内文、多条沈線文、縄文(LR)	
	51	SX174 P1	VII	深鉢	二重円筒状文(突起頂上部)、円窓、沈線文、多条沈線文、縄文(LR)	
	52	SX174 P1	VII	深鉢	多条沈線文(手内凹)、区画陰線文、多条沈線文(垂下・蛇行)、縄文(LR)	
	53	SX174 P1	VII	深鉢	異方向縄文(L)	
	54	SX174 P1	VII	深鉢	横走沈線・刺突文、多条沈線文	
	55	SX174 P1	VII	深鉢	多条沈線文(張狀)、縄文(LR)	
	56	SK120 P2	VII	深鉢	盲孔・盲孔上部突起、區划沈線文(突起内外面及び頂上部)、区画沈線文、盲孔、縄文(LR)	
	57	SK148 P1	VII	深鉢	連続横刻目文、区画内・指内文(円窓内多条沈線)、多条沈線文、縄文(LR)	

表12 土器觀察表(2)

器物番号	遺物番号	出土地点	時期分類	器種	文様	備考
80	58	10-15Ⅲ	VII5	深鉢	円文山形突起(円内に沈線)、弧状沈線文、漸縮縦位斜目文、多条沈線文、網文(L.R)	
	59	12-15Ⅱ	VII5	深鉢	(区画延伏状横文)	
81	60	10-14Ⅲ	VII5	深鉢	斜行沈線文、区画横円文・梢円状沈線文、多条沈線文、網文(L.R)	
	61	11-12Ⅲ	VII5	深鉢	区画横円文、多条沈線文、網文(L.R)	
	62	12-16Ⅱ	VII5	深鉢	円底付山形突起(頂上部斜状縫み)、区画沈線文	
	63	10-13Ⅲ	VII1-VII1	深鉢	円底付山形突起、撇手状縫帶文	
	64	9-13Ⅱ	VII5	深鉢	円底付山形突起(頂上部・S字状円孔)、区画横円文、多条沈線文、網文(L.R)	
	65	11-16Ⅱ	VII5	深鉢	円底、円形刺突文(口唇・内側)、ボタン状貼付文(8字状)	
	66	SK174 F2	VII4-5	注口土器	円底付縦状把手(縫帶文)、盲孔。多条沈線文	
	67	SX174 F1	VII6	深鉢	区画沈線文(延伏刺突入)、区画沈線文(平行・同心円)、漸消網文(L.R)	
	68	12-13Ⅱ	VII6	深鉢	区画沈線文(横内・方形状)、磨消網文(L.R)	
82	69	12-14Ⅱ	VII6	深鉢	区画沈線文(縫帶文)、磨消網文(L.R)	SK66出土土器と合
	70	SK36 F2	深鉢	無文		
	71	SK164 F2	深鉢	無文		
	72	SK170 F1	深鉢	網文(L.R)		
	73	SX174 F1	深鉢	正盤撫条文(L)		
	74	12-13Ⅱ	VII6	深鉢	網文(L.R)	
	75	12-15Ⅱ	壺	口唇沈線、網文(L.R)		
	76	11-15Ⅲ	深鉢	正盤撫条文(L)		
83	77	9-17Ⅱ	VII1	深鉢	多段連続刺突文(縫点状)	
	78	SK152 F1	VII1	深鉢	区画罫列刺突文(竹管文)	
	79	SK228 F1	VII2	蓋	多段連続刺突文(魚鱗形)	
	80	11-12Ⅲ	VII2	蓋	区画沈線文、円形刺突文	
	81	SK230 F2	VII2	蓋	多段連続刺突文(花弁形)	
	82	SK172 F2	VII2	蓋	多段連続刺突文(花弁形)	
	83	SK172 F2	VII3	蓋	区画沈線文、盲孔、多段連続刺突文(爪形)	SK172出土土器と合
	84	SK172 F2	VII3	蓋	区画沈線文、盲孔(把手)、多段連続刺突文(列丸状・キャビリ状)	
	85	SK172 F2	VII2	蓋	盲孔起点降縫文(一誤巻状ツマミ・劍目入)、梢円状沈線文、多段連続刺突文(花弁形)	
	86	10-13Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文(隙縫上・S字状刺突入)、多段連続刺突文(爪形・キャビリ状)	12-15出土土器と合
	87	10-15Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文、盲孔、多段連続刺突文(爪形)	
	88	9-16Ⅱ	VII3	蓋	区画沈線文(隙縫入)、区画沈線文、円形刺突文、多段連続刺突文(キャビリ状)	
	89	10-16Ⅱ	VII3	蓋	区画沈線文、盲孔。多段連続刺突文(爪形)	
	90	10-13Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文、多段連続刺突文(縫点状)	
	91	13-16Ⅱ	VII3	蓋	区画沈線文(縫手状)、多段連続刺突文(爪形)	
	92	10-14Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文(劍目入)、盲孔、連続刺突盲点(列丸状)	
	93	10-15Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文、多段連続刺突文(爪形・キャビリ状)	
	94	10-14Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文、多段連続刺突文(爪形・列丸状)	
	95	10-16Ⅱ	VII3	蓋	区画沈線文、盲孔、多段連続刺突文(爪形)	
	96	10-13Ⅲ	VII3	蓋	区画沈線文、多段連続刺突文(花弁形)	
84	97	SK304 Y	VII2	深鉢	区画沈線文(藏手状)、充填刺突文(雨滴状)、充填純文(L.R)、網文(L.R)	RPI8
	98	SX384 F1	VII1	深鉢	区画底下網文(雨滴状)	
	99	EU183	VII1	深鉢	区画沈線文(縫字状・ジグザグ状)、網文(L.R)	RPI2
	100	SK230 F1	VII1	蓋	垂下・区画縫線文、多段連続刺突文(爪形)	
	101	10-15Ⅲ	VII2	注口土器	縫狀把手(円底付)・縫口・縫合状縫狀把手(盲孔・沈線入)	
	102	10-14Ⅲ	VII2	深鉢	多段連続刺突文(花弁状)	
	103	SK188 F2	VII2	深鉢	縫曲条文(交差)	
	104	SK124 F1	VII1-2	深鉢	区画沈線文(突起部・S字状・網文附E)、網文(L.R)	
	105	ST135 F1	VII3	深鉢	突起部円孔(貫通孔)、区画沈線文(横走・ジグザグ状)、網文(R.L.R.L)	
85	106	SK149Y	VII2	深鉢	区画沈線文(突起部・S字状・劍目入)、網目状縫帶文	RPI5
	107	EU236	VII3	深鉢	区画沈線文(ジグザグ状)、網文(L.R)	RPI9
86	108	SK175 F1	VII4	深鉢	円底付山形突起(頂上部S字状盲孔)、盲孔、区画沈線文充填連続刺突文(円形)、多条沈線文、網文(L.R)	
	109	10-14Ⅲ	VII4	深鉢	区画沈線文、多条沈線文(縫状)、網文(R.L)	RPI7
	110	ST62EL238	VII4	深鉢	区画沈線文(垂下・強凸)、磨消網文(L.R)	RPI17
87	111	ST62EL238	VII4	深鉢	無文	RPI22
	112	11-11Ⅲ	VII5	深鉢	梢円状沈線文、多条沈線文(蛇行)、磨消網文(L.R)	
	113	13-16Ⅱ	VII5	深鉢	溝状縫帶線文突起劍目入・半円状劍目入・沈線文(織縫)、盲孔起点区画沈線文(鴨脛)、多条沈線文(財称鴨脛)	10-15,9-12出土土器と合

表13 土器觀察表(3)

擇回 番号	遺物 番号	出土地點 層位	時期 分類	器 種	文 標	備 考
87	114	SX174 F1	W85	鉢	多条沈文(対称彌状)	
	115	SX174 F2	W85	深 鉢	多条沈文(曲下)	
	116	SK154 F3		浅 鉢	縄文(LR)	
	117	SK140 F2		深 鉢	縄文(LR)	
88	118	SK38 F1		深 鉢	無文	
	119	SK36 F2		深 鉢	佛垂莊貞文(K)	
	120	EU192		深 鉢	正整拵系文(L)RP13	SK06-68出土土器上接合
	121	SK38 F2		深 鉢	無文	SK06出土土器上接合
	122	EU237		深 鉢	縄文(L)	RP15
	123	SK149 F1		深 鉢	縄文(L)	
89	124	SX174 F1		深 鉢	無文	
	125	SX174 F1		浅 鉢	無文	
	126	SX174 F1		深 鉢	底部木壓痕	
	127	SX174 F1		深 鉢	無文	
	128	EU234		深 鉢	無文	
	129	SK175 F1		深 鉢	無文	
90	130	ST138 F1		深 鉢	縄文(LR)	
	131	SK191 F1		深 鉢	無文	
	132	SK191 F1		深 鉢	正整拵系文(L)、底部網代底	RP21
	133	EU235		深 鉢	縄文(LR)	RP10
	134	11-13Ⅲ		深 鉢	縄文(LR)	RP9
	135	10-15Ⅲ		深 鉢	無文	RP6
91	136	SK160 F1		深 鉢	底部網代底	
	137	SK227 F1		深 鉢	無文	
	138	SK155 F1		深 鉢	無文	
	139	SK150 F1		深 鉢	底部木壓痕	
	140	SK148 F1		深 鉢	底部網代底(縦横:2本透丸・2本削り)	
	141	9-15Ⅲ		深 鉢	区割比溝文、磨消縄文(LR)	
	142	12-15Ⅱ		深 鉢	底部網代底(縦横:2本透丸・2本削り)	
	143	9-15Ⅲ		深 鉢	底部木壓痕	
	144	10-12Ⅲ		深 鉢	底部木壓痕	
	145	10-14Ⅲ		深 鉢	無文	
	146	12-15Ⅱ		深 鉢	底部網代底	
	147	8-13Ⅱ		深 鉢	無文	
92	148	10-14Ⅲ		深 鉢	底部木壓痕	
	149	10-14Ⅲ		深 鉢	底部木壓痕	
	150	9-15Ⅲ		深 鉢	底部網代底(縦横:2本透丸・2本削り)	
	151	10-14Ⅲ		深 鉢	底部網代底(縦:2本透丸・2本削り、横:2本透丸・1本削り)	
	152	10-16Ⅱ		深 鉢	底部網代底	
	153	12-15Ⅱ		深 鉢	無文	
	154	9-14Ⅲ		深 鉢	底部網代底(縦:1本透丸・2本削り、横:2本透丸・1本削り)	
	155	SX174 F2		深 鉢	底部木壓痕	
	156	9-13Ⅲ		ミニチャーフ土器	縄文(LR)	
	157	SK160 F1		ミニチャーフ土器	逐級側穿文(竹管文)	
	158	9-17Ⅱ		ミニチャーフ土器	無文	
	159	9-15Ⅲ		ミニチャーフ土器	無文	
	160	11-15Ⅲ		ミニチャーフ土器	無文	
	161	11-13Ⅲ		ミニチャーフ土器	無文	
	162	10-14Ⅲ		手 桶	指頭痕	
	163	SK120 F2		手 桶	指頭痕	
	164	10-13Ⅲ		円盤状土製品	磨消縄文(LR)	
	165	10-13Ⅲ		円盤状土製品	磨消縄文(LR)	
	166	10-14Ⅲ		円盤状土製品	縄文(LR)	
	167	10-15Ⅲ		円盤状土製品	佛垂文(L)	
	168	10-14Ⅲ	W82	円盤状土製品	多段連続突突如舟形)	
	169	10-16Ⅱ		円盤状土製品	縄文(LR)	
	170	10-13Ⅲ		円盤状土製品	縄文(LR)	
	171	SX174 F2		円盤状土製品	無文	

(3) 石器

調査で出土した打製石器の器種と点数は、石鏃1点・石錐1点・石匙1点・石箋2点・削器9点・石斧2点であり、これらすべてを図示した。コンテナ20箱相当の出土量に比較してtool割合が極めて少なく、大半がその製作に関連する剥片ばかりであった状況と言える。磨製石器は掲載した石斧5点の他に、折損した基部側の資料2点がある。礫石器では凹石・磨石・敲石・砥石・石皿などの器種を認めている。

打製石器（第93・94図、図版89・90）

1は石鏃である。基部側に丸みを帯びたわずかな抉り込みが入るもので、尖頭部が折損する。

2は横形の石匙である。つまみを上方にした時、その下端と右側縁が刃部となり得るものである。背面側の加工は素材の縁辺において施される。

3は素材となった剥片の一端を尖らせて刃部とした石錐である。全体的に厚みがあり、先端部には摩耗が認められる。

4・5は石箋である。4は撥形であるが中央部がややくびれる形態で、刃部が両刃状となるものである。両面加工となり刃部は丸みを帯びる。5は撥形で片刃状となるものである。主要剥離面側には一切の加工が認められず、刃部の形態は直線状をなす。

削器は9点が出土している。不定形であるが、いずれも縦長剥片を素材としている。6は両面加工により、素材の左側縁が刃部となるものである。7～14は片面加工によって刃部が作出されたもので、刃部の作出位置から次のように細分できる。素材の右側縁が刃部になる7・9・10、末端部が刃部になる11、両側縁が刃部となる8、三縁辺が刃部となる14、左側縁と末端が刃部になる12、右側縁と末端が刃部になる13がある。

縦横比のほぼ等しい厚手の剥片を素材とし、その長軸の一端に刃部を作出した石器を打製石斧とした。形態的には中央からやや基部側の両側縁が抉り込まれる分銅形を呈するもので、基部に対して刃部が大きく、刃部幅は基部幅の約2倍となる。15は主要剥離面側に調整加工を施し、末端と抉入部に至る左側縁に刃部を作出している。刃部は摩滅して全体的に丸みを帯びる。16は素材となった剥片の比較的鋭利な縁辺に調整を施して刃部が作出され、背面側には自然面を残す。15同様に末端と左側縁が刃部となり、使用による摩滅が認められる。

磨製石斧（第94図、図版91）

出土した7点の内、完形品及び全体の大きさが把握できる資料は2点であり、その他のものは基部もしくは刃部の欠損品である。これらは以下の3類に分類できる。

I類：両側縁が面取りされる定角式のもの（17・18・20）。これらの平面形態はやや中膨らみか直線的な長脚二等辺形を基調とし、縦断面形がレンズ状、刃部は両刃となる。法量的には全長10cm前後を測るものである。

II類：定角式磨製石斧であるが、厚みのある大型品で表面中央に凸部を作出しているもの（21）。背面と刃先には敲打痕が認められる。

III類：横断面形が楕円形になる乳棒状のもの（19）。縦断面が扁平な形態となる平刃のもので、基部と刃部の先端が破損しており、敲石に転用されたと考えられる。

礫石器

凹石（第95図、図版92・93）は、全部で30点余の資料が出土している。これらは平面形態や凹痕の在り方などから、以下に示した大別4類が識別された。

- I類：礫の一面に凹みを持つもの（24・28）。平面形は円形を呈する。
- II類：扁平両面に凹みを持つ平面形楕円礫である。凹痕は中央部に1～2箇所認められ、2つある場合でも近接しているため連結する一群（25～27）と、両面2箇所づつある凹部が間隔をおく一群（31・32）に細分できる。
- III類：両面に凹みを持つ平面形長楕円または棒状のもの（33・34）。34は複数の凹みが連続して列状になり、34は棒状礫の長軸先端にも凹痕が観察される。
- IV類：楕円礫の扁平片面と側縁面の二面に凹みを持つもの（29・30）。29の扁平面凹みは規模が大きくしかも内部を研磨しており、右手で持った場合に親指が収まって側縁部で敲打するのに適した形態である。

磨石（第96図、図版93）は全部で50点以上の資料があり、磨面の位置や形態の特徴的な9点（35～43）を例示し分類した。

- I類：礫の一面を磨面として使用したもの。断面形が長方形となる35と、半楕円形扁平礫の長軸平坦面が磨面となる40がある。
- II類：礫の二面を磨面として使用したもの。断面形が楕円状となる扁平礫の一面と一側面を磨面とした36・39と、長方形様扁平礫の両側面が磨面となる41がある。
- III類：礫の三面を磨面として使用したもの。礫の扁平両面と一側面を使用した38・43、横断面形が三角形を呈し各面が磨面となる42、及び平面形方形礫の変則三面を使用した37の別がある。37は磨面が凹面となることから、砥石的な機能が窺われる。

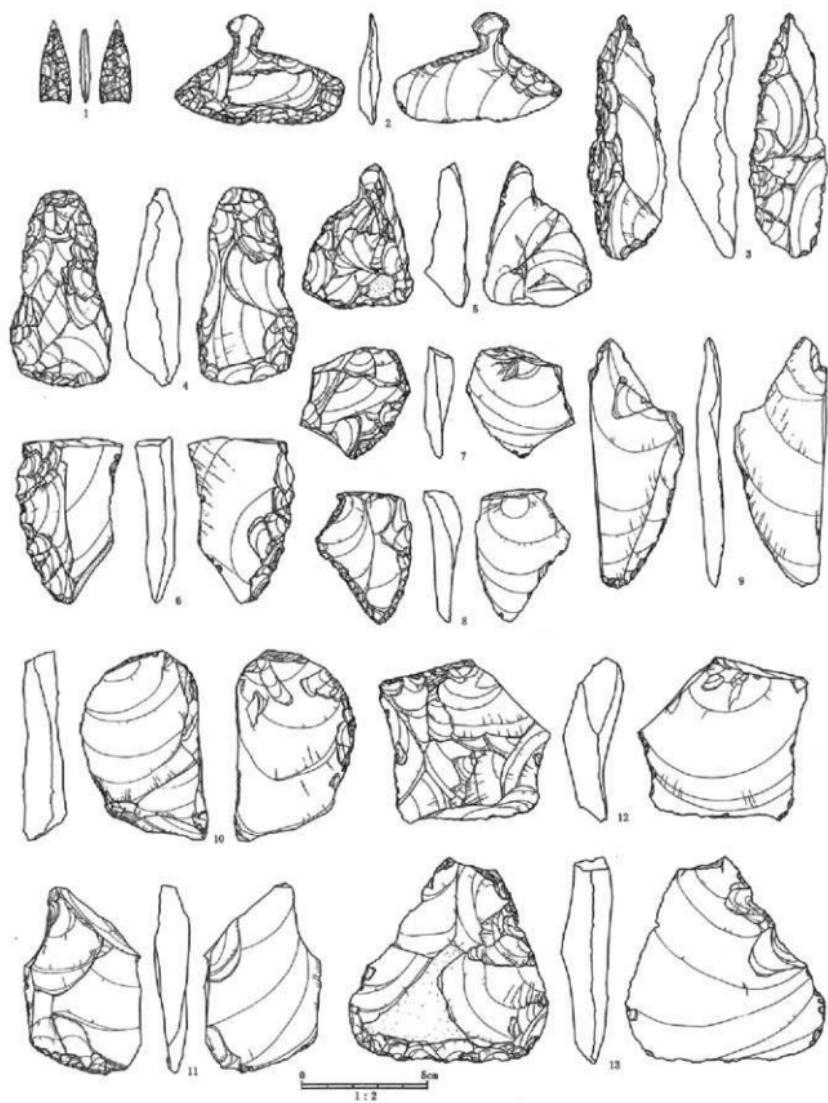
敲石（第96・97図、図版94）はハンマーとして使用されたと考えられるもので、礫の長軸先端または端部に敲打痕が認められる。これらは握り部（基部）に対して敲打部が幅広となるのが特徴で法量的大小や形態から、基部の横断面が三角形様となる小型の44、中型で先端部が薄い扁平礫を使用した45、横断面形が方形を呈す棒状形態の46・47に識別される。

研磨器と考えられる大小の砥石（第97・98図、図版94）が出土している。大型の52は長さ28cm程の柱状のもので、表面中央部が浅い溝状に凹んでおり、内面は磨痕により平滑である。51は小型品で長方形箱型の形態を呈しており、表裏両面が研ぎ面として使用されている。

石皿（第98図、図版96）は、容器状に整形して外縁を有するものの（54）と、扁平な河原石の一面を敲打と磨きにより水平に仕上げるもの（55）の2例を図示した。

（4）石製品

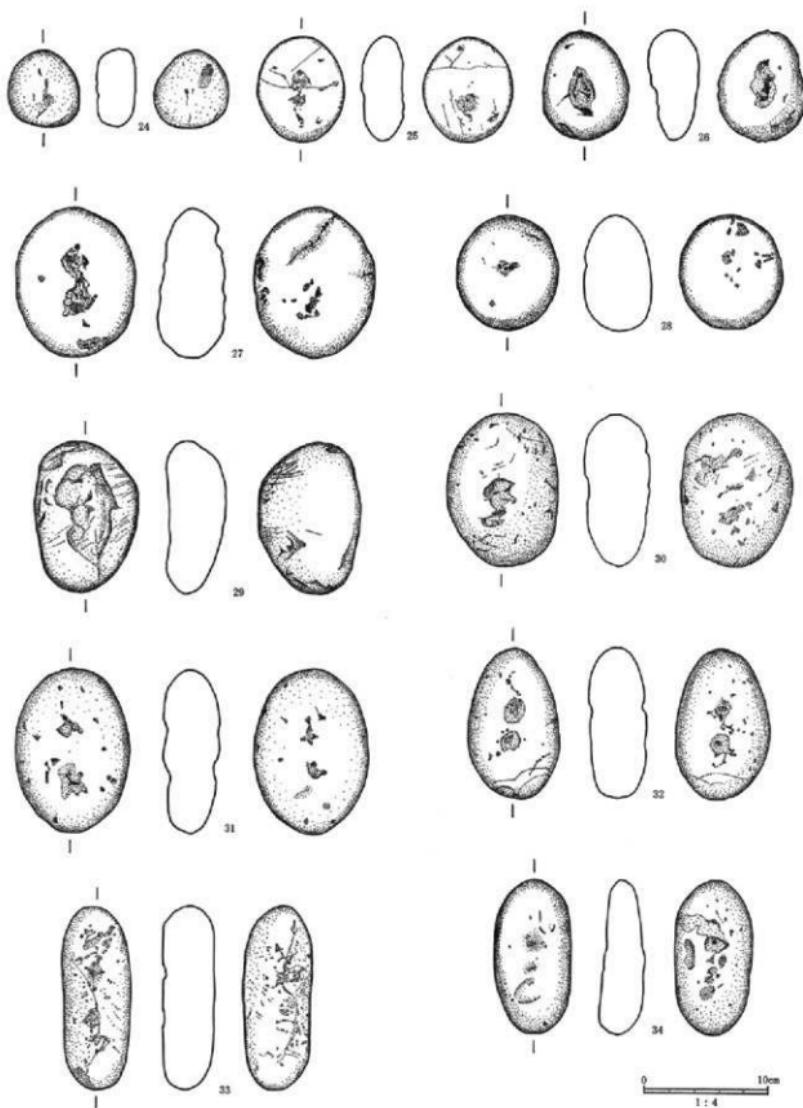
装身具と考えられる穿孔のある石製品（第94図22・23）2点と、祭祀具である石棒（第97・98図、図版94・95）が出土している。石棒は細長の河原石を利用し側縁の一部を敲打・研磨して整形された棒状形のもので、男根形の先頭部を写実的に作り出す形態のものは認められない。例示資料4点（48～50・53）は全長15～24cm範囲のもので、48・53はS K154土坑検出面にて確認されたが、状況等から原位置を留めるものではないと言える。



第93図 打製石器



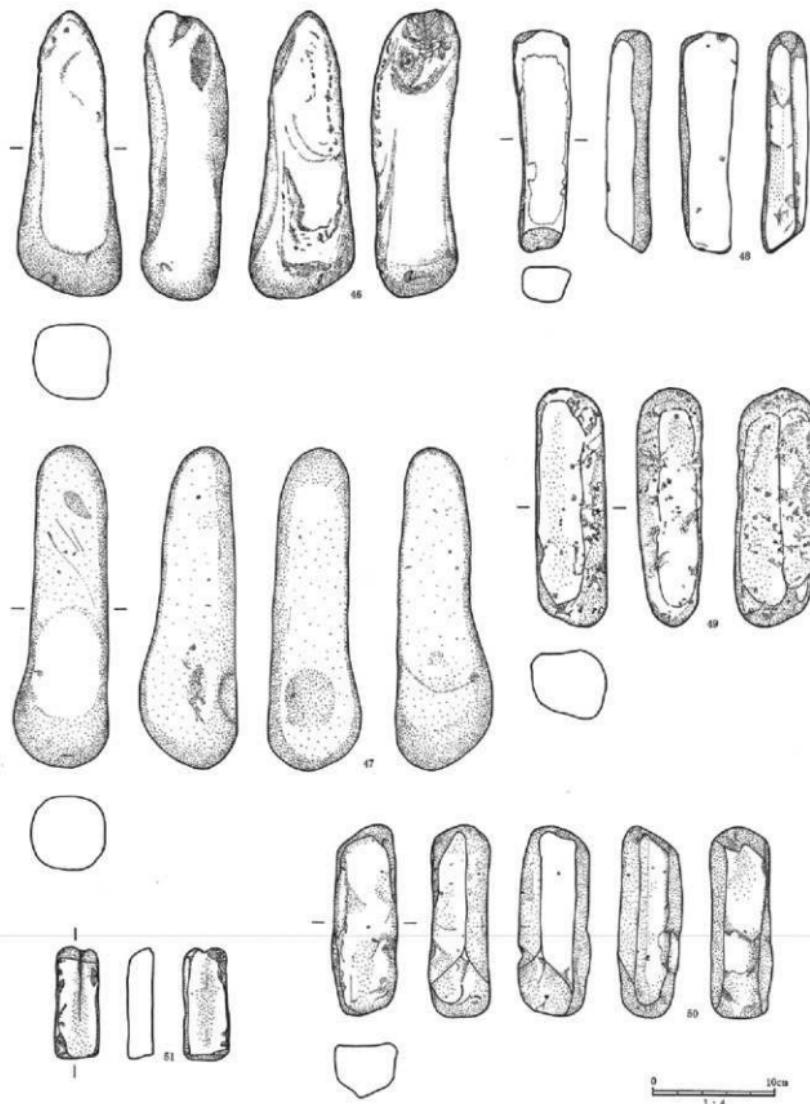
第94図 打製石器・磨製石器・石製品



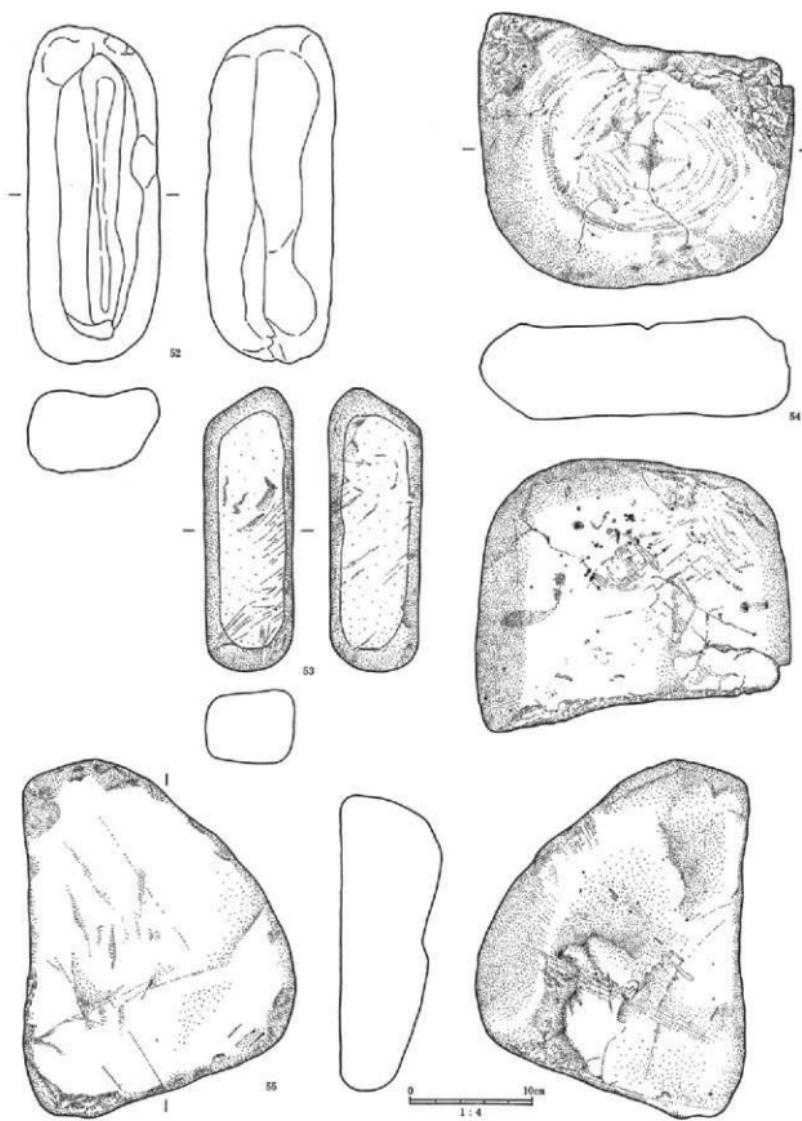
第95図 磨石器 (1)



第96図 磨石器 (2)



第97図 石製品・礫石器(1)



第98図 石製品・礫石器（2）

表14 石器計測表

擇回 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石材	出土地点 層位	分類
			長	幅	厚				
93	1	石 破	(29.5)	12.5	4.0	1.43	珪質頁岩	9-18 II	
	2	石 破	45.0	67.0	7.0	16.53	珪質頁岩	7-21 II	
	3	石 鋸	101.0	31.5	23.5	59.41	珪質頁岩	10-15 III	
	4	石 破	80.5	41.5	22.5	69.31	珪質頁岩	8-20 II	
	5		59.5	44.5	17.5	32.09	珪質頁岩	12-17 II	
	6	削 刀	67.5	40.5	14.0	38.08	珪質頁岩	SK230 F1	
	7		45.0	40.5	12.0	22.36	珪質頁岩	12-15 II	
	8		54.5	38.5	12.5	29.41	珪質頁岩	12-17 II	
	9		102.5	37.0	10.0	39.62	珪質頁岩	SX182 F1	
	10		74.5	48.5	17.5	67.50	珪質頁岩	SK137 F1	
	11		72.0	46.5	14.5	48.38	珪質頁岩	10-14 III	
	12		61.0	65.5	19.5	87.40	珪質頁岩	11-15 III	
94	13		83.5	81.5	19.0	101.18	珪質頁岩	12-14 II	
	14		62.5	35.5	12.5	22.00	珪質頁岩	10-14 III	
	15	打製石斧	78.5	69.5	19.5	85.06	珪質頁岩	11-13 III	
	16		80.0	61.5	23.5	85.35	頁 岩	11-13 III	
	17		96.5	50.5	21.5	175	蛇紋岩	12-17 II	I
	18		63.0	41.0	20.0	95	蛇紋岩	9-15 III	I
	19		136.0	66.0	28.0	360	安山岩	11-12 III	III
	20		82.0	44.0	23.0	155	安山岩	11-16 III	I
	21		112.0	62.0	44.0	424	ホルンヘルス	12-14 II	II
22	穿孔石製品		81.0	69.0	32.0	232		11-14 III	
	23		39.0	26.0	22.0	18.90		10-15 III	
95	24	圓 石	64.0	58.0	32.0	202		11-12 III	I
	25		86.0	73.0	32.0	298		10-15 III	II
	26		89.0	71.0	37.0	323		SK73 F1	II
	27		122.0	100.0	50.0	910		10-14 III	II
	28		93.0	82.5	53.0	640		11-14 III	I
	29		124.0	87.0	46.0	820		SK148 F1	IV
	30		126.0	90.0	52.0	740		10-14 III	IV
	31		134.0	95.0	45.0	700		10-14 III	II
	32		123.0	75.0	48.0	580		ST135 F1	II
	33		150.0	58.0	42.0	481		10-12 III	III
	34		127.0	63.0	35.0	407		10-14 III	III
96	35	磨 石	81.0	75.0	36.0	362		9-15 III	I
	36		97.0	73.0	53.0	475		SK143 F1	II
	37		83.0	74.0	45.0	427		13-17 II	III
	38		96.0	68.0	41.0	403		9-15 III	III
	39		102.0	100.0	50.0	780		SK91 F2	II
	40		121.0	61.0	37.0	370		SK149 F7	I
	41		101.0	54.0	34.5	334		SX222 F1	II
	42		119.0	70.0	48.0	477		SK164 F4	III
	43		97.0	77.5	41.0	380		SK164 F4	III
	44	敲 石	135.0	68.0	32.0	427		6-22 II	
	45		194.0	64.0	28.0	660		10-14 III	
	46		246.0	83.5	62.0	1380		10-15 III	
97	47		265.0	76.0	77.0	1820		10-15 III	
	48	石 棒	190.0	39.0	25.0	430		SK154 F1	
	49		195.0	66.0	53.0	990		10-15 III	
	50		158.0	59.0	51.5	600		SK125 F1	
98	51	砥 石	91.0	37.0	21.0	151		12-13 II	
	52		277.0	107.0	67.0	3290		SK175 F1	
	53	石 棒	234.0	74.0	64.0	1890		SK154 F1	
	54	石 盆	258.0	226.0	85.0	6300		10-14 III	
	55		293.0	223.0	86.0	6880		10-14 III	

4まとめと考察

遺跡は山形県西置賜郡小国町大字綱木箱ノロ字千野に所在し、野向・市野々向原遺跡より約3.5km下流の横川左岸河岸段丘に立地する。遺跡範囲は中位段丘面を中心とした東西40m・南北80mと推定され、縁辺に近い南半部に約1,600m²の調査区を設定し発掘調査を実施した。調査で得られた成果について以下に要約し、若干の考察を加えてまとめる。

- 1) 千野遺跡では、縄文時代中期末葉から後期前葉に係る遺構・遺物の存在が確認された。主体となったのは住居跡等の検出事例より後期であり、遺物の出土量も豊富で土器型式には継続性が認められた。
- 2) 検出された遺構は、敷石を含む竪穴住居跡・石組炉・配石遺構・土坑・埋設土器など総数約240基である。分布の概観は調査区北半部に集中する様相が指摘され、集落の主体域であったと理解された。
- 3) 竪穴住居跡は傾斜面に隣接させて分布する3棟を検出した。いずれも石組炉を有し、径2m程の小規模なものであった。住居は壁沿いに小穴が巡る構造から、壁柱によって上屋が支えられていたと推測できた。石組炉は方形またはコの字状に礫石を配した造りで、3棟とも床面東側に付設される共通性が窺えた。ST135では南東側にテラス状の張り出しがあり、出入口施設と解釈した。これら住居跡の構築時期は、出土土器より後期前葉に位置付けられた。
- 4) 敷石住居跡は竪穴住居と同規模のもので、東側に付設された石組炉を取り囲むように扁平礫を敷き詰めていた。炉は内部に土器を据えた土器埋設石組炉であり、二分割された炉体内個々に深鉢形土器が認められた。炉体土器は壠之内I式に併行するものであり、構築は竪穴住居群と同時期に比定された。
- 5) 200余基を数える土坑は、フラスコ状や袋状を呈するものが多く存在した。本稿ではこれらを形態的特徴の他、構築場所や遺物出土状況等の観点から6種のグループ化を行い、各々について概説した。これら土坑の構築時期は、出土土器により中期末葉から後期前葉の範疇で捉えられた。
- 6) 調査区北東域において2基の配石遺構を確認したが、配石下より土壌は検出されなかつた。埋設土器は7基確認され、その分布状況や埋設姿勢に規則性はないと窺われた。土器型式の判明した3基は、後期初頭の所産と判断された。
- 7) 出土した遺物は土器・土製品・石器・石製品など108箱相当分で、後期前葉に属する縄文土器は完形品がないものの、質・量とも一括した良好な資料であった。toolが少なく、礫石器類が多い特徴も窺えた。分布の概観では遺構同様に調査区北半に集中しており、遺構内からまとまった遺物が出土したのは、住居城よりも北東部検出の土坑群であった。
- 8) 土器の出土量はコンテナにして63箱であり、先に述べた如く量的主体は後期に属する土器群であった。これらは三十稻場式及び南三十稻場式に比定されるもので、従来の土器型式で6型式に分類された。本稿では、深鉢形土器・(浅)鉢形土器・注口土器・蓋形土器・ミニチュア土器等に類別し、復元図化できたものを中心にして器形的特徴や文様構成要素な

どについて概述した。

- 9) 打製石器は20箱相当の出土量に対してtoolの点数が極めて少なく、その製作に関する剥片が大半を占めた。磨製石斧は7点出土しており、礫石器には凹石・磨石・敲石・砥石・石皿など多様な器種が認められ、量的にも充実した内容であった。

(1) 敷石住居跡について

住居跡を「竪穴式」と「平地式」に大別した場合、敷石住居跡は後者に属するものである。関野克は平地住居を「平地即地表を床として住居を営んだ形式」とし、そこに敷石がある場合「床の湿潤を防ぐ為に石を床に敷き詰めた」ものとの考えを示している(関野1934)。また、後藤守一は平地住居について、縄文時代中期末から後期の初めにのみ存在する住居はそれ以前も以後も竪穴住居であることから、敷石遺構のすべてが住居であるとは限らないとした上で、敷石住居を「家の床として、地面に相当大形にして、かつ面の平坦なる石を敷き並べた構設の遺址と思惟せられるもの」と概念規定し、「敷石住居は竪穴から平地住居への過渡時代の住居型式」としている(後藤1940)。さらに、敷石住居の性格に関しては佐藤攻が、「単一の集落内部において、確実にこれらの住居址が存在するとするならば、その集落の単位内部における祭祀的行為を行うべき住居もしくは同祭的な特別な人間の居住を指摘することができるであろう」との考え方を示し、敷石住居の特殊性を唱えている(佐藤1970)。

本遺跡の敷石住居跡は機能や性格については定かでないが、規模が他の竪穴住居跡とほとんど変わりがなく、また東側に付設される炉の位置の共通性などから、一般的な住居跡であると考えられる。構造的には地面を掘り込んで敷石が配されることから、竪穴式と平地式の中間型式と窺われ、この点で後藤の言う「竪穴から平地住居への過渡時代の型式」と捉えられるのである。住居跡の年代は炉体土器となった深鉢から壙之内1式期に位置付けられ、敷石住居としては終末期に属すると言える。遺跡における住居跡の変遷は、出土土器から推察する限りS T135→S T62(敷石住居跡)→S T58となり、不明なS T67も共存した可能性は低いと考える。とすれば、一時期に1棟ずつ存在したことになる。敷石という特殊な住居が構築された時期には、当地にその型式が伝播したと考えられるが、終末期であったために一時的な存在にしかならなかつたと推測されるのである。

(2) 遺跡の性格

検出された住居跡の規模や構造から察して、これらはいずれも定住性を持つものではなく、先の2遺跡同様に季節的に使用したキャンプサイトと想定される。出土遺物の比率に見られる特徴は打製石器におけるtoolの点数が少なく、これに対し石皿等の礫石器が多いこと、磨製や打製の石斧が一定量存在することなどである。打製石器では石核やその製作に拘わる剥片が多く認められ、例示できなかったものの接合される剥片がS X43からまとめて出土しており、遺跡にて石器生産が行われていた事例と受け取られる。また、埋設土器や配石・立石遺構、さらにはミニチュア土器等の存在から祭祀性が窺われる。これらから遺跡は定住地ではなかったものの、継続的に居住していた様相が指摘される。

VII 総括

縄文土器の編年（第99～101図）

野向他2遺跡から出土した縄文土器は、断続的ながらも早期中葉から晩期中葉までに至る幅広い時期のものである。中でも集落の存続に係わる時期は、竪穴住居跡等の検出事例より中期末葉から後期前葉にかけてであり、土器の出土量もこの期間のものが主体を占めている。しかし、出土した土器は小破片のものが大半で、全体の器形や文様構成の把握できる資料は少ないというのが実状であった。

本章ではこれらを所属時期によって大別して、縄文土器についての編年的位置付けを行う。型式的に連続性のあるものは一括し、また1点のみの確認であっても前後の型式と連続しないものは一群として扱ったため、以下に示す9群に分類される。なお、土器群の分類は遺構単位で出土したものはともかく、包含層出土土器については遺物の時間的な前後関係を層位的に捉えることが不可能であった。したがって、その基準となったのは従来の編年研究の成果をもとに、文様や施文手法の観点から分類を行ったことを断つておく。

第Ⅰ群土器

貝殻文や沈線文を主体とする早期前～中葉に属するものである。器種は尖底深鉢で、平縁もしくは波状縁となる器形と認識される。

1類：斜格子状沈線を施文するもの。器面は内外面の削り・磨き調整が丹念に行われ、焼成も良好である。胎土に纖維は含まれない。

2類：沈線文・貝殻腹縁圧痕文・連続刺突文等により文様構成されるもの。文様要素は太・短沈線文に加え、貝殻腹縁文や爪形刺突文等が多様される。

3類：沈線文・貝殻腹縁圧痕文・連続刺突や押引文等により文様構成されるもので、2類に比較して器厚は薄手となる。

1類は沈線文系土器として扱われ、竹之内式または関東の三戸式に比定される。2・3類は貝殻沈線文系土器であり、2類は関東の田戸下層式に併行するものである。この中で曲線的なモチーフとく字状の押引文が主体を成す類は、明神裏Ⅲ式に比定されよう。3類は田戸上層式に併行すると見られるもので、連続刺突文が口縁部に集約される特色を有する類は常世式に属すると考定できる。

第Ⅱ群土器

撫糸圧痕文が主体的に施され、前期初頭に位置付けられるものである。器種は屈曲の少ない深鉢が一般的と認識される。口縁部文様帯には撫糸圧痕文を巻手状に施しており、胎土に纖維を多量に含んでいる。東北南部の上川名Ⅱ式土器と判断される。

第Ⅲ群土器

半截竹管や櫛歯状工具による沈線文と各種の撫糸文が特徴的な一群で、前期中葉に位置付けられるものである。口縁に4単位の山形突起を持つ深鉢は、突起部に貼付文を配するものもある。胎土には纖維を含むものが多く、大木2a式の範疇に比定される。

時期	関東	南東部北	新潟	市野々向原	野向
縄文早期	I 1	三戸 竹ノ内	新潟		
	I 2	田戸 明神裏 下層Ⅲ	室谷		
	I 3	田戸 常世 上層	II 群世		
	II	花積下層 上川名Ⅱ	布目		
	III	黒浜 大木2a	大湊		
	IV1	諸磯 大木3	刈羽		
	IV2	諸磯 大木4 b	泉龍寺		
	V	十三 菩提	大木6		

第99図 出土土器編年(1)

第IV群土器

半截竹管による沈線や押引文、または粘土紐の貼付けによって文様が施される前期後葉に属する一群である。後者の資料からは、口縁が大きく外反して開く深鉢形態が窺い知れる。

1類：半截竹管や棒状工具による沈線文・押引文を施文するもの、及び刻目のある粘土紐が貼付けられるもの。胎土中への纖維の混入は微量である。

2類：口唇や口縁に刻目のない粘土紐貼付文が施されるもの。文様単位として細い粘土紐を小波状に巡らし、太紐にてV字状や波状の装飾文を作り出すことが特徴である。これらのモチーフは、口唇や口縁内側に貼付けられる。

1類は沈線で区画された口縁部文様帶に山形沈線が施文されたり、上面に刻目が施された粘土紐を巡らすなどの特徴から大木3式に考定される。2類は粘土紐貼付文が盛行する型式と捉えられ、口縁部の立体的な装飾文によって文様構成される大木4式土器に位置付けられる。

第V群土器

半截竹管や棒状工具による沈線文・押引文、及び粘土紐の貼付けによって文様構成される前中期葉に属する一群である。器形は頸部でくの字状に大きく縫れる形態が多く、口縁部が肥厚するものも認められ、文様帶は口縁部・頸部・胴部に分割することが特徴となる。頸部文様帶には数条の沈線文や爪形の押引文あるいは鋸歯状の貼付文が施され、口縁・胴部文様帶の区画線となっている。これらは大木6式土器の範疇に捉えられ、関東の十三菩提式や新潟県の重箱場式に併行する要素を持つと考えられる。

第VI群土器

半截竹管による平行沈線を描出した中期前葉に属するものである。深鉢の器形は頸部に縫れを持ち、胴部上半が張り出す形態と窪われる。頸部に施された横位隆線には爪形刻目文が付けられ、胴部には平行沈線が縦走している。北陸の新保式に後続する新崎式に比定される。

第VII群土器

隆線や沈線を用いて縁どった文様の内外部に地文を充填する土器群で、中期末葉に属するものである。器種に深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器等が認められ、深鉢の器形は口縁部が外反もしくは外傾するものが多い。

1類：器面全体もしくは肩上・中部にS・C字状文が幅広の沈線で描かれ、文様内部に地文が充填されるもの。地文は単節繩文が主体となり、沈線は線を引いた後に磨き調整が加えられることもある。

2類：器面上半部にS・C・U字状文や波状文が隆・沈線によって描かれ、文様の内外部に地文が充填されるもの。文様の内部は無文で、外側に地文が充填されるものも多く認められる。地文は単節繩文が主体だが、撚糸文も見られる。

1類は横方向に文様が展開するものであるが、文様は単独で描かれることが多い様相から大木10式古段階に位置付けられる。2類は文様がしだいに器面上半部に集約される傾向が認められ、文様は連結したS字・U字状文が基本となり、区画内に刺突文が加えられるものが存在する等から、新相を示す大木10式土器と捉えられる。

時 期		南東北新潟 東部北陸		市野々向原		野 向		千 野	
VII	阿 玉 台	大 木 VII E	7b	加曾利 IV (古)	大 木 IV (古)	冲	16-11	16-9	7b-3
文 中 期	加曾利 VII E	大 木 IV (新)	原	大 木 IV (新)	大 木 IV (新)	冲	16-1	16-4	16-7
				16-22	17-24	17-25	17-27	17-28	17-29
				41-21	41-22	41-23	41-24	41-25	41-26
				40-21	40-22	40-23	40-24	40-25	40-26

第100図 出土土器編年(2)

時 期	關 東 部 北 海	市 野 々 向 原	野 尚	千 野
VII 期 I	稱 名 綱 三 十 取 場 相 (古)			
VII 期 II	稱 堀 之 內 (古) (古)			
調 期 文	堀 之 三十 相 場 相 (新) (古)			
後	堀 之 三十 相 場 (古)			
VII 期 I	堀 之 三 内 (古) 相 場 (中)			
VII 期 II	堀 之 三 内 取 十 相 (新)			
VII 期 III	堀 之 (新) (新)			
VII 期 IV	安 大 石 3a B			
VII 期 V	安 大 朝 3b BC			
VII 期 VI	安 大 朝 3c C1 日			
調 期 文	弘 生 (X)			
前 期	前 期 後 半			
中 期	前 期 半			

第101図 出土土器編年(3)

第VII群土器

隆・沈線によって文様帯が区画され、特徴的な刺突文や貼付文及び条線文や集合（多条）沈線文が施されるものを一括した。これらは刺突文系土器と沈線文系土器に大別され、後期初頭から前葉に属するものである。器種に各種鉢・壺・蓋・注口土器が認められ、深鉢の器形は口縁部から頸部にかけてくの字状に外反し、球形長胴を呈するものが精製土器に多く見られる。その他には胴部から口縁部まで屈曲せず直線的なものや、口縁部が内傾するもの等が知られる。

- 1類：深鉢は頸部に刺突などのある隆線文を巡らし、口縁部より垂下して連結する区画隆帶文を持つことを特徴とする。口縁部は無文となるが、区画沈線内に充填繩文が施されるものが一部残存する。他には胴部にJ字状の沈線文が施文されるもの、小型の橋状把手を有するものなどが存在する。地文は繩文と花弁形や爪形の刺突文が見られる。
 - 2類：深鉢頸部の隆帶は一周せず連鎖しないX字状になること、あるいは口縁に4単位の逆凹状山形突起を形成して巡る隆帶が貼付けられることを特徴とする。後者はやや先行する形態と認識され、編年表では1類に含めている。橋状把手は1類に比較して大型になり、形状も多岐にわたる。地文は刺突文が主体的で、他に条線文や撫糸文がある。蓋は側辺に把手を持ち、刺突のある隆帶を施文するものが認められる。
 - 3類：頸部に隆帶を巡らす深鉢は縫れが弱まり、橋状把手は扁平になって小型化となるか、退化して口縁に癒着し突起や貼付文に変容する。口縁部や胴部には、沈線による区画文等が施されるようになる。蓋は隆帶や沈線を端部に並行または渦巻状に施文しており、加飾が著しくなると同時に端部の抉りが大きくなる。地文は繩文の他、特徴的な花弁状の刺突が姿を消し、刻目や方形状の連続刺突文が整然と列状に施される。
 - 4類：頸部が縫れる深鉢は口縁端部が複合口縁状に屈曲して立ち上がり、平縁に突起を持つことを特徴とする。肥厚した口縁部に文様を集約させたものが多く、端部に円形押捺文を巡らすものもある。複合口縁状の端部には縫帶文等が施され、地文となる繩文の上から弧状や縦位の集合沈線が施文される。
 - 5類：深鉢は4類と同様の特徴を有し、口縁に縫帶文を施して端部に沈線による刻目を施文するものが増える。口縁には透かし文様の大型突起を付加するものも認められる。胴部の文様は集合沈線文が盛行し、繩文地に沈線を斜行・蛇行・弧状に施して幾何学的な文様を描出している。
 - 6類：沈線により幾何学的な文様を施文して、充填繩文ないし磨消繩文が多用され、文様構成は横位に展開する傾向が指摘されるもの。口縁裏に沈線が引かれたり、口縁が内側に折れ曲がるもののが認められる。
- 1類は称名寺I式及び綱取I式に併行する三十稻場式の古段階に位置付けられるが、新潟県城之腰遺跡（藤巻他1991）の土器編年に倣って、祖型と考えられるものを分割して扱った。3類までを三十稻場式に比定される刺突文系土器とし、4類以降が沈線文系土器に相当するものである。4類・5類は南三十稻場式を主体とする堀之内1式及び綱取II式に併行するもの、6類は堀之内2式に位置付けられると考える。

第IX群土器

三叉状入組文や羊歯状文等により文様構成される晩期前葉から中葉に属する一群である。器種に深鉢・浅鉢・壺・注口土器などがあり、地文の縄文は綾絡文が多い。

1類：曲線的な三叉状入組文が沈刻されるもの。口縁部装飾帶にB字形突起を付加し、口唇に大きな刻目を施しており、器面は丹念に研磨される。大洞B式に比定される。

2類：羊歯状文が施されるもの。注口土器の口縁にはB字形突起と浮彫装飾小突起が付けられる。浅鉢は頸部のみに文様が描かれる半精製である。大洞BC式に比定される。

3類：平行沈線間に刻目や刺突が付けられるもの。羊歯状文が押し潰されて平行沈線化するものである。頸部文様帶に珠文状の浮文を施すものがある。大洞C1式に比定される。

以上のような9群の分類を試みたが、層位的に捉えられなかった出土状況から文様や施文手法に頼った位置付けであり、時間軸に組み入れることに無理があるのは否定できない。また、編年表については各地方間での型式対比に問題点を含み、必ずしも整合しない点があることを付記しておく。ただし、当該地域の縄文時代遺跡においては以前より指摘されているように、前期末葉から中期中葉にかけて新潟や北陸地方の影響を受け(新崎式土器など共伴)、中期後半にはそれらの影響が一旦薄れ、後期に入ると三十船場式土器が流入するなど再び北陸の影響が強まる傾向が、今回の調査でも立証されたことは確かである。

《引用・参考文献》

小国町文化財研究会 1988:『小国町の文化財一埋蔵文化財編一』

山形県 1990:『土地分類基本調査 小国・手ノ子』

大川 清・鈴木公雄・工楽喜通 編 1996:『日本土器辞典』雄山閣

新潟県考古学会 1999:『新潟県の考古学』高志書院

- 関野 克 1934:『日本古代住居址の研究』『建築学雑誌』591
 後藤 守一 1940:「上古時代の住居」(上)・(中)・(下)人類学先史学座15~17
 興野 義一 1967:『大木式土器理解のために(Ⅰ)』『考古学ジャーナル』13 PP16~18
 興野 義一 1968:『大木式土器理解のために(Ⅱ)』『考古学ジャーナル』16 PP22~25
 興野 義一 1968:『大木式土器理解のために(Ⅲ)』『考古学ジャーナル』18 PP8~10
 佐藤 攻 1970:「『縄文中期聚落についての問題点』『信濃』第22巻第4号
 今村 啓爾 1973:「霧ヶ丘遺跡の土壤群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 PP131~159
 丹羽 茂 1981:『大木式土器』『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器II』PP43~60
 鈴鹿八重子 1982:「ピット」『東北新幹線開通遺跡発掘調査報告書V.鳴神・柿内戸遺跡』
 福島県文化財調査報告書第101集 PP332~340
 斎野 裕彦 1983:「考察・まとめ」沼原・嶺山地区的層位関係と土壤・土壤群について
 『茂庭』仙台市文化財調査報告書第45集 PP518~539
 都築恵美子 1990:「堅穴住居址の系統について—縄文中期後半から後期初頭の住居変遷と時期的動態ー」
 『東京考古』第8号 PP1~15
 庄内 昭男 1994:『貝殻文』『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器III』PP203~218

 柏倉 亮吉 他 1970:『山形県西置賜郡小国町朝倉遺跡発掘調査報告書』建設省東北地方建設局
 渡部徳太郎・塙原勇太郎 1980:『蟹沢遺跡発掘調査報告書』小国町埋蔵文化財調査報告書第3集
 渡部徳太郎・塙原勇太郎 1981:『团子山遺跡発掘調査報告書』小国町埋蔵文化財調査報告書第4集
 阿部明彦・名和達朗 1981:『下野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第38集

- 佐藤正俊・名和達朗 1982:『墓塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第58集
 佐藤 正俊 他 1983:『谷地遺跡』『農林事業関係遺跡(1)』発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第63集
 福島県立博物館 1983:『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告書第17集
 黒坂雅人・渡谷孝雄 1989:『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
 阿部明彦・月山隆弘 1990:『川口遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
 藤巻 正信 他 1991:『開越自動車道関係発掘調査報告書』城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集
 佐藤 庄一 他 1995:『古屋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
 佐藤庄一・黒坂雅人 1996:『富沢1進跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
 菅沼 宜 他 1997:『野音遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
 小間真司・渡辺 薫 1997:『津谷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集
 佐藤喜春・國井 修 1997:『宮下遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第47集

報告書抄録

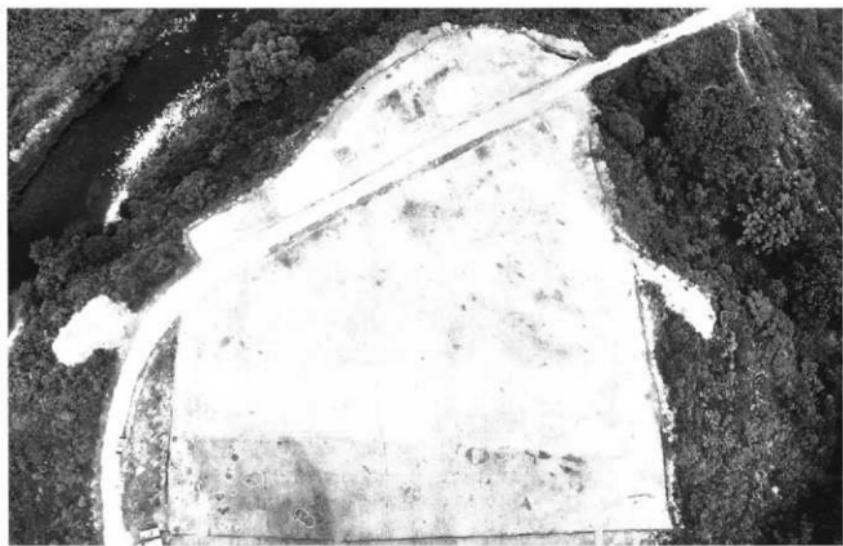
ふりがな	のむかいいせき・いちのむかいはらいせき・せんのいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第71集						
編集者名	須賀井新人 黒沼幹男 國井修						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301						
発行月日	2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度登録	東經 度登録	調査期間 19970519 ~ 19970801	調査面積 (m ²) 7,900	調査原因
やまとたけん 山形県 おこてまち 小国町 おおみやぎのいの の大字市野々 あざののむら 字野向	平成元年 度登録	38度 36分 00秒	139度 49分 14秒				
やまとたけん 山形県 おこてまち 小国町 おおみやぎのいの の大字市野々 あざののむら 字野向	1425 6401	38度 49分 00秒	139度 49分 18秒	19970728 ~ 19971015	8,100		横川ダム 建設工事
やまとたけん 山形県 おこてまち 小国町 おおみやぎのいの の大字木箱 のくわざせん のノロ字千野	1423	38度 02分 16秒	139度 49分 46秒	19971023 ~ 19971126	1,600		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野向遺跡	集落跡 狩獵域	縄文時代 (前期・中期)	堅穴住居 複式炉 陥穴 土坑 ビット	1 2 11 335	縄文土器(深鉢・浅鉢) 打製石器(石鏃・石錐 尖頭器・石籠等) 磨製石斧 凹石・磨石・石皿	時期と狩猟法の異なる2形態の陥し穴群を検出した。 遺跡は狩猟域の他、季節的に滞在したキャンプサイトと考えられる。 (総出土箱数:27)
市野々向原 遺跡	集落跡	縄文時代 (早期・ 前期・ 中期・ 後期・ 晩期)	堅穴住居 石組炉 集石土坑 土坑 埋設土器 ビット	1 2 3 370 2	縄文土器(深鉢・浅鉢・ 蓋・注口土器) 打製石器(両尖匕首1・ 石鏃・石匙・削器等) 石製品(垂飾り1) 凹石・石棒・石皿・砥石	遺跡は狩猟・採集のため季節的に逗留したキャンプサイトである。 また、石器生産跡としての性格も考えられる。 (総出土箱数:63)
千野遺跡	集落跡	縄文時代 (中期・ 後期)	堅穴住居 敷石住居 石組炉 土坑 配石遺構 埋設土器 ビット	3 1 5 200 3 7	縄文土器(深鉢・浅鉢・ 蓋・注口土器) 円盤状土製品 打製石器(石鏃・石匙・ 尖頭器・石斧等) 磨製石斧 穿孔石製品2 凹石・礫石・石棒・砥石	山形県内で初出となる敷石住居跡を検出した。 遺跡は縄文時代後期前葉を中心に継続的に営まれた集落跡である。 (総出土箱数:123)

図 版



遺跡全景(北から)



A区遺構検出状況

図版2



S T 334 検出状況 (北から)



S T 334 土層断面 (北から)



S T 334 土層断面 (南から)



E L 452 複式炉 土層断面 (西から)



S T 334 完掘状況 (南西から)
堅穴住居跡



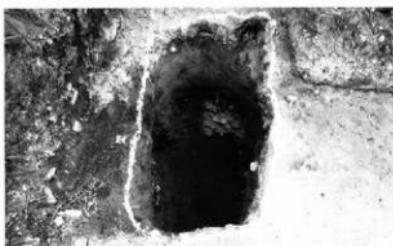
SK10 土層断面 (東から)



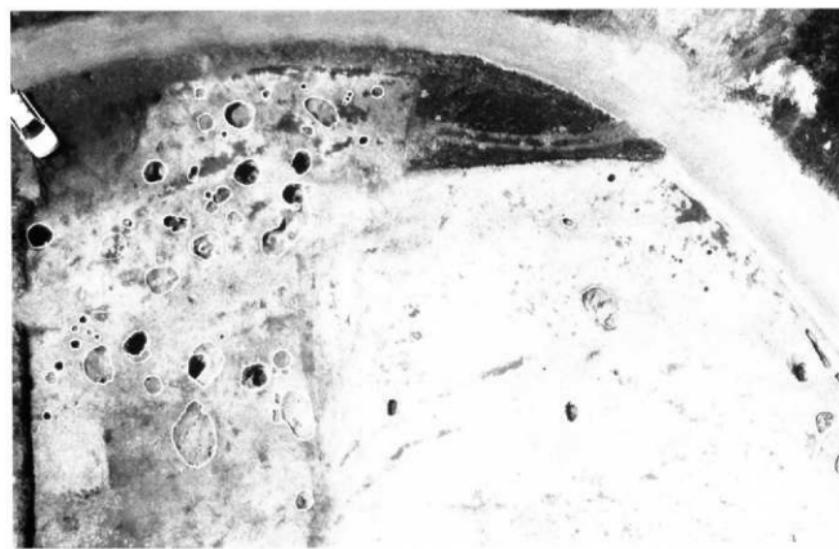
SK10 完掘状況 (東から)



SK11 土層断面 (東から)



SK11 完掘状況 (東から)

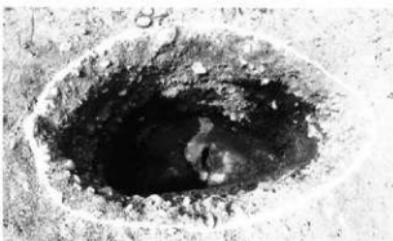


A区検出陥し穴群配列状況
陥し穴

図版 4



S T140 完掘状況 (南から)



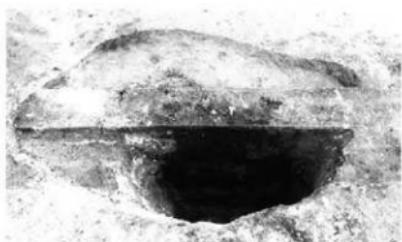
S K152 完掘状況 (南から)



S K151 土層断面 (東から)



S K151 完掘状況 (南から)



S K125 土層断面 (南から)



S K125 完掘状況 (南から)



S K127 土層断面 (西から)

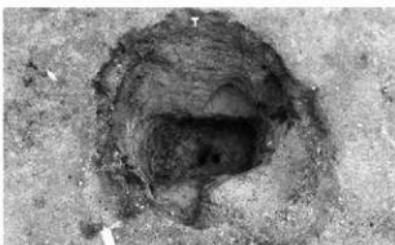


S K127 完掘状況 (南西から)

陥し穴



SK 147 土層断面 (北から)



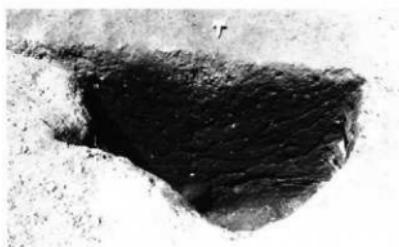
SK 147 完掘状況 (南から)



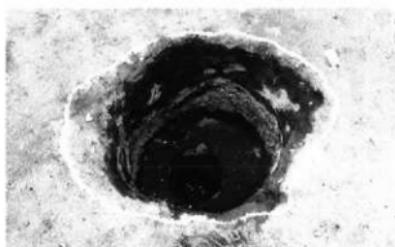
SK 109 土層断面 (南から)



SK 109 完掘状況 (南から)



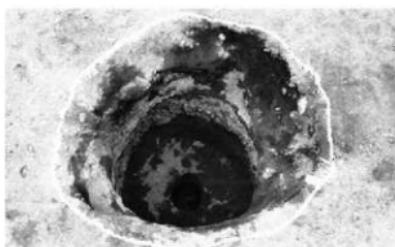
SK 442 土層断面 (南から)



SK 442 完掘状況 (南から)



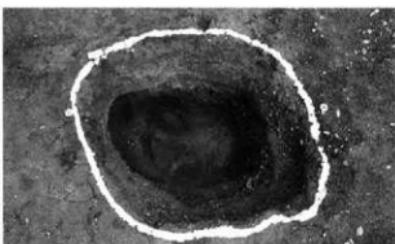
SK 445 土層断面 (西から)

SK 445 完掘状況 (南西から)
陥し穴

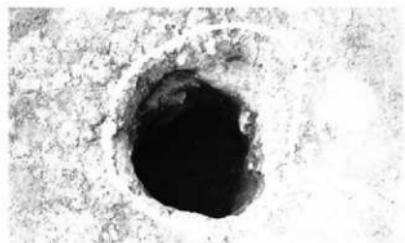
図版 6



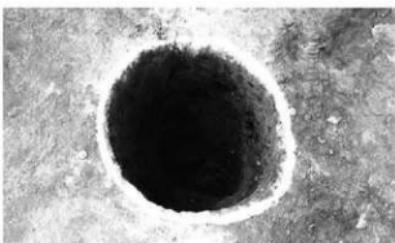
SK 385 完掘状況 (南から)



SK 383 完掘状況 (南から)



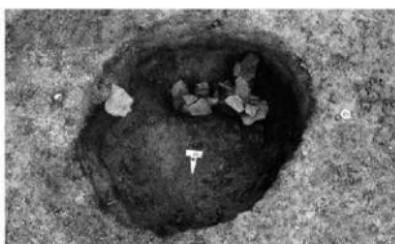
SK 385 完掘状況 (南から)



SK 393 完掘状況 (南から)



SK 384 土層断面 (南から)



SK 384 完掘状況 (南から)



SK 394 完掘状況 (南から)

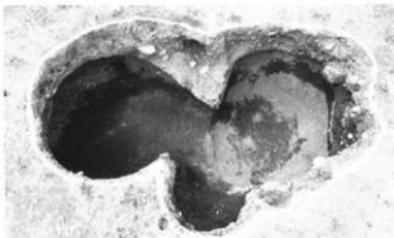


SK 408 完掘状況 (南西から)

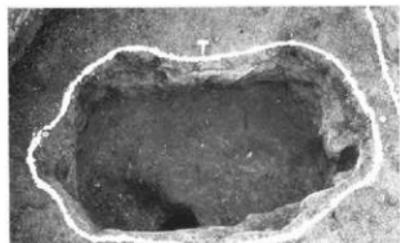
土坑



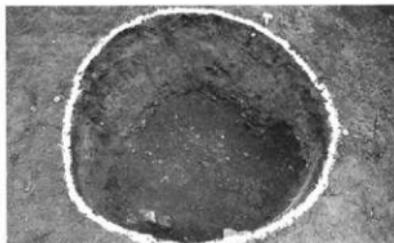
SK 113・114 土層断面(南から)



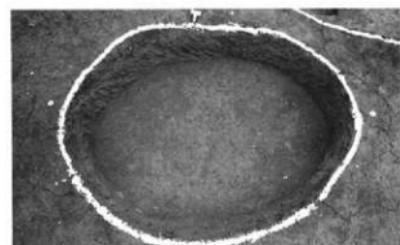
SK 113・114 完掘状況(東から)



SK 6 完掘状況(南から)



SK 186 完掘状況(南から)



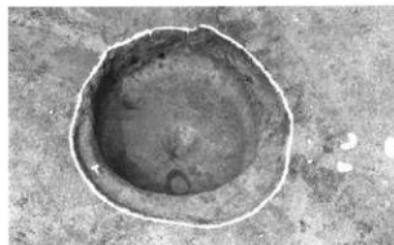
SK 196 完掘状況(南から)



SK 197 土層断面(南から)



SK 376 土層断面(南東から)

SK 376 完掘状況(南から)
土坑

図版 8



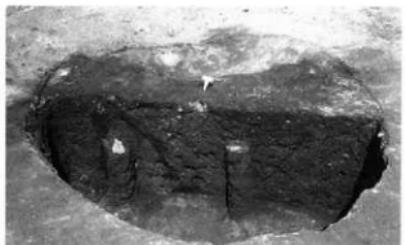
SK 377 半截遺物出土状況 (西から)



SK 377 土層断面 (南から)



SK 377 遺物出土状況 (西から)



SK 380 土層断面 (南から)

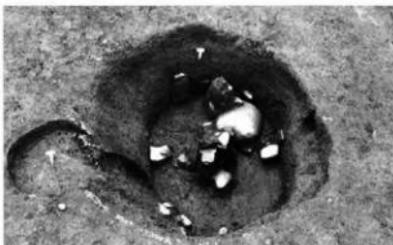


SK 380 完掘状況 (西から)
土坑

図版 9



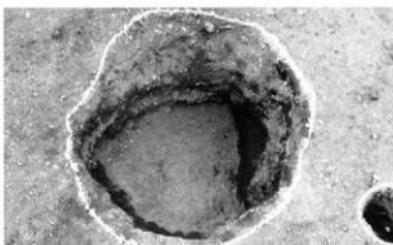
SK 381・382 土層断面(東から)



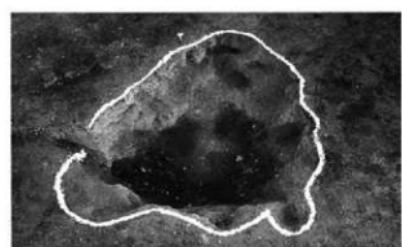
SK 381・382 完堀状況(東から)



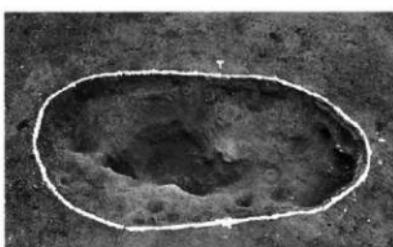
SK 444 土層断面(南西から)



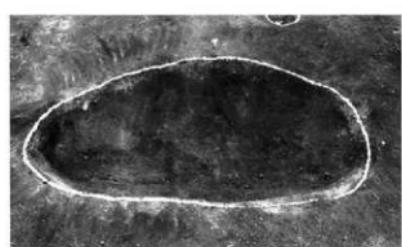
SK 444 完堀状況(南から)



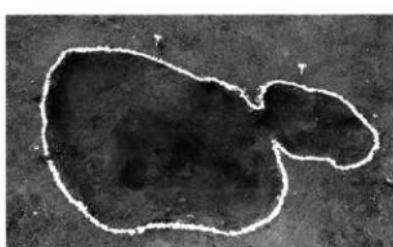
SK 27 完堀状況(北から)



SK 49 完堀状況(南から)



SK 439 完堀状況(東から)



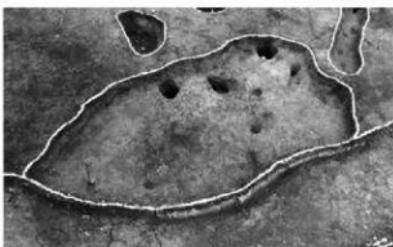
SK 55・56 完堀状況(西から)

土坑

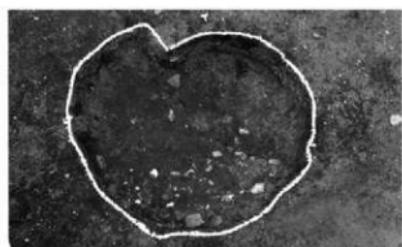
図版 10



SK 159 土層断面(南から)



SK 194 完掘状況(南から)



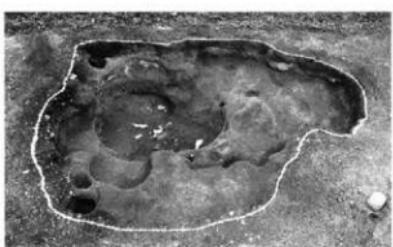
SK 252 完掘状況(南から)



SK 371 土層断面(西から)



SK 251 土層断面(南西から)



SK 251 完掘状況(南から)



SK 105 土層断面(北西から)



SK 105 完掘状況(北から)

土坑



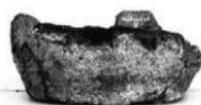
1



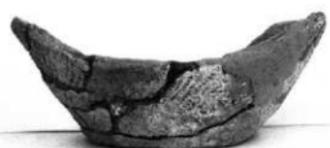
2



8



12

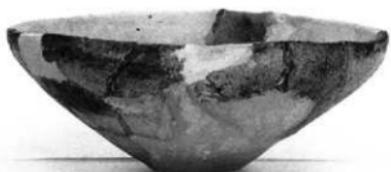


6



13

出土土器(1)



10



27



15

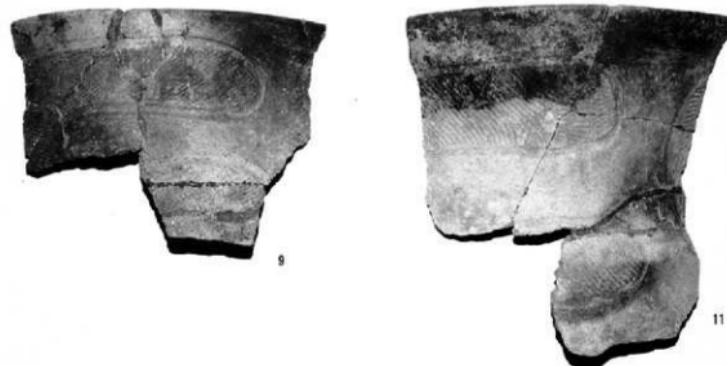


31



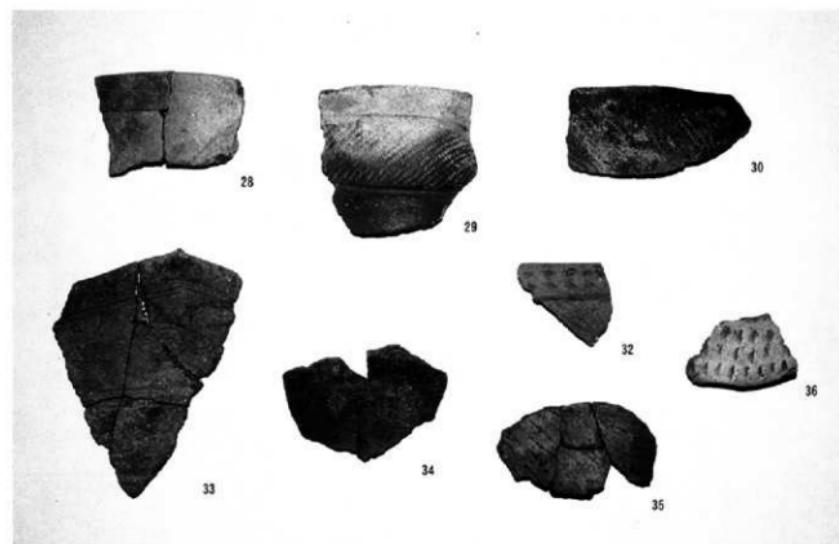
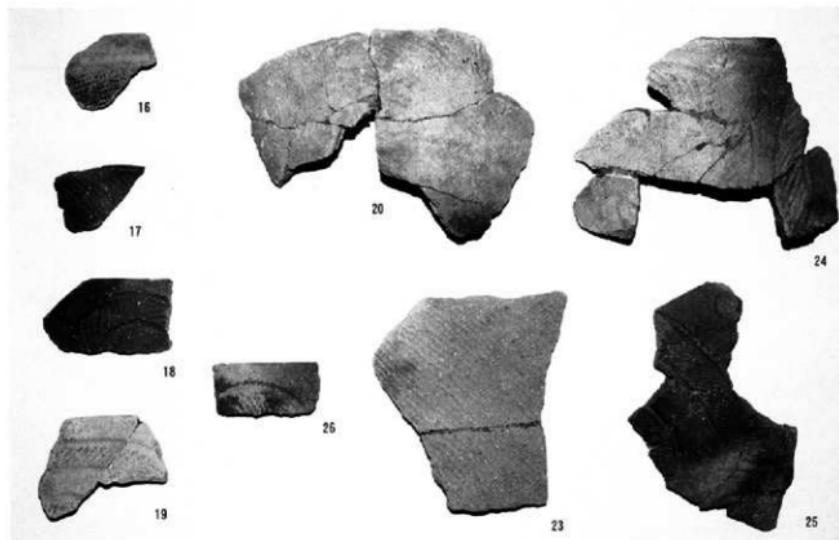
14

出土土器(2)

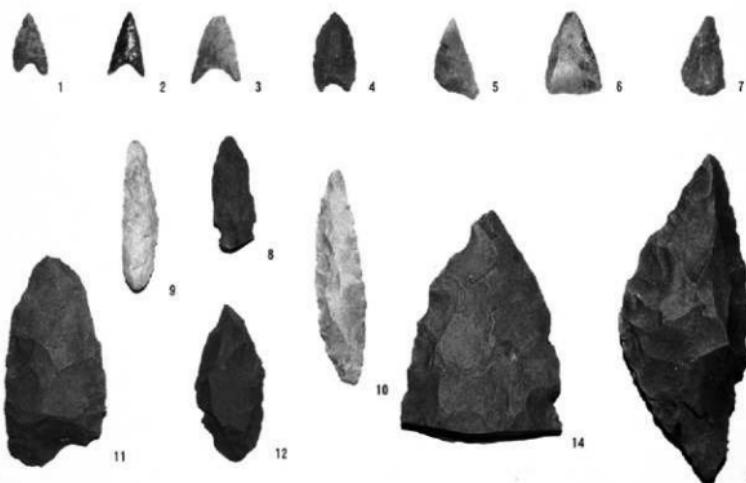


出土土器 (3)

図版 14

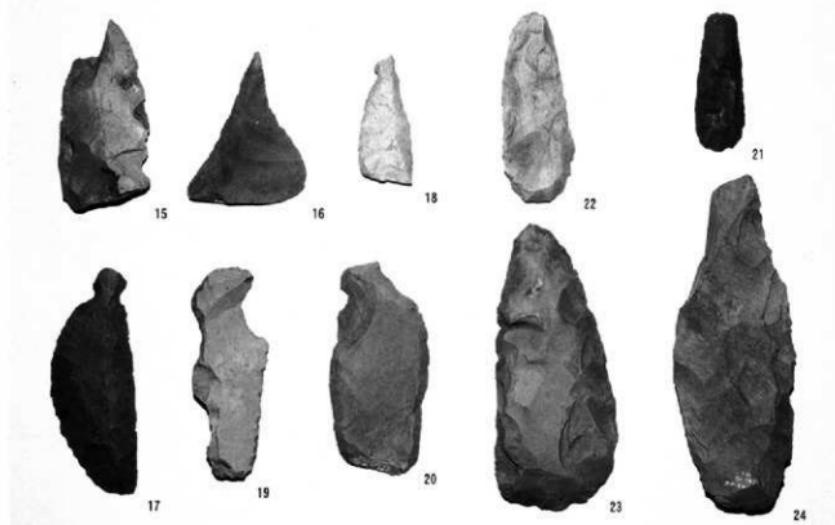


出土土器 (4)



石鏃・尖頭器

図版 16



石錐・石匙・石鎌



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34

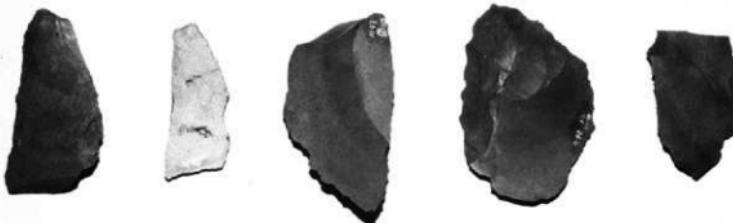
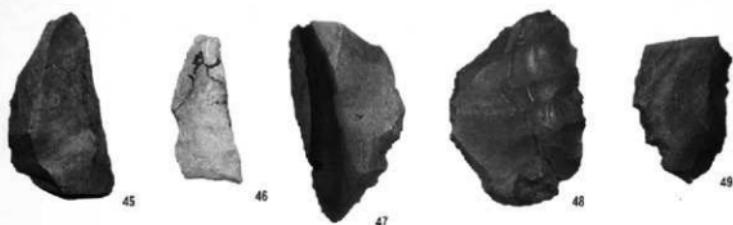


石器

図版 18



石範・搔器



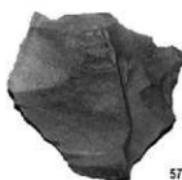
削器



55



52



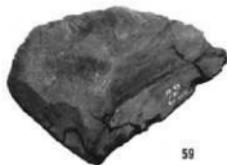
57



60



58



59



61



55



52



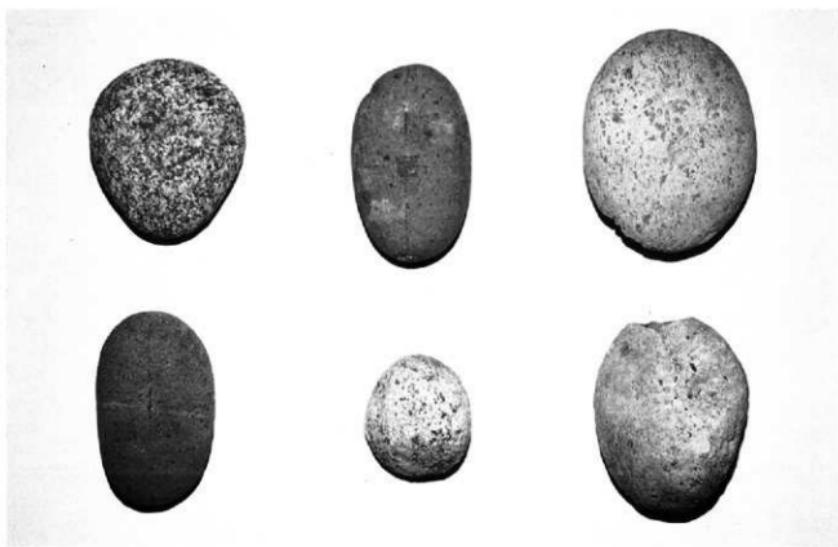
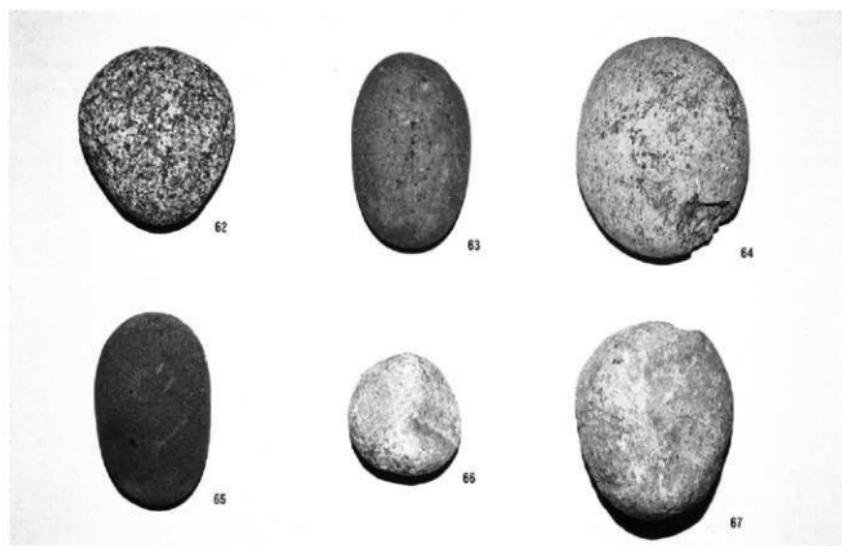
57



60

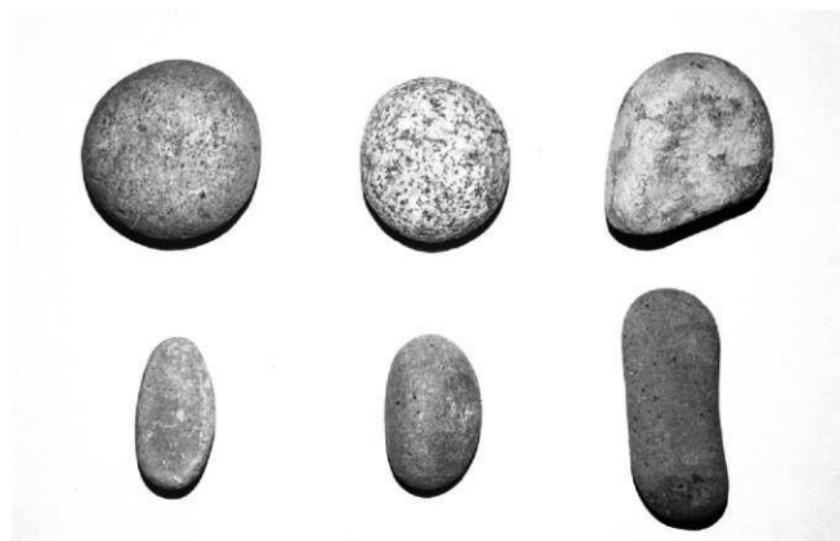
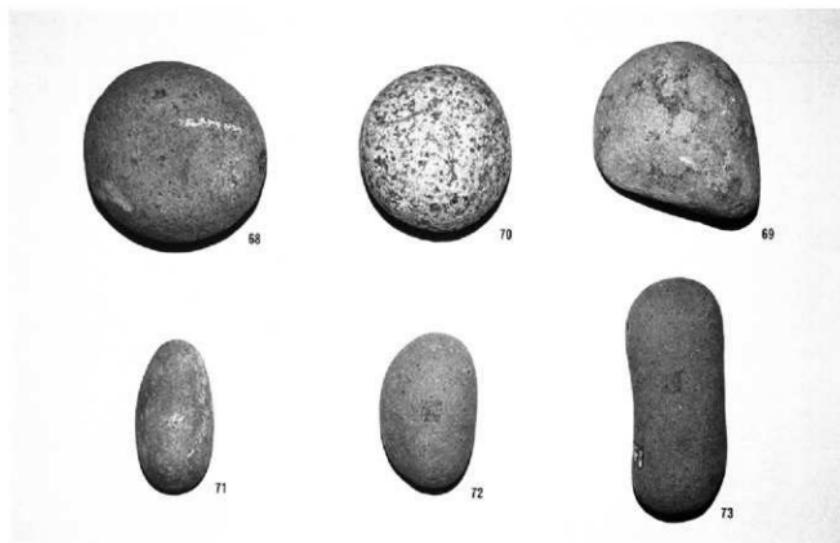


削器・磨製石斧



凹石

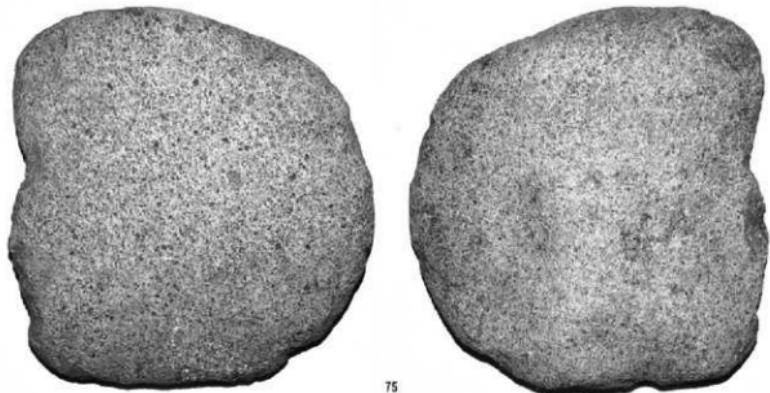
図版 22



磨石



75



75

石皿

市野々向原遺跡

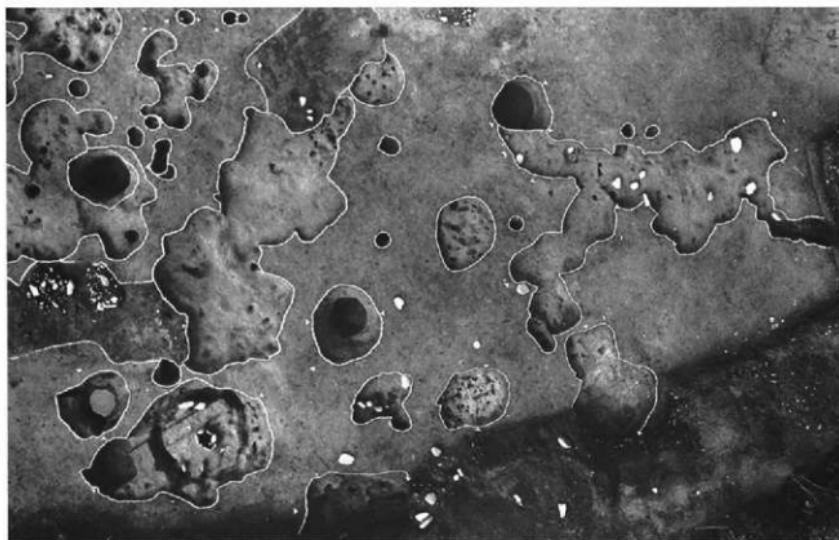
図版 24



遺跡全景(南から)



A区 遺構完堀状況



A区南端 堅穴住居周辺



S T 533 堅穴住居跡 (南から)

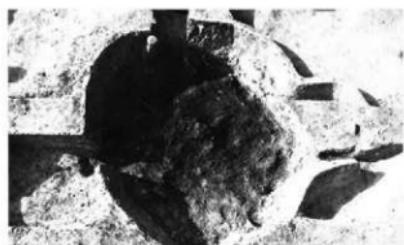
図版 26



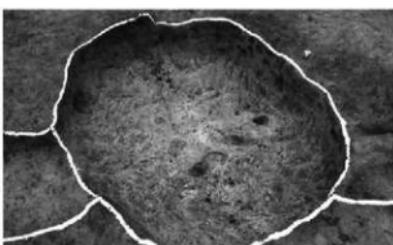
SK 526 土層断面(西から)



SK 526 集石検出状況(南から)



SK 526 集石下炭化層 検出状況(南から)



SK 526 完掘状況(南から)



SK 525 土層断面(西から)



SK 525 遺物出土状況(東から)



S X 525・526・S X 561 完掘状況(南から)



E L 567 土器埋設石組炉(南東から)

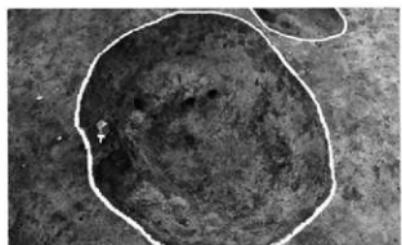
土坑



SK 530 土層断面(西から)



SK 530 集石検出状況(西から)



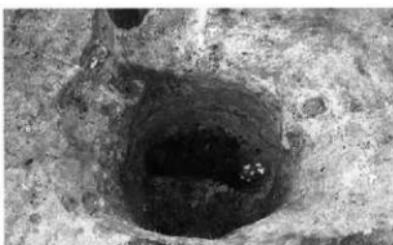
SK 530 完堀状況(東から)



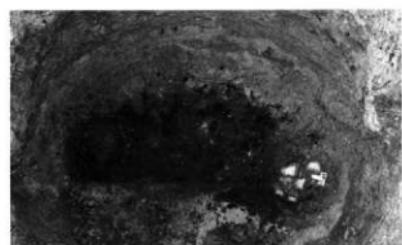
SK 524 集石検出状況(東から)



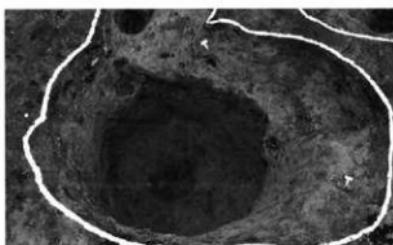
SK 236 土層断面(南から)



SK 236 炭化種子出土状況(南から)



SK 236 炭化種子出土状況(南から)

SK 236 完堀状況(南から)
土坑

図版 28



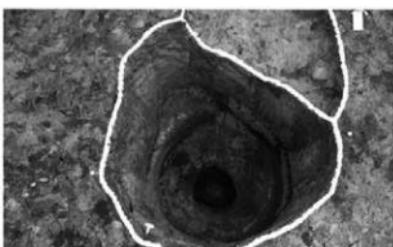
E U569 埋設土器検出状況(東から)



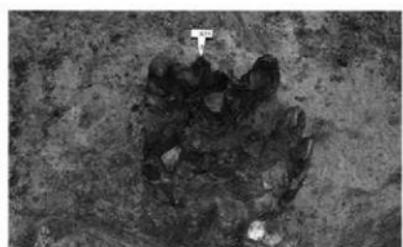
SK 202 土層断面(南から)



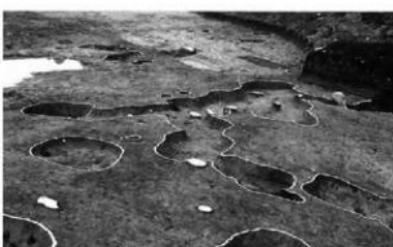
SK 202 遺物出土状況(東から)



SK 202 完掘状況(北から)



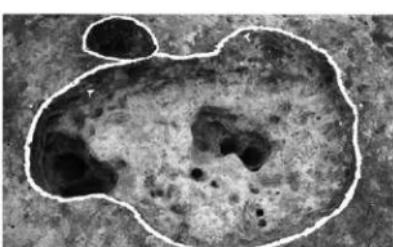
SK 538 遺物出土状況(南から)



SK 538 完掘状況(南西から)



SK 155・156 土層断面(西から)



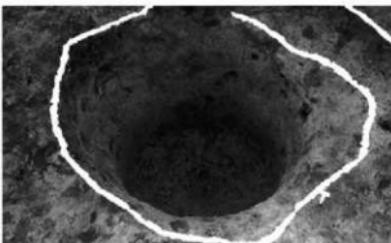
SK 155・156 完掘状況(南東から)

土坑

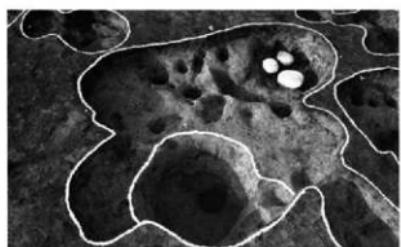
図版 29



S X 175・S K 177 土層断面(東から)



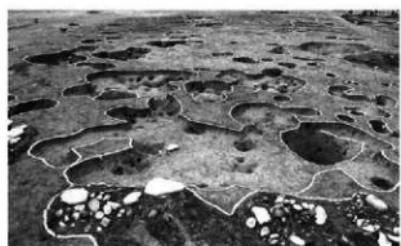
S K 177 完掘状況(南から)



S K 170・171、S X 172 完掘状況(南から)



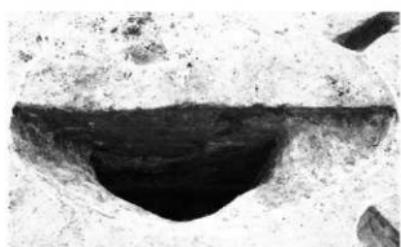
S K 171 土層断面(南から)



S K 175等 完掘状況(南から)



S K 287 土層断面(東から)



S K 228 土層断面(東から)



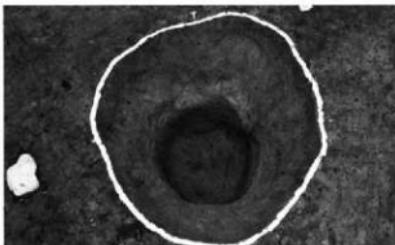
S K 228 完掘状況(東から)

土坑

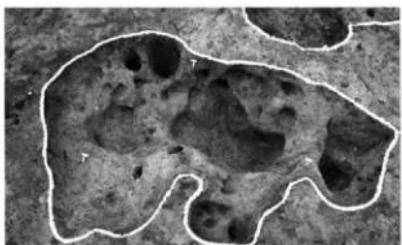
図版 30



SK 194 土層断面(北から)



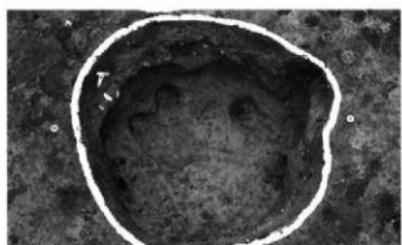
SK 194 完掘状況(南から)



SK 291 完堀状況(東から)



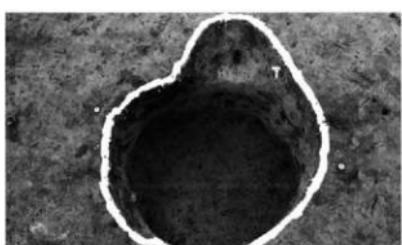
SK 298 完堀状況(南から)



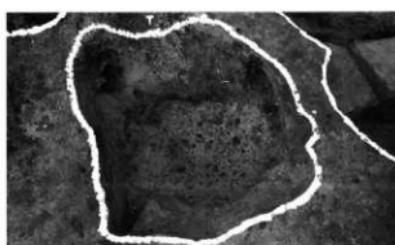
SK 288 完堀状況(東から)



SK 527 土層断面(西から)

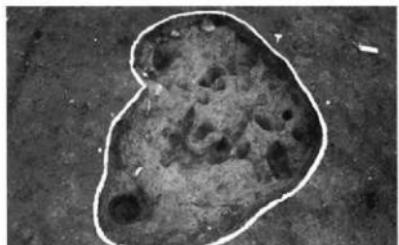


SK 548 完堀状況(南から)

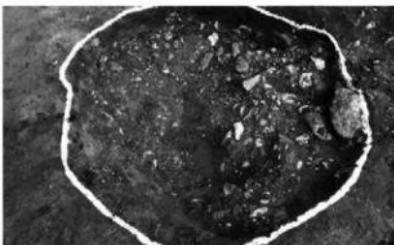


SK 563 完堀状況(西から)

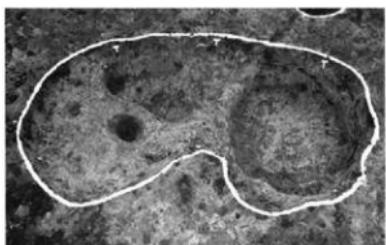
土坑



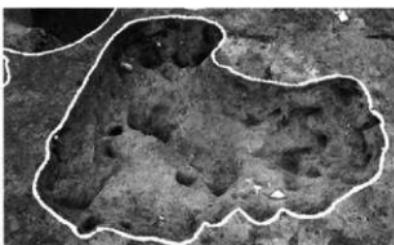
SK 370 完掘状況(南から)



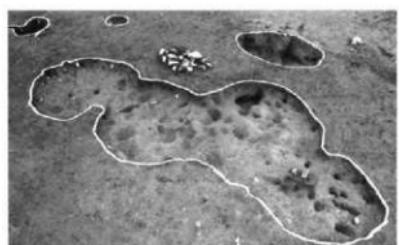
SK 29 完掘状況(南から)



SK 356・357 完掘状況(東から)



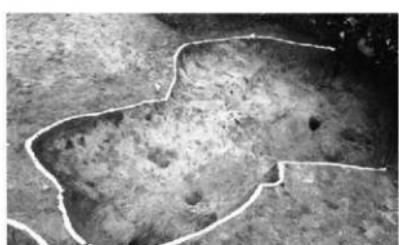
SK 238 完掘状況(東から)



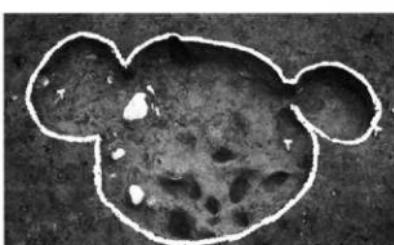
SK 422～424 完掘状況(南西から)



SK 2 完掘状況(西から)



SK 541・542 完掘状況(北から)



SK 372 完掘状況(西から)

土坑

図版 32



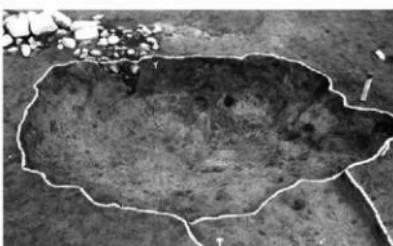
SK 28 完掘状況 (西から)



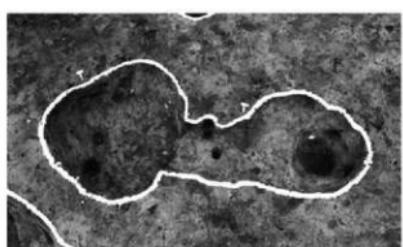
SK 537 遺物出土状況 (東から)



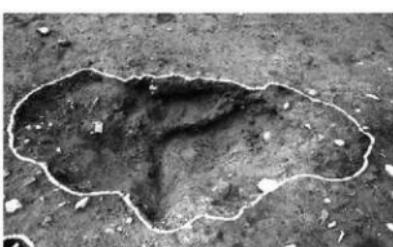
SK 443 完掘状況 (南西から)



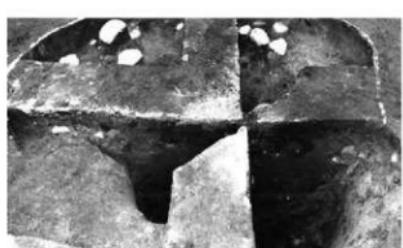
SK 443 完掘状況 (南から)



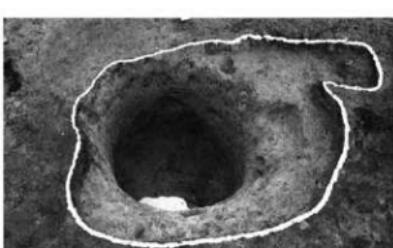
SK 294・295 完掘状況 (東から)



SK 337 完掘状況 (東から)



SK 310 土層断面 (北から)



SK 310 完掘状況 (北から)

土坑



9



21



32



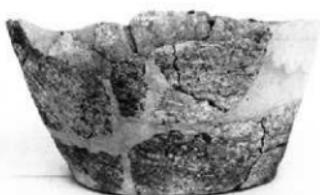
22



26

出土土器(1)

図版 34



25



30



23



68



69



51

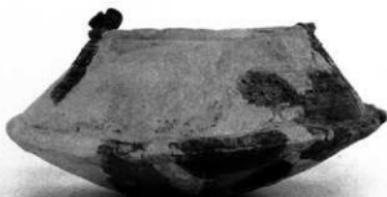


70

出土土器(2)



52



53



74



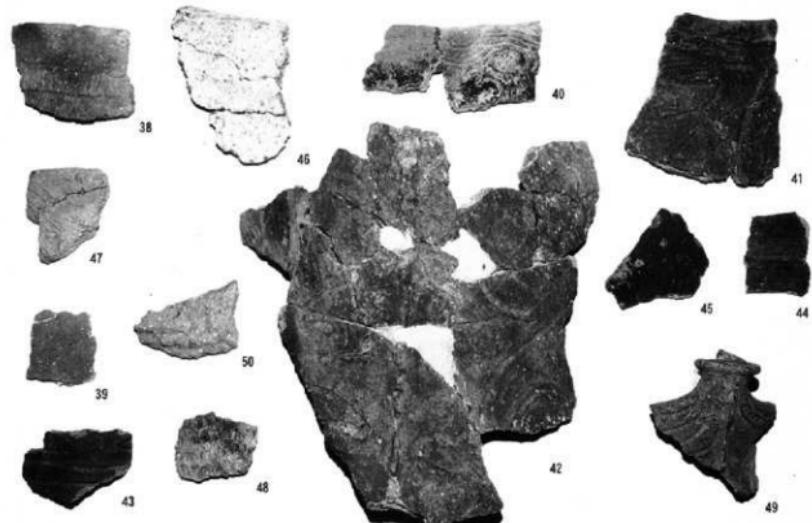
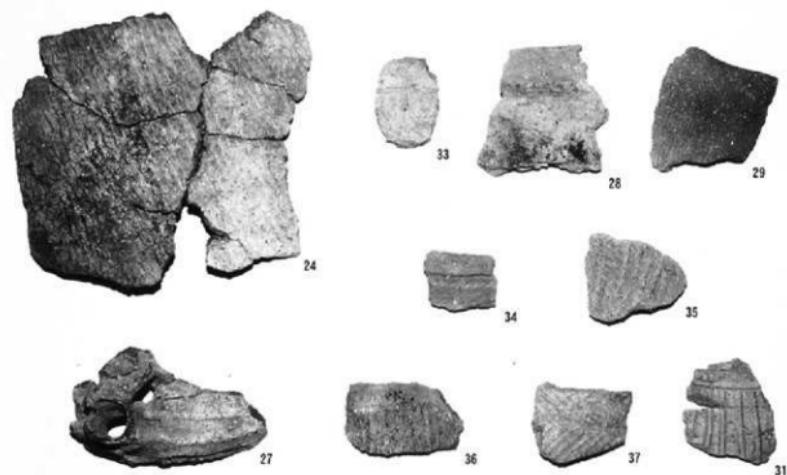
78

出土土器(3)

図版 36

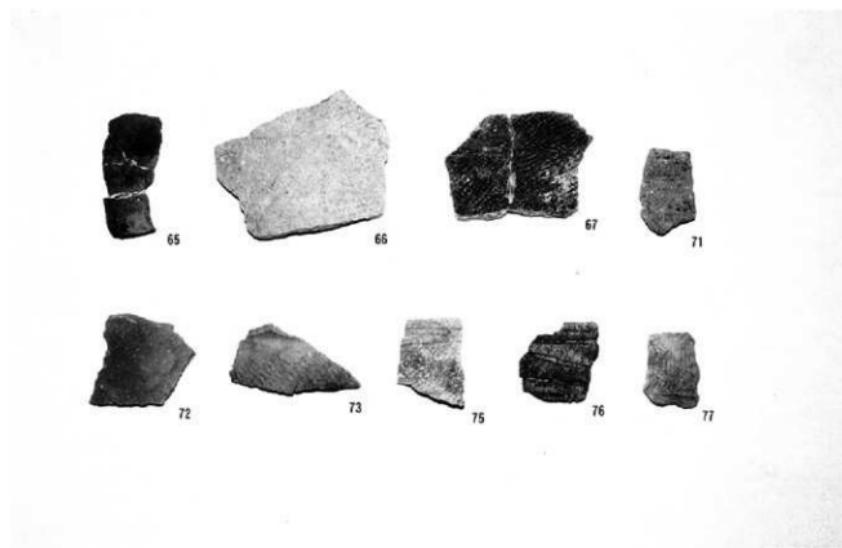
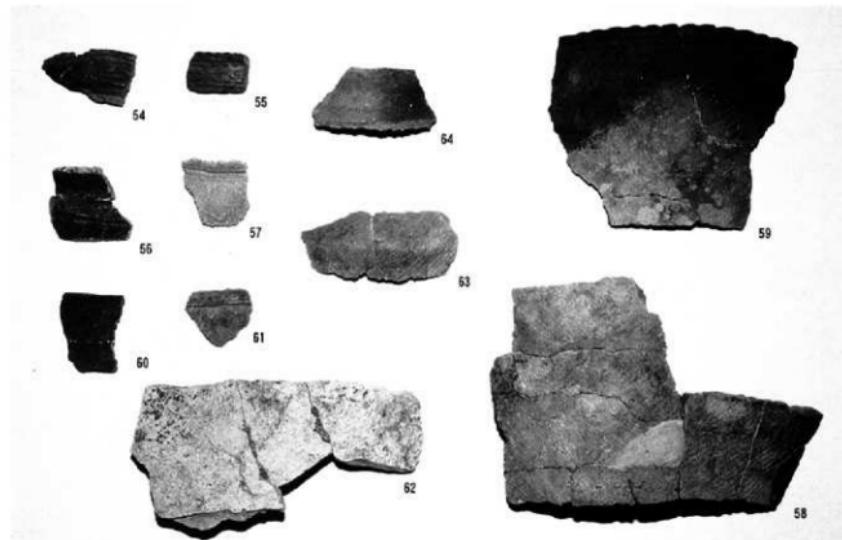


出土土器 (4)

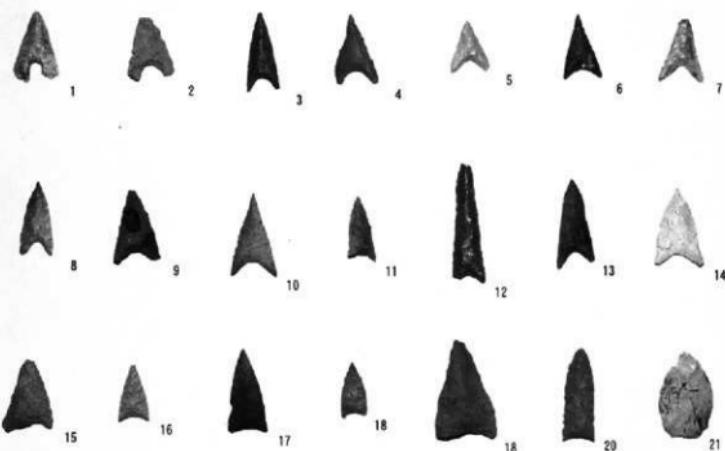


出土土器 (5)

図版 38

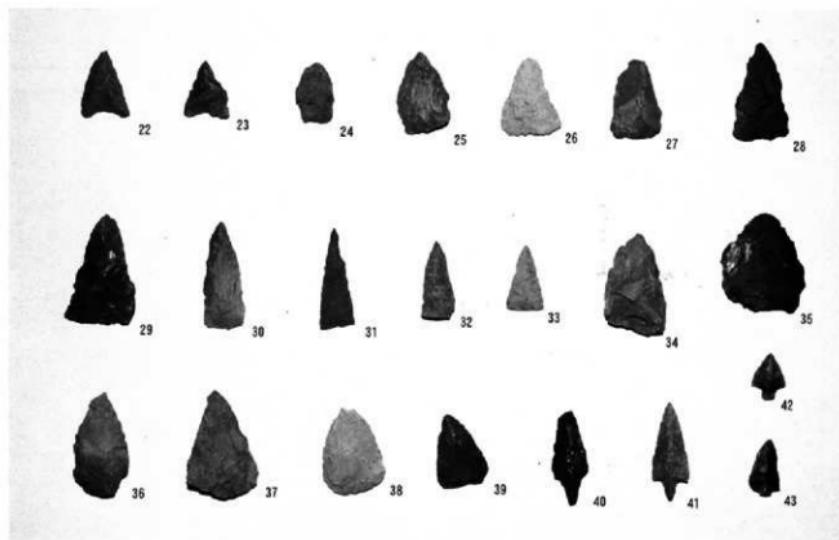


出土土器(6)



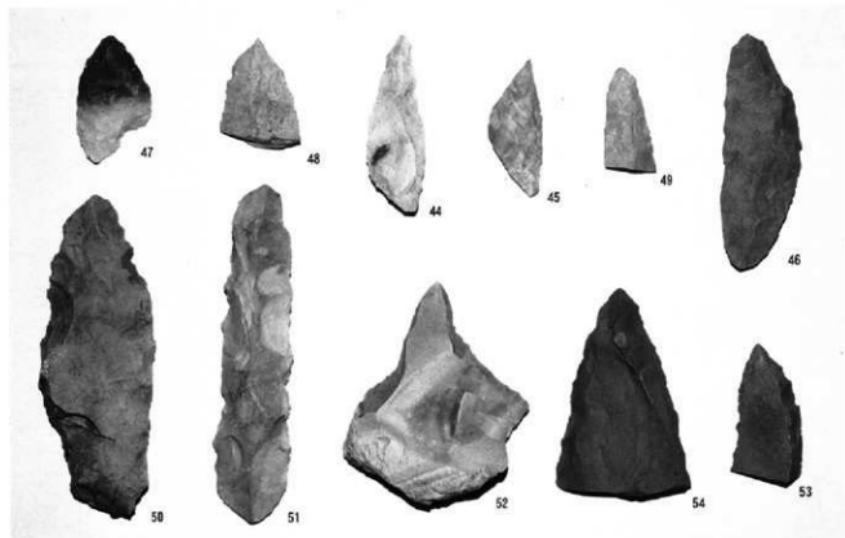
石鏃(1)

図版 40



石鏃(2)

図版 41



尖頭・石錐

図版 42



55



56



57



59



58



60



61



62



両尖匕首・石匙



63



64



65



66



67



69



68

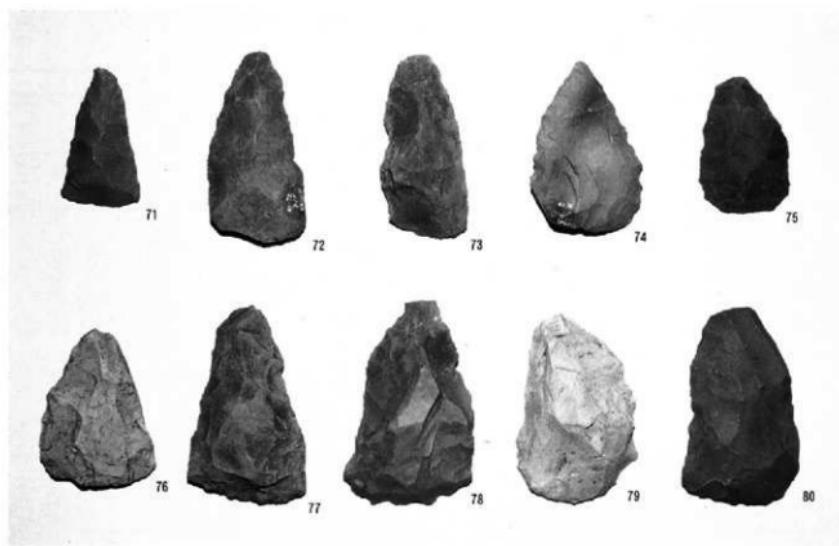


70

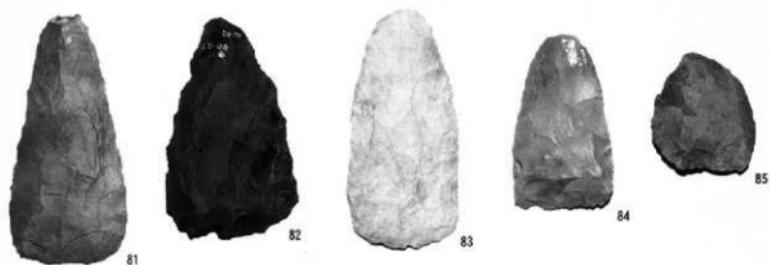


石匙

図版 44

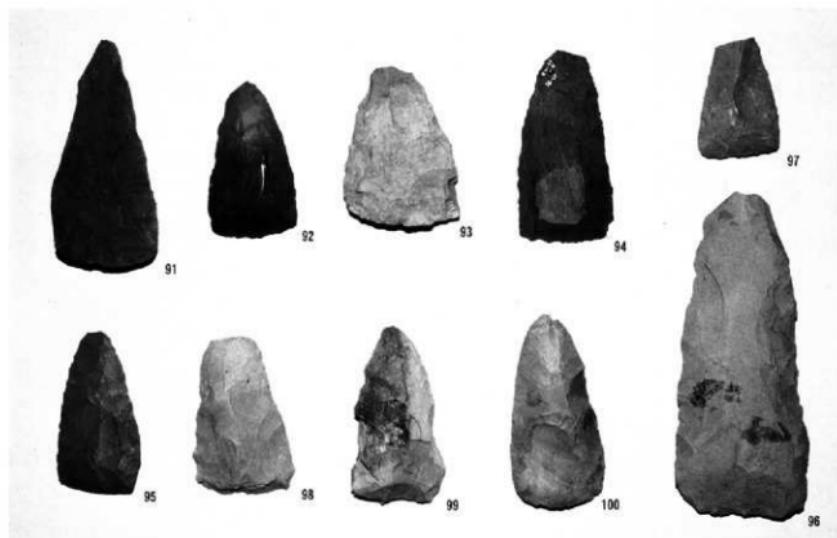


石器(1)

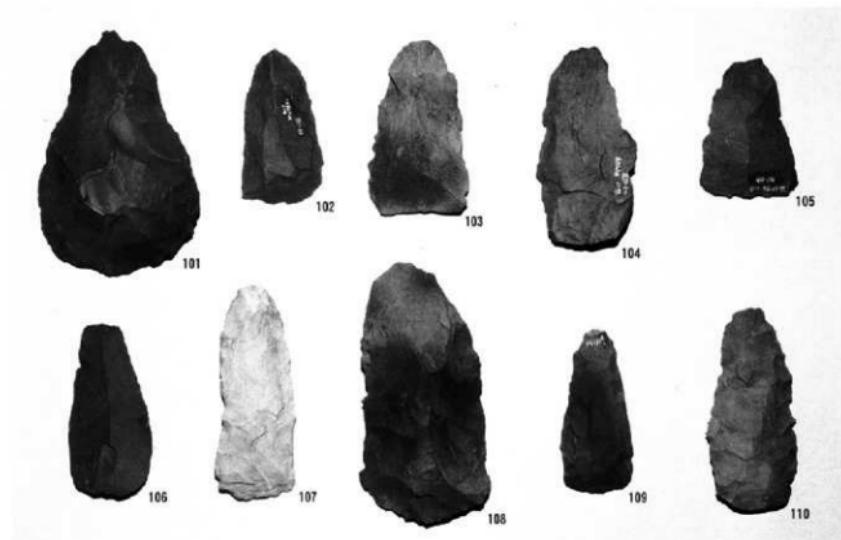


石器(2)

図版 46

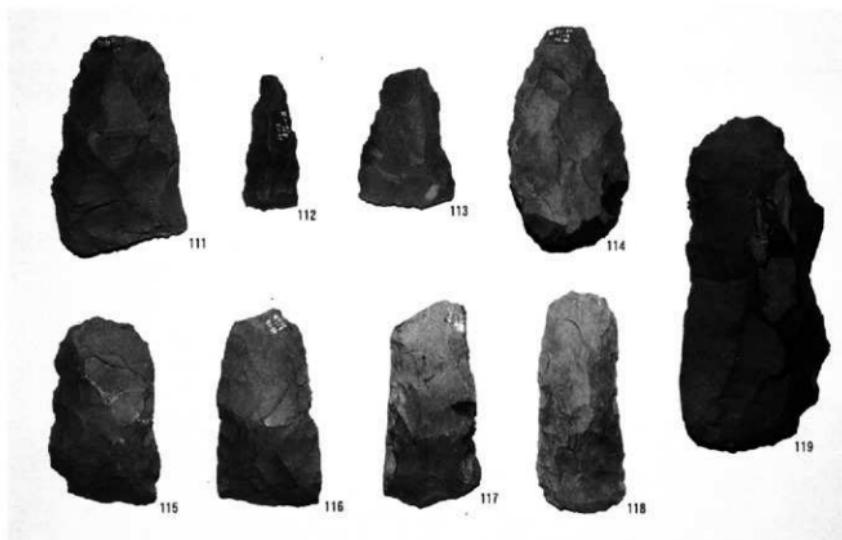


石器(3)

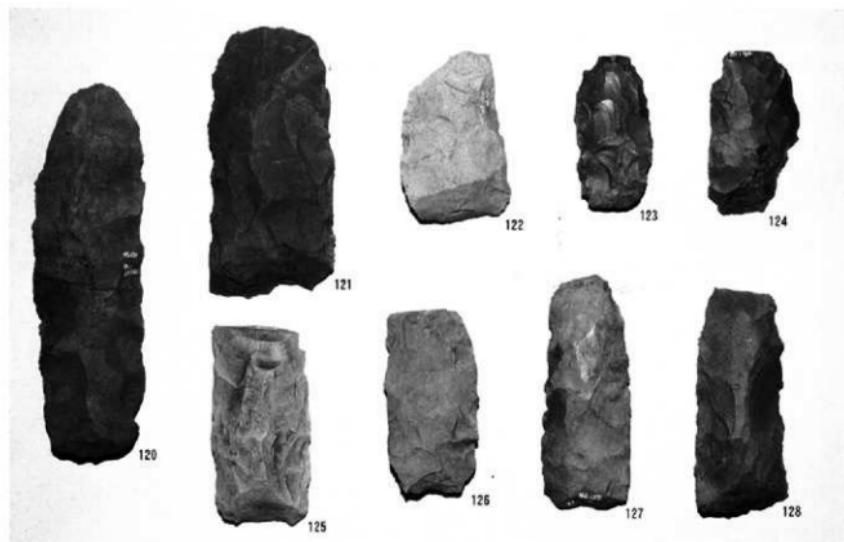


石器 (4)

図版 48



石器(5)



石器 (6)

図版 50



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



石器(7)



石器(8)

図版 52



146



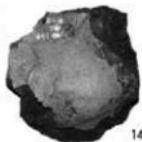
147



148



152



149



151



153



150



搔器



154



155



156



157



158



159



160



161



162



削器(1)

図版 54



163



164



165



166



167



168



169



170



171



削器(2)



172



174



175



178



173



176



177

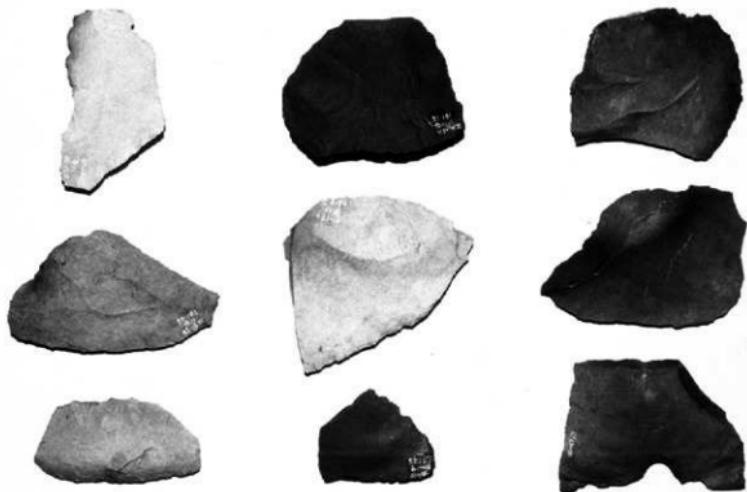
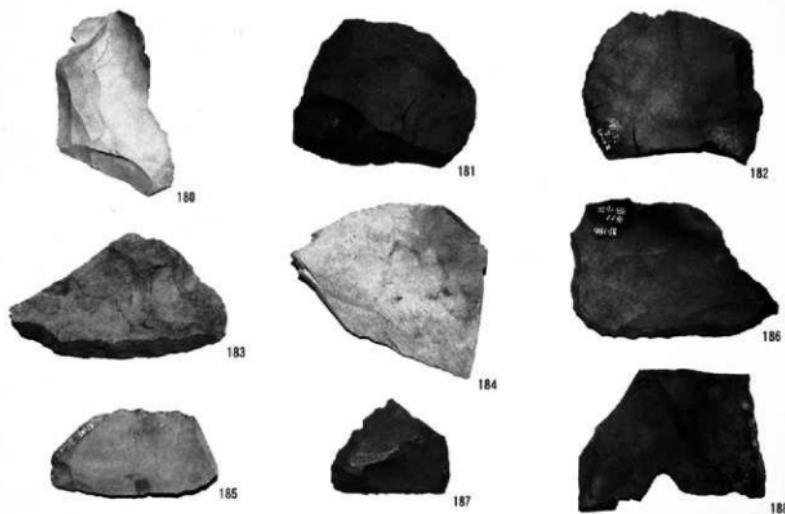


179

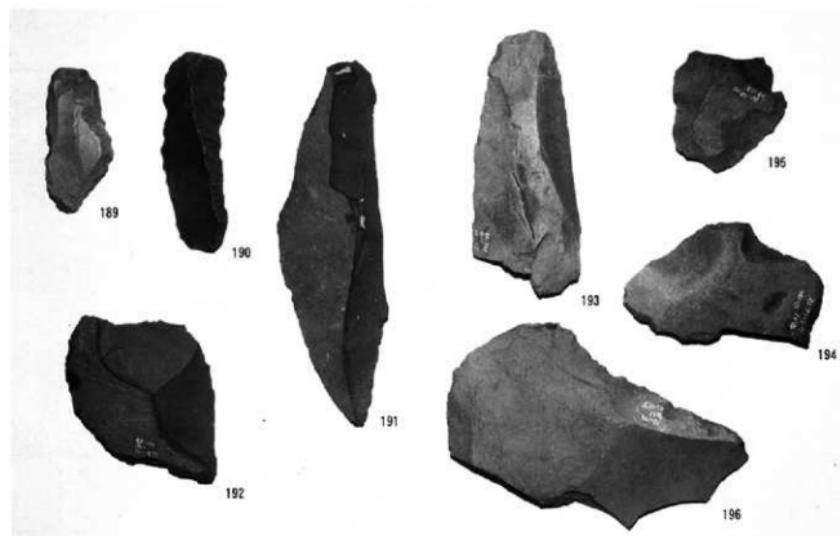


削器(3)

図版 56

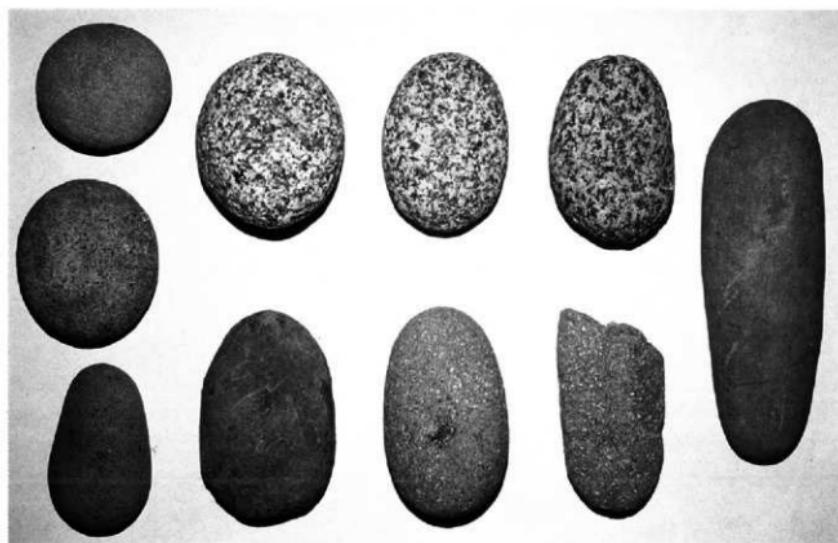
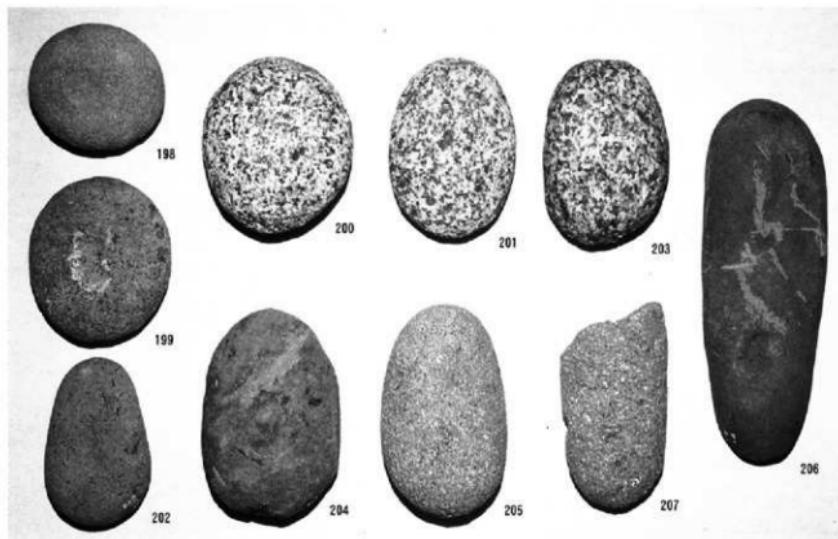


削器・異形石器



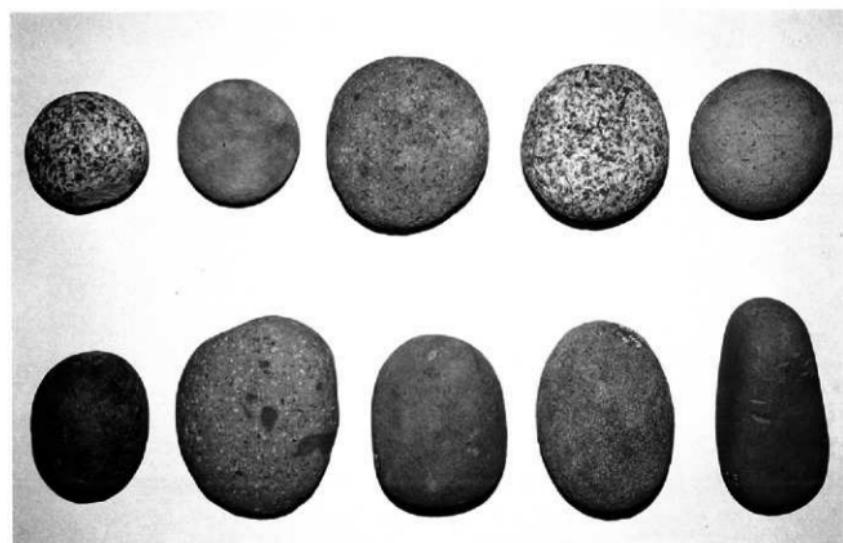
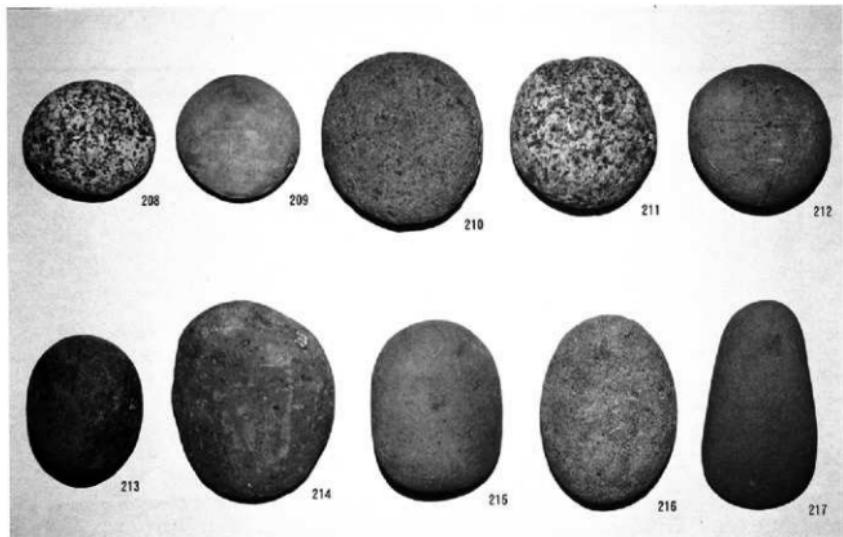
加工痕ある剥片

図版 58



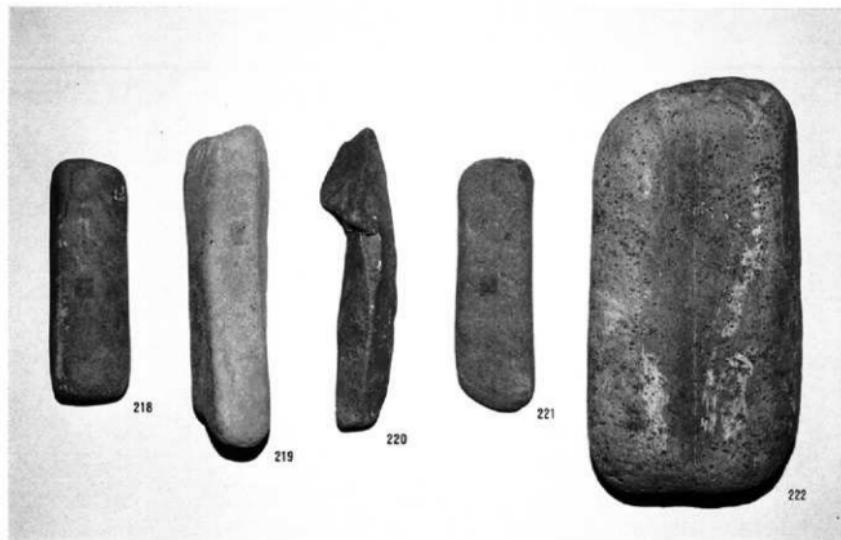
凹石

図版 59



磨石

図版 60



石棒・砥石



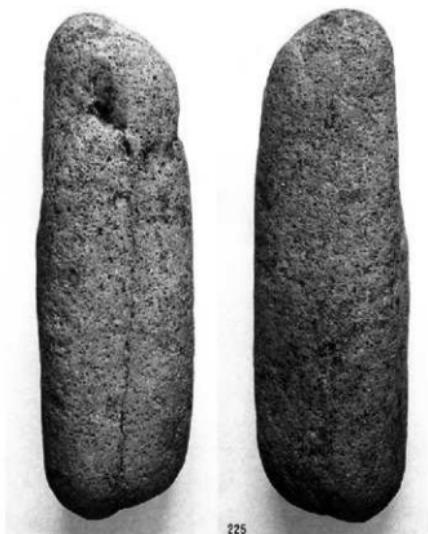
223



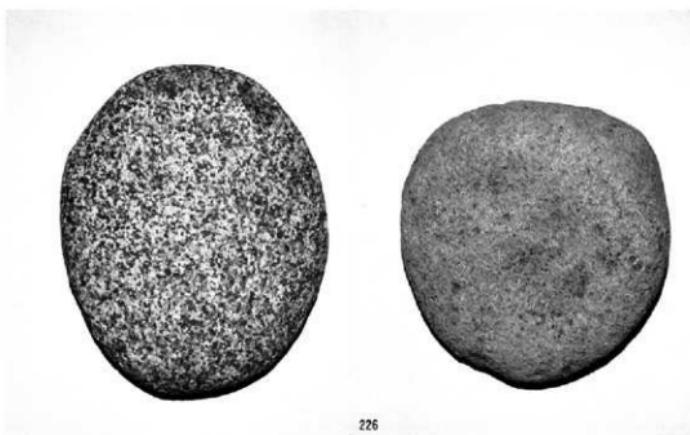
224

石棒

図版 62



225



226

石棒・石皿



227



228

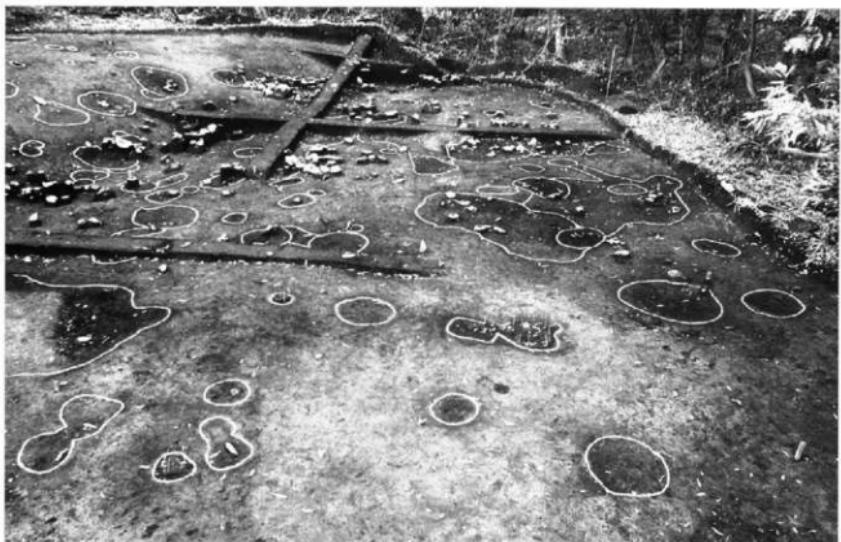
石皿



千野遺跡全景(南から)



調査区北半包含層土層断面(南から)

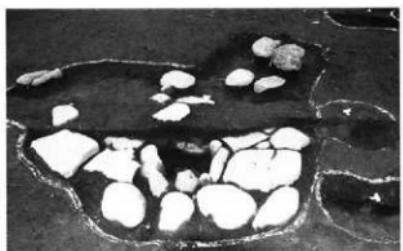


調査区北東部遺構検出状況(南から)

図版 66



S T 62 敷石住居跡 (西から)



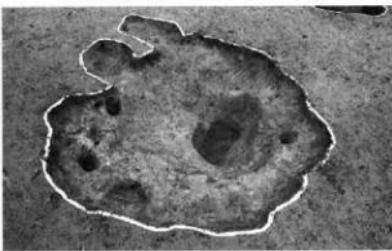
S T 62 土層断面 (東から)



S T 62 敷石部分 (西から)



E L 238 土器埋設石組炉 (西から)



S T 62 完堀状況 (西から)
敷石住居跡



S T 58 土層断面(北西から)



S T 58 完堀状況(東から)



E L 241 石組炉(東から)



S T 135 土層断面(北から)



S T 135 完堀状況(東から)



E L 240 石組炉(東から)



S T 67 完堀状況(東から)

E L 239 石組炉(東から)
堅穴住居跡

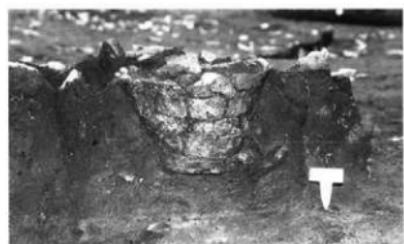
図版 68



SK26、E L237 (東から)



SK26 土層断面 (東から)



EU234 (東から)



EU235 (東から)



EU220 (南から)



EU183 (南から)



EU192 (南から)



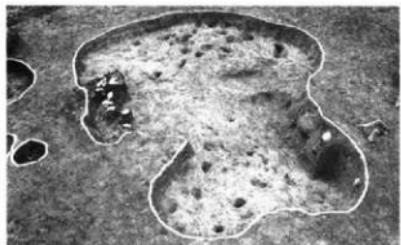
EU236 (西から)
土器埋設石組炉・埋設土器



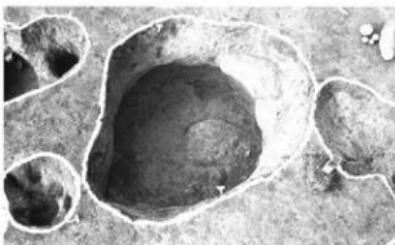
SK 189 土層断面 (南から)



SK 120 遺物出土状況 (北西から)



SX 43 完掘状況 (東から)



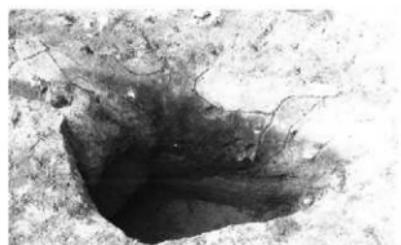
SK 139 完掘状況 (南から)



SK 188 土層断面 (北東から)



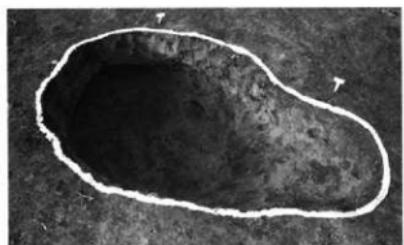
SK 188 完掘状況 (南東から)



SK 172 土層断面 (南東から)

SK 170・172 (南から)
土坑

図版 70



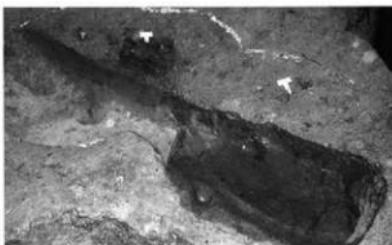
SK 121・122 完堀状況 (南から)



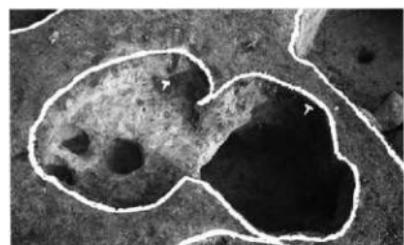
SK 154 土層断面 (北から)



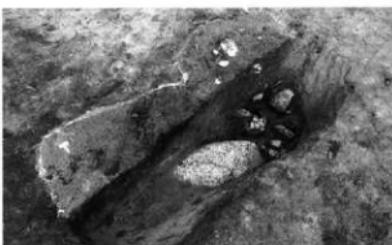
SK 291 完堀状況 (東から)



SK 227・228 土層断面 (南西から)



SK 227・228 完掘状況 (西から)



SK 187・230 土層断面 (南西から)



SK 148 土層断面 (南から)



SK 159・160 完掘状況 (南から)

土坑



SK 153 土層断面 (南から)



SK 153 完掘状況 (東から)



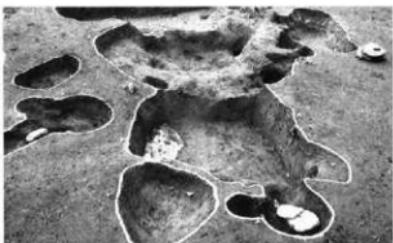
SX 152 完掘状況 (北東から)



SK 149 遺物出土状況 (北東から)



SK 149 土層断面 (南から)



SK 2 完掘状況 (西から)

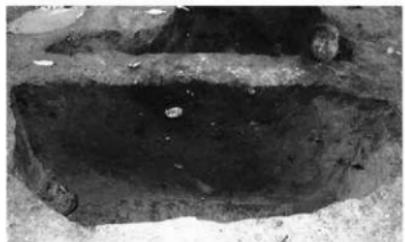


SK 175 土層断面 (南東から)

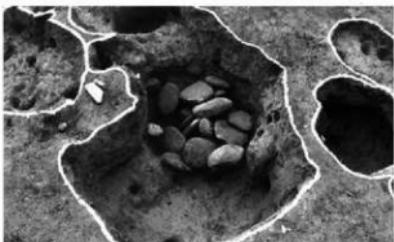


SX 174・SK 175 完掘状況 (南から)
土坑

図版 72



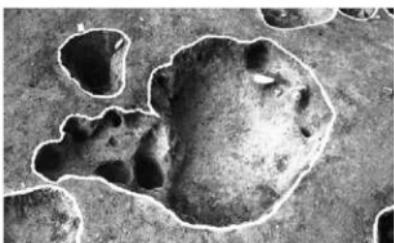
SK 124 土層断面 (北から)



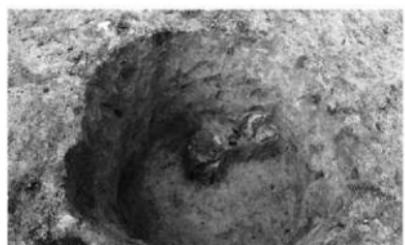
SK 124 完掘状況 (北東から)



SK 164 遺物出土状況 (南から)



SK 164・169 完掘状況 (南から)



SK 66 遺物出土状況 (南から)



SK 137 遺物出土状況 (南から)



SK 191 遺物出土状況 (南から)

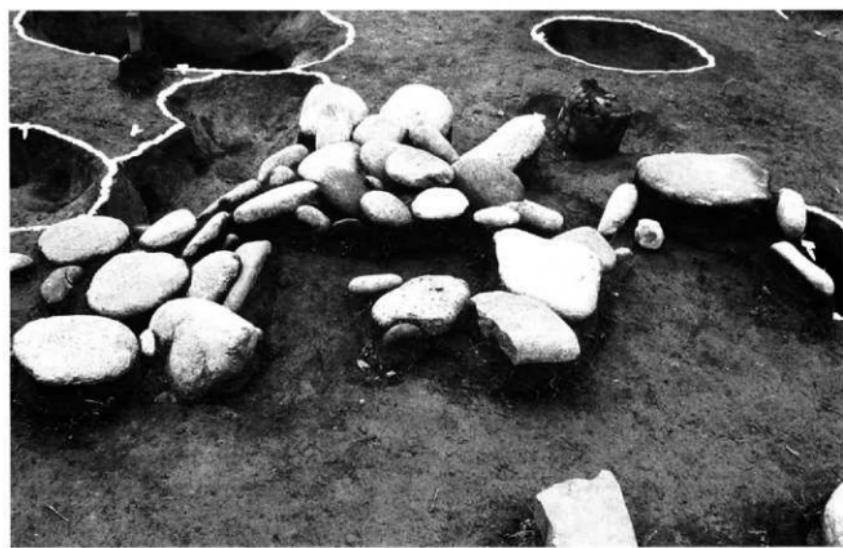


SK 204 遺物出土状況 (南から)

土坑



配石遺構群検出状況 (南から)



配石遺構 (東から)



78



113



112



116



123



130

出土土器(1)



97



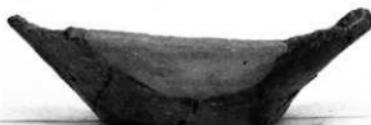
100



98



108



125



129
出土土器(2)



99



124



78



132



114

出土土器(3)



101



111



105



117



109



131

出土土器(4)



102



136



107



122



128



115



141

出土土器(5)



104



118136



106

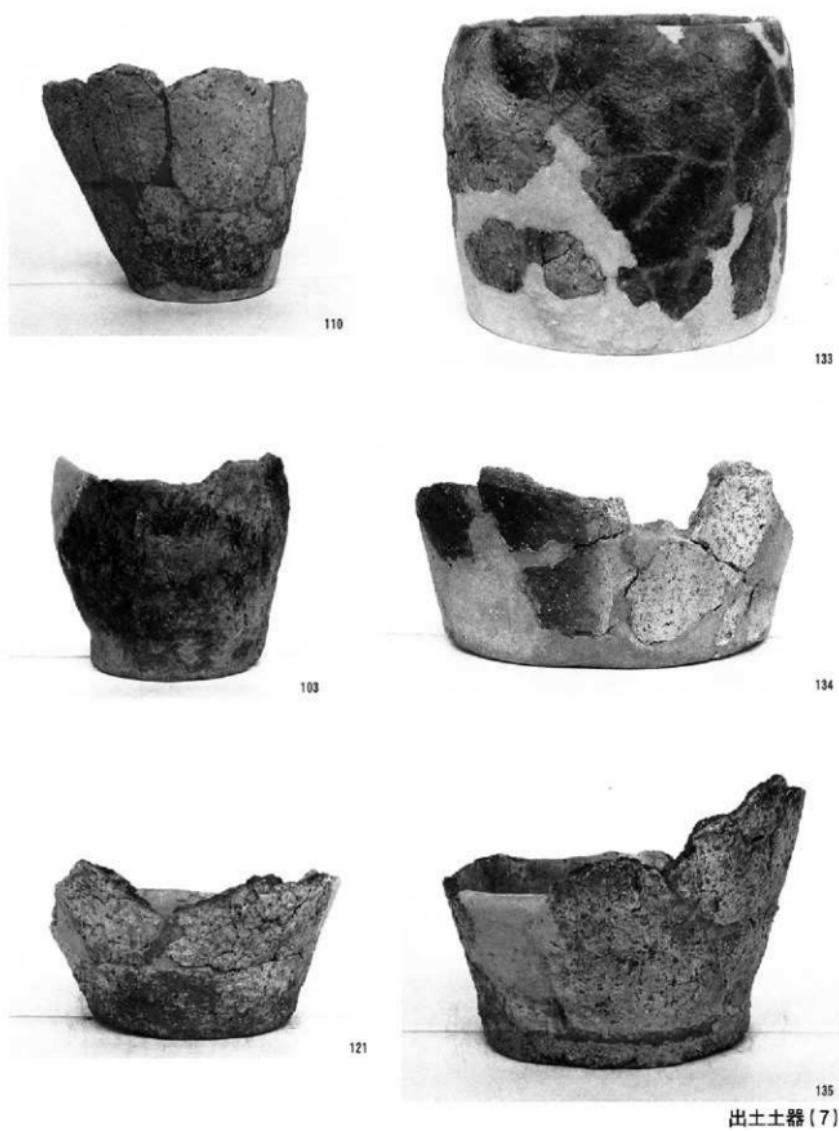


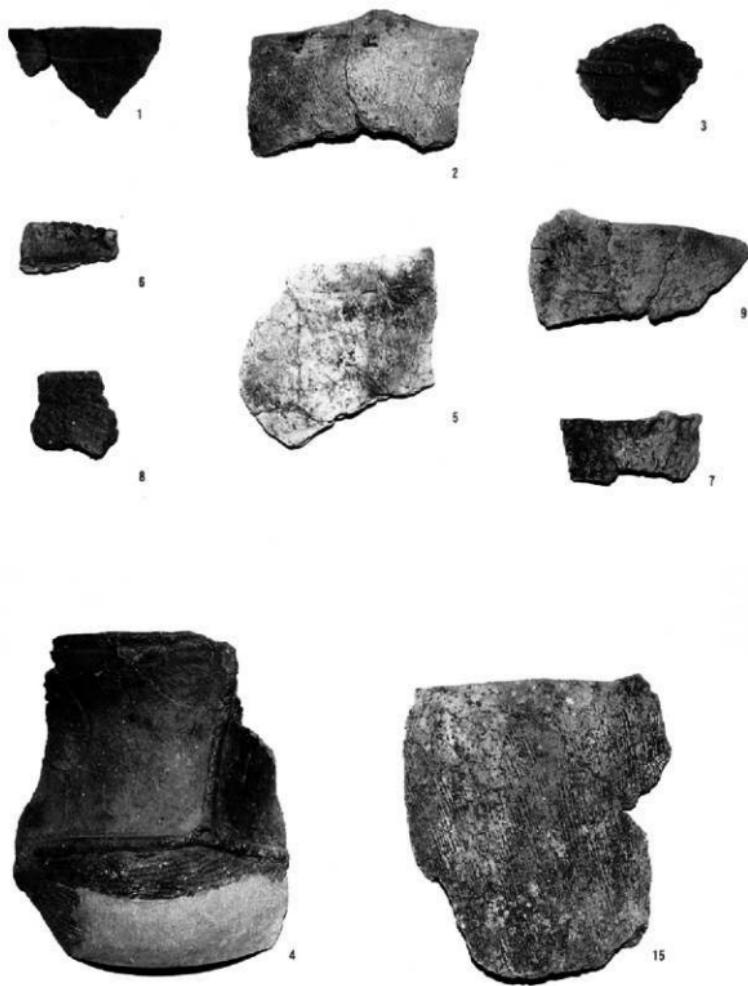
119



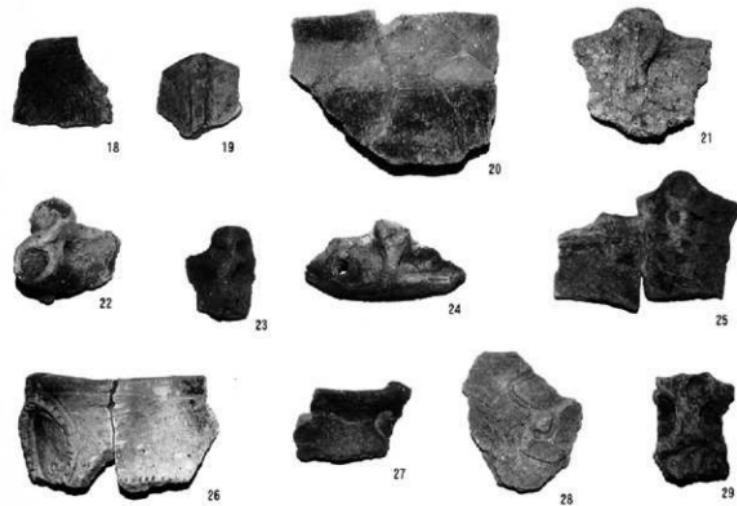
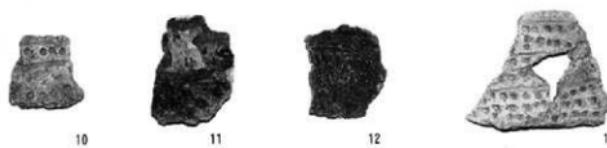
126

出土土器(6)

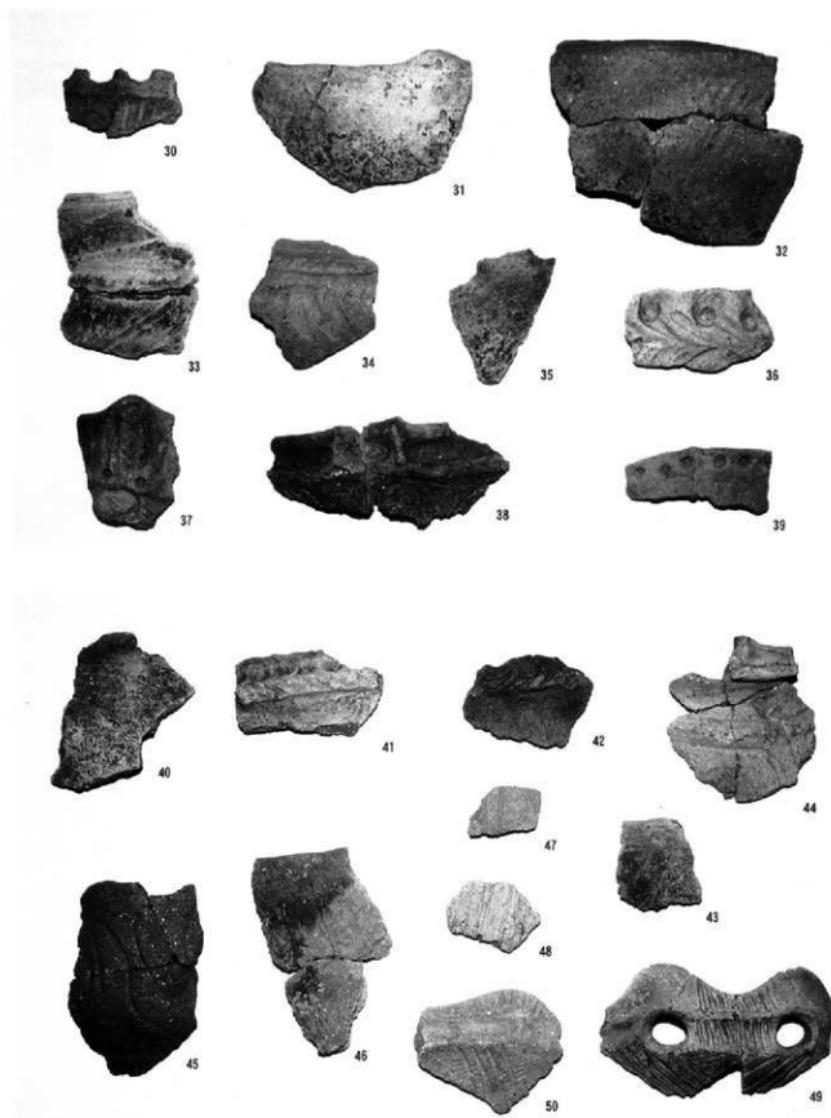




出土土器(8)

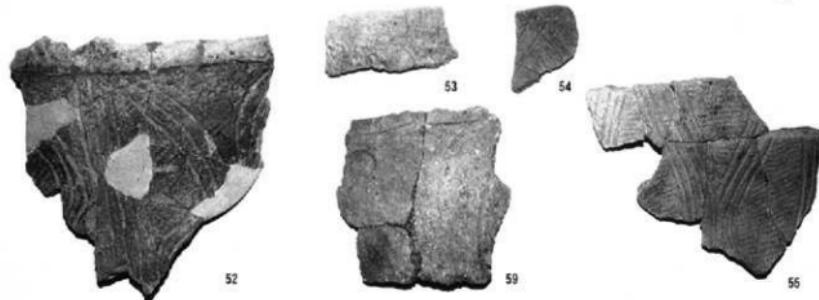


出土土器 (9)

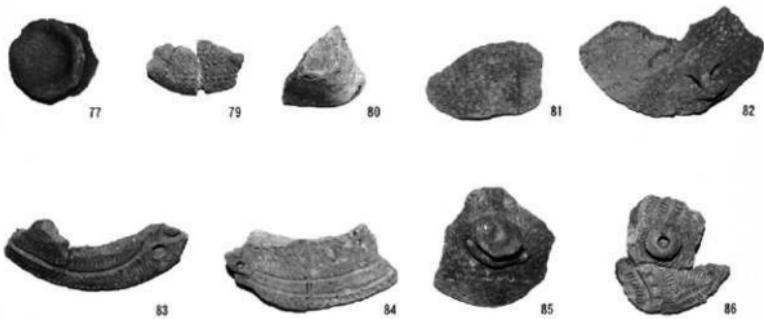
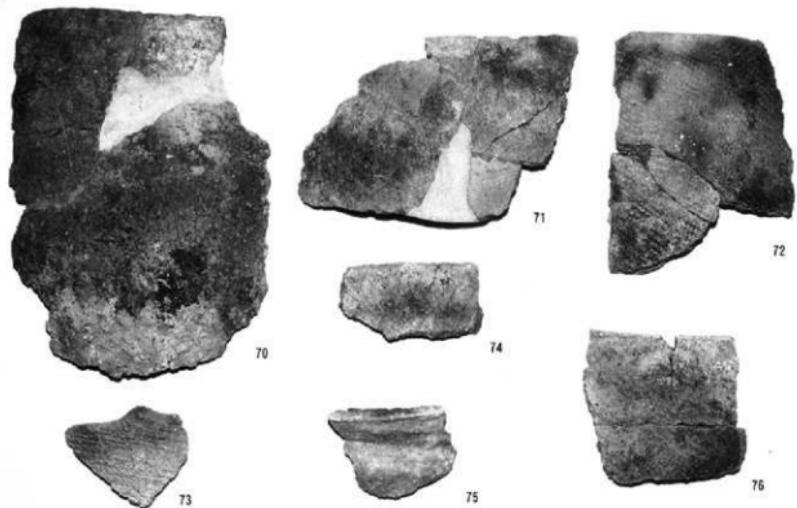


出土土器 (10)

図版 84



出土土器 (11)



出土土器 (12)



87



88



89



90



91



92



95



94



93



96



127



139



140



142

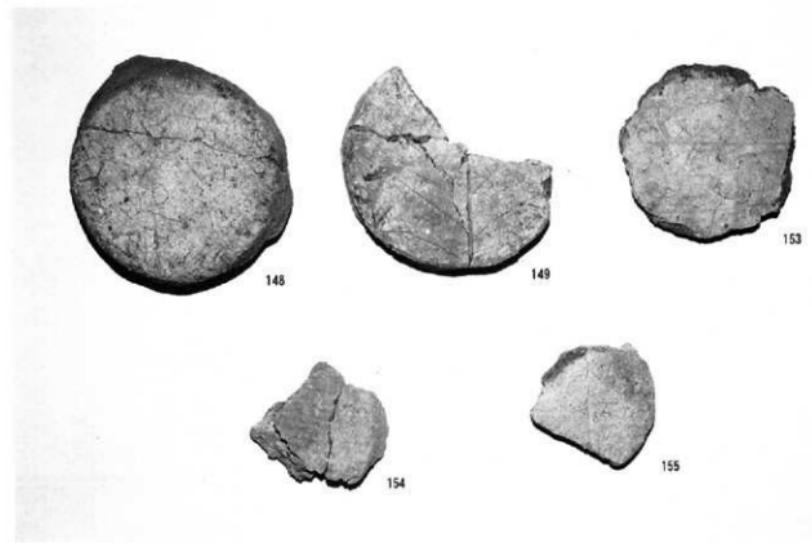
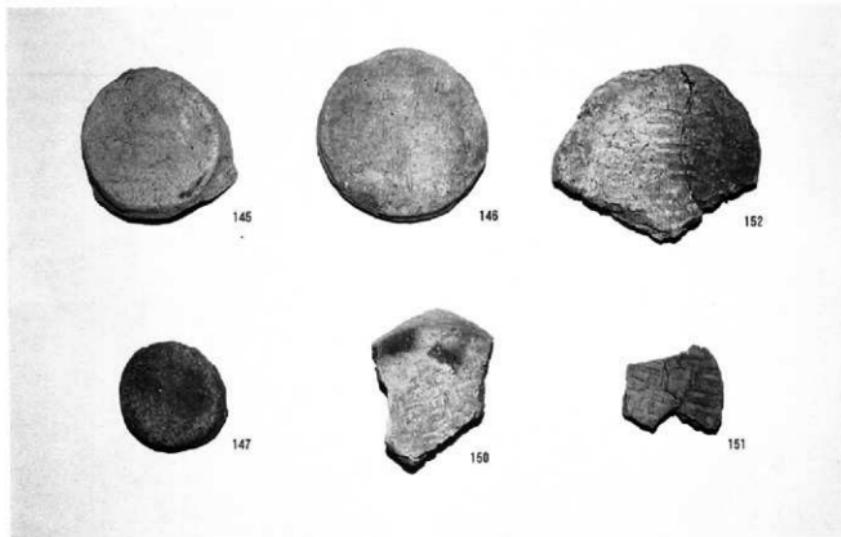


143

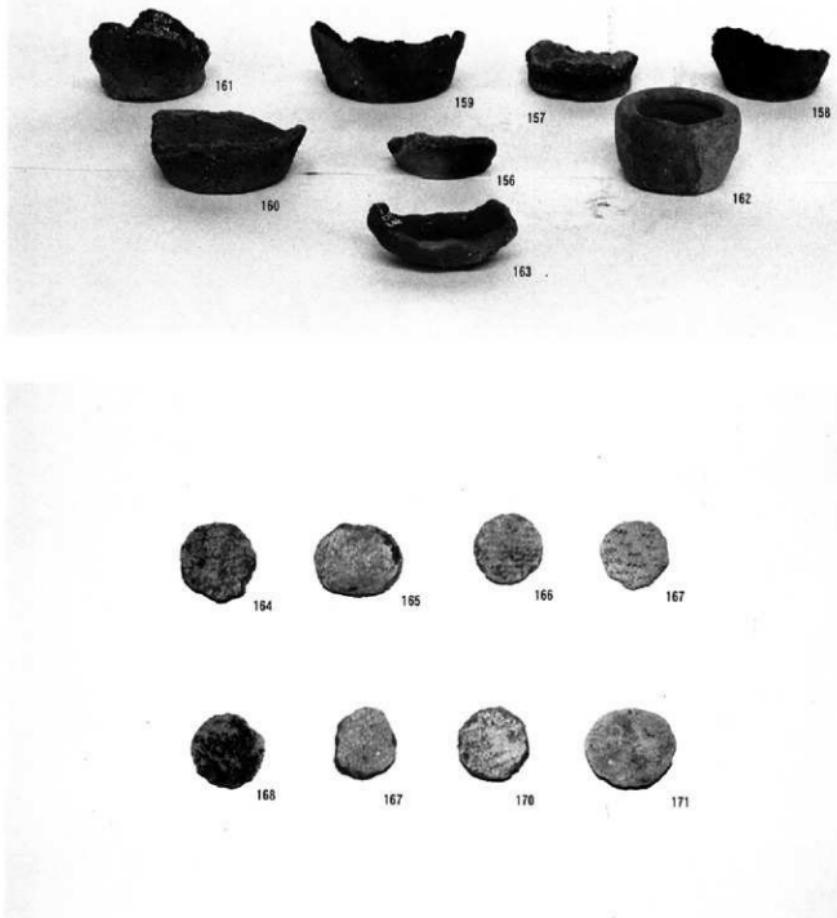


144

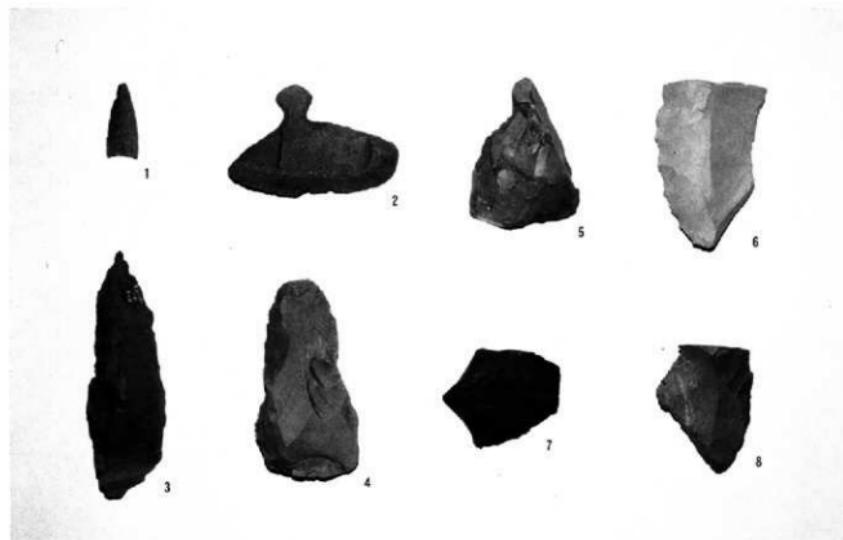
出土土器 (13)



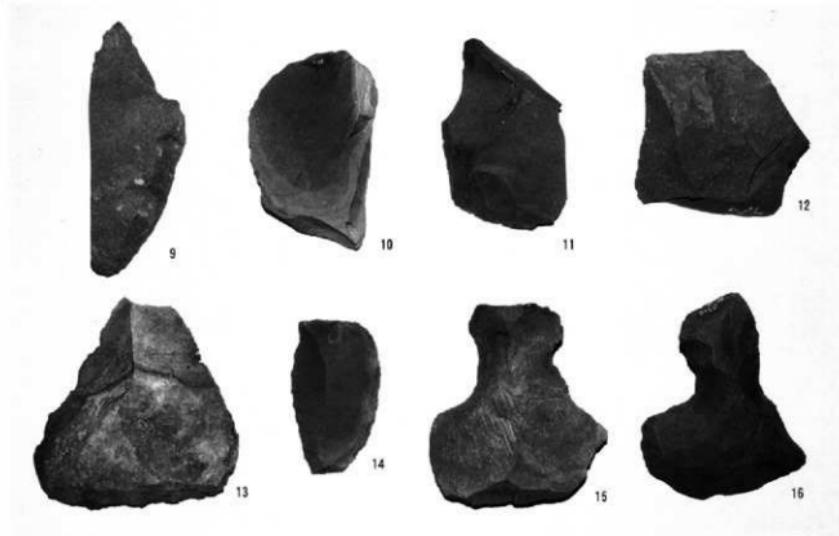
出土土器 (14)



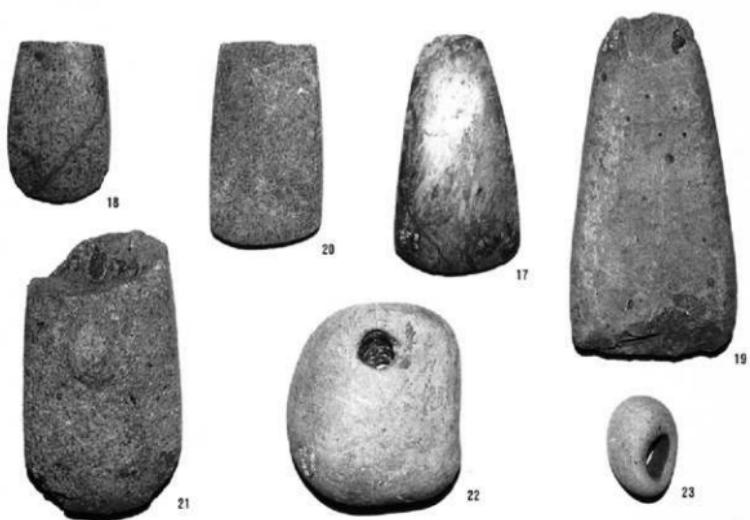
ミニチュア土器・手捏土器・円盤状土製品



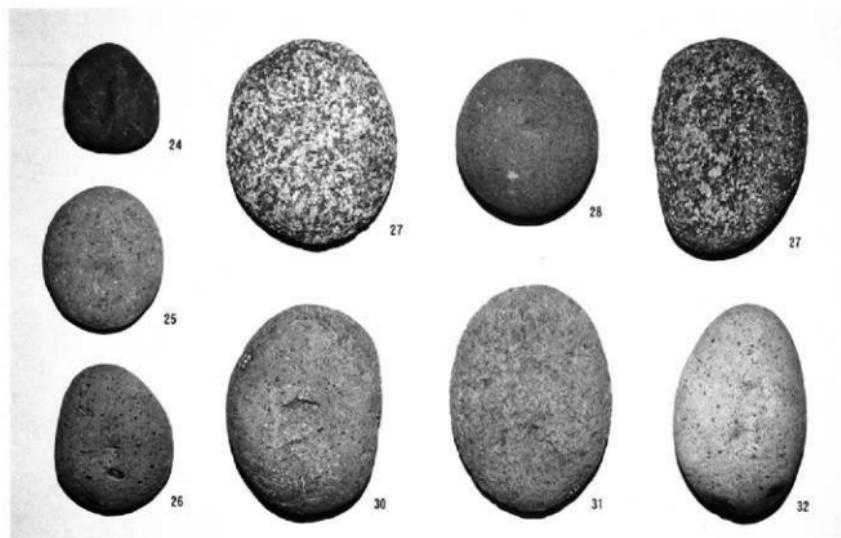
石鎌・石錐・石匙・石範・削器



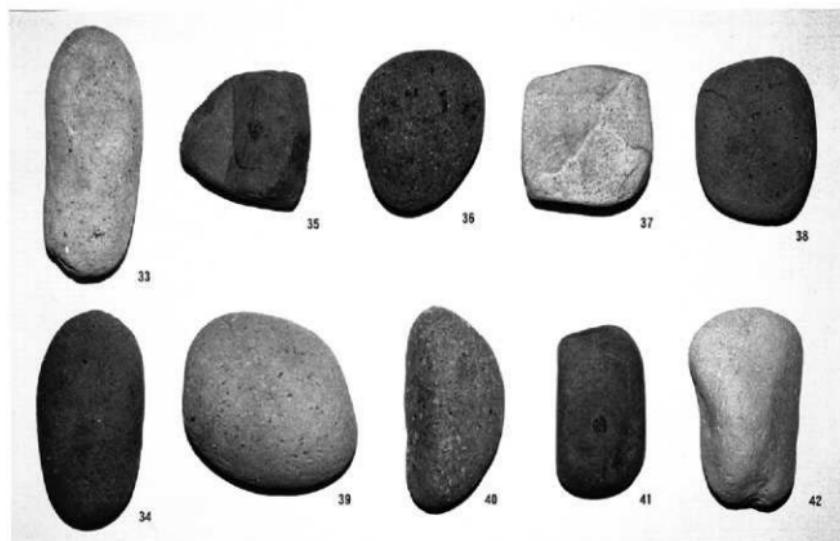
削器・打製石斧



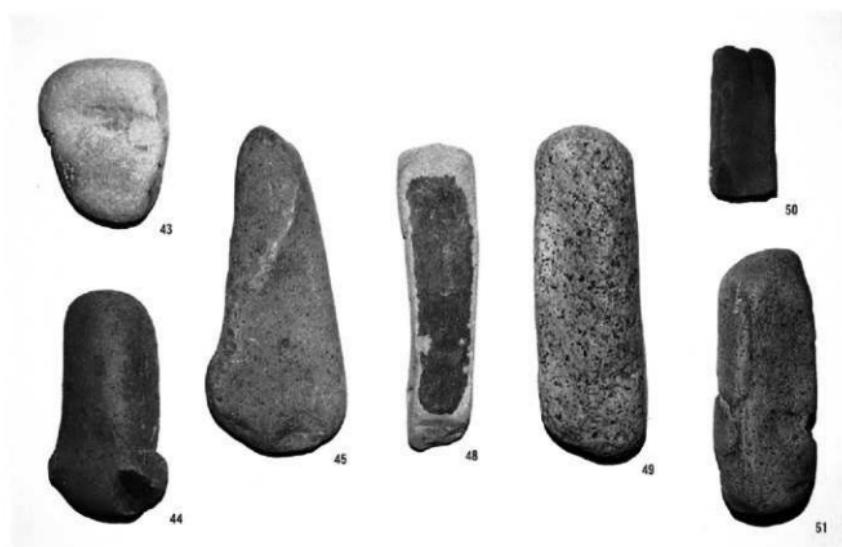
磨製石斧・穿孔石製品



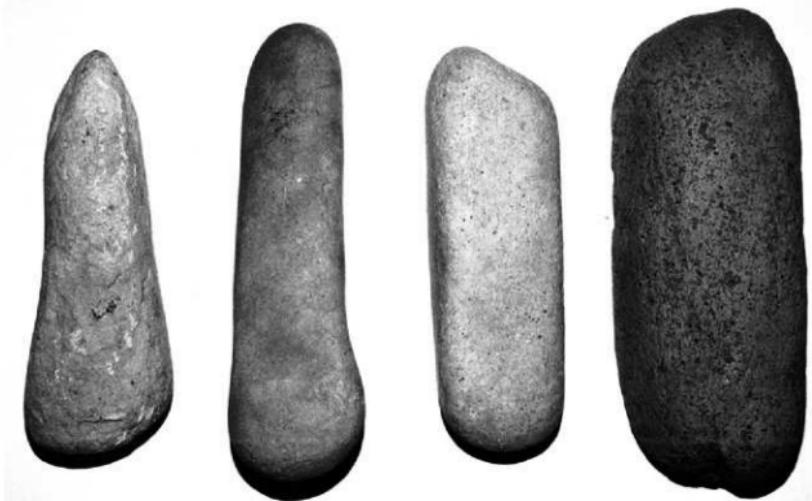
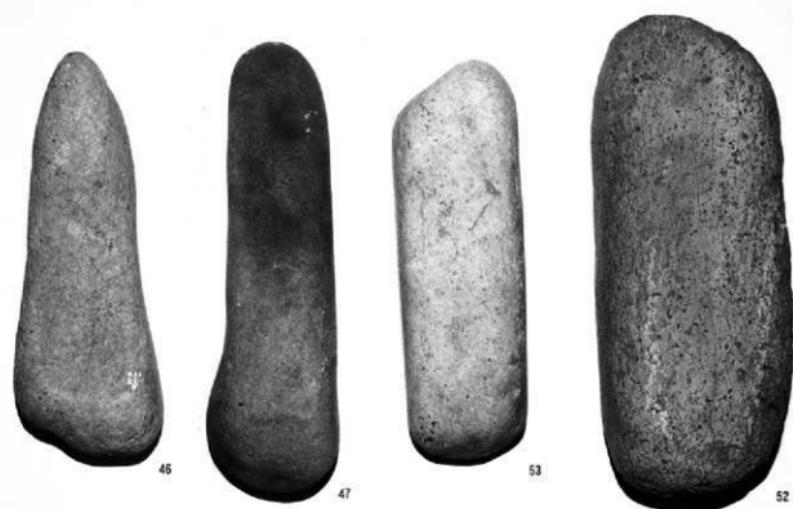
凹石



凹石・磨石



敲石・石棒・砥石



石棒



54



55

石皿

付 編

山形県、市野々向原遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 市野々向原遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	SK536	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\sigma^{13}\text{C}$ (%)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 1	6300 ± 70	-26.2	6280 ± 70	交点 BC5245 2 σ BC5330 TO 5055 1 σ BC5275 TO 5210	11600

(2σ : 95% probability, 1σ : 68% probability)

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

(2) $\sigma^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\sigma^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。

(5) 測定No.

本試料の測定は、Beta Analytic Inc. (Florida, U.S.A.)において行われた。

Beta-は同社の測定No.を意味する。

II. 市野々向原遺跡出土炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、土坑S K536より出土した炭化材 1点である。

2. 方法

試料は剖析して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果は表に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。なお各断面の顕微鏡写真を示す。

表 市野々向原遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試 料	樹 種 (和名／学名)
炭化材	ブナ属 <i>Fagus</i>

ブナ属 *Fagus* ブナ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は、まれに上下端のみ方形細胞が見られるが、ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものが存在する。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、韌性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

III. 市野々向原遺跡出土炭化種実の同定

1. 試料

試料は、土坑SK236から検出された種実類である。大型の種実で、炭化しており、割れたものばかりである。

2. 方法

試料を肉眼および実体顕微鏡によって観察した。また、表皮の裏面を落射顕微鏡によって観察を行った。同定は現生標本との対比によって行った。

3. 観察と結果

土坑SK236より出土した炭化種実は、いずれも割れており、部分的に表皮が残る。大きな破片で2.5cmある。やや扁平な球形を呈し、でこぼこするところもある。表皮は小片しか残存しないが、表面はやや粗く、裏面はやや滑らかである。表皮の表面にはクリやコナラ属にみられる長形な細胞はない。裏面は不整形ナデシコ科な模様をもち、トチノキのものに類似する。破片であり、わかりにくい種子であるが、以上からトチノキ種子とみなされる。全体量は破片であるため、重さで示す。トチノキ種子は渋抜きを行えば優良な食物になる。

表 市野々向原遺跡出土炭化種実の同定結果

出土遺構	分類群（和名／学名）	部位	重量
土坑SK236	トチノキ <i>Aesculus turbinata</i> Blume	炭化種子	100.9g

なお、焼け膨れ状の亀裂があることと、落射顕微鏡下で反射光をもつため、熱を帯びて炭化したものとみなされる。

参考文献

粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧。縄文文化の研究第2巻、雄山閣出版、p. 42-49。

千野遺跡より出土した縄文時代埋設土器のリン酸・カルシウム分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

千野遺跡は、標高約206mの横川左岸の段丘上に立地する。今回の発掘調査は横川第2段丘上が対象で、縄文時代後期前葉の遺構・遺物が検出されており、そのうち埋設土器は幼児や胎児の墓である可能性が指摘されている。

そこで、埋設土器内へ遺体が埋納された可能性を検証するために、動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量を測定することとした。リン酸は人骨に多量に含まれる成分であり、分解した遺体のリン酸成分が土壤中に含まれるアルミや鉄と結合して難溶性のリン酸化合物を形成するため、濃集の有無が確認しやすい。また、人骨に多量に含まれるカルシウムについても分析を行うが、分解の進んでいる遺体ではカルシウムは土壤中で拡散・移動が大きいので、ここではリン酸の補助的項目として結果を捉えることにする。

1. 試料

調査対象は、埋設土器6基（RP3・RP10・RP11・RP12・RP13・RP19）である。これらの土器は、基本土層のII層からVI層にかけて正位あるいは逆位で埋設され、底部のあるものと無いものが認められた。なお、本遺跡の基本層序は、上からI層（耕作土層）、II層（遺物包含層）、VI層（地山）であり、調査区北端部にみられる鞍部には、II層とVI層の間に厚い遺物包含層（III層・IV層・V層）が認められる。

試料として、各埋設土坑内覆土の上部と下部が採取された。すなわち、6基の埋設土器から計12点の土壤試料が得られた。また、対照試料として、調査区北端部から基本層序I層・II層・III層・IV層・V層より1点ずつ土壤が採取された。

分析調査では、これら17点全点を用いた。

2. 分析方法

分析では、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。

表1 各種設土器のリン・カルシウム分析結果

試料名		土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)	備考		
						出土層位	埋設姿勢	底部の状態
基本土層	I	CL	10YR1.7/1黒	1.27	0.56			
	II	L	10YR2/3 黒褐色	1.13	0.40			
	III	CL	10YR1.7/1黒	1.11	1.34			
	IV	LiC	10YR1.7/1黒	1.08	1.24			
	V	LiC	10YR1.7/1黒	1.44	0.57			
RP3内	上半	HC	10YR2/2 黒褐色	0.69	0.19		正位	底部あり
	下半	LiC	10YR2/3 黒褐色	1.42	0.26			
RP10内	上半	SL	10YR2/2 黒褐色	1.05	0.26		逆位	底部なし
	下半	SL	10YR3/4 暗褐色	0.83	0.46			
RP11内	上半	LS	10YR2/1 黒	1.47	0.63		正位	底部あり
	下半	LS	10YR3/2 黒褐色	1.30	0.42			
RP12内	上半	LS	10YR3/3 暗褐色	0.71	0.23		正位	底部なし
	下半	LS	10YR3/4 暗褐色	0.63	0.38			
RP13内	上半	LS	10YR3/2 黒褐色	0.66	0.98		正位	底部あり
	下半	LS	10YR3/2 黒褐色	0.60	0.34			
RP19内	上半	LS	10YR4/3 にぶい黄褐色	0.68	0.35		正位	底部あり
	下半	LS	10YR3/3 暗褐色	0.64	0.14			

土色：マンセル色色系に準じた新版標準土色誌（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

L：壤土（粘土0～15%、シルト20～45%、砂40～65%） S L：砂壤土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

L S：壤質砂土（粘土0～15%、シルト0～15%、砂95～95%） C L：堆肥土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%）

L i C：輕壤土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%） S i C L：シルト質堆肥土（粘土15～25%、シルト45～85%、砂0～40%）

HC：重壤土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

3. 結果

結果を、表1に示す。試料は、基本土層試料で粘土分の多い土壤であるが、埋設土器試料では概して砂分の多い土壤である。

対照試料である基本土層試料のリン酸含量は、1.0～1.5P₂O₅mg/gと近似する。カルシウム含量は、III・IV層で1.0CaOmg/g以上の含量を示すが、他は1.0CaOmg/g未満である。

埋設土器試料では、RP3で下半試料、RP10では上半試料が1.0P₂O₅mg/g以上の含量を示し、上下に差異が認められる。RP11は上半・下半試料とともに1.0P₂O₅mg/g以上で、対照試料の含量に近似する。RP12、RP13、RP19は、上半・下半試料ともに1.0P₂O₅mg/g未満である。カルシウム含量は、いずれも1.0CaOmg/g未満の低い含量を示す。

4. 考察

今回調査した試料のうち、基本土層試料は粘土分の多い土壤、埋積土器試料は概して砂分の多い土壤であった。土壤中の粘土分は、遺体の分解に伴って生成するリン酸などの化学成分を保持しやすい。そのため、基本土層試料やRP3では、土壤内に化学成分が集積・残留しやすかったと推定される。

ところで、リン酸の土壤中に普通に含まれる量、つまり天然賦存量は約3.0P₂O₅mg/g程度とされる (Bowen, 1983; Bolt·Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。また、人为的な影響を受けた黒ボク土の平均値は、5.5P₂O₅mg/gとの報告もある (川崎ほか, 1991)。すなわち、この値を著しく越える土壤では、外的要因 (おそらく人為的影響によるもの) によるリン酸の富化が指摘できる。今回は、この値を越える試料は基本土層と埋設土器ともに認められない。埋設土器の層位や埋設姿勢、底部の有無にも関連は少ない。

また、基本土層試料と比較すると、埋設土器試料はむしろ低い含量を示す試料が多い。土性を考慮すれば、基本土層が粘質な土性であるためにリン酸やカルシウム成分を保持されやすく、逆に埋設土器では砂質であったために保持されにくかったためと考えられる。今回の結果を見る限り、埋設土器内に遺体が埋納された痕跡は明確でない。

なお、R P11はリン酸含量が上半・下半ともに相対的に高くなっている。そのため、R P11にはリン酸成分の高い物質が供給された可能性がある。しかし、リン酸成分は動物遺体だけでなく、植物遺体からも供給される。特にR P11は、土色が黒色あるいは黒褐色であり、植物遺体に由来する腐植含量の大きいことがうかがえる。したがって、植物由來のリン酸の影響を評価するために腐植含量も測定し、濃集の有無をさらに明確にし、遺体の有無について改めて検討したい。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p. 28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [H. J. M. Bowen (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, H. G. · Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター[H. G. BOLT and M. G. M. BRUGGENWERT (1976) SOIL CHEMISTRY], p. 235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法. 440p., 養賢堂.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. :p. 23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻. 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p., :p. 39-40.

市野々向原遺跡の種実 I



1 トチノキ炭化種子



2 トチノキ炭化種子



3 トチノキ炭化種子



4 トチノキ炭化種子



5 トチノキ炭化種子



6 トチノキ炭化種子

1.0cm



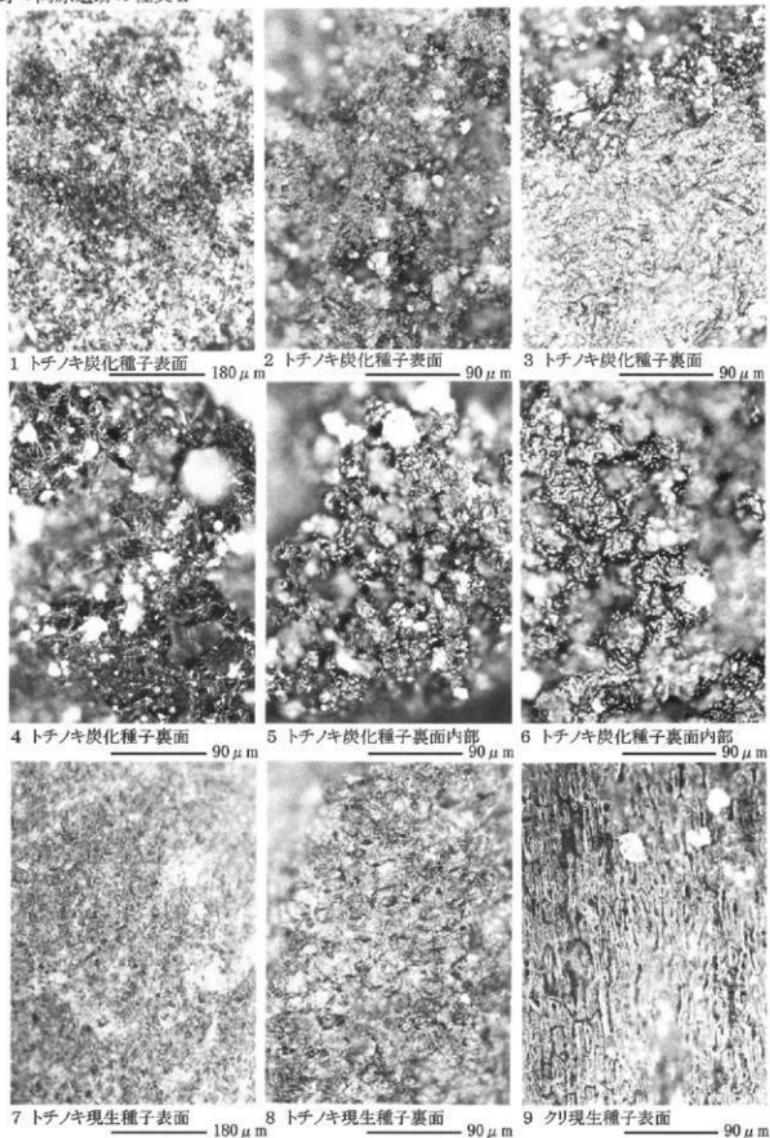
7 トチノキ炭化種子全体像



8 同左

1.0cm

市野々向原遺跡の種実II



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第71集

野々向遺跡

市野々向原遺跡

千野遺跡

発掘調査報告書

2000年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 藤庄印刷株式会社

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第71集

野々向遺跡

市野々向原遺跡

千野遺跡

発掘調査報告書

2000年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社